

苦小牧駒澤大学紀要

第 8 号

- 彦根藩「大久保家文書」(一) 大久保 治 男 1
- 龍宮のイメージの形成 林 晃 平47
— 近世の浦島伝説とその周辺をめぐって —
- 婚姻史研究 — 若者組再考 (一) — 高 嶋 めぐみ81
-
- ◇
- 有事立法と後方 室 本 弘 道(1)
— 防衛論議におけるわが国のロジスティクスの考え方 —
- 世界的に見たオーストラリア像 マイケル・キンドラー(29)
— 多文化社会におけるナショナル・アイデンティティをめぐる衝突について —
- 植民地下フィジーの自治行政制度 東 裕(73)
— フィジー人行政 (Fijian Administration) の構造と機能 —
- ヴィクトリア朝時代の知識人に見られる見識と国際感覚 谷 村 善 通(91)
— ザ・グラフィック紙の復刻版を通読して —
- 外国人私費留学生の現状 — アンケート調査を中心として —
..... 石 田 清 史(121)
- フリーター世代に英語をおしえるということ ... ロバート・カール・オルソン(163)
- 戦後日本のビジネスサイクルに対する
株価の先行性についての実証的検証 山 崎 和 邦(189)

苦小牧駒澤大学

2002年11月

BULLETIN OF TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

Vol.8

- “The ŌKUBO’s Samurai Archive” of Japanese History
about “The Hikone Han” (Ii daimyo domain) in Modern Era Part I
..... Haruo ŌKUBO 1
- The Process of molding the Ryugu Palace Image Kouhei HAYASHI47
— Centering on the Modern Urashima Legends —
- A Study of the History of Marriage Megumi TAKASHIMA81
— Reconsideration of the “Wakamonogumi” Part I —
-
- ◇
- Emergency Legislation and Logistics
— A Study of Logistics for National Defense — ... Hiromichi MUROMOTO ... (1)
- Australia’s Global Self:
A Discourse of Competing Identities Michael KINDLER (29)
- “Fijian Administration” in Colonial Fiji Yutaka HIGASHI (73)
— Its Structure and Function —
- Some Outstanding Outlook and Views of the Intelligentsia
in the Victorian Era
— From the Graphic in 1869~1870 — Yoshimichi TANIMURA ... (91)
- Present Condition of a Foreign Student Studying in Japan
..... Kiyoshi ISHIDA (121)
- “DON’T MEAN NOTHIN’”
Teaching English to the “Freeter” Generation Robert Carl OLSON (163)
- Verification of Japanese Stock Prices as
Leading Indicators of Business-Cycles after
World War II Kazukuni YAMAZAKI ... (189)

TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

November 2002

苫小牧駒澤大学紀要第八号 (二〇〇二年十一月三十日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 8, 30 November 2002

彦根藩「大久保家文書」(一)

“The ŌKUBO’s Samurai Archive” of Japanese History

about “The Hikone Han” (Ii daimyo domain) in Modern Era Part I

大久保 治 男

Haruo ŌKUBO

キーワード：近世彦根藩政史、彦根藩・大久保家文書、井伊直弼―井伊家歴代藩主

幕末・維新史、井伊大老側役・大久保小膳

要旨

幕藩体制にあって譜代筆頭・彦根藩の政治・経済・文化に与える影響は大である。大老・井伊直弼は我が国を鎖国より開国に導き国際協調主義を实践した偉大な政治家であった。筆者の大久保家は四百年以上の歴史を有し徳川家康の祖父の代より旗本であり、彦根藩主井伊家初代を二歳より御育てした縁で彦根藩重役となった。家老、中老、公用人、側役等代々藩主側近の重職についている。「彦根藩・大久保家文書」は二百五十年位前よりの史料がほとんど保存されているが、特に幕末、維新の大変革期に日記や諸公文書、記録等を含む一万数千点があり、その史料価値も一級と評価され、東大近代法政史料センターや彦根城博物館や彦根市教委市史編纂室にて筆者の協力を得て共同調査・収録・マイクロ化が行われていた。本年度は苫駒大公費在外研究員のチャンスをつるに活用し古文書の整理、調査を更に進行させている。「大久保家文書」に関する概況を述べ斯界の研究に貢献する研究ノートである。

一

「彦根藩・大久保家文書」は我が国の近世史、特に藩政や幕末・維新の変革期の幕藩体制から明治新政府体制への流れの変化に関する重要な史料を多く含んでいるものと高く評価されている。

彦根藩三十五万石は譜代大名中の筆頭であり、徳川四天王と謂われた本多・酒井・榊原の諸氏に比べ井伊氏は高禄である。

彦根は京都に近く西国・中国の大名を押え京都守護の大任を遂行すべく、軍事力、経済力も大きく、江戸幕府、徳川氏の信頼も強く忠誠第一の正に幕藩体制のキーストンであった。二百七十年間一度の国替も無かった。

幕末、大老井伊直弼の桜田門外のテロ行為受難で水戸征伐の意見を押え、また、十万石召上げの幕令にも従い、鳥羽伏見の戦に諸状勢より勤王に踏み切り、京都の朝廷守護の栄職も失う等総て幕府の一体となって幕末、維新を迎えることもなる。

彦根藩が徳川総軍の先鋒の家柄として武門の最高荣誉を担っていたこと、將軍の上洛や日光参詣の平時の大事にも井伊家は家格としてその先駆を命ぜられ、將軍支障の場合はその名代を命ぜられていた事も特筆されよう。

黒船が日本近海に現われ尊王攘夷論も起り国是決せられない時に、海に接しない近江の国より開国の元勲を出したのも日頃の国際情勢の情報収集や鎖国体制下にあつて、グローバルな視座を有しえた彦根藩海外事情研究の先駆的实力とも謂えるのである。

二

幕末の偉人・井伊直弼は文化十二年（一八一五）十一代彦根藩主・井伊直中の十四男として誕生、五歳で母を、

十七歳で父を失ったので藩の掟「嫡長男以外は養子に出ない場合は三百苞の捨扶持で城を出て不遇の生活をする」に従い、彦根城佐和口御門前の公館「北の屋敷」で三十二歳までの十五年間を暮らすこととなる。「世の中をよそに見つつも埋れ木の埋もれておらむ心なき身は」直弼は和歌を詠じてこの館を「埋木舎」を号した。

直弼は「茶、歌、ポン(鼓・能)」とあだ名があった如く、茶道、和歌、能は達人の域で、また国学、蘭学、書画、禅、湖東焼、楽焼などのほか、さらに武術、柔術、馬術、弓術など、文武両道の修練を一日四時間眠るだけで足ると埋木舎で励んだのである。特に茶道は、埋木舎の茶室「澍露軒」(法華経の「甘露の法雨を澍ぎて、煩惱の焰を滅除す」の文より命名)において有名な「茶道一会集」を記し、「二期一会」「独座観念」「余情残心」「和敬静寂」の極意を大成し、茶名を「宗観」とも「無根水」とも号した。

埋木舎の庭中の柳の風に逆らわぬを範として「柳王舎」「緑舎」とも号した。

居合術は「新心新流」を創設し、「勝を保つためには滅多に刀を抜いてはならぬ」といって「保剣」とした。また曹洞宗「清涼寺」へも参禅し、仙英禅師に帰依して架梁血脈さえも授与された。

直弼の一生の親友、国学者、長野主膳と三晩、人生論を語り合ったのも埋木舎であった。奥庭には楽焼の作業場や武道場の跡もある。庭の月山には柳王観音堂もあり信仰も篤かった。埋木舎におけるこの様な偉大な人格形成があったればこそ、直弼三十二歳の弘化三年(一八四六)二月、相続人のいない兄、直亮の養嗣子となりすぐ後に三代藩主や幕府の大老職となっても立派にその職責をはたし命をかけて国難を救う大器量が発揮されたのである。

嘉永六年(一八五三)六月三日、アメリカ使節ペリー提督が浦賀に来て修交を迫った。直弼は八月二十九日「別段存寄書」を幕府に答申、堂々と開国の正論を主張した。開国に反対する者に対しては「国家之大政関東へ御委

任」を大儀とし、違勅に關しても「公用方秘録」によれば「……此義天朝思召ニ叶不申時ニハ、諸役人之罪御大老職ニテ御引受被遊候梯可相成ニ付……」と大老一身の責任で国難の緊急事態に英断を決したのである。

安政二年（一八五八）四月、大老職に就任。同年六月、日米修好通商条約に調印、国際協調主義、平和主義の政治、外交を行なうも、反対する勢力も存するため九月頃より、所謂「安政の大獄」——死刑はわずか八名で小獄——が始まり翌年まで続く。

安政七年＝萬延元年（一八六〇）三月三日、桃の節句の祝儀に江戸城（参上の桜田門において水戸の浪籍者らのテロに倒れる。年令四十六歳であつた。

「春浅み野中の清水氷^{つらみ}ゐて底の心を汲む人ぞなき」国家や国民のためを思い戦乱を回避し立派な政治決断をしたのにその真意が伝わらず困惑する直弼の心が痛いまでよく現われている和歌である。更にテロに会う二ヶ月前の和歌は「あふみの海磯うつ波の幾度も御世に心をくだきぬるかな」と歌われている。

三

「大久保家」は徳川家康の祖父・徳川清康の時代すなわち天文年間より徳川の旗本であつた。筆者の先祖の大久保（埋木舎の現保存者）は天下の御意見番・大久保彦左衛門忠教とはその父忠員の時代の弟忠平の子孫が彦根に着任した。小田原城主の忠世、忠隣とも近い一族に当たる。さらにさかのぼれば、宇津左衛門五郎忠茂より遠く、攝政、太政大臣藤原忠平の三代後、道兼の玄孫宗円、宇津宮座主となり宇津を氏とする等系図に明記されている旧家である。「大久保新右衛門尉藤原忠正」が現大久保家の初代である。

祖先の旗本大久保式部少輔忠正は一時甲州武田信玄に出向して仕え、信玄公より昌^{まさ}の一字を賜り「忠昌」と称し

たことがある。このことは徳川家康が甲斐を領するに及び武田旧臣の主だったものを藩祖・井伊直政に所属させることにも貢献した。従って彦根藩の兵法は武田兵法であり、武器も「赤備え」となるのである。

大久保家と井伊家との関係は実に古くにさかのぼる。徳川清康の当時、井伊直政の祖父井伊信濃守は今川義元に従っていて、桶狭の戦で織田信長に攻められ戦死された。その子井伊肥後守は今川を脱し徳川方につこうとすると今川義元の子氏真の臣朝比奈備中守に攻められ永禄五年(一五六二)三月殺害されてしまう。この時、井伊肥後守の御子、万千代はわずか二歳であった。この折り大久保忠正は今川方に引取を強引に交渉し実現して御子を御養育したのであった。後に井伊兵部大輔直政といわれ徳川家康に忠勤をほげまれるのである。これを御縁に家康の命令によって、天正二十年(一五九二)大久保忠正は彦根藩初代藩主井伊直政に親父代りとして勤め、大久保は井伊家の重臣として仕えるようになる。井伊直政が上州高崎に居られた時も、二代直孝を長い間大久保忠正は私宅へ御預りし御養育した。二代に渡っての育ての親代りともいえよう。

大久保忠正についてさらに述べれば、幼名、千代松、後に式部忠政、定正と改め、新右衛門とも称した。慶長五年(一六〇〇)に関ヶ原の戦いに従軍し戦功があったので同六年十一月、二百石を加増され六百石の知行となった。さらに七年三月、二百石を加増、八百名を知行した。町奉行に昇進、慶長十九年の大坂の陣の時は彦根の留守居役を仰せつかった。元和元年(一六一五)八月死去、法号は、清蓮院殿大誉清栄居士、彦根宗安寺に現在も墓が残る。後に大久保は元禄の頃は一千四百石を知行した。このように大久保家と井伊家は天文時代より特別の関係があり、代々、家老、中老、公用人、側役等の藩主側近の重職についている。

四

井伊直弼の時代には筆者の曾祖父・大久保員好（章男、後に小膳）が活躍する。十二代藩主直亮、十三代直弼、十四代直憲と三代に渡る藩主の側近として重き職を勤めた。大久保員好は員毗の嫡男で家督後小膳と称し明治維新までこれを唱える。幼名銀十郎、後捨三郎、母は三浦氏、文政四年（一八二一）正月二日尾末町邸にて生れる。天保七年（一八三六）二月五日、十六歳の時、御小姓となる。同年十月五日、藩主直元公付を命ぜられる。天保十二年正月、父病死に付二十一歳で家督を継ぐ。三百石賜う。三月、江戸諸勤務を命ぜられる。天保十三年七月、二十三歳の時、御前御母衣役になり、翌十四年、徳川家慶、日光御参詣につき、井伊直亮御供の折、御側御供相勤める。弘化二年（一八四五）藩主直元の御小納戸役、同三年直亮の御小納戸役を勤めた後、嘉永元年（一八四八）十一月五日、直弼の御小納戸役となり、直弼側近の重責を負う。嘉永四年（一八五一）三月五日、直弼の相州御備場御巡見の時の御先廻りの責任者で防備状況を視察、同五年には井伊家の婚礼用掛として江戸藩邸に仕えた。また、京都守護、禁裏護衛の任にも従った。同六年三月、直弼の日光御参詣の後、佐野御領分御巡見の折を始め、江戸勤務は側近であった。

その他、物情騒然たる政情のため、直弼の名代として各地に往還すること数知れない。江戸へ三十九回、大坂へ七回、京都へ十三回に及ぶといわれている。安政四年三月、直弼御側役と御子様直憲の教育係も勤めている。

なお、大老の茶のお相手役高弟の一人で「宗保」の号を賜った。謡や楽焼のお相手役でもあった。和歌も直弼と共に作った。直弼が大人物であるので近習達も真摯な学問研究に精進したのであろう。

さて、安政七年（万延元年）（一八六〇）三月三日の桜田事変起るや、江戸藩邸の決議を携えて大久保小膳は正使として、副使高野瀬喜助、同伴家来足田常助を従えて、三人で三台の早籠に乗って彦根へ急を告げる。三日夜江

戸を発つて八日早くに着いている。三人は腹に長い白木綿を巻き付け(籠の震動で胃腸や臓器がゆれ気分が悪くなるため)水以外断食で昼夜兼行にて四日で彦根まで記録的速さで着いた。しかも箱根八里の大雪や天竜川、大井川の出水川止めもある悪条件下である。蜂の巣をつついたような彦根表では御殿で二日間昼夜相談会議が行なわれた。藩士は総登城となり城下町も警戒体制に入った。水戸討伐論を押え、重大な時機に幕藩体制の中核としての彦根藩の責任をはたす結論に導き、その決議を携え再び大久保小膳は二人を従え江戸の彦根藩邸へ早籠で帰った。小膳四十歳、藩の存亡の大事の時大活躍をしたのであった。

大老井伊直弼の御逝去後、大久保小膳は御子直憲の御養育、御相談相手として井伊家の内外一切を切り廻し、直憲より「親父」といわれてその忠誠心をほめられ御寵愛をうけたのである。万延二年、鉄砲足軽三十人組を賜る。文久元年(一八六一)には和宮の東下の際には江戸より京へ迎えに行き、道中の警備の責任者となり、役料五十石加増。藩主直憲の時は堺の警備を命ぜられ、蛤御門の変に關しても警備の役に就いた。この時は鉄砲組を指揮して、藩主の側近に侍した。明治元年(一八六八)に天皇が東京遷都された時も先駆の役を命ぜられ加増三十石、三百八十石を領した。明治三十六年八十三歳で死去。墓は禅宗・竜潭寺、法号章義院殿忠誉宗保居士。

五

彦根藩政史の基本的な重要史料の一に「侍中由緒帳」(現在七十九冊)が存する。元禄四年(一六九一)から明治四年(一八七二)の廃藩に至る迄書き継がれた彦根藩士の由緒、履歴を記したものである。これは彦根藩士に関する武家史料ではあるが幕政・藩政とのかかわりや習俗、慣習も記され彦根藩政史に関する基礎文献ともいえる。平成三年より彦根城博物館(市の外郭博物館)には古文書、典籍等の歴史資料に専従する史料室を開設したところで

あるが、ここにおいて最初の重要な公刊事業として、「侍中由緒帳」が選ばれ調査、研究、公刊が行なわれている。現在九冊目迄公刊され（彦根藩史料叢書）研究者の活用に使われている。

「侍中由緒帳」5に収録されている「大久保孫左衛門、小膳」の処を全文原史料として次に載せることとする。

幕末、維新の時代の彦根藩の重要な古文書は後述の如く、大久保小膳が命がけで死守した文書類（後に井伊家に渡される）が中心であり、現在の「大久保家文書」一万数千点のそのほとんどがやはり大久保小膳の保存による文献が実は大であるのでまずその人物についての史料を一読する必要があるためである。「彦根藩・大久保家文書」の研究には不可欠であろう。

尚、「侍中由緒帳」が収められていたと思われる文書入れの大きな木箱はそのふたの表に「侍中由緒帳」と墨書きされたものがそのまま大久保家に現在も保存されているので、やはり幕末・維新の混乱期には大久保小膳が守り、明治中頃、世の中が安定した後に、井伊家等に渡された文書の一つであったことは窺えるのである。

大久保家由緒帳

「侍中由緒帳」収録

三百石当御知行 大久保小膳

三代目新右衛門二男孫左衛門書出之留

一 右拙者先祖之儀親新右衛門書付二申上候

一六年以前貞享三年^寅二月朔日ニ被 召出兩度江戸江罷下御小姓役相勤申候以上

元禄四年^未三月十七日

一元禄十^丁五年十一月九日 御座之間江被 召出新知貳百石被 下置候

一元禄十一^戌年十一月廿六日ニ久々相詰骨折候由ニ而』為御褒美銀子三枚御熨斗目小袖壹ツ於江戸被 下置候

一元禄十四^辛年十月三日父新右衛門病死仕同十一月二十三日忌明候得共新右衛門存生之内不所存之様子有之御

家老中より悴子共遠慮仕可罷在由被申渡候處翌^壬年江戸詰被 仰付因茲同年十二月十二日江戸御觸被申渡候

一宝永六^巳年五月五日於江戸御小納戸役被 仰付候

一同年六月 直通様京都 御名代御勤被遊候ニ付御供被 仰付候

一正徳二^壬年十二月十八日於江戸 御前江被 召出悴子之時分より御近習ニ被 召仕品と御小納戸役をも相勤

候由被 仰定 百石御加増被 下置候

一正徳三^癸年四月十三日被 仰出候者今度御加冠御勤被遊候御時節之 御用首尾好』相務候為御褒美白紗綾二

台被 下置候

一正徳五^乙年八月十五日於江戸 御前へ被召出御懇之 御意之上母衣御役被 仰付候

一享保之^酉年八月六日数年屋敷無之由被 仰出平石小左衛門上ヶ屋敷被 下置候

一享保三^戌年六月五日久々御近習無恙相勤経由被 仰立御取次役被 仰付候

二代目政之介書繼之趣

一享保五^庚年五月十五日親孫左衛門病死仕同年六月六日父跡式無相違三百石悴子政之介ニ被下置候

一同年十一月十六日政之助儀孫左衛門与名相改申候

- 一元文元^丙年八月十二日 御座之御間江被 召出母衣御役被 仰付候
- 一寛延四^辛年四月朔日 御座之御間江被 召出御城使役被 仰付候
- 一宝曆二^壬年十月二十三日江戸詰中四月折相勤候段被 仰立白銀拾枚被 下置候
- 一宝曆八^戌年七月二十一日御座之御間江被 召出御馳走奉行二御役替被 仰付候
- 三代目九^{山伏}八書繼之趣
- 一明和五^戊年十一月五日養父孫左衛門願之通隠居被 御付跡式無相違三百石養子九八江被 下置候九八儀実者
- 二代目石居三郎左衛門三男二而御座候
- 一同年十一月八日九八儀孫左衛門与名相改申候
- 一安永三^甲年正月十六日御帳除之養兄縫殿儀不宜風聞有之二付御領分立去七候様被 仰付候二付恐入伺之通指
扣御家老中被申渡候
- 一同二月十七日指扣 御免御家老中被申渡候
- 一安永五^丙年四月十三日光山江御供奉被遊候二付立帰リ被 召下御手廻リ』御跡行列騎馬御供被 仰付候
- 一安永八^巳年二月朔日 御座之御間江被 召出母衣御役被 仰付候
- 一天明六^丙年十二月二十六日於江戸 御役中御用多処出精相勤候二付為御褒美御手銀二筋被 下置候旨勤番御
家老中被申渡候、
- 一寛政元^巳年四月二十三日
- 大魏院様 御遺志二付御割合を以御銀被 下置候
- 四代目平四^{目録}郎書繼之趣

一 寛政二^{庚戌}年二月九日養父孫左衛門病死仕同三月晦日養父跡式無相違三百石養子平四郎江被 下置候平四郎儀
実者七代目朝比奈藤右衛門弟二御座候

一同年五月二十九日平四郎儀孫左衛門与名相改申候 』

一 寛政十一^{巳未}年三月二十七日丸山政太郎養祖母御追放被 仰付候程之儀二及候政太郎儀者年若二茂候得は近親

二付常々心添を茂可致処不行届不埒至極二被為 思召候依之御叱り被 仰出恐入伺之通指扣御家老中被申渡候

一同年四月二日指扣 御免御家老中被 申渡候

一 寛政十二^{庚申}年十一月朔日御座之御間江被召出母衣御役被 仰付候

一 文化七^{庚午}年四月十六日名披露違致御断申出御取次之御役前不念之儀二思召伏之 御叱乍勤指扣御家老中被申渡翌十七日 御免被申渡候

一 文化十一^{甲戌}年五月十一日御中屋舖御留守居役并御馳走奉行兼帶被 仰付候 』

五代目捨三郎書纏ノ趣

一 文化五^{戊辰}年閏六月十日父孫左衛門存生之内御小姓二被 召出御擬百俵八人扶持被 下置候

一 文化六^{巳未}年十二月六日捨三郎儀小膳与名相改申候

一 文化十一^{甲戌}年八月二十九日父孫左衛門病死仕同十一月四日跡式無相違三百石悴子小膳江被下置同日御近習
御免被 仰付候

一 文化十四^{丁丑}年正月二十一日 御座之御間江被 召出母衣御役被 仰付候

一 文化十五^{戊寅}年四月二十一日於江戸京都御用向無滯出精相勤為御褒美江州御綿貳抱被下置候

一文政五^{壬午}年十二月三日江戸詰之節十月三日片桐權之丞当番之処仲ケ間同意ニ而為教御門出某日 御出被 仰
出老入不足ニ相成權之丞を引込ニ取斗恐入身分申』出候処不埒ニ付急度指扣被 仰付同月二十三日御免被
仰付候

一文政七^{甲申}年六月八日 御座之御間江被 召出御中屋敷御留守居役被 仰付候

一文政八^{乙酉}年三月晦日大津御藏屋敷奉行ニ御役替被 仰付候

一同年十一月十五日

大殿様六十之御賀御祝被遊候ニ付為御肴軒御割合を以御金被 下置候

一文政十一^{戊子}年二月九日

若殿様御小納戸役ニ御役替被 仰付候

一同年六月十一日於江戸木俣亘理認屋敷江願之通替屋敷被 仰付候

一天保二年^{辛卯}年正月二十四日於江戸 『

若殿様御側役ニ御役替御小納戸其佝兼帯被 仰付候

一天保四^{癸巳}年正月二十二日昨冬

若殿様寒中 御意之儀ニ付不取調有之恐入御断申出候処昨夏御達被置候筋茂有之夢而心懸可居處右躰之儀不
念不埒ニ 思召御叱 御目通指扣被 仰付御用御指出ニ付御目通御免被 仰付同月二十四日指扣御免被 仰
付候

一同年正月二十四日熊二郎相統方祖父大久保主膳儀兼而禁足被 仰付置同居致居候処 致家出恐入身分相願候
処右躰之儀不行届不埒ニ付御叱指扣被 仰付候

一同年二月五日指扣 御免被 仰付候 』

一天保五^甲年正月二十六日於江戸

若殿様御登城之節御駕入御刀之儀ニ付不念有之不埒ニ付 御叱指扣被 仰付同月二十九日日數相定不申候得
共年始之儀ニ付指扣御免被 仰付候

一天保十^巳年七月四日病氣ニ付御役儀御免相願候処如何様共加保養其俣相勤候様被 仰付候

一同年十一月朔日大津御藏屋敷奉行ニ帰役被 仰付候

一天保十二^辛年正月九日病死仕候

六代目捨三郎書繼之趣^{員好}

一天保七^丙年二月五日父小膳存生之内御小姓被 召出御擬百俵八人扶持被 下置候

一同年十月五日於江戸

若殿様御小姓ニ被 仰付候

一天保十二^辛年閏正月十九日父小膳於大津表病氣大切ニ相煩彦根江罷下り養生仕度願御免無之内罷下り恐入指
扣相伺候処不埒ニ付 御叱指扣被御付同月二十四日 御免被 仰付候

一同年閏正月晦日父小膳跡式無相違三百石悴子捨三郎江被 下置候

一同年閏正月晦日御近習 御免被 仰付候

一同年六月二十八日於江戸捨三郎儀小膳与名相改申候

一天保十三^壬年七月朔日母衣御役被 仰付候

一天保十四^{癸卯}年四月十三日光山江御供奉被遊候ニ付御宿供被 仰付御手廻り総行列騎馬御供共相勤申候

一弘化二^{乙巳}年七月二十二日

御座之御間江被 召出

若殿様御小納戸役被 仰付候

一弘化三^{丙午}年二月十八日於江戸御小納戸役被 仰付

若殿様御小納戸向御用茂相勤候様被 仰付候

一嘉永元^{戊申}年十一月十五日於江戸

若殿様御小納戸役相勤候様被 仰付候

一嘉永三^{庚戌}年五月十三日於江戸御上屋敷御類焼之節御大切御持退之御品御土藏江入置致焼失恐入身分之儀相伺

候処右躰之儀者御役前不懸念不埒ニ付 御叱指扣被 仰付同月二十三日 御免被 仰付候

一同年十月十日於江戸御筆置舟摺李次杉原此面上ニ被 仰付候

一同年十二月三日於江戸

天徳院様 御遺志ニ付御割合を以御金被 下置候

一嘉永五^{壬午}年八月二十八日於江戸此度御婚禮御用懸り出精相勤候ニ付御祝儀旁御紋付御上下疋具被 下置候

一嘉永六^{癸丑}年三月五日於江戸実弟三浦源左御門相州ニ而閉塞被 仰付恐入伺之通指扣勤番御家老中被申渡尚又

御用御指出ニ付乍勤指扣ニ被申渡翌六日

御目通 御免被申渡候

一同年四月十日於江戸乍勤指扣 御免勤番御家老中被申渡候

一 嘉永七^卯年三月十六日於江戸彦根二而家内之者御制服相用 御叱江 御出候二付恐入伺之通指扣勤番御家老
中被申渡同月二十一日 御免被申渡候

一 安政元^甲年三月二十三日御鷹場御巡見并京都江御立寄之節御供無滯相勤候二付為御褒美江州御綿貳把被 下
置候

一 安政二^乙年八月十六日調練二付多々罷出出精致候為御褒美江州御綿貳把被 下置候

一 安政三^丙年六月二十七日在府之節近來莫太之御物入打続御勝手向必至而御指問二付是迄之御定式半減二而御
用弁致候様江戸表不一通御儉約筋被 仰出候処御省略方 行届御為方二相成一段二

思召為御褒美佐野御綿貳把被 下置候

一 安政四^丁年正月十八日実弟三浦源左衛門閉門被 仰付恐入伺之通指扣御家老中被申渡同月二十一日御用御指
問二付乍勤指扣二被 申渡并 御目通 御免被 仰付候

一 同年二月九日乍勤指扣 御免御家老中被申渡候 『

一 同年三月十五日 御座之御間江被召出御側役二御役替被 仰付候

一 同年三月十五日

愛磨様御附人兼帶被 仰付候

一 安政七^庚年三月三日於江戸彦根御家老中江御用筋被 御付御目付高野瀬喜介同道立帰り罷登御用相勤候

一 同年三月二十三日於江戸当御役之上御鷹頭取被 仰付候

一 萬延元^庚年十一月十一日於江戸当春以来御用多之処凝丹誠相勤一段二思召御紋附御小袖褄被 下置候

一 萬延二^辛年正月十一日於江戸

御座之御間江被 召出御役儀無滯相勤候ニ付鉄炮御足輕三十人組御頭ニ被遊候 』

一文久元^{辛酉}年十二月二十七日於江戸御前髮被為執候ニ付御跡乘

御免被 仰付御祝儀旁佐野御綿貳把被 下置候

一文久二^{壬戌}年五月五日弟安三郎儀於江戸今度 上使之節御道中御供無滯相勤候ニ付為御褒美御金貳百足被 下置候

一文久三^{癸亥}年三月十一日御役儀無滯出精相勤候ニ付五拾俵御役新米昨冬之御日附ニ而被 下置候

一慶應二^{丙寅}年三月九日一昨年秋京帰動乱之節出張致候ニ付

公辺より被下置候御金御割合を以被下置候

一同年十二月二十八日 御座之御間江被 召出年来御役儀無滯相勤候ニ付五拾石御加増是迄被 下置候御役料

米茂其俵被 』

下置候

一慶応三^{丁卯}年九月二十一日此度御足輕鉄炮隊ニ御改制之御都合ニ寄御預組支配御免是迄無滯相勤一段と

思召佐野御綿壹抱被 下置席之儀は是迄之通相心得候様被 仰付候

一慶応四^{戊辰}年二月十六日御都合ニ寄り

御鷹頭取 御免被 仰付候

一同年七月二十一日昨冬より於京都段々心ヲ尽御満足ニ 思召被下置候段

御意之上自 御手白鞘兼房御脇指被 下置候

一同年八月十八日御用多之処出精相勤候ニ付黒羅紗御陣羽織地自 御手被下置猶又 御念願之 御意之上自

御手金家御刀鐔被下置候 』

一明治元^{戊辰}年十一月二十六日於京都是迄之御役儀 御免三等家執事御供頭兼被 仰付候

一同年十二月二日於京都小膳儀章男与名相改申候

一明治二^{己巳}年二月十四日御都合ニ寄御供頭御免被 仰付候

一同年六月二十三日於東京御婚禮御用向無滯相勤候ニ付為御祝儀給御熨斗目御上下沓具被下候

一同年八月十三日上等家扶

精宮様附兼被 仰付候

一同年九月十三日御咎方日割之儀ニ付不念之儀有之恐入身分之儀相同候処謹慎被 仰付尤御用御指図ニ付乍勤

謹慎ニ被 仰付 御目通り 御免被 』 仰付同月十五日 御免被 仰付候

一同年九月十五日「外之冬彼是尽力苦心致し今般被為蒙 御賞賜一段ニ 思召三拾石御加増被下候

一同年十二月二十八日平日勤仕不怠且母江任方宜趣相聞寄特ニ 思召為御褒美白紬沓端被下候 』

六——(一)

安政七年[〓]万延元年(二八六〇)大老井伊直弼の死去後、幕府内部の政変の結果、井伊家に対する迫害が起つた。領地の一部没収、十万石の削減などである。藩主が横死した場合、御家断絶の責任まで云々される勢いであった。藩の重役達はこれらの追求を免れるため、直弼執政中の藩の重要文書を焼棄し証拠をなくそうとして、大久保小膳と竜宝寺清人の二人に文書焼棄を命じたのである。大久保小膳は直弼の執政の文書を焼棄してしまえば後世、直弼が行なってきた立派な業績を証明する証拠が失われ、遂にその偉大な功績は永久に埋没してしまう。その場の

下らない政争で直弼の真価を失わせることはしのびないと強行に主張した。竜宝寺は自己の保管分(約二分の一)は全部焼棄してしまったが、大久保小膳は藩庁には焼棄したと報告、実際は極秘裏に自宅へ持ち帰り秘密の場所に隠し万一発覚の場合は焼破し自らも殉死すべく火薬と共に置いたのであった。――平成初めの埋木舎の全面解体修復の折り長屋門の一階階段下に四面総て壁の部屋跡がありこれら秘密文書を隠し守った処も証明された。――大久保小膳は文書判明の折は切腹謝罪する決意であったことは申すまでも無い。小膳は主君直弼に忠であるばかりでなく国の正しい歴史にもまた忠であったので実に命がけの立派な行動であったといえよう。

明治十九年(一八八六)直弼の二十七回忌の法要が東京世田谷豪徳寺で挙行された折、大久保小膳は世の中も落ち付いてきたので、時機到来と毎日新聞主筆、島田三郎氏にこの事実を打ち合げた。島田氏はよくぞ命がけて客観史料をお守り下さったと絶賛し、幕末の政治事情も客観的に理解されることとなり、島田氏はこれらの史料により「開国始末」の名著を世に出された。単なる主観的薩長史観のみでなく、幕末我が国をとりまく国際情勢急を告げる折り、国論の混乱する中で、開国を断行し、我が国難を救い戦争を回避し国際協調主義の実践をされた大老井伊直弼の偉大さを国民が認識しうる史料保存に命を賭けた大久保小膳の忠誠心は主君死去後約三十年で花開いたのである。

これらの史料は井伊家に返され、その後、井伊家史料として東大史料編纂所等より公刊されてきたものである。尚、同時期の大久保家個人の史料も一万数千点同じく保存されておりこれらがわたくしの代になって東大近代法政史料センターや彦根市彦根城博物館史料室、彦根市史編纂室等の専門家によって、彦根藩政史研究のための一級史料であると云われ目下史料調査、整理、研究がなされ、マイクロ化や写真撮映が進行して、所蔵目録等が作成されつつある史料の分となるのである。「大久保家所蔵文書」は古書、冊子、留記、役職関係記録、日記、文書、絵画、

地図、経済生活の文書、それに直弼はじめ井伊家歴代藩主や藩政の重要人物、幕府や重要藩よりの書簡等入れると一万数千点に及び、今日迄整理されている分は約半分一寸位である。

東大法学部近代日本法政史料センターにて既にマイクロ化している史料等に関しては東大法学部の三谷太一郎先生、坂井雄吉先生、さらに石井紫朗先生方に高く評価された史料を中心に御力添をいただいで収録されたものである。深甚なる謝意と御礼を申し上げる。

六——(二)

大久保小膳(章男)の幕末における命がけの彦根藩重要文書の保存の功績が島田三郎氏の名著「開国始末」上の緒言、四頁より八頁に記されているので原資料として左に収録する。

井伊直弼櫻田の春雪と共に消えしより幾時ならずして事局大に變じ幕政を非難するの聲京師及び諸強藩の間に充満せり而して其幕府を非難するの聲は轉じて井伊氏を追咎するの說となり幕府は彦藩の領地十萬石を削りて以て京師に對する更政の一證となしたり此時に當り藩内の人心切々冤を幕府に訴へ死を以て之れを争はんとする者ありしが藩老、直孝の遺訓を示して之を鎮め因りて事なくして已むを得たり——中略——是より先き藩老幕禮の到らん事を恐れ嘗て直弼の信任せる長野主膳宇津木六之丞二人を斬りて追罰の輕からんを望むに至れり事情此の如くなりければ唯其冤を訴るの道なきのみならず直弼の執政間其手録の文書及親臣の記録を存するが爲めに災害の闔藩に及ばん事を恐れ一切焚燬して迹を没せんとの議に決し竜寶寺清人^{始中居彌}五八といふ大久保章男の二人此等の文書を執りて一炬に附せりと聞えぬ維新の後世態一変し井伊氏も亦勤王の功を以て賞を被りしと雖直弼の事に至ては世

論之を尤めて萬口一辭皆專權不臣の人と云いざるなし然るに才月の移るに隨ひ時運の開くると共に世漸く其然らざるを想ふ者ありしが明治十九年三月の法會に際し生前反對の政論を執られし人々も亦詩歌を贈りて之を弔し新聞紙上其逸事を掲げて其志を説くも世間又之を非議する者なきに至りければ大久保章男は時機漸く到れりとなして彦根に赴き多年其家に秘し置ける文書を携へて再び東京に出たり是れ即ち先きに一炬に附せしと披露せし者にして直弼が公卿諸侯に往復せし文書長野宇津木島田名は龍章、左近といふ九條氏の臣にして長野と共に公武の間に周施し後に暗殺せられたる者なり其他當時機密に干与せし人々の手簡數百通皆幕府の繼嗣、海港の開鎖、京師水府の事情等を記せし者よ係れり當時の真相是によりて窺ふを得べし往年彦藩譴を被りて文書焚棄の議あるに際し竜寶寺は之を火にして主家の安全を計るに如かずと云ひ大久保は之を保存して故主の必事を後年に證すべしと云ひ議相協はざりしが大久保は固く保存説を主張して曰く時運既に變じて先公の本意地下に没しぬ然れ共他年今日の眞狀を知りて先公の苦心を明にすべきは獨り此文書のみなるに一時の難に耐へずして匆卒之を火にせば何によりてか冤屈を他年に伸るを得ん僕竊に之を保存し藩廳には火中に投ぜりと復命せん万一事發露せんとせば罪を一身に引き文書を焚き其上に屠腹して辨解の辭に代へば以て主公を累ハすに至らざるべし若し機縁他年に熟して之を公にするを得るの聖代に遭ハゞ獨僕等の幸のみにあらず若し生前此幸機に會せずハ子孫に囑して永く家に傳へんと竜寶寺も之を強ふる能はずして止みしかバ大久保は常に文書と共に火藥を密藏して万一の變に備へしといふ此事は竜寶寺を除き闔藩一人も之を知る者なくして年を経り其後竜寶寺は病死したるが大久保の宿望空からず明治十九年の昭代に遭ひければ生前同憂異説の故友を想起し事由を竜寶寺の墓前に告げ此文書を携へ出で、人に示すに至れり豊原の手を経て予の通覽したるは則ち此文書にして今ハ井伊氏の有に帰したり直弼の藩政及び大政に關して手記せる文書數十通其稿今尚ほ井伊氏に藏せり中に就て其志を窺ふに足る者數通並びに本書に要ある名家の手簡は其眞蹟を摸刻して之を卷末に附しぬ

六—(三)

彦根藩・大久保家文書目録 — 資料 —

東京大学法学部

近代日本法政史料センター。第一回受入分(マイクロフィルム化完了)

- 一 直孝様御書之写(寛永二一、一一)
 - 二 御旗本八陣法手順記
 - 三 旗本練略式(慶応元、八)
 - 四 調練略記
 - 五 介錯之卷 貳冊之内
 - 六 介殺法 聞記 貳冊之内
 - 七 訓閲集 虎卷
 - 八 訓閲集 差物之卷
 - 九 軍決要目集目録(明暦三、七、六)
 - 一〇 日光御道中御往来御行列之諸事覚書
 - 一一 散人夜話
 - 一二 写(叙任記録)(慶応一〇〜元治元)
 - 一三 栗田郡野洲郡蒲生郡
- 御料村々御高並家数人数取調

- 一四 写（赤穂浪士関係）（文化五、二一、二五写）
- 一五 道押次第書
- 一六 小笠原婚姻式。水嶋氏森氏今邨氏伝来之起
- 一七 同 右 貳冊目
- 一八 西遊作
- 一九 仮写、俳諧道御礼金、御免許、願書扣
- 二〇 次徴様鉄炮御足輕四十人組ニ御組替被為蒙仰候一卷、留
- 二一 拔書帳（天明四、五、七）
- 二二 亀羈遊撃之業（辰、正月）
- 二三 あま夜の燈、蒲廬館藏、全
- 二四 枕乃草紙類句 目錄 詞書 全
- 二五 御内裏御障子色紙和歌、中殿、小御所（安政二、一一）
- 二六 茶道聞書
- 二七 陣訓要略抄
- 二八 講餘私録
- 二九 改元定
- 三〇 近衛龍山公記（天正一一、六、二）
- 三一 御供留（元文二、一一）

- 三二 家督被仰付候節江戸表江御札ニ使者指下候節之留(享保八、九)
- 三三 次宗様御引越留(安永八、一一、六)
- 三四 次徴様弓御足輕二十人組御預被為蒙仰候一卷、留(文政四、一、一一～二八)
- 三五 天保十三壬寅冬来朝中琉球浦添王子歌(天保一三)
- 三六 千松園旧槻尾末町表(明治一二)
- 三七 御自分御状留(天明七、二)
- 三八 月並歌集(嘉永六・七)
- 三九 鎧着初之次第
- 四〇 前惣持寺隆山儀ニ付申上
- 四一 御組足輕衆御代判ニ付留(享保一三、正月、六)
- 四二 故実聞書
- 四三 尺牘提要 稚文集成 上・下
- 四四 学問のすすめ(明治四年)
- 四五 詩文(物思い他)
- 四六 治道弁
- 四七 作意弁
- 四八 留記
- 四九 卷藁前十五色代(宝永三、五)

- 五〇 騎射步射集（宝永三、五）
- 五一 箭鑑集（宝永三、五）
- 五二 五徳集（宝永三、五）
- 五三 訓閲集（權化卷、他）
- 五四 訓閲集（团卷、他）
- 五五 館轄卷、武略集、武明論、兵的等法
- 五六 訓閲集（城取卷、他）
- 五七 決勝要略集 一〽十五
- 五八 嚶鳴館遺草 一〽六
- 五九 兵法雄鑑 一〽五
- 六〇 兵法雄鑑微妙至善卷
兵法雄鑑卷五十三微妙
- 六一 甲冑軍用記 一〽七
- 六二 洋外紀略 上・中・下
- 六三 直孝様御咄覚書
- 六四 聞書（正徳（次年）正月）
- 六五 万川集海抄 卷之一ヨリ五迄 上
- 六六 万川集海抄 卷之六ヨリ拾迄 下

大久保治男 彦根藩「大久保家文書」(一)

六七 御布告面 写(明治三)

六八 武官並非役之規則 三冊之内

六九 藩制 三冊之内二(明治三年)

七〇 藩制

東京大学法学部

近代日本法政史料センター。第二回受入分(マイクロフィルム化完了)

七一 諸家知譜拙記 一〜五(明治二年五月改正)

七二 单騎要略 被申弁 一〜五 村井昌弘編(天保八年六月再刊)

七三 年中用文章、上、下、龍章堂先生遺筆 小川玉水亭主人書

七四 画 釜 一〜七 筑前魯軒林守篤 編述(享保六年)

七五 槍術印可之卷

七六 都名所車(文政一三年正月)

七七 早引二鉢節用集(天保一三年)

七八 第二号 見一割

第三号 算法初学集

第四号〜第九号 日用算法記

第十号 百好算法記

第拾壹号 近道塵劫記

- 七九 議案録、第一 第三、第五（明治二年三月～四月）
- 八〇 日記控帳 上花咲宿、井上七郎右衛門（安政四年正月）
- 八一 御祝御銀式尽（寛延二年）
- 八二 御鎗奉行被蒙仰万留（寛政六年四月朔日）
- 八三 卓子献立書写（巳年）
- 八四 古一代集時代撰者撰様
- 八五 意見書（此節柄御急務之儀ニ付）（嘉永六年）
- 八六 答加藩大番頭岡田之静之問
- 八七 山鹿素水ヨリ答、大垣小原大夫之問（嘉永六年五月）
- 八八 薩、肥大守上書策（嘉永六年）
- 八九 聞 書（古人之咄聞伝他）
- 九〇 東海道井伊谷廻、御道中日記、西尾隆治他四名（嘉永四年五月）
- 九一 葛松先生話聞書（安永五年一月写）
- 九二 意見書（海防策）小原寛
- 九三 公議所日誌 第十五
- 九四 古城山往借之咄聞書（享保一九年七月写）
- 九五 古城山往借之咄聞書

大久保治男 彦根藩「大久保家文書」(二)

- 九六 志州鳥羽船頭小平治口上書写(明治三年十月写)
- 九七 大蔵流狂言 装束附
- 九八 喜多流 装束附
- 九九 次徴様鉄炮御足輕三十人組御預被為蒙仰候一件留(文化十四年正月)
- 一〇〇 仮面譜
- 一〇一 軍書覚書
- 一〇二 石田軍記、卷之八、卷之九
- 一〇三 遠浦春曙、霞中尋花、遇不逢恋
- 一〇四 家督被仰付候節之留
- 一〇五 慶長以来新刀弁疑拔書
- 一〇六 万葉三、四、五、
- 一〇七 後撰集
- 一〇八 請捌帳(文久三年四月)
- 一〇九 午ノ拾六番拾七番御長持入記(天保五年七月)
- 一一〇 子年卯月端午 御召御注文
- 一一一 諸国太刀(備前物一類他)
- 一二二 手続口上之覚(酉年六月)
- 一二三 午ノ五番六番御長持入記(天保五年五月二一日)

- 一一四 午ノ拾八番御長持入記 御碁盤箱入記(天保五年七月二三日)
- 一一五 控(金掘合戦 犬追物興行)
- 一一六 享保十五戌年諸払方大略
- 一一七 博覧会物品録 会計局(明治九年)
- 一一八 聚香舎鬪香記
- 一一九 雑記帳(天正拾八年、小田原責他)
- 一二〇 当家鎧威毛之次第聞書
- 一二一 菅山寺縁起写
- 一二二 御参詣之節之留下書(文化九年一〇月)
- 一二三 一騎軍用覚書
- 一二四 佐々木藤渡先陣
- 一二五 菩薩戒蒙引(はさみ込み資料一点付)
- 一二六 軍器図冊序、鷹記(文政七年一〇〜一二年)
- 一二七 大 学
- 一二八 大学作意
- 一二九 大学解
- 一三〇 自遺往来
- 一三一 愚 詩

- 一三二 覚(虫干他)
 - 一三三 歌集
 - 一三四 書簡(芙夷一件他)
 - 一三五 古城山往昔之咄聞集書(元禄二年一月)
 - 一三六 風聞書(五月四日)
 - 一三七 奥平源八郎奥平伝蔵夏目外記親之敵奥平隼人父子討立退井伊家江罷出候始終之書(寛文一二年二月二〇日)
 - 一三八 銀座四丁目江張札之写、烏山九郎秋就(文久三年五月)
 - 一三九 武具式目
 - 一四〇 竹説
 - 一四一 留記(五月十三日触他)
 - 一四二 留記(新徴組二付伺他)
 - 一四三 石田治部少輔三成伝
 - 一四四 一枚文書
- ① 差出申一札之事(無銘半鐘二付)(文化七年一月三日)
 - ② 差出申一札之事(風聞不宜、召捕二付証証文)(文政八年六月)
 - ③ 差出シ申一札之事(同右)
 - ④ 差出シ申一札之事(同右)

⑤ 店請証文之事（天保二年三月）

⑥ 乍恐以書付奉申上候（上納金二付）寅年二月一日

⑦ 乍恐以書付奉申上候（役儀入用割賦二付）申年正月二九日

⑧ 御差紙、申年七月五日

⑨ 乍恐以書付奉申上候（弥右衛門一件二付）戌年二月二三日

⑩ 書筒（出張依頼）三月二一日

一四五 一紙文書

① 差出申一札之事（弥右衛門儀村御預御慈悲願上二付）

② 書筒（出張依頼）

③ 六郎兵衛一件内濟書

④ 覚（御触書、御受印帳受取二付）

⑤ 差紙

⑥ 名主役依頼二付一札

⑦ 目録

一四六 皇都略記（弘化二年五月）

東京大学法学部

近代日本法政史料センター。第三回受入分

- 一四七 小学理学問答、上、中、二冊
- 一四八 絵本庭訓往来 全
- 一四九 重刊冠註、寂室和尚語録、卷之一、卷之四、四冊
- 一五〇 古今鍛治備考 七冊
- 一五一 草木生類名寄
- 一五二 鑑定便覧 上、下、二冊
- 一五三 袖珍、藩銘録 全
- 一五四 華族階級
- 一五五 茶人系伝全集 全
- 一五六 小学中学読本字引 全
- 一五七 武家必携 泰平年表 完
- 一五八 殿居囊 完
- 一五九 青標帑 後編
- 一六〇 生花図
- 一六一 肥前長崎図 全
- 一六二 改正増補蛭語箋

- 一六三 諸国名義考 上、下、二冊
- 一六四 四季草七冊
- 一六五 元禄十五年云々、播州赤穂城下離散
- 一六六 御陣帳
- 一六七 松平大和守様御備場備付
- 一六八 相摸国三浦郡之内郷村高帳
- 一六九 江州彦根御城御普請記
- 一七〇 弘化二年 漂流人 口書
- 一七一 城ヶ崎内安房備台場備付之分
- 一七二 犬追物
- 一七三 万 留
- 一七四 寸法書 全
- 一七五 大坂各御陣御家来御着列記 上
- 一七六 関ヶ原大坂両御陣取御着之写
- 一七七 嘉永二年、智磨様御出生中道具御奥方江
- 一七八 一百足ツツ正月五月九月
- 一七九 明治四年十一月 通御泊之段御直段書
- 一八〇 寛政元年 御縁女様御符請御支度御道具 留

- 一八一 新野家統書 一綴
- 一八二 靈宝之覚
- 一八三 覚書(相国寺)
- 一八四 覚書(相国寺)
- 一八五 覚書
- 一八六 覚書(大徳寺)
- 一八七 覚書
- 一八八 覚書(総見院)
- 一八九 覚書(妙心寺)
- 一九〇 覚書(大雲山竜安禅寺)
- 一九一 覚書(石山寺)
- 一九二 覚書(平野社)
- 一九三 覚書(宝寿院)
- 一九四 覚書(竜光院)
- 一九五 覚書
- 一九六 覚書
- 一九七 覚書(清涼寺)
- 一九八 覚書(天竜寺)

一九九 覚書（北野宮社中役者梅泰坊）

二〇〇

御小納戸宛覚書（請取）

二〇九

十通

二一〇

御小納戸宛覚書（請取）

二一九

十通

二二〇 信州木曾山大樹有無之儀探索仕左ニ申上候

二二一 御本丸御普請御用

二二二 御本丸云々

二二三 御本丸御普請脚作事方

二二四 御作事方諸棟梁云々及び書状

二二五 御本丸御普請御用

二二六 弘化度御本丸御普請及び書状

二二七 辰年御本丸御普請御用職御入用高

二二八 文久二年、殿様御弟妹様御麻疹云々

二二九 留記（一袋）

二三〇 弘化三年、宗観院公之御事、若殿様御物帳、七点他二

- 二三一 留記 一綴
- 二三二 講武所規則
- 二三三 書付 二通
- 二三四 歌会関係 五通
- 二三五 歌会関係 五通
- 二三六 歌会関係 五通
- 二三七 詠草 通辰上
- 二三八 文化五年、御手筒入御櫓入記
- 二三九 覚 一通
- 二四〇 彦根有之御官服帳 御小納戸
- 二四一 手形留書
- 二四二 御官服帳 書拔 一綴
- 二四三 弘化三年、御発駕云々 御用役一綴
- 二四四 東新御土蔵御道具 留
- 二四五 嘉永二、江戸ニ御残し御道具帳一綴

第四回受入分として調査・整理済分

- 二四六 小手分年番仰付候ニ付諸事留(文政五年)

- 二四七 小手分組道押次第書
- 二四八 小手分備立並揃場書所付入(袋共十点)
- 二四九 御側役宛書状
- 二五〇 彦根表出立東海道出府 諸色諸捌帳(文久元年)
- 二五一 公方様御上洛
- 二五二 御小納戸御用
- 二五三 下田亜米利加來記(安政三年七月二十一日)
- 二五四 京都名所記
- 二五五 請捌帳(元治元年七月)
- 二五六 請捌帳(文久三年)
- 二五七 北海道絵図
- 二五八 直書目録(五帖)
- 二五九 母衣職相勤諸事留(五点)
- 二六〇 御内献上巻(安政二年)
- 二六一 足輕組心持之事
- 二六二 家督被仰付候式他三通(嘉永三年十一月)
- 二六三 御小納戸役二付手控
- 二六四 御供留他(元文二年)

二六五 万川集海抄 卷之一〜五 上

卷之六〜十 下

二六六 総房海岸御見分村々之覚(弘化四年十一月)

二六七 風聞書、彦藩中川生書翰写

二六八 使節従行記(宝曆庚辰五月)

二六九 異国船渡来一件書拔

二七〇 小鹿素水より異国船渡来ニ付申上書

二七一 魯西亜国様子書

二七二 佐土原侯上書写

二七三 御物頭御用書付入 十点

二七四 彦根県関係文書 一袋(明治初期)

二七五 延享四丁卯年御留書拔 十帖

二七六 富士見十三州輿地之全図

二七七 御側役宛書状

二七八 井伊家系図 早見

二七九 イキリス船漂流覚増書他一帖

二八〇 絵 図 一袋

二八一 絵 図 一袋

- 二八二 御直書御案文下書写 一冊
- 二八三 年番諸事留 (弘化二年正月)
- 二八四 上書 一冊
- 二八五 御道中日記 (文久三年)
- 二八六 書状 (一束)
- 二八七 御東京供奉日記、大久保藤助他 (明治二年二月)
- 二八八 御一新關係留記 (十五点)
- 二八九 改正日本輿地路程全圖
- 二九〇 留永武艦大成、壹、貳、參
- 二九一 藩制 (四冊)
- 二九二 直者公御咄覚書
- 直者公御遺言
- 二九三 書状 (一袋)
- 二九四 御在京中御供勤方 (文化六年三月)
彦根より御行列書之写、他三冊
- 二九五 別段風説書 (安政五年正月)
別段風説添書 (安政五年正月)
- 二九六 御道中日記 (嘉永七年十一月)

日記目録(宝暦十三年正月〜文政十三年九月)

二九七 御供留(元文二年)

御供留(元文三年)

抜書

二九八 藩庁、内家、職員録(明治四年)

二九九 士族禄制(明治四年)

三〇〇 彦根御料地 彦根城井伊家江拜借二付書類写並留記

七

「彦根藩・大久保家文書」は幕末、維新の混乱期にあつて彦根藩政史、彦根地方史、更にこれらを通じての日本全体史との関連にとつて大変重要な一級史料が散逸することなく保存されていることは大久保家代々の功績であり、史料の高い評価については、専門の東大教授方、また、彦根市史、彦根藩政史の専門委員の京大教授、名大教授、博物館史料専門学芸員等の方々の一致した結論であり、これらの調査、研究、記録、収録については所有者である大久保治男の協力、共同の研究・調査の形で実践せられることとなり、東大近代日本法政史料センターのマイクロー化はしばらく中断し、平成四年よりは彦根市側の彦根城博物館の調査、研究、収録に全面的に協力することとなり大久保治男との共同調査・研究で行なうこととなった。

平成四年七月の彦根市側の公文書によれば「彦根藩・大久保家文書——大久保治男所有文書——」の調査概要として、

- 1、調査の対象 大久家文書 約一万点
- 2、調査場所 東京都文京区千石 大久保治男氏邸
- 3、調査日程 平成四年七月二十七日から八月一日まで
- 4、調査担当者 学芸員 母利美和（大久保治男氏と共同調査）
- 6、調査の方法 ダンボール箱・プラスチック衣装箱二十一個に収納されてきた資料は現当主の祖父、伯父、中

村不能齋らにより一部整理された痕跡がみられる。しかし、江戸時代のもの明治時代のものなどが混在し、また当初一括資料とされていたものが分割されたりしている。そのため、現状で一括されているものは、可能な限りそのまま保存し、一括が崩れているものについては、個々に分けて再分類が必要である。

調査の手順は、単年度の調査完了は不可能なため一年度に約一五〇〇点を調査対象とし、写真撮映、目録化を進める。所有者の意向により調査は現地での共同調査を原則とするが、作業の効率化をはかるため仮目録を作成の上、博物館に一時資料を寄託することもある。資料については以下のように分類した。

「前近代文書」

古文書

歴代藩主関係資料

側役関係資料

小納戸関係資料

鷹役関係資料

鉄砲組支配関係資料

幕末・異国船警備関係資料

絵 図

系図・系譜・由緒書

典 籍

文芸関係資料

「近代文書」

明治元年以降、明治四年の廃藩置県以前の資料

廃藩置県以降の資料

この分類にしたがい、全資料を分類し、仮目録作成のため文書にラベルを貼付し、ナンバリングを施した。このナンバー順に、別紙後仮目録のように、個々の文書の頭書を書き出し、形状、点数を明記して、文書の特定ができるようにした。但し、これはあくまで仮目録作成と写真撮映をおこなうための便宜的な分類であり、最終的には本目録作成のため、個々の資料につき、分類の出所原則に従い、差し出し元の部局、人名別等により編年整理する必要がある。

7、今後の調査

古文書は膨大な資料点数にのぼるため、短年度の調査は不可能。博物館資料として利用度の高いものから順次、目録採集、マイクロフィルム撮映をすすめていくのが妥当と考えられる。一度に約一五〇〇点から二〇〇〇点を目途に整理し五ヶ年計画とするのが妥当と考えられる。本年

度は初年度であるため、一〇〇〇点程度を対象とし、九月末頃に再調査を実施する予定である。

この様な方針によりまず平成四年七月には一番より七〇七番迄の史料調査仮目録が出来十月の調査では七〇八番より一二九二番迄の史料調査仮目録が完了した。

平成五年度は一二九三番より三九二八番迄の二六三八点の史料の仮目録の調査・収録が出来た。

平成六年度は三九二九番より五五五七番迄の一六二八点の史料の調査・収録が進み仮目録の作成がなされた。

平成七年度は歴代藩主の井伊直弼書類を含む貴重史料の調査、撮映に入った為、総て大久保の自宅書斎で行なわれた。門外不出のため調査・収録件数は少なかったが史料価値は超一級のものばかりであった。五五五八番より六〇五〇番までの調査・マイクロ収録が終了し仮目録が出来た。四九二点であった。

尚、撮映されたマイクロフィルムより通常読了できるように古文書が現象され製本されB5版の白地に墨字で完了している立派な図書として二セット製作された。

彦根城博物館貴重史料室と大久保家に各々一セットずつ保存され、古文書そのものを見なくてもその本の史料を読めば内容が判るようになった。堅表紙、金文字で「彦根藩・大久保家文書」と書かれている図書はなんと、一二六巻（一巻は三、四百頁）の多きになり本棚四、五段にも整然と並ぶに至っている。彦根市公費と大久保の個人経費と協力によって完成した斯界の研究者等への貢献は勿論、彦根藩政史、維新史の重要な原史料として超一級史料と高い評価を受けている。

本調査、収録事業は大久保治男が苫小牧市との公私協力大学の開学設置準備委員長になった平成八年より大多忙になり残りの部分については中断したままになっている。また、平成十年度より平成十三年度までは同大初代学長として北海道に参ってしまった為新たには行なわれていない。以上の約六〇〇〇点になる膨大な史料仮目録も出来

てはいるがここでは膨大の数で記述不可能のため原目録を見ていいたくとして紙面の都合上記することはできない。

八

平成十四年三月、十七万苦小牧市民の二十年の悲願の四年制大学を平成十年四月に立派に創設し、(市長より感謝状も受け)苦小牧駒澤大学初代学長を無事任期満了して四月より同大の公費在外研究員となった大久保治男は従前の如く「彦根藩・大久保家文書」の調査・研究・収録の仕事が可能となり、五、六年間中断していた分をとり戻すべく計画をたてる中で、幸いに、目下、彦根市史の編纂事業が進行中にて、彦根市役所総務部に「市史編纂室」が活躍中であるので、事前に史料も寄託してある文書もあり大久保の調査、研究活動とのドッキング、共同調査協力がなされ、市史の方も今正に近世史、近代史の史料収集の大詰の段階であるが、なかなか市史に直接役立つような史料収集が思いにまかせず、従前の収集されている彦根城博物館の「彦根藩・大久保家文書」も利用させてもらおうと考えていた矢先であったので早速に「大久保家文書」の残りの史料についても共同での調査・収集・目録作成の実施がなされ、平成十四年八月迄に「市史編纂室」の方で新修彦根市史編纂に活用できる史料を一類としその他の史料を二類として区分された。市の予算と専門職員が一类については史料に調査番号を付して、大久保治男指導・協力の下で史料目録を作成しマイクロカメラで撮影された。撮影終了後、史料に調査番号を記した付箋を挟み、収納容器十六箱に収納された上、埋木舎の大久保家に返却され、目下、大久保の方で各史料に付その内容等を当り調査、研究が行なわれている。但し、膨大な史料数であるので単年度では終了せず今後も継続されるものである。この中の重要な史料については彦根市史の史料編―近世―や―近代―の処で相当数が掲載され利用される予定になっている。

尚、文書一類は更に項目によりその内容によって十六迄分類されている。その文書の内容、年号、差出人や作成人、相手方、形状、数量、備考として特記事項や文書の状態等について既に目録が完了しているところであるが、これも原本を見ていただくところでは頁数の関係で載せられない。

収録の点数のみ記し概況を推えることとする。総て一類である箱1……01-001-011-013、箱2……02-001-021-001。箱3……03-001-030-092。箱4……04-001-040-019。箱5……04-020-040-036。05-001-050-091。箱6……06-001-060-040。箱7……07-001-070-024。箱8……08-001-080-023。箱9……09-001-090-045。箱10……10-001-100-010、箱11……11-001-110-003。箱12……12-001-120-011。箱13……13-001-130-007。箱14……14-001-140-006。箱15……15-001-150-001、箱16……16-001-160-007。

この中で、明治元年より大正、昭和の初期迄の大久保家代々の日記は藩主側近より維新後も井伊伯爵の執事として仕えた大久保の公的生活の多い日記として正に市史編纂にとつても一級史料として高く評価されている。

以上の史料の調査番号より一類として収録されている重要史料は合計一〇四七点の多きにのぼっている。

因みに二類として分類されているものは1〜33迄に細分類されている。ここでは省略するが、我が国にほとんど残っていない貴重な明治初期の新聞が約百二十点他十数束、教科書、辞書、雑誌、京都帝大関係図書、軍事関係、収支簿、郵便局伝票、宗教関係、写真等々があるが、古文書としてはなく貴重な残存が少ないと思われる活字本等があり、合計は約二〇五〇点であり他に束になっているもの、湿気や虫くいで古文書がひつついていて解くことができないもの等も相当ある。

以上、「彦根藩・大久保家文書」として、現在迄に調査され、一応、仮目録やマイクロフィルムに記録された古文書については、

東大法学部近代法政史料センター分	三〇〇点
彦根城博物館史料室四年間調査分	六〇五〇点
彦根市史編纂室分	

一類	一〇四七点
二類	二〇五〇点

以上総計

九四四七点

「彦根藩・大久保家文書」は公的機関との共同調査、収録約一万点が公費や公務員の方々のご協力で目録等が完成しつつあるが、未だ門外不出の大久保家家宝級の藩主や歴史上の名人の直筆や古文書、古書等の分は公にしている分も残っている。更に、幕末より明治維新の頃の手紙もほとんど残っており、りんご箱の大きさの箱三〜四箱びつしり入っており、虫くい等心配されるので早急に調査・研究を行なわなければならない。目録ができていない古文書等についても、各文書の内容等や総合的研究は筆者のライフワークとしての調査・研究を急ピッチで行わなければならないことは申すまでもないが市史編纂室や市博物館史料室や彦根藩政史研究家によっても行われるところであろう。何代にも渡り二百数十年以上の大久保家代々による掛け替えの無い貴重な文書保存の並々ならぬ(幕末期は命がけの)努力と、その子孫として筆者の責任の重さをひしひしと感ずるのである。(二〇〇二、八、三〇)

(おおくぼ はるお・苫小牧駒澤大学教授。国特別史跡・井伊直弼学問所「埋木舎」当主)

苫小牧駒澤大学紀要第八号 (二〇〇二年十一月三十日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 8, 30 November 2002

龍宮的イメージの形成

——近世の浦島伝説とその周辺をめぐって——

The Process of molding the Ryugu Palace Image
——Centering on the Modern Urashima Legends——

林 晃 平

Kouhei HAYASHI

キーワード：イメージ、浦島太郎、伝説、龍宮、門

要旨

龍宮のイメージは、一度に形成されたものではない。浦島伝説においても所謂御伽草子の本文の中では四方四季の庭を持った金銀のきらびやかな宮殿のイメージしがなく、その描かれた風景も日本的であった。一方挿絵では元禄四年刊本にのみ後に「龍宮門」と呼ばれる門が描かれている。しかし、これは本来中国明清代の城門や寺門の形式であり、それが当時の日本では異国異境を象徴する意味で描かれていたに過ぎなかった。その後江戸後期の草双紙類には、この門が龍宮の門として描かれることが徐々に多くなり、次第に龍宮の象徴的意味あいをもって描かれていくことになるのである。

【1】問題提起

明治三十五年秋、森鷗外は、俳優伊井蓉峰からの依頼で、これまでにない全く新しい視点から、戯曲を書き下ろす。それは小倉時代の左遷落魄から帰還した鷗外の文壇への華々しい再出発となる作品でもあった。それが『玉篋兩浦嶼』である。鷗外はこの作品の上演にあたって、自注をものしている。その「井筒みづづ、桔槔はねつるべ。その上に桂かつらの木。」の注は、次のようなものである。注1

日本紀神代の卷、彦火火出見尊の海神の宮にゆき給ひし條に、門の前に井あり、井の上に楊津ゆづからのみ杜樹ありと云へるに本づく。

同じ書の雄略紀に、浦島子のゆきしは蓬萊山なれば、海神の宮にはあらず。されど蓬萊山の景物は、一つだに記されず。釋日本紀に引ける丹後國風土記にも、たゞ蓬山とあるのみなり。こゝには俗説に浦島太郎龍宮にゆきぬと云ふを取りて、神代の卷の海神の宮の景物を用ゐたり。


〔玉篋兩浦嶼自註〕歌舞伎・第32号、明36・1、原文総ルビ、引用文の傍線は筆者付す・以下も同じ〕この注の文から一つの興味深い事柄が明らかになる。つまり戯曲は内包しているすべてを文字だけで表すのに対して、上演する舞台では作り物、例えば大道具小道具という作られた物の力を借りなくてはならないことである。依頼戯曲ゆえに上演を前提にしている。そして、大道具小道具を製作するためには具体的な形が必要であり、目に見えるイメージの提示がないと作ることではできない。鷗外もそのために、自注を作成して作者の意図を明確にし、頭の中のイメージを具体的に説明していく。

だが、こうした過程の中で一つの障害が起きる。鷗外の意図していたイメージがうまく形にならないのである。鷗外のイメージした浦島は、神話時代の浦島であり、訪問先は龍宮ではなく蓬萊山であった。しかし、蓬萊山の具体的イメージは文献には提示されていない。鷗外はこのことを承知している。だが、具体的イメージがないと舞台

での展開はできない。ゆえに鷗外は「俗説」のイメージを借りるという。海神の宮でも蓬莱でもなく浦島太郎の行った龍宮とするのである。その龍宮に神代の海神の宮の「楊津杜樹」を登場させてこう述べたのである。

ゆえにこの戯曲の浦島とは、彦火火出見尊であり、海幸彦であり、浦島の子であり、浦島太郎なのである。そうになると、ここに展開するものは龍宮であり、同時に海神の宮でもあり、蓬莱山でもあるのである。しかし、何よりも元となったイメージは龍宮なのであった。龍宮と蓬莱と海神の宮、時代もイメージもまったく別で大きく違うはずのものを一つにして上演するのは奇妙である。しかしやむを得ない。劇場で幕が開けば、大道具小道具の具体的なイメージが演技よりも先に舞台に提示さる。役者の演技よりもものが先行していく演劇であればこそその処置である。

ところで、結果としてこの「俗説」の龍宮は具体的にどう表現されたのか。また、そのイメージはたして観客たちにはどう受けとめられたのか。この明治の龍宮イメージを遠くに見据えながら、今日の人々が抱いている龍宮のイメージがどう形成されてきたのかの考察を進めていこう。

そこで、まずは龍宮の今日的イメージを抽出してみよう。今年二〇〇二年の夏、最新のイメージを提出しておく。JR佐賀ステイネーションキャンペーン「Go to SAGA」のポスターである。電車の中吊り広告なのであるが、この佐賀県の武雄温泉の楼門を写したポスターに添えられたコピーは「竜宮城へは、コイン数枚で入場できます。」というもの。これは温泉の宣伝を意図したものであるから「龍宮城」とは明らかにこの楼門を龍宮城の門に見立ることと成立しているものである。つまりこの門こそが龍宮を象徴しているのである。

ちなみに、この龍宮城に付属するこのような形の門の典型を挙げるならば、昭和十二年発行の講談社の絵本『浦島太郎』を示しておこう。笠松紫浪によって描かれたこの挿絵には、浦島が龍宮に近づく場面から故郷へと帰る場

面まで、表紙と中扉を含め都合七箇所はこの門が描かれている。例えば、故郷へと浦島が龍宮を後にする場面でも大きなこの楼門に乙姫ほか侍女たちが出て見送る様子が描かれているのである〔図B〕。まさにこの門こそは龍宮表現の象徴といえるであろう。ゆえにこの俗に「龍宮造り」とも呼ばれる形式の門を本稿では「龍宮門」という呼称で使用していく。^{注2)}

二 所謂御伽草子の龍宮の描写とイメージ

「俗説」とされる浦島太郎が行った龍宮とはどんなところであつたのだろう。一般に浦島太郎の典型を所謂御伽草子に求めることが多い。しかし、その御伽草子「浦島太郎」の龍宮は案外なものである。まず流布本系の典型である祝言御伽文庫の本文から確認していく。^{注3)}

祝言御伽文庫 さてふねよりあがりいか成所やらんと思へばしろかねのついでをつきてこかねのいらかをならへ門をたていかならんてんじやうのすまゐもこれにはいかでまさるべき此女ぼうのすみ所ことばにもおよばれず中く申もをろかなり

龍宮に関する具体的特徴は、銀の築土、金の葺、門、これだけが記されているに過ぎない。これに対して流布本の異本も確認しておこう。

岩崎文庫絵巻 さてふねよりあかりいかなるところやらんとおもへは白かねのつるちをつきてこかねのいらかをならへもんをたていかならん天上の住居もこれにはいかでまいるへきこの女房のすみところをみれば心もよはれす中く申もをろか〔なり誤脱〕

東大国文研奈良絵本 A さて舟よりあかりて見るにしろかねの門をたてこかねのいらかをならへいかなるきん中のすみひもこれにはいかでまさるへき此女はうのすみ所こゝろことはもおよばれす申も中くおろかなり

元禄四年刊本 さてふねよりあがりいかなるところやらんとおもへばしろかねのついでをつきてがねのいらかをならべもんをたていかならんでんじやうのすまゐもこれにはいかでまさるべきこの女ぼうのすみどころことばにもよばれずなか／＼申もおろか也うらしまこれを見てたゞぼうぜんとあきれはてゝぞゐたりける

龍宮の建物の描写に関しては、流布本の間ではほとんど変わるところはない。金銀と築土・門・葺がセットで出てくるに過ぎない。では、建物以外では特徴的描写は存在するのか。共通するものが、もう一つある。それは、龍宮に付随する四方四季の庭の描写である。これについては既に先学による論考があるので本稿では詳しくは触れないが、簡単に春の場面に限って確認しておこう。四方四季の庭は、龍宮の特色として紹介されているのである。

祝言御伽文庫 さて女ぼう申しけるはこれはりうぐうじやうと申所なり此ところに四方に四きの草木をあらはせりいらせ給へみせ申さんとてひきぐして出にけり (略) まづひがしのとをあけてみれば春のけしきと覺てむめやさくらさきみだれやなぎのいとも春かぜになびくかすみのうちよりもうぐひすのねものきちかくいづれの木ずゑも花なれや

岩崎文庫繪巻 女房申されけるは是はりう宮しやうと申ところなりこのところに四方に四季のさうもくをあらはせりいらせ給へみせ申さんとて引くしていり玉ふ (略) まつひかしの戸をあけてみせたまへは春のけしきとおほしてむめやさくらさきの咲きみたれ柳のいと春風になびくかすみのうちよりほのめきいつるうくひすの音ものき端にちかくなきにけりいつれのこすゑも花なれや

東大国文研奈良繪本 A そのうち女はう申けるはこれはたつのみやこと申ところなりすなはち四方に四きのさうもくをあらはせりいらせたまへ見せ申さんとて太郎をひきくしてこそ出にけれ (略) まつひかしの戸をあけて見れば春のけしきとおほしくてのきはの梅にうくひすの聲めつらしくあをやきのいとしつかに春風のなびく霞のひまよりもいつれのこすゑもはななれや元禄四年刊本 さてうらしまいふやうはこのところはいづかか成ところにてかほとめでたくましますやいぶかしさよとぞ申さ

れける女ほうきいてそもくこれはりうぐうじやうとてたのしみふかきところなり四ほうに四きのさうもくをあらはせり見せ申さんとてひきぐしていでにけり（略）まづひがしおもてを見てあればはるのけしきとうち見えてむめやさくらさきみだれやなぎのいとのをやかにるかせにうちなびきかすみのうちよりうぐひすのこゑもさながらのどかにていづれのこずゑもはななれや

やはり、流布本系本文に大きな異同はない。以上を確認しつつまとめしておく。流布本系本文における龍宮に関する記述には、諸本間に大きな異同や変化はない。そして、その描かれた内容は銀の築土あるいは門、金の甍であり、「禁中」あるいは「天上の住まい」という考えられる最高のイメージと龍宮との比較称揚であった。また、龍宮の特色とその描写に関しては、四方四季の庭があった。しかし、この庭も具体的には日本のないわば和様の庭園であり、梅・桜・柳・鶯・霞などを配した類型的表現であった。

ところで、これまでは「俗説」といわれた浦島太郎を、その流布という観点から流布本系統の本文によって検討した。では、流布本以外では龍宮はどう表現されているのか。これらも確認しておこう。所謂御伽草子「浦島太郎」は流布本を含め四つの系統に分けることができる。まずⅠ類を見る。高安六郎旧蔵本（焼失）と日本民藝館絵巻A（前半欠）・フランス国立図書館パリ奈良絵本（前半欠）の三本の伝本が確認されているが、具体的描写が詳細な高安本の本文を見てみよう。

うらしまを、かめのみやこ、ほうらいへ、つれてゆきけるに、ろかいなけれども、船は、ほうらいへ、つきにけり〔挿繪 第二圖〕／されは、うらしまは、これを、夢かうつゝかと、うたかはれ、ふしきの、おもひをなして、見給へは、こんくゝりを、のへたるところあり、みちには、めなうをしき、しろかねのつゝみち、こかねのもんをそ、立たりける／うちへ入て見給へは、きんくゝをのへたる、たいりあり、このもんへ、いる人は、あつからず、又さむからず、としをふれとも、おひもせず

(略) / さて、あるゆふくれに、ふるさとの事を、思ひいたし、女はうに申けるは、あまりに久しく、ふるさとを、見候はねは、こひしく候ほとに、かへりたく候と、申ければ、女はう、のたまひけるは、此さとへ、きたりては、ふたゝひ、かへり候事ならず、かへり候とも、ふるさとは、中くしんせきたえはてゝ、御身のゆかりと申人も、あるましく候そや、御とゝまり候へと、申されければ、(略) 心くるしくおもひて、さらは、なくさめ申て、とゝめんとして、四きのせんすいをそ、見せにける / まつ、ひかしおもてを、みせければ、せいやうの、はるのけしき、おもしろさ、かきりなし、まかきのうちには、うくひす、さへつりて、やうはいたうりの、いろくに、みちくぬれは、にほひきて、岸のあをやき、いとみたれ、なくやかはすの、こゑすみて、ぬるめる水にかけうつす、月のゆふへも、いとしく、おほろけ成ける、ありさまを、御らんしけるに、このはるの、おもしろきけしきにも、心はさらに、とゝまらず

(室町時代物語集・第五・二二六〜二七頁)

浦島太郎の訪問先は龍宮と決まっていたわけではなかった。このⅠ類では、亀の都であり、蓬萊なのであった。しかし、その蓬萊の描写は名前の違いほどもない。類型的であり、金・銀・瑠璃・瑪瑙という素材を散りばめた道・築土・門、金銀を延べた内裏との比較称揚、四季の泉水、春ならば鶯・楊梅・桃李・青柳・蛙などで飾られた四方四季の庭も完備しているのである。

次にⅡ類の日本民藝館絵巻Bを見る。

さて、この女はう、うみのうへにて、をりけるとをもへは、こかねのはまへ、おちつき、こなたへ、いらせ(絵 第三図)たまへと、うちによひいれて、申やう、みつからは、(略) かりそめとは、おもへとも、はや三年(絵 第四図)にこそなりにける / あるとき、このりうくうしやうとの、四はうの、しきを、みせ申さんとて、たちいてける / まつ、ひかしのものを、あけてみれば、むめ、さくら、さきみたれ、心ことはも、をよはれず(絵 第五図)

(室町物語時代大成・第二・六〇三頁)

この絵巻は文字の量も少なく具体的描写に乏しいのであるが、「金の浜」という表現はやはり類型的描写の域を逸脱するものではない。また「このりうくうしやうとの」とある部分は「と」の衍字でも「龍宮城殿」の意でもなくて「龍宮浄土」なのであろう。流布本の一部にも同様の語句が見られる。

Ⅲ類は古梓堂文庫旧蔵本のみの孤本で奈良絵本を改装した絵巻である。独自の本分を持ち挿絵も含めて注目に値する特異な本である。残念なことに現在所在不明であるが、幸いなことに全文の翻刻と不鮮明ながら挿絵図版によつて一部を今日でも窺い知ることができる。

御物かたりに、心いさみ、いつのまにかは、ほとなく、ほふらいさんにつく、これこそ御すみかと、ありしかは、夢の心ちに、
見わたせは、かい /〔繪 第九圖〕 / まんくとし、きわもなし / さなから、しつほうをちりはめ、くふてん、ろう
かく、けんくはんをたて、しろかねのついち、あかゝねの、もんをたて、そらには、たまのはたをなひかし、らんかんには、る
りのゆきけた、しきてわたせり、はくしゆのはたは、かせになひき、ふきくるかせに、あたりて見れば、こと、ひわ、しやう、
ひちりきの、しらへ /〔繪 第十圖〕 / みちくゝて、さなから、こくらくしやうとも、かくやらんと、しやうしむしやう
の、ねふりも、さめぬへしと、心そゝろに、うれしくこそ、おもひける / もんくはいには、八たいりうわう、もんのはんを
こそ、つめられける /〔繪 第十一圖〕 / こと、おひたゝしきふせい、めをおとろかす、はかりなり /〔繪 第十二
圖〕 / いまた四きののていを、みせまいらせぬとて、御てこしを、こしらへ、みなく、くわんにんとも、あまた、めしつ
れて、ふうふは、こしに /〔繪 第十三圖〕 / めされつゝ、そのほか、さんかいの、ちんふつ、とゝのへて、まつ、はる
のゝに、いてさせたまふ / むめさくにはに /〔繪 第十四圖〕 / ふく風は、にほいもよそに、ちる花の、木すゑをつ
たふ、うくひすの、はつねもむすふ、たにの水、こぼりはいまたはつきくら、さきにけり /〔繪 第十五圖〕 / やなぎの
いと、なかきひも、やよひはすへと、なりてけり、いての山ふき、さきみたれ、まつのなたてに、なかふちの、はなむらさき

の、くも見えて、わりなかりける、けしきかな

(室町時代物語集・第五・二〇二〜三頁)

ここでも訪問先は蓬萊山である。その描写は、七宝・宮殿楼閣、玄関・銀・銅・玉・瑠璃・琴・琵琶・笙・箏・簞箆という多彩なことで飾られている。しかし、これもやはり類型表現の域を出ない。どうやら龍宮と蓬萊は名前こそ異なれどイメージはそれほど異なるものではなかったようだ。

こうした龍宮蓬萊に対する表現は、浦島太郎に限られたものであったのだろうか。参考までに他の作品も確認しておこう。その一つは『地藏堂草紙』に描かれた龍宮のイメージである。

浪の上を陸地のごとくはるかにとをくおきのかたに出たれば、四方の山もみえずなりぬ。(絵) かの海のそこにいたりて見

れば、宮殿楼閣の精舎あり。莊嚴微妙にして、この世のたぐひにあらず。唐絵などをみる心ちして目出たかりけり。門内に入てみれば、わが妻と思つる女の姿、たちまちに天女のごとくに成ぬ。

(古典文庫『未刊中世小説』三・一八五頁)

この龍宮は古椗堂文庫旧蔵絵巻の蓬萊に似ており、宮殿楼閣と門のある以外の具体的描写に欠けている。だが、これによって逆に龍宮というもののイメージの基本が宮殿楼閣と門を有することであるのが知られる。注目したいことは、ことばで具体的に表現されなかつた補いとして「唐絵などをみる心ち」ということがあることである。まさにその龍宮は唐絵のような建物だったのであろう。また、龍宮を訪れた人物といえは田原藤太が挙げられるが、例えば学習院大学蔵『俵藤太物語』の描写は「七宝の宮殿黄金の楼門」とあり、これも古椗堂文庫旧蔵絵巻に似るイメージであり、さらびやかな宮殿と門のあることを述べている。

さて、こうした文字表現に対して、付属の挿絵では、龍宮はどう表現されていたか。これも確認しておこう。所謂御伽草子『浦島太郎』の挿絵の絵様は、布本系統の本文を持つ諸本でも一様ではなく、個々の表現に唐様と和様の二つの表現が入り交じったものがある。その概要を表で簡略に示したものが次の「挿絵和様唐様対照表」である。

たという理解はこの一例からでも可能にはなる。それは、さらに宇良神社蔵絵巻の蓬萊（＝龍宮）の門〔図D〕を重ね合わせることにより、この門の形式はもつと遡ることになり、それは、確実と見えるだろう。

しかし、ことはそれほど単純容易ではない。龍宮門とはいいいながら、はたしてこの門は龍宮のみに付属した限られた形の門であると言い切つていいのだろうか。というのも、例えば龍宮門の例で挙げた同じ講談社の絵本で例にとるならば、同じ昭和十二年『桃太郎』の斎藤五百枝が描いた挿絵の鬼ヶ島の場面にもこの門が描かれているのである。鬼の城の城門もこの形をしているのである〔図F〕。そして、鬼の縁で遡れば、所謂御伽草子「酒呑童子」の鬼ヶ城にもこの門が描かれているのである。そして、四方四季の庭も有する。

例えば岩瀬文庫『酒呑童子』（伊吹山系）では「此川上に、石のつる地、大なる門有、内外に、おそろしけなるものとも、二三十人番して、其奥に、石をたゝみ、壇をつき、其上に、石のつるちを、つきまはし、鉄の扉を立て、其内の四方四角には、春夏秋冬を作り」（室町時代物語大成・第二・三八六頁）とあり、その描写の一部は浦島太郎の龍宮と似ており、金銀のきらびやかなイメージが石と鉄に変わるばかりである。但し、この鬼ヶ城の門とても一律ではない。逸翁美術館『酒天童子』（大江山系）では

賤女の詞に随て、此所を、すこし、あゆみのほりて、見れば、誠に八足の大門有、門の柱、扉は、うつくしく、殊勝にして、あたりも、かゝやく程也 / 四方の山は、瑠璃のことし、地は、水精のすなを、まきたるに似たり、各、これを見るに、石室、霜ふかくして、迦葉の洞に、来れるかと疑ひ、蘿徑、雪あさくして、懺悔の庭に、のそめるかことし

（室町時代物語大成・第三・一二七頁）

とあり、きらびやかなイメージは龍宮に変わらないが、門は八足門とあるので、下部が漆喰で固められた龍宮門ではない。また、次の麻生太賀吉蔵『酒典童子』（大江山系）でも、石と鉄の堅固なイメージに金銀のきらびやかさ

が付属しているのである。

女房、なみたをとゝめ、鬼か城のありさま、いかばかりとか、おほしめす、あれに見え侍る、こふかき、もりのうちに、はんしやくを、たゝみ、ついひちとし、くろかねの惣門をたて、おそろしき鬼とも、夜ひる、かたく、まもり侍るなり / そのうち小門あり、遠侍、うちさふらひ、めんろう、わたとの、つねのすみかにいたるまで、金銀をちりはめ、玉をみかき侍るなり

(室町時代物語大成・第三・一九六頁)

所謂御伽草子においては龍宮蓬萊は鬼ヶ城のイメージとさして違ふものではないのである。そうなるとこの龍宮門が龍宮付属の門であるという独自性もあやしくなってくる。

【二】江戸前期における龍宮造の門のイメージ

では、所謂御伽草子「浦島太郎」においては初めて元禄四年刊本で確認できるこの門の形式が描かれた意味は何であつたか。この前後の時代を含めて、同時代の作品の挿絵からその意味を探つて見よう。

まず遡る例から見ていこう。仮名草子『伽婢子』(寛文六年・1666)巻之八(一)に「長鬚国」という話がある。ある男が難破して着いたところが「長鬚扶桑州」という国で、その城郭の惣門がこの龍宮門のような形として描かれているのである。

(前略) ある家に立入て、国の名をとへば、「長鬚扶桑州」といふ。国主を問ば、「是より一里ばかりの東に城郭あり」とをしゆ。彼におもむき惣門を過て見れば、国主の本城とおぼしくて、門のかまへ、つる地たかく、石がきはけづり立たるごとし。門のほとりに立よりければ、門を守るもの一同に出て大にうやまひ、奥のかたにいひ入たりしに、衣冠の跡世に見なれざる出立したるものはしり出て、殿中に請じ入たり。宮殿はなはだ花麗にしてきらびやかなる事いふはかりなし。紫檀・くわりん・白檀など

入ちがへ、沈香・金銀ちりばめまじへて立たり。

(新日本古典文学大系75・二一九～二二〇頁)

この長鬚国という国が実は海老の国であることが後にそれとわかるように記されるが、それによりこの国が現実の国ではなく異類の異境として表された国であり、その門として描かれていることがわかる。同じような形の門の挿絵はもう一箇所ある〈図G〉。巻之九(二)「下界の仙境」という話で、金堀が掘った掘り抜き井戸の奥にあった天桂山宮の門である。


(前略) 金堀やうく山をくだり、ふもとより一町ばかりにして、ひとつの楼門にいたる。上に天桂山宮と云額をかけたなり。門の両脇に、番の者二人あり。金堀を見ておどろき出たり。 (同・二五九頁)

これも題に明らかなように仙境の門である。しかし、何もこうした形の門は異境仙境だけにあるとは限らなかつたようである。この門は貞享四年(1687)刊『奇異雑談集』巻五の四「姉の魂魄、妹の体をかり夫に契りし事」にも描かれている。挿絵の場面は判然としないが、妹・慶娘が夜半に崔哥を訪ねたところと思われるので、崔が寄宿していた呉防禦の家、すなわち異境ではなく日本にとっては異国の富豪の屋造りを描写したものと思われる。

異国の門の表現については、元禄より少し後のものだが近松浄瑠璃『国性爺合戦』(正徳五年・1715)にも見られる。比較的成立が古い東京大学図書館霞亭文庫『座敷操御伽軍記』を例に挙げれば、二つの場面に当該の門がある。一つは第三・獅子が城楼門であり、もう一つは第四・九仙山の国性爺の合戦の城門である。獅子が城楼門の絵〈図H〉は、五常軍甘輝が城(獅子が城)の城門で、門の上層には錦祥女(甘輝・妻)一官・娘が城外の父鄭芝龍(老一官)和藤内・父)や和藤内(国性爺)鄭成功)とその母を見ている場面である。九仙山の絵は、呉三桂が太子とともに九仙山に登り、高皇帝と劉伯温が打つ碁盤の上で国性爺が韃靼と戦っている姿を見る場面である。その戦いは、石頭城(春の戦)、あんかい城(夏の戦)、秋の戦、長楽城(冬の戦)と現れ、各城には各々の門が描

かれてそのどれもがこの門の形式である。そして、これらは後の絵番付絵尽にも踏襲されている。

これは『国性爺後日軍談』にも同様に描かれている。第一「国性爺館」の石門龍の逆心のため、帝は側近と甘輝のところへ逃げて来た時に、甘輝が楼門の上から見る場面。第四「東寧城」帝とともに甘輝が東寧城に国性爺を尋ねるところで、日本へ渡りたいと城を脱出する錦舎と出会う場面。第五「南京城」錦舎が和睦の返事の使者として単身南京城に向かう場面。以上、これらはすべて明国の城郭に付属の門を示している。

しかし、同じ浄瑠璃ながら少し異質なものもある。土佐浄瑠璃『東鑑後撰集』（元禄九年・1696）である。これは、道心となつて木曾にいた今井兼平が、矢橋から船に乗つて粟津に着くまでの間に、船頭の翁から名高い「都の富士」の比叡山の景色を説明される場面であるが、挿絵では山中にこの形の門が見える（）。該当する本文は次の通りである。

〔四たんめ〕（前略）こはかたしけなきごほうしやと、やがてふねにのりければ、翁さほゝかたさし、あれごらんぜよあの山は、都のふしとなにたかき、ひえのおやまよみねつゝき、ふもとは山王大ごんげん、しけれるもりは八王寺、とつきかもとのじんか迄、のこりなくみへ候、さてあの山は王城のきもんのまもり、悪まをほらふのみならず、わしのみやまをかたとれり、又てんだい山とこふするは、しんたんの四めいのほらをうつせりと、四方山くゝのものかたり、舟はあはつに付にけり

（土佐浄瑠璃正本集・第一・一四九頁）

ここからはこの門が延暦寺を示していることがわかる。天台山と号するのは震旦の四明の洞を模したものであるというのである。つまりこの門は比叡の山寺であり、またそのもとなった中国の四明山の伽藍でもある。この門の形式が間接的には異国の風物を示しているのである。

もう一つ、異国のイメージを描いたものに土佐浄瑠璃『太子伝』（刊年未詳）がある。この中で聖徳太子が天竺

に行つた時の様子の挿絵である〔図J〕。太子が靈鷲山に着くと力士が出迎え帝釈宮へ申し上げ喜見城へと案内する様子が述べられる。挿絵はこの場面とも考えられるが、太子が門を背にして皆黒の馬に乗っていることを考えると、帰りの場面とも考えた方がよいのかもしれない。

〔四たんめ〕（前略）かくをそろしき道なれと、ほけ經のくりきにて、まうしうきみも恐れをなし、天竺国に聞へたる、れうじゆせんにぞ付給ふ / かゝる所にふしきやな、けしたる姿の力士一人こつせんと顯れ、われは天ていつかへにし、ならゑんけんごと申もの、今日本あるしの御子渡天のよし、先立てたいしやく宮へ聞へつゝ、御迎の爲参りたり、いそき是より喜見城とうりの都へ御上り、天ていへ御たいめん有べしと申詞の下よりも、白うんそはだちつゞきつゝ、平地をあゆむことくにて、喜見城へぞ付給く / （中略）たいし重ておうけ有、御いとまごひなされつゝ、宝前を立給ひ、かいくろの駒に召、とうりの都喜見城を出させ給ふと思ふ所に、せつなが間にはせ下り、和国のだいらゆめどのに、てうし丸諸共に、こつせんとして立給ふ

（土佐浄瑠璃正本集・第三・二四〇頁）

ともかくもこの門はこれらの詞章から喜見城の城門と思われる。門は、異国異境の風物としてこのような形に描かれたのであろう。こうして見てくるとこの門の意味は異国異境の象徴ともいうことができるであろう。

こうした異国異境の表現の例は、他にも正徳四年（1714）刊『絵本故事談』を例にとれば、卷之一「西湖四季山水」という中国の西湖の風景を描いた図の所々にこの門が見られる。異国西湖の実景ということであろう。卷之二「昇月宮」では月宮殿の図にあり、宮殿を描いた階段の前の門がそれである。これは月天子の宮殿という異境である。卷之六「壺公」では費長房の壺中の宮殿の図の門、これも異境ととらえられよう。また、卷之七「逢萌」に描かれた長安城東都門もこの形をしている。長安の城門が、果たして明代の城門の形式を持っていたかはわからないが、異国の城門の表現としては似つかわしいのであろう。

さらに都賀庭鐘没後の刊行『義経磐石伝』（文化三年・1806）巻之五下の「義経脱危機入洞天」という挿絵にもこの門が見られる。北条の追手から逃れるために義経が祈ると鑑石が開いてその洞の中に入る。「正面に楼門あり。碧櫓、朱扉、浮屠の殿に似て同じからず異木薫じて珍花芬芳たり。」と描写される部分である。これは異境の楼門なのである。また、巻之四には漢の韓信の故事「會將軍趨拜韓信」の挿絵にも、跪く樊會と韓信の背後にはこの門が描かれている。これも異国の城門である。ゆえに『義経磐石伝』においても基本的に明国や仙境の城の門のイメージといえよう。

以上、元禄以前から文化年間までの作品の挿絵を見てきたが、この門はすべて異国乃至は異境の表現としての門の例ばかりであり、その異境の中には残念ながら龍宮の例はない。したがって、元禄四年刊『うらしま太郎物語』の挿絵で、龍宮に描かれている門であるといえども、この門は龍宮に限る門といえないばかりか、龍宮の門としても極めて異例の門といえよう。ゆえにこの門は単なる異境表現の象徴として描かれていたと見てよいであろう。

〔三〕江戸後期の草双紙に見る龍宮

元禄四年刊本の門は龍宮を意識して描いた龍宮門ではなかった。しかし、こうした門が龍宮に付属の門として頻繁に描かれたためにいつの頃からか俗に龍宮門と呼ばれるようになったのであろう。では、その時期の目安となる手掛かりはないだろうか。そのためにまずこの門が龍宮の門として描かれている作品と時期を見ていこう。

『龍の都亀甲の由来』という作品がある。奥村屋宝曆四（1754）年刊行と推定される二冊本には龍宮の門としてこの龍宮門と見なされる門が確かに描かれている。^注話は初めに浦島太郎も登場するが、「猿の生き胆」とも「海月の使い」とも称される話をもとにしている。ここでは亀が猿を迎えに行き、後で猿たちにひどい目に合わせられ、

それがもとで亀の甲羅のひび割れができたという題名通り由来を語るものとなっている。掲出の挿絵は門番の海月と猿が顔を合わせ、海月から事の真相を告げられる場面である〔図K〕。本文は以下の通り。

（前略）猿を門の前に下ろし、竜王に申し上げる。その暇に門番の海月猿に向かひ、「さてくその方は何とて来るぞ。今日の暮に生肝を取られん事の不憫さよ」と申ける。猿驚き、逃げ帰らんと思へども、海中なれば叶はず。さらば知恵お出し謀らんとぞ
思案の回らしける。
（新日本古典文学大系83・草双紙集、木村八重子・校注、五九頁）

二層の楼門の上層には欄干もあり、額には「龍宮」と記されている。漆喰周りには波頭も描かれ龍宮らしさを加えている。同内容でこれより先行すると思われるものに岩崎文庫蔵赤本『猿のいきぎも』がある。しかし、岩崎赤本は構図は似ているが、門前の猿と海月は左右逆になっており、また門は龍宮の門ながら唐破風の門なのである。

だが、こうして龍宮門がはつきりと龍宮の門として描かれたものを多く目にするようになれば、確かに人々の認識も改まっていっただろう。ゆえにこれらの草双紙を中心とする浦島や龍宮を題材とする版本の門の挿絵を有する作品を年代順にまとめたものが別に掲げた「龍宮の門に関する文学作品関連略年表」である。

これは龍宮門の挿絵のある『うらしまた太郎物語』が刊行された元禄四年から、龍宮の典型的な結構が描かれた為永春水の弘化四年刊『^{注10}浦島仙人玉手箱』〔図M〕までの間に刊行された作品を対象とした。これは浦島太郎の登場するものに限らず龍宮を題材とした作品も含め草双紙類及び挿絵に龍宮門の描かれたを版本作品を対象として整理したものである。作品の上の○印は龍宮の門として龍宮門が描かれているもの、★は龍宮門以外の門が描かれているもの、☆は龍宮以外の門として龍宮門が描かれているもの、△印は描かれている門が一部のみで龍宮門か否か未確定のものである。なお、C、Pのアルファベットは本稿に図版として掲載したものの記号を示す。年代のはつきりしないものは推定で適宜配列した。もとより一千に及ぶといわれる草双紙の中で、管見の限りの心覚えであるゆえ極

めて杜撰なものだが、龍宮門のイメージ形成過程の目安くらいにはなろうかとあえて掲載したものである。これによってにこの門に関する経過のおおよそが理解できるであろう。

龍宮の門に関する文学作品関連略年表

○ 龍宮の龍宮門 ★ 龍宮門以外の門 ☆ 龍宮以外の龍宮門 △ 一部のみで未確定

〔黒〕 黒本・青本 〔黄〕 黄表紙 〔合〕 合巻

作品名

年号 年 西暦

備考 (ジャンル・作者・絵師・版元・冊数)

○ うらしま太郎物語

C 元禄 四 1691

特小本、大坂かうらい橋・藤屋弥兵衛・田中庄兵衛版元

☆ 東鑑後撰集

I 元禄 九年 96

土佐浄瑠璃

浦島年代記

元禄 一三 1700初演

浄瑠璃、近松門左衛門、宝永頃の説有

☆ 太子伝

J (刊年未詳)

土佐浄瑠璃

☆ 絵本故事談

正徳 四 14刊

☆ 国性爺合戦

正徳 五 15

浄瑠璃、近松門左衛門

浦島年代記 (絵尽)

享保 七 22頃

桐竹三右衛門一座繰人

浦島太郎倭物語

延享 二 45

浄瑠璃、為永太郎兵衛、浅田一鳥・豊岡珍平

浦島太郎倭物語絵尽

延享 二 45頃

浄瑠璃絵本

増補うら嶋

宝暦 二 52

〔黒〕 鱗形屋

★ 猿のいきぎも

赤本

○龍の都亀甲の由来				K	宝曆四	54?	〔黒〕二卷、奥村屋版
浦島七世孫				宝曆八	58		〔黒〕三卷、鳥居清重画
住吉 麻呂妹背玉手箱				明和一	64		〔黒〕二卷、鶴屋版
現金 かけねなし釣竿の由来				明和一	64?		〔黒〕二卷、鶴屋版、和祥作
新 今昔浦島咄				〔明和〕四	〔67〕		〔黒〕三卷、山本・松本版、(西宮新六)
玉手箱東方朔九千歳				明和七	70		〔黒〕三卷、富川房信画
☆猿影岸変化退治			L	明和七	70?		〔黒〕二卷、富川房信画
かつらき やま 眉輪王出生記				明和七	70		〔黒〕二卷、奥村屋版、富川房信画
金平龍宮物語				明和七	70		〔黒〕二卷、富川房信画
○水江 浦島対紫雲篋				明和八	71		〔黒〕三卷、鳥居清経画
新 浦島出世亀				明和八	71		〔黒〕三卷、富川房信画
新 嘘八百根元記				明和八	71		〔黒〕二卷、鶴屋版、富川房信画
○新浦島				?			〔黒〕二卷、村田屋版
○昔 五重錦				安永一	72		〔黒〕三卷、村田屋版
新 風流龍宮曾我物語				安永三	74		〔黒〕二卷、松村屋版、富川房信画
★十六嶋千代之碑				安永四	75		〔黄〕三卷、鶴屋版、富川房信画
○絵本龍宮遊				安永八	79以前?		絵本、改題本『龍門の瀧』
△浦島 太郎二度目の龍宮				安永九	80		〔黄〕二卷、奥村屋版、市場通笑作、鳥居清長画

○浦山 龍宮の巻 太郎兵衛		安永	九	80	〔黄〕三卷、窪田春満作、北尾三二廊（政美）画
○大違宝舟		天明	一	81	〔黄〕三卷、鶴屋版、芝全交作、北尾重政画
○昔噺し虚言桃太郎		天明	二	82	〔黄〕三卷、岩戸屋版、伊庭可笑作、鳥居清長画
○亀屋万年浦島栄		天明	三	83	〔黄〕二卷、深川錦鱗作、恋川春町画
○押懸龍宮の御客 浦島の掃獅 八島の入水 猿蟹遠昔噺		天明	三	83	〔黄〕三卷、松村屋版、三越乳堂百川作、古面堂未通画
○龍宮珍説通世界二代浦島 笠上襦説		天明	四	84	〔黄〕二卷、伊勢屋版、飛田琴太作、阿古三蝶画
△不背御年玉		天明	七	85	〔黄〕三卷、森羅万象作
○新海中箱入姫		天明	八	88	〔黄〕三卷、西宮新六版、七珍万宝作、北尾政美画
○繪本浦島太郎海中軍記		天明頃		85頃？	〔斎藤千山の画か？〕
○即席耳学問	P	寛政	二	90刊	〔黄〕三卷、市場通笑作
○箱入娘面屋人魚		寛政	三	91	〔黄〕三卷、蔦屋版、山東京伝作、北尾重政画？
○新龍宮洗濯噺		〔寛政〕	三	91	〔黄〕二卷、西村屋版、勝川春朗画
○浦島 龍宮羶鉢木 太郎		寛政	五	93	〔黄〕三卷、鶴屋版、山東京伝作（馬琴代作）、北尾重政画
△古手妻品玉手筥		寛政	七	95	〔黄〕二卷、西村屋版、桜川慈悲成作、歌川豊国画
○青海波龍宮		寛政	八	96	〔黄〕三卷、十返舎一九作画
○龍宮苦海玉手箱		寛政	九	97	〔黄〕三卷、蔦屋版、瀧澤馬琴作、北尾重政画
○江戸紫子 其跡幕婆道成寺		寛政一〇		98	〔黄〕三卷、西宮新六版、式亭三馬作

☆義経磐石伝

文化 三 1 8 06

読本、都賀庭鐘

○(新版)二世の浦島

文政 一 18

〔合〕岩戸屋版、玄光亭金黒作、歌川国信画

○赤本昔物語

文政 五 22

〔合〕立川焉馬作・五渡亭国貞画

○浦島太郎珠家土産

文政 一 28

〔合〕八巻、西宮・西村合梓、為永春水作、歌川国丸・北尾重政画

○祝言浦島臺

文政 一四 31

〔合〕山本栄久堂版、十返舎一九作、五湖亭貞景画

○新春龍宮物語

天保 三 32

〔合〕文栄堂刊、為永春水作、歌川国直画

開中笑談

天保 三 32

三冊、歌川貞房画

○むかしばなし浦島ぢゝい

天保 六 35頃?

豆本、鶴屋版、柳亭種彦聞書、歌川貞秀画

絵本浦島年代記

天保 八 37

近松門左衛門、柳齊重春画

○福德天長大國柱

弘化 一 44

〔合〕二編六巻、山崎屋版、万亭応賀作、歌川豊国画

○浦島仙人玉手箱

弘化 四 47

〔合〕二巻、藤慶版、為永春水作、歌川貞重画

先の『亀甲の由来』は宝暦という十八世紀の半ば頃であったが、龍宮門が確実に浦島の龍宮に関わってくるのは十八世紀も終りの天明年間頃からであろう。そして寛政から文化文政と十九世紀初めにかけて浦島の登場する以外の作品も含め頻繁に刊行されている。

こうした流れの中で、注目したいのが富川房信の作品である。年表の通り房信には明和年間に龍宮や浦島ものがいくつも存するのであるが、不思議なことに房信の描く草双紙類にはこの門が龍宮の門としては描かれていない。

それは彼がこの門の形を知らないからではなかった。例えば『猿影岸変化退治』（明和七1770）では、挿絵にこの形式の門が見られる（註図L）。しかし、それに添えられた本文は次のようになっていいる。

その頃、霞の洞より雲を吹き出し、棟高き殿造りせる形を現す事おりく有。これ変化の業なり。常に霧深く、東西南北分きがたく、樵山賤も分け入事なし。

（山男）「おちいたちはもふ帰るのか。一緒に行かふ」

（山賤右）「そりや出たは」

樵山賤、妖怪に恐れ逃げ帰る。山男といふ化物、目一つあり。力強く知恵なしとかや。障らざれば物を損なはず。時気よつて現れ、時気よつて消ゆるとかや。

（山男）「これく」

（同、木村八重子・校注、一三七頁）

木こりたちも恐れる妖怪変化として登場する山男と、霞の洞から吹き出す雲によつて出現する「棟高き殿造り」が、見開きの画面に描かれている。つまり、この門は「棟高き殿造り」とある宮殿楼閣を表すためのものと知られる。そうなると房信はこの門を龍宮の門であるとは考えてはいない。山中に現れた異境を象徴する門なのである。しかし、既に見てきたようにこの頃を境として龍宮の門として描かれることが多くなつてきている。ゆえに、龍宮門の始まりをこの辺りにおいても間違いはないであろう。そして、そうした龍宮門の成立をより確実なものにしたのが、この頃の草双紙の趣向ではなかったか。

例えば「吹き寄せ」という趣向のもとに、草双紙では龍宮に関わる人物たちが集められていく。芝全交の天明一（1781）年刊『大違宝船』（三冊、鶴屋版、北尾重政画）では（註図N）、淡海公（藤原不比等）に依藤太や浦島太郎が登場し「いづれ龍宮一卷の間違いなれば、よくく相談を極めて、近く、龍宮へみなく、発足せん」と龍

宮へ向かう。加えて山椒太夫と八百屋お七、弁才天と毘沙門天という面々も登場してくるのである。

〔中〕(前略) 俵藤太は竜宮の門番にいひけるは、「もし、跡より八百屋お七といふ者、われを追つかけて来らんこともあるべし。必ず竜宮城へ入れては悪しかるべし」と頼みけるゆへ、門番どもは「お七禁制なり」とて、かたく入ざりけり。お七は追つかかりけれども、門の内へ入ぬゆへ、門番どもにかの百足小判を一両づゝ袖の下に使い、ちよ／＼らをいつて、竜宮城へ入る。

(同、宇田敏彦・校注、二〇〇頁)

また、伊庭可笑の天明二(1782)年刊『昔斬し虚言桃太郎』(三冊、岩戸屋版、鳥居清長画)では、桃太郎(後、浦島太郎と改名)と猿、龍宮と亀と乙姫、さらには舌切雀と花咲爺の昔話まで登場する。そして、三越乳堂百川の天明一三(1793)年刊『押懸龍宮の御客』(三冊、松村弥兵衛版、古面堂未通画)では、桃太郎の子である医者桃の玉庵が、父のように宝物を取りにと猿と共に龍宮へ向かう。しかし、猿は龍宮門の門番水母に事の真相を聞かされ逃げるなどの、やはり桃太郎・浦島太郎・猿の生肝などが吹き寄せられた話である。掲出の挿絵のように龍宮門のこちら側波の上には、亀には猿が乗り、玉庵は炎出見命の代わりに鱈に乗って龍宮へと向かう(図〇)。こうした、龍宮に吹き寄せられた話は、他の異境に比べいやが上にも龍宮の存在を顕在化させ身近にしていき、またその異境としての龍宮のイメージを固定化させていくことになったと思われる。

蛇足ながら付け加えておきたいのは、龍宮のイメージが江戸後期のこの頃には蜃気楼とも結びついていくことである。市場通笑の寛政二(1790)年『即席耳学問』(三卷)〈図P〉では、

〔下〕(前略) 此の大蛤は元が学者故、蜃気楼という、唐の屋造りを吹いて楽しみけるを、新右も面白き故、ふわりとその蛤に乗りければ、段々と底へ沈みける。新右思は、蓑笠の徳あれば、水も漏らすまじ、さらばよき次手なれば、龍宮を見て来んとの出来心、ぐつと目口をふさいで、蛤任せに行きにける。(中略) 新右衛門暫く過ぎて目を開けば、ちよ／＼り龍宮に着きけるが、

こゝも蓑笠にて隠れ見るに、大昔の通りなるは龍宮ばかり也。

(教養文庫・江戸の戯作絵本・四、三一―二頁)

『即席耳学問』は、主人公新右衛門が大黒天から隠れ蓑を授かり、それを使いながら鳥獣の世界を窺う話であるが、大蛤を見て今度は龍宮を見に行こうというのである。蜃気楼の「蜃」とは大蛤のことゆえ、大蛤の吐く息から出現する楼台を蜃気楼と呼ぶのは、古代中国からのことであるが、これが龍宮城と同一視されるのである。その形は「唐の屋造り」とあるようにまさに唐様の楼閣であった。

こうして龍宮は、海中でもあり海上でも出現する楼閣となるのである。これゆえ、たとえば、国立東京博物館に蔵される郷コレクションの「蛤牙彫根付」(江戸19世紀)には、外側は蛤に象られ、その殻の内側には片方は亀に乗り釣竿を持った浦島太郎が彫り込まれ、もう片方は浦島を迎える龍宮城が彫り込まれているのである(図Q)。
蜃気楼と龍宮の同一視がなければこうした蛤の貝殻に彫り込まれた浦島と龍宮城の根付の意匠の意味はわからないであろう。江戸後期には『其跡幕婆道成寺』など蛤の息から龍宮城が出現する絵を見ることも多くなってくる。

【四】まとめ・龍宮の描写とイメージ

さて、冒頭の森嶋外の『玉篋兩浦嶼』に戻ろう。舞台の「わたつみのかみのみやこ」のイメージは実際にどう表現されたのであろう。嶋外の意図したものはどこまで実現されたのであろうか。明治三十年代の龍宮のイメージとは如何なるものであったのだろうか。

伊井蓉峰は上演に当たって、大道具・小道具・衣装などを具体的にどうしたらよいかを嶋外に尋ねる。相談は日本画家久保田米僊にまわり、米僊は「上の巻之龍宮の道具の大體は、京都梅尾高山寺什寶なる信實朝臣の作になれる、華嚴繪詞の畫卷中のものに據り、間々鄙意を加へたり。」と述べ、「階段は男米齋が朝鮮王宮にて目撃せしめて

ものを用ゐたり。」(「浦島の道具と服装と」歌舞伎・第33号、明36・2)とする。鎌倉時代初期に作られたとされる高山寺蔵『華嚴宗祖師絵伝』は華嚴宗の祖師、義湘と元暁の伝記を描いたものだが、元暁の伝の中に「龍王宮」が描かれている。これを元に米僊自身の考えを加え、それに階段は息子の米齋が朝鮮王宮で見えたものを採用したという。鎌倉時代の想像力で描かれた龍宮に朝鮮王朝の階段を合わせて作られた舞台であった。日程の切迫と予算の関係から充分な道具立てとはならなかったようだが、とにかく道具は作られて舞台は開いた。

こうして開いた舞台を歌舞伎座の田村鈴鹿は「誰も龍宮へ行った人もありませんから、どれが好いやら悪いやら解りませんが、さう思はれないのが、一番悪からうと思はれます。第一家の造り方が、海中の別世界のようではなく、玄宗皇帝の居る處のやうでした。まづ朝鮮、支那の屋造りを何となく異風にしなければ、龍宮とは思はれません。」(「市村座の浦島を見て」歌舞伎・同)と注文を付ける。田村のイメージする龍宮は海中にあった。それは単に「朝鮮、支那の屋造り」ではだめなのである。もう一捻り、もっと異境然としている必要があるというのである。龍宮は見ることの出来る異国ではなく、海中にあつて見たこともない異境でなくてはならないのである。

それに対して、『歌舞伎』の編集人であり、鷗外の弟で伊井蓉峰と鷗外の間立って調整をした三木竹二は「鳴物も餘り洋樂を使ふと、却つて西洋臭くなつて、龍宮らしくあるまい、寧ろ支那臭い方が龍宮らしくらうといふので、主に支那の鳴物を用ゐた。」(「劇としての兩浦島」歌舞伎・同)と、音楽では西洋風よりはむしろ中国風である方がよいだろうと述べている。まさに三人三様の龍宮のイメージを展開しているのであつた。

しかし、こうした三様の龍宮のイメージながらその根底にあつたイメージは、やはり異国異境としての中国的なものではなかつたか。人間は、見たことのないものをイメージすることは難しい。イメージの根源には既成の形がある。龍宮の表現とは、究極の異境表現であるが、異境を絵でいかに具現化するかという課題においては、奈良絵

本・絵巻の「浦島太郎」では、和様から唐様へと移っている。そして龍宮門で見えてきたように唐様つまり「唐の屋造り」の中国風なものこそが龍宮的イメージとなったのであろう。

龍宮の今日的イメージは、近世の前期に胎動を始め後期に定着していった。その象徴となるべき具体的形が龍宮造りと呼ばれる樓門形式「龍宮門」である。それは当初は異境・異国境表現の一つであり、中国明清代の門の建築形式であった。それが龍宮の門として定着していくのには草双紙などの絵入本の普及が関わった可能性がある。

ちょうどこの時代には印刷によって以前とは格段の差で書物が普及していく。そして日本においては初期の古活字版から製版へと移行する。これにより画像も印刷というマスメディアに容易に載ることが可能となり一度に大量に頒布される。しかも画像は文字よりも直截的理解を可能にする。言語で喚起されてきたイメージがメディアの変遷によって、画像として直截伝達されることになり、画像も文学を構成する重要な要素となってきたのである。

伝説において伝承されていくのは言語的事象だけではなかった。視覚的イメージもそのイメージが大量に頒布されることにより、周知の約束ごととして伝承されていく。おそらく「龍宮門」は近世における印刷というマスメディアが生み出したイメージであり、こうした流れの中で形成されてきたと思われる。人間の想像力は、言語だけでなく画像という視覚的イメージをも活用して広がり、そして定着していくようである。さらにその視覚イメージは言語とは独立して別箇にも伝承されていくのである。

明治三十年代の鷗外の提示した龍宮とは、彼の自注から一見彼独自の特異な龍宮のように思われる。しかし、これまで見てきたようにさまざまな異境的要素は既に近世後期には吹き寄せられて一つの龍宮として結実していく。彼の龍宮もこうした近世からの延長線上に立っていたものなのである。

注1 森鷗外『玉篋兩浦嶋』に関する詳細は、拙稿「森鷗外『玉篋兩浦嶋』成立の周辺」(『駒澤大学苦小牧短期大学紀要』第28号、1996・3、後)「森鷗外と浦島伝説」と改題して拙著『浦島伝説の研究』(おうふう、2001・2)第七章近代における浦島伝説の展開・第二節に収録を参照されたい。

注2 『国史大辞典』第13巻・別刷「門」崇福寺三門解説文(後藤治)では、「俗に龍宮造と呼ばれる」と記し、中村元『仏教語大辞典』では「龍宮門」を項目として立て「龍宮をかたどった門」と説明して崇福寺を例示している。

注3 流布本に関する詳細は、拙稿「所謂御伽草子「浦島太郎」再考・その二」(『苦小牧駒澤大学紀要』第2号、1999・3、後)「所謂御伽草子「浦島太郎」流布本考」と改題して拙著『浦島伝説の研究』第三章所謂御伽草子「浦島太郎」・第二節に収録を参照されたい。

注4 市古貞次『中世小説の研究』第五章・異国小説(東京大学出版会、1955・12)、三谷栄一『古典文学と民俗』七・中世小説(民俗民芸双書23、岩崎美術社、1968・1)など。

注5 所謂御伽草子「浦島太郎」の本文系統の詳細は、拙稿「所謂御伽草子「浦島太郎」再考」(『駒澤大学苦小牧短期大学紀要』第30号、1998・3、後)「所謂御伽草子「浦島太郎」の諸本」と改題して拙著『浦島伝説の研究』第三章・所謂御伽草子「浦島太郎」・第一節に収録を参照されたい。

注6 画像とその和様唐様の問題については拙稿「浦島伝説における画像の諸問題」(『第24回国際日本文学研究会学会議録・境界と日本文学』所収・国文学研究資料館・2001・3)を参照されたい。

注7 この和様表現の特殊性については注3の拙稿に詳述しているのでそれを参照されたい。

注8 この話は「剪燈新話」の「金鳳叙記」を翻訳したものである。揚州の呉防禦の二人姉妹と防禦の友人の崔郎君の子・崔哥と結婚を記したもので、姉・興娘は病死するが、彼女の靈魂が妹・慶娘の肉体を借りて崔哥と夫婦となる話。原話は元朝の大徳年中のこととされるが、描かれた風俗は明代か。

注9 新日本古典文学大系・解題(木村八重子氏・五四頁)による。

注10 『浦島仙人玉手箱』の刊行は国書総目録によれば天保十五年とあるが、刊行の根拠は未確認。浮木庵蔵本の表紙に「弘化丁未」とあり、弘化四年を示しているので、ひとまずこの年を刊年としておく。

注11 新大系では刊行年には触れていない。絵題簽には(欠けている下巻は岩崎文庫『青本絵外題集』から補っているが)題名の下に鶴丸があ

り鶴屋、また、絵の下部に竹と虎が描かれているので、寅歳刊行と思われる。内容から『古今繁野話』（明和三年（1766）正月刊）の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」を黒本化したものといいい、そうなると、この書の刊行は明和三年以降の最も近い寅年は明和七年となり、刊行年をこう推定しておく。国書総目録も明和七年とする。

付記

本稿は、北海道説話文学会平成十三年度大会（2001・9・15、於・札幌大学）で「龍宮的イメージの形成―所謂御伽草子を基点として―」と題して行った研究発表及び伝承文学研究会平成十四年度大会（2002・8・25、於・小樽商科大学）で「浦島伝説における龍宮的イメージの形成」と題する研究発表を素稿としている。両発表に対して戴いた諸氏のご意見に感謝を表す。



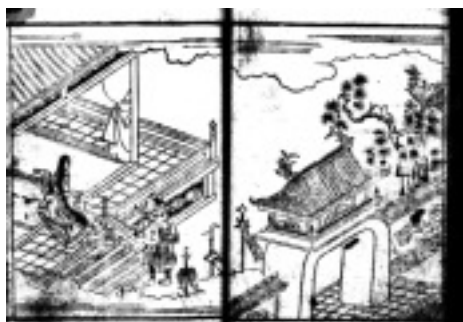
図B 講談社の絵本『浦島太郎』



図A 武雄温泉の楼門・ポスター



図D 宇良神社絵巻の蓬萊 (=龍宮)



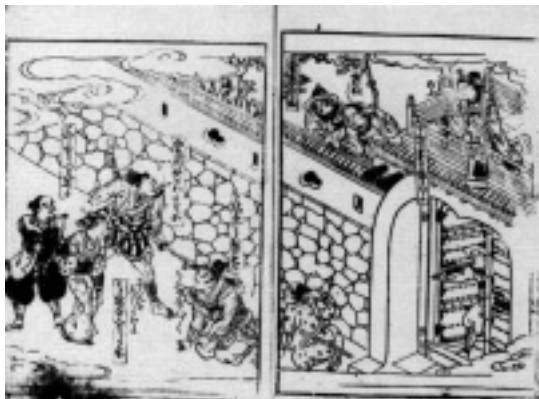
図C 元禄四年刊本の龍宮城 (第四図)



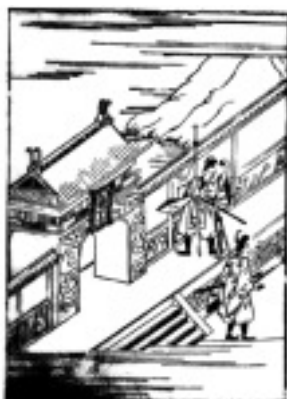
図F 講談社の絵本『桃太郎』の鬼が島



図E 浮木庵絵巻の龍宮の門



図H 『国性爺合戦』第三・獅子が城楼門



図G 『伽婢子』巻之九
(二) 下界の仙境



図J 土佐浄瑠璃『太子伝』



図I 土佐浄瑠璃
『東鑑後撰集』



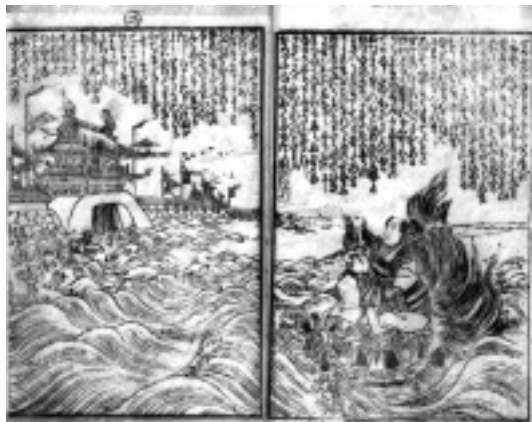
図L 『猿影岸变化退治』の雲中御殿



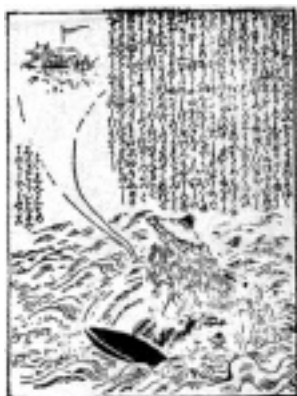
図K 『亀甲の由来』



図N 『大違宝船』



図M 『教訓玉手箱』



図P 『即席耳学問』



図O 『押懸龍宮の御客』



図Q 根付の浦島と龍宮

〔図版一覧〕

- A JR佐賀デザインেশョンキャンペーン「Go to SAGA。」JRグループ
- B 講談社の絵本『浦島太郎』笠松紫浪・画 昭12初出 講談社バイリンガル絵本『うらしまたろう』（1996・9）
元禄四年刊『うらしま太郎物語』浮木庵蔵
- C 『浦島明神縁起』宇良神社蔵 続日本の絵巻・19（中央公論社、1992・6）
- D 奈良絵巻「浦島太郎」浮木庵蔵
- F 講談社の絵本『浦島太郎』斎藤五百枝・画 初出・昭和12（新・講談社の絵本、2001・5）
『伽婢子』国立国会図書館蔵 新日本古典文学大系75（岩波書店、2001・9）
- H 『座敷操御伽軍記』東京大学図書館霞亨文庫蔵 『近松全集』第17巻（岩波書店、1994・4）
- I 土佐浄瑠璃『東鏡後撰集』東京都立中央図書館蔵 『土佐浄瑠璃正本集』第一（角川書店、昭50・3）
- J 土佐浄瑠璃『太子伝』東京大学図書館蔵 『土佐浄瑠璃正本集』第三（角川書店、昭52・3）
- K 草双紙『亀甲の由来』ロンドン大学蔵 新日本古典文学大系83『草双紙集』（岩波書店、1997・6）
- L 草双紙『猿影岸変化退治』大東急記念文庫蔵 新日本古典文学大系83『草双紙集』
- M 合巻『玉手箱』浮木庵蔵
- N 草双紙『大違宝船』東京都立中央図書館加賀文庫蔵 新日本古典文学大系83『草双紙集』
- O 草双紙『押懸籠宮の御答』東京都立中央図書館加賀文庫蔵
- P 草双紙『即席耳学問』教養文庫『江戸の戯作絵本』四（社会思想社、1983・3）
- Q 郷コレクション「蛤牙彫根付」（江戸・19世紀）東京国立博物館編『印籠と根付』（二玄社、2000・7）

（はやし こうへい・本学教授）

苫小牧駒澤大学紀要第八号 (二〇〇二年十一月三十日発行)
Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 8, 30 November 2002

婚姻史研究

— 若者組再考 (一) —

A Study of the History of Marriage
— Reconsideration of the “Wakamonogumi” Part I —

高嶋 めぐみ
Megumi TAKASHIMA

キーワード：年齢階梯制、群れの教育、若者条目、寝宿、娘組

要旨

日本の婚姻、ことに庶民婚姻史を考える場合、各村における一定年齢集団の若者たちが果たした役割は重要であると考えられている。本稿は、若者組織の規範たる若者条目から加入・脱退要件及び若者たちの本拠である寝宿における男女交際の統制について考察をする。また唯一現存する三重県鳥羽市答志島の若者組織について現状を報告する。

一、若者組

江戸時代から明治時代にかけて、村単位で組織された一定年齢の若者たちの集団が存在し盛んに活動した。明治時代、官製青年団が普及するまで広く各地の町や村に自然発生的に組織され、村の中に組織された子どもたちの集団、青年男子の集団、あるいは娘たちの集団、老人たちの集団など年齢階梯制が顕著な村において青年男子の集団は中心的位置を占める。本稿では近世から明治初期にかけて活動した若者たちの行動のなかでも婚姻との関わりを中心に考察し、そして唯一現存する三重県伊勢湾に浮かぶ離島の中でも一番大きな島、答志島の現在の若者組織について報告するものである。

二、若者組の名称

若者集団の名称は地方ごとにさまざまなものがあり、「若い衆」「若衆」「若者」「若者連」「若組」「若い者組」「若者仲間」「若者組」などが一例としてあげられる。「若者組」という名称は学術用語として使われており、最も一般的な名称は「若い衆」系統のワカイシユ、ワケエシユ、そして東北地方でも主に日本海側のワカゼ（「若勢」の漢字が充てられる）、「若者」系統のワカモノ、ワツカモン、ワカモノナカマ、九州地方一帯の若い男を意味するニイセ、ニセ、ニサイ、ニンセイ（以上「二歳」の漢字が充てられる）などがあり、さらに若連、若連中などの呼称もある。このような名称に対して和歌森太郎は「若者のワカは活力のあるという意味」⁽¹⁾であると解いている。また瀬川清子は「若者組」について、「宿仲間・若い衆仲間の親しみによってつながる程度のもの」を「若者仲間」と呼び、「加入脱退の儀礼を厳粛にし、参加人員の間の年齢階層的秩序に従って任務を分担し、いろいろな規約を設ける整備された」ものを「若者組」として区別するべきである、という類型を示している。⁽²⁾

若者組の発生第一因として考えられるのは、村の先輩たちが将来村の労働者として若者たちが十分な技能や人格を身につけるための教育をする場として設けられた。また、成人を迎えた男女が将来、秩序ある生活を送るうえで学ばなければならない大きな問題である性的な訓練にまで及んだとされている。『源氏物語』の「雨夜の品定」のなかで、光源氏が成人式を行った日の夜、先輩の公家たちが集まって源氏に女性の選び方を教えるくだりがある。先輩の公家たちが宿直の晩に源氏に性教育をし、これをもって女性選択の一生の方針として二七名の女性と関係を持つていく。平安時代には両親に代わり、先輩、若しくは同輩が成人を迎えた若者に性教育をする慣習がすでに存在したと考えられる。

三、若者組への加入と脱退

(一) 年齢

近世においては、大体男子十歳までを幼年、十四歳までを少年、十五歳を以て成年とする慣習が行われていた。『全国民事慣例類集』^⑤には、十五歳を以て成人とみなしている例が全国的に最も多く、これに次いで十七歳が多い。十五歳を境に前後を分けるといふ觀念は、近世の村においてはあらゆる機会に採用されている。村の道普請、用水の掃除など共同労働に際しても十五歳以上の男子が請け負った。また百姓一揆動員に際しても十五歳以上の者が対象となっている。

わが国においてこの年齢は人生の一つの折り返し目として、烏帽子祝い、禪祝い、前髪落としなどの名称で呼ばれる成年式を催す慣行があり、この儀礼を契機として人は村人として一人前の権利と義務とが付与された。若者入りの年齢もまたこれと関係があり、第二の人生への出発とする意識も働いたようである。

若者組の多くは若者条目を持っており、その規範となるべき徳目が条目のなかに記載され、仲間はこれを社会行動の一つの基準としている。この若者条目が登場するのは十八世紀中頃以降のことである。早い条目は享保年間（二七二六～一七三五）に出されているが、この条目は五人組帳や村の掟の内容と共通している。五人組は幕府や藩の法令に頻繁に登場しているが、若者組に関しては幕府の法令集には唯一文政十一年（一八二八）四月に出された若者組解散令のみである。村自らの組織であった若者組の内部規制はきわめて強いものであり、若者としての修養・義理・対面維持・年長組への尊敬・不品行など道徳的な時勢などの重要な目的をもつ。

近世における若者組の加入脱退年齢に関して、若者条目を主な資料として若者組織の規範が検討されている『若者制度の研究―若者条目を通じて見たる若者制度』^④の資料が参考となろう。この資料は東海道筋に集中しているが、江戸期の文書資料である若者条目が八三通収められている。条目資料は徳川四代將軍家綱の時代（延宝五年）から十五代將軍慶喜（慶応三年）まで約一九〇年間のものである。以下条目のなから幾つか抜粋してみる。

（十五歳で加入三十歳で脱退）

文政一二年 若者仲間取極帳寫（四一）静岡県賀茂郡下狩野村大平

一、村内若者之儀は拾五歳より三拾歳まで尤他跡仕り候ものは其時かぎり暇願出可申候事

安政六年改 下組若者取極議定書（六八）静岡県小笠郡土方村

一、天保年中御改革御趣意に付御支配様より若者連中取崩之被仰付其砌雨乞虫送りの節は十五歳より六十歳の者にて鉦太鼓歩行いたし候所此度一統相談の上村役人中へ願出十五歳より三十歳迄の連中取組致し然上は向後故障ケ間敷事相互に無之様睦合可致事連中取極左の通り

（十五歳で加入三四歳で脱退）

正徳三年 文政七年寫條々〔四〕静岡県賀茂郡下河津村濱

- 一、従古来相定申候者十五歳より仲間合帳面に可相詰候三十四歳に罷成候得共其年之正月十一日限り仲間可祓事は狂言有り候年者其九月十七日限り退役可仕其事

(十五歳で加入三五歳で脱退)

年代不詳 掟書條目之事〔八二〕三重県志摩郡国府村

- 一、毎年六月十二日正月四日一ケ年に兩度の寄合不寄何事も惣而若者十五才より三十五歳迄男一人も不殘寄合ふ依而何事も無法なる者聞及候は、吟味可申渡事

(十七歳で加入三五歳で脱退)

文久元年 当村若者中契約掟牒〔七〇〕宮城県黒川郡宮床村小野

- 一、半附合の儀は十七歳より三十五歳迄附合可仕事附たり申合せの通り十七歳より三十五歳迄には候得共若者中へ加入致度候者は何程に相成候得共相除き申間敷事
- 一、十七歳に相成若者中に相加り候は、一統世話人に可申出候事
附たり半より相祓候時も右同様可仕事

一、当村に於て十七歳以上の者有之候は、世話人方にて相談に相及び半入可為被仕申定之事
(十七歳で加入三六歳で脱退)

弘化三年 御條目〔五二〕静岡県賀茂郡三濱村西子浦

一、右之條々堅相守十七歳より三十六歳迄之者共自身番組主役として火之番可相勤條目仍而如件
以上の如く、一定の加入・脱退年齢の定めが場所によって異なるが存在していたことが分かる。^五

(二) 類型

若者組にはいくつかの類型がみられる。その類型を仮にA・Bとするならば、まずAは十五歳頃の成年式から婚姻までの若者からなる未婚者集団で、兄弟全員加入制をとっている。主な機能は寢宿と呼ばれる若者たちが寢泊りをするところを拠点とした男女交際や婚姻の媒介あるいは娯楽的なもので、その機能が不定期的であるところから若者の「仲間」と称すべき型である。続いてBは、加入年齢はAと同じであるが、既婚者壮年層をも含み一戸一人加入制をとる場合が多く、年配序列が厳しい。さらに集会所としての寢宿で厳格な制裁や若年層への「しつけ」がなされるような若者組であり、その機能は祭礼への参加のほか、村内警備、難破船の救助、防火のための夜回り、道普請などの村仕事への参加、あるいは村落自治の下での雑役に従事するなどの労働集団としての性格を有する型である。両型と重複ないし並存する場合と両者が混合する場合がある。若者組へは、その町村の住民のうちその年齢に達した全員が家柄の上下などに関わらず義務的に加入する例が多かったとされるが、大旦那の子弟だけは除外する、賤民系統の子弟の加入は認めない等というところもあった。例えば、旧薩摩藩内では、士族の子弟と平民の子弟とは同一村内でも別々の組を作っていたし、東北地方には長男息子だけが加入して次男以下は加入資格を認めないという例も多かった。

西日本では若者組には一定年齢層者が長男であろうと次男、三男であろうと全員が加入するが、東日本では家の跡取である長男のみというところが多い。福田アジオは、若者組における長男の独自性に注目し、北関東に顕著に存在する長男単独加入についてやがて戸主になるべき男子のみの組織であることを明らかにしている。⁶⁾ 脱退に關しては、西日本では村人として一人前とみなす節目の婚姻を契機に脱退したが、東日本では、家は固定的な存在として子ども一人が跡取として相続していくのが基本としているので、その相続の時期または親の死去もしくは老齢

化による引退を契機としており、婚姻はしても加入は継続することもあった。^七

また他村からの入婿、養子及びその他の外来者も新しく入村した者として若者組に加入し、村生え抜きの若者たちと同じ洗礼を受けることが必要とされた。入村した時点で若者組に加入できる年齢が超過していても三年間は加入させるところや、年下の者の役を勤めさせるところもあった。^八長男は若者組に加わる権利を有したが、次男三男はこれから除外されており、十五歳で加入し、四十歳で退くことを原則とし、他村からの入婿だけは例外として四二歳まで勤めさせられた茨城県久慈郡幸久村字上河合の例などもみられる。^九

以下にみる条目は他村よりの外来者に対する待遇の一例である。

安政六年「旧記帳」中、若者中七ヶ條定書之事〔六五〕三重県志摩郡甲賀村

一、他領より婿入養子ニ参り候者ハ其郷々の若者中へ挨拶仕鹿酒ニ而茂持参為致仲間入之披露可致事

安政六年 組若者取極儀定書〔六八〕静岡県小笠郡土方村

一、当村より他村へ養子婿入致し若し離別の節は年限迄相勤め可申事

一、入婿の儀年若之内は不及申重りて婿入致候とも三ヶ年の内急度可相勤事

嘉永二年 若者規定締方〔五七〕福井県今立郡岡本村

一、他村ヨリ入人之儀ハ廿五歳満ニテモ三ヶ年若役勤メ候様村一統会議之相定り候事但シ廿三歳迄ニ加入人ハ廿五歳限退役廿三歳満加入之人ハ三ヶ年之都合迄退役不相成定之事

一、他村ヨリ入人之儀ハ三ヶ年之間者世話方為致不申定ニ付人札壹枚タリ共不可書若心得違ニテ入札へ相加へ候者有之共可為反古事但廿五歳満加入三ヶ年モ同断之事

一、今般村中取締ニ附被申渡候條若役不致者或ハ他村ヨリ奉公ニ入人タリ共若心得違之者有之不埒之致方有

之候節ハ世話方ニ而篤ト利解ヲ致若手ニ餘リ候時ハ村惣代或ハ副戸長中へ申出候事

文政一二年 若者仲間取極記寫〔四一〕 静岡県賀茂郡下狩野村太平

一、入婿之儀は年たけ候者ハ三ヶ年を限り若三拾歳ニ相成不申候者ハ縦何ヶ年に相成候とも三十才限り可申候事

一、入婿之儀は廿七歳までに相成り候もの三拾歳を限り若又三拾歳ニ相成り候もの三ヶ年限りに暇願出可申候事
などがある。

加入や脱退の年齢に関しては、社会上あるいは経済上の理由が考えられる。例えば労力が欠乏しているところでは、加入年齢は早め脱退年齢を遅くして若者組員を確保しておくことが必要であろう。いずれにせよ、若者組への加入によって子どもと成人とに区別された。

四、若者仲間における婚姻統制

日本の庶民婚姻史を考える場合、若者仲間の存在は大きなものがあると考えられている。若者仲間の婚姻に関して果たした役割は重要であり、婚姻習俗と密接な関係を持っていた。^{二〇}これは、若者集団を明治以降の官製青年団から区別する最も大きな相違点となっている。

若者や娘はそれぞれに寢宿を作り、親の管理下から離れてそこで寢泊りをした。未婚の娘たちが集まった宿が娘宿と称され、若者宿よりも加入する年齢が二、三歳早かったといわれる。何人かの気の合った娘たちが集まって、自分たちの選んだ人に宿親に成ったもらい部屋を借りて生活する。宿親から嫁入りまでの期間、仕事や行儀作法、

婚姻に関する知識を教えられる。「娘組」が後に女子青年団になった例はあるが、両者の違いは「娘組」のほうが積極的に性教育の指導をした点にある。^(二)

娘宿に寝泊りしている期間中は、若者たちとの交際は大目に見られており、宿の存在は一定規範内において自由な交際の場となっている。

宿の名称は「若衆宿」「若者宿」「若勢宿」「寝宿」「泊り宿」「若屋」「おやしよ」「若い者部屋」「小屋」「娘宿」などさまざまあり、その機能や習俗も各地一様ではない。国の南北を通じて存在した寝宿制度は、村の成立と共に始まりそれぞれの宿を互いに往来し婚姻へ導くために果たした役割は大きい。

仕事を終え若者宿や娘宿へ集まる若者たちは、子ども社会から大人社会への仲間入りをすると同時に村落内では婚姻できる能力を備えた一人前の大人として扱われた。村の若者たちに対する教育が家庭内の親によって行われるのではなく、家庭外での「ムラ」による集団生活の場が存在しそこで行われていたのである。

若者宿が若者たちの共同宿泊に利用されている場合に、この宿泊所は婚前交渉の「よばい」の習俗を伴っており、配偶者の選択ないし求婚の機能を果たすものであった。「よばい」とは「夜這い」として最近まで残されていた習俗である。本来は古代の婚姻形態である妻問婚の未婚男女の求愛・求婚の一作法であったが、その零落した形態であり、配偶者選択の機会であった。

「よばい」は、若者組が存在していた時期において自由気ままに行われていたわけではなく、若者組の自治統制と男女が集まる寝宿の宿親の厳格な監督のもとによるものであり、一定の規律が保たれていた。三重県熊野市磯崎の規律には「若連中の幹部の監視下にあつたので、それを破ることは許されず、もし約束を破ると村八分あるいは厳罰に処された」という記録もある。^(三)長崎県南高来郡千々石町木場では、明治ごろまで各組に一軒ずつ若者宿

と娘宿があり、同じ村のなかでも他の組の娘宿へ遊びに行くためには、その組の若者宿の承認を必要としていた。そして他の組の娘の情人になる場合には、その組の若者へ酒を買ってご馳走しなければならなかった。^(一三)

夜這いに関する若者たちの掟の中で最も広く見出せるものは、夜這いの相手と同じ村に限定しようとするものである。これは、配偶者選択範囲は狭かったが判断を誤ることは少なく済んだといわれる。^(一四) また、村内婚を維持するために村の内部規制力として働いた若者仲間の事例が瀬川清子の『若者と娘をめぐる民俗』^(一五) に多く紹介されている。どの地方においても若者仲間が村内の娘を支配する、という意識をもっていて娘への制裁はどこでも他の村の若者と親しくしたということであり、つまり村内婚を原則にしたということがその頃の婚姻の大きな条件であったと指摘している。

自村以外の異性との交遊に対しては、若者仲間から厳しい制裁や非難を受けた。例えば、屋久島の安房では娘が他国者と通じていることが発覚したら、その娘は海岸の砂に首まで埋められて侮辱されたり、隠岐島の島後の都万村では、他村の若者の夜這いが発覚したらひどい目に合わされるのは勿論のこと、夜這いに応じた娘も村の人たちに海岸に連れて行かれて海水に何度も浸けられる。その様子を親は見ても当たり前前の仕打ちとして眺めている等という例もある。^(一六)

若者条目のなかには他村との交渉についてのルールの記述もみえる。

文化十年 若居者身持掟書(二二九) 愛知県渥美郡泉村の一節

- 一、若イ者召仕之下女杯と密通事にて他村へ通ひ候は、右之次第先様之若イ者江断を相立其上にて可通候其沙汰なく踏附に通ひ候は、如何なる不覚之咎に可逢も難斗り候間唯失念之儀無之様に相つ、しむべく候成筋を為無断通来ル者有之候見附候理不尽ニ不可改密ニ様子尋ね可申候捨置がたく筋に候は、其旨頭分

之者に相逢免茂角も取斗可仕申候惣而不依何事堪忍之儀専一兼々可致相嗜申候

他村から婿入した者には先にみた加入や脱退の特別な扱いと共に、仲間入りの礼を尽くさなければならなかった。

沖縄県比地での通婚圏は、「他部落との結婚は罰金を支払う義務があつた」とされ、同県読谷村座喜味では、「結婚は、ほとんど同部落の者同士で行われ、他村へ行くのは親の上を越えるホームリン（あばずれ）と非難された」とされる。^{二七}また、国頭地方金武間切の村内法には、他の部落の者と婚姻した場合の条文が存在した。

「四四条 他村他間切ヨリ村の女ヲ貫ヒ受ケ妻ニセントスルモノハ婿家ヨリ馬酒代トシテ千五百貫文以上式千貫文以下懲役ノ上妻ニ差免候事」

「四五条 他村間切ノ者当村ノ婦女ト姦通スル者ヲ捕押ル時ハ科銭千五百貫文申付候事」
(明治十九年届出)

以上のように規定され、「馬酒料ハ公費ノ補ニ充ツル」ものであつたとされる。^{二八}

他村への縁組に対して厳しく対処した理由の一つに労働力の確保が考えられ、また村の娘たちは古代から神に仕える巫女と考えられていた信仰的な理由も影響していると思われる。

「よばい」には村内婚という規範があつたので、村内の娘達はあたかも若者たちの所有物的に考えられていた。長崎県川上村に「ボーフナ（南瓜の方言）と娘は若もん次第」という俚諺があり、このような実例は各地にみられた。青森県下北郡東通村大字尻屋では、明治初期まで村の娘と出戻りの婦人は若者の共有物であり、村の娘達は差別なく一五歳になるとメラシ（処女の方言）宿へ泊まりに行き、村の若者たちの要求に対して絶対服従であつた。もし要求を拒否した場合は、迫害と制裁とが加えられた。反対に外来者に対しては貞操を固守しなければならない

義務が負わされており、これに背けば制裁が加えられる。^(二九) 尻屋村に近い同郡東通村大字目名の「若者連中規約」から、若者と娘たちに関する個所のみを以下に抜き出してみる。

明治四二年十月以降改則

一、若者連中、一週間に一回平均なる集合に会合する事

一、十五歳以上未婚の女を以て、めらし組合を組織し、之れは若者連中に附属し、凡ての行動は若者連中の指揮を受くるものとす、随つて保護を受くるものなり

一、めらし外泊は、若者連中の許可なくして出来ざる事

一、尚連中の若者に非ざれば、肌を接する能はざる事

一、家族は一切娘そのものには、何も構えもせず、一切若者連中に預け、若者の自由に任せる事^(三〇)
娘たちを共有することが、若者たちの権利とされていたことを明らかにするものである。

また、中道等氏所蔵文書（青森県八戸町出身）の中に若者たちが娘たちの処女共有を示すくだりもみえる。

元南部領七戸通三沢村と申所、風俗今以舊染不宜儀は、此村に限り男女婚姻の期に至り、媒の者嫁女を夫家え連れて行き、婚姻の夜は夫婦同席和淫の禮を不為致、媒の男右嫁女を妻同様に寢席致、其翌夜より真の夫婦同席供寝為致候由、是を名付けて口取りト云、同元田名部通の内海濱字トマリと申所、並其近辺大底は男女に若者頭と申者撰立、婦人生て一四、五歳、既に女道を知ル年頃ニ至候折は、是を通称すてメラシと唱へ村中に若部屋と申所儲け置き、是え夜分ニ至れば右メラシ共連レ行、淫奔自在此風舊染ニして、婦の両親と雖も之を禁ずる事不能、若此村え他郷より若い男あり入来て此村の婦人と性交する時は、譬へ男女とも示談和淫ト雖モ地風と（？）其男を捕へ村中の若者共打寄り打擲、或は海水に浸すなど、傍若無人の所業見に不忍由、当時年長

す候得共、左記の人員若年の頃、彼ノ若者頭といふ者ニてありすといふ伝有之候、御舎の為奉申候以上

トマリ元若者頭

平野 作平

四十位

前同断

柿崎 富弥

四十位

但三沢村口トリ田名部ノ女ゴヘヤ右事件は先達テ申上候七戸町ノ高橋元吉ト申者御尋被遊候得者明細之事

右之通

明治七年三月廿八日^(三)

さらに「口取り」の慣習は、媒酌人が新婦に対しての初夜権を有していたといわれる。^(三)

この他幾つか例示してみると、秋田県仙北郡檜木内村、同郡田沢村の各村落では、女子共有の習俗が昭和初期頃まで残っており、年頃の娘を持つ親たちは旧正月の一日夜、一定の場所に仮小屋で男女の会合を設け徹夜させることになっていた。もしこの会合に娘を出さなかった場合には、大勢の青年が押しかけて誹謗を行い、さらにその娘の嫁入の妨害まで行ったといわれる。^(三)

山形県置賜郡、秋田県秋田郡の各村々における婚姻は、媒介者の斡旋で縁談が進むと新郎新婦の家族の承認を得ることは言うに及ばず、村内の若者たちの同意を得ることが成立の要素となっていた。若者たちが承認した後内約を結び改めて組頭へその旨を口頭で届け出て挙式という運びになる。^(三)もし他村の男と関係した場合は、その男

女を捕らえ昼間丸裸にして二人に提灯を持たせて先に立て、村民はその後ろにつき村内を囃しながら歩かせる制裁があつた。^(三五) また明治以前の習俗であるが、兵庫淡路の出島では、拳式前夜に花嫁を新郎の若者仲間の親しい友人三名が天神様と俚称する鎮守の森に誘い出す習俗があり、花嫁は三人に対する義務を果たした後でなければ新郎の家に行くことを許されず、また新郎もこれが終わらなければ花嫁を独占することは出来なかつた。^(三六) 婚姻には村の若者仲間の納得と承認とを必要としたことは各地の条目からも明らかである。

安政六年 若者中七ヶ條定書之事(六五) 三重県志摩郡甲賀村

一、若者中之内縁組有之候女江不埒之儀有之候ハ、急度吟味之上頭中迄相届可申候過料之義者双方とも相糺之上取計ひ可申候事

年代不詳 掟書條目之事(八二) 三重県志摩郡国府村

一、娘縁談の儀に付き内縁有之候は、先方内縁之男に娘方之親類相對致し其上類之所に可致縁付事

これは、婚姻と若者仲間の関係の深さを示すものであり、初夜権の行使が風俗化され、さらに通俗化されて婚姻の一儀式とまで考えられるようになった。

性習俗を伴った寢宿の制度は昭和初期まで行われていた地方があつた。

この性習俗の廃止は若者・娘たちから求婚の機会を奪い取ることもある。

長崎県五島列島の福江島で起きた事件では、かつてこの島に他所から網子人夫が村の娘宿を侵して始終トラブルが生じたために娘宿が廃止されることになり、娘宿最後の日に娘たちは臨席の校長に「先生、ワカルカイナ、御祝言(結婚)サエンノジャナイカ、相手ハミツケレン」と非難の言葉を浴びせた。娘宿が廃止されると村の若者たちとの恋愛の機会が失われ、結婚相手が見つけれなくなってしまうことを島の娘たちが嘆いたものだが、結局一年

後に娘宿は復活した。^{三七} 若者宿や娘宿婚姻の媒体として重要な役割を持っていたことをよく示すものである。

若者宿での生活の始まり、村の婚姻統制の意味において成年式は重要な役割を果たしていたが、若者条目の中にも婚姻がいかに大切な問題であったかということが窺える。

天保十四年 若者條目控〔四九〕静岡県賀茂郡岩科村

一、連中内心安き方泊り候も朝早く家へ帰り朝寝いたし候得は自然日々の実家に拘り第一御上様より被仰渡候難有御書附之御趣意にも相洩候条百姓方の者は別而相心得可罷在事

安政六年 制定箇條文〔六四〕新潟県中魚沼郡芦ヶ崎

一、夜分野中村内遊び出候共女中者に苧積み邪魔を致候ものは仲ケ間之内にて急度一々詮議致候事田村へ遊びに参候は、礼儀は不申及諸事穩便に丁寧にて疎忽無様に心付可申候事

安政六年 條目〔六六〕静岡県駿東郡静浦村江浦

一、寝宿其外何れへ罷出候共高上り不致雑魚寝に致し申し間敷候事

文政七年 若者仲間掟〔三三〕愛知県渥美郡泉村石神

一、泊り宿江出候輩は外二而長遊び仲間敷事

文政八年 若者示合掟書記〔三五〕愛知県渥美郡泉村宇津江

一、兄弟の内何れにても婚禮祝儀等有之候者打寄取持致惣若衆中悦ひに罷越し候定日ハ祝言の日二日目の晩方会所の亭主同道にて罷越し相互二人柄よく御祝儀之趣可申達候

また、寛政十三年の「申渡之覚」の条目のなかに伊豆七島の一つ、三宅島の若者と寝宿の生活についての条文がある。

寛政十三年 申渡之覚〔二〇〕東京府三宅島

一、寢宿の儀も道理に不当義に付既に先□御支配様御渡海之節相止め候様被行渡も有之候得共住古より仕來の事故役人の勘辯を以差免し置候□□何れ朝暮寢伏の世話にも相成寢宿親と唱候程の事故是又疎遠に無之様可致候大鉢の要用有之候共寢時と定め候時刻には急度其寢宿へ参り候雜可被致候
また、八丈島にも『八丈実記』のなかにおいて、若者宿と娘宿に対する禁止令がある。

「コノ嶋に、マハリコトテ、男女共二一八ノ盛りニナリヌレバ、己レガ親ノ家ニ臥ス、日暮レハ他人ノ宅ニ住テ寝ね、夜アクレハ朝ハヤウ家ニ帰ル。是ヲマワリ子ト云フ。寛政度マテハコレヲ居タリト云シ也。一軒ニ少キモ二三人、オ、キ八十人ニモ過テ止宿セリ。

寛政八辰七月県令ヨリ仰セ渡シニ、島方仕来リニテ男女共若年之者共、いたりと号、朋友傍輩躰之者方へ互ニ罷越シ、寢臥致候由、不埒之事ニ候間、右躰之者有之ハ早速相糺、以來ハ慎方申教候様可致、不取用ニオイテハ廻宿、他役人、立会役、村役人立会遂吟味、いさゝ之始末便船次第可申立候トアレトモ、古ヨリノ土地ノナラハセ今ニ止マス。

又、夜行ノ少年輩、夜毎ニ思ヒノ家ニ忍ヒ入り、志サス女ト枕席ヲ同シテ、夜明ヌウチニ帰ラル也。サレハトテサノミ隠ニモアラス、コレヲ夜這人ト云フ。人家ニ戸シマリナク、深更ニ出入リスルハ盜難ノ患ナキ故也。〔三六〕

三宅島も八丈島と同様に、御支配様御渡海之節には相止めるように、とのことであつたが、寢宿は往古よりのものなので役人も勘弁をもつてさし許すため、寢宿親には疎遠がないようにし、寝るときには必ず寢宿へ行くように、という戒めである。

若い男女の交際から婚約が成立するまでの経過を見守り、援助するのが若者仲間たちであった。

五、答志島に残る寝屋子制度

現存する唯一の若者組制度は、NHK他民放のテレビなどでも放映されたことがある三重県鳥羽市の沖、伊勢湾の入口にある漁業の盛んな島、答志島にある。

答志は古くは、手節（たふし）、塔志と書かれ、朝廷への海産物貢納地として知られたところである。以前は伊勢志摩地方各地でみられた制度であったが、今では答志島答志町に無形民俗文化財として昭和六十年（一九八五）二月に指定された「寝屋子制度」と称されたものが一四軒現存しているだけとなった。「寝屋」とは、若者たちが寝泊りする部屋を指す。またその寝屋で生活する若者たちを「寝屋子」と称する。

寝屋子たちの生活は、昼は各自の家で、夜になると寝屋親の下に自主的に集まり共に過ごす。このしきたりは一足年齢に達した若者たち数名を擬制的親子関係を結ぶ人（寝屋親）の家に預かってもらう制度である。

加入にあたっては、以前は入会の披露などが行われ、新人は会の規約を厳しく教え込まれた。組内での上下関係は厳しいものがあつた。

以下は、筆者が平成十四年六月に答志町で寝屋子仲間に入っていた若者に話を聞いたものである。まず現在の寝屋子仲間結成に関して、中学を卒業した男子数名が仲間を組み、指導力のある者を寝屋親に選ぶ。その家庭に寝泊りをし一つの寝屋子仲間を組織する。以前は異年齢集団で、年長者が婚姻をすると新しい若者が加入するという形をとっていたが、現在は同級生で仲間を組むので年配序列などは強くない。

加入年齢は中学卒業から婚姻までの期間で、一戸一人加入制である。主な活動は、地区によって重点を置く分野

に差があるが海難救助、夜警、風紀取締、消防活動、漁場監督、墓掃除、盆踊、精霊送り、神祭の準備などである。この寝屋子も数十年前までは毎夜寝屋に来て仲間と過ごしたが、今は土・日だけという場合も多く、寝屋子たちが自主的に集まるようになっていく。また宿の鍵はいつでも入ることができるようにと開いている。寝屋親や仲間たちとの付き合いは生涯に及び、寝屋親の指導は仕事や礼儀作法など生活面に及ぶ。

答志島では、寝屋子制度のほかに三つの町（答志・和具・桃取）毎に一六歳から二六歳までの長男・長女以下全ての若者たちが青年団を組織し、一年を通じて活動を行っている。この青年団組織のなかに寝屋子が存在する。個人的な付き合いを通して友情と絆を深めていく寝屋子に対し、青年団は月一回の総会を開き電話帳配布、海女の漁場監督、盆踊り、敬老会準備、夜警などに従事している。また、青年団運営資金として「ひじき」を採取したりして資金に充てている。

婚姻との関わりに関しては、以前存在した「娘寝屋」と称する宿はなくなり若者たちと娘たちとを結びつける直接的な機関はなくなったが、寝屋子仲間に入ってきた娘が出来る仲間同士が協力をするかたちは残っている。昭和四五年にNHKで放映された番組のなかで、寝屋子たちが年頃の娘の家に訪ねて行くと家の者は席を外すしきたりがあり、このことは社会的に認されている行為であることが紹介された。若者の話では、男女の取り持ちは「アネラ遊び」^{二五}と称され、寝屋子仲間を連れて娘の家に遊びに行った際に本人は娘と話をし、他の仲間は娘の親と話をし、付き合いを頼みに行った。

仲人は寝屋親が務めることが多いが、答志町の特徴として新郎方の親戚一組と寝屋親夫婦一組の計二組が仲人を務める。挙式は、昭和初期頃までは若者仲間の協力により島内で行われていたが、今では島羽市内での挙式が多い。夜に提灯を持つての嫁入行列や、嫁入に関連するような「高盛の儀」などの儀式は姿を消してしまっただけで

く、話を聞いた若者は知らなかった。

答志島は、志摩波切を根拠として付近の土豪を制圧し勢力を伸ばした安土桃山時代の武将九鬼嘉隆自害の地であり、首塚と胴塚がある。九鬼水軍を率いて志摩半島一帯を支配した嘉隆は織田信長、豊臣秀吉政権水軍組織の中心的存在であった。この水軍には漁師も多数参加しており、いざというときの人集めのためにも寝屋子の制度は必要な存在であったといわれる。鳥羽市のなかでも豊かな漁場に囲まれているためであろう、漁師になる者が多く島人たちの結束の固さがこの寝屋子制度にも現れ受け継がれている。平成七年度高等学校卒業生の半分以上が漁師を継いだ、平成十三年度卒業生においては一人という状況であると聞いた。

島外に出てもなお寝屋子仲間の結束は固い。加入、脱退、しきたりなどの形は変化してもその中に流れるものは変わりなく引き継がれており、人と人とのつながりの大切さを改めて感じた。今後昭和初期・それ以前の寝屋子仲間について現在と比較し考察していきたいと思っている。

六、おわりに

若者組と婚姻の関わりについては、①性教育や配偶者選択に関する諸慣習 ②婚礼をめぐる諸慣習の二つに分けられる。前者は寝宿を中心として行われるものがある。柳田は往時における性教育や配偶者の選択は若者組とその監督下の娘組よって自主的に行われていたものとみなした。若者組という年齢階梯制の基本的な組織は、若者と娘との交友を極度に圧迫する傾向が強く、これを禁止する条目を徳目の一つとしているところも多い。また、娘組、娘宿が併存する地方においては娘組との交友も行われ、娘宿を媒介として婚姻が行われた地方も少なくない。

若者組への加入は、柳田が「群れの教育」と命名した学校教育以前の教育であった。その教育のなかで施された

もの一つ、性教育のもつ意味は大きい。日本では性を「忌避すべきもの」「隠蔽すべきもの」として捉えている者も少なくないが、これは明治維新以後の風潮である。時代を遡れば、性は神聖だからこそ忌避され隠蔽された。タブー思想というものは、相手が神聖であるから避ける、という発想であり、例えば血を「穢れ」と考えるのもこのタブー思想によるものである。神聖なものゆえに逆にタブー視される。だからこそ封建社会において、若者組・娘組に入り共同生活を営み、その生活のなから先輩が教育するという方法が成立したとも考えられる。

本稿ではほとんど触れていない娘組・娘宿に関して、柳田は村落社会では普遍的存在であったが、一方では東北地方には余り見られないと明言している。^{三〇}その理由は、婚姻を決定するのは「見合い」が一般的な方法であり、自由に相手を選ぶこと自体が例外と見られていたと武田正は『昔話の現象学』のなかで述べている。^{三一}これは、武家社会の名残が農山村を支配した経済条件が大きかったこと、また「必ずしも重ねては考えられない」という前置きのもと、娘宿に変わるものとして「お針子」と呼ばれるものが存在していたことがあるという。農山村では農閑期になるとほとんどの娘が針を習いに行き、見合いの年頃の娘がそこへ通うこと自体が婚姻の一つの条件であったというものである。雪深い北陸や東北地方においては、一度凶作に見舞われると回復に何年もかかり、その間に身売りせざるを得ない娘も存在していたという悲劇もあったことを考えると、娘宿に集っておしゃべりを楽しむ前に針などの技を身につける必要性もあった。しかし、針を習いに行ける娘はそれさえも幸福であったといわれる。

本稿では、若者組と婚姻に関して若者条目を中心に若干の考察を試みた。今後は若者たちが婚姻の際にとった具体的な行動について取り組んでみたい。

〔注〕

- (一) 和歌森太郎「若者組の規範意識」『歴史研究と民俗学』弘文堂、一三〇頁、一九六九年。
- (二) 瀬川清子『年齢構成からみた若者組』一九六六年、前田安紀子『配偶者の選択』一九七三年。
- (三) 全国民事慣例類集第七章第一款幼年年齢の条 司法省、一九二四年。
- (四) 大日本聯合青年團『若者制度の研究』若者条目を通じて見たる若者制度』一九三六年。
- (五) 一五歳より若い加入年齢の例は以下の通りである。
 静岡県田方郡韭山村では、加入年齢は多くは一五歳であったが、なかには一三歳の部落もあつた。静岡県清水市宮加三では、時により一定しないが大抵一〇歳より一三、四歳で加入した。
 愛知県東春日井郡小牧町の若衆連は、一四、五歳より二二、三歳の若者を以て組織されていた。(前掲『若者制度の研究』参照)
- (六) 福田アジオ『若者組の諸類型と『家』の構造』一九七二年。
- (七) 天野武『若者の民俗―若者と娘をめぐる習俗』ペリカン社 一九八〇年
- (八) 福田アジオ『若者組の活躍』『村の生活文化』塚本字編・日本の近世第八卷 中央公論新社 一九九二年。
- (九) 中山太郎『日本若者史』春陽堂 一九三〇年。
- (一〇) 『若者制度の研究』三二五頁以下、柳田国男「よばいの零落」『婚姻の話』岩波書店、一九四八年、六五頁以下、一二五頁以下、一九〇以下、有賀喜左衛門『日本婚姻史論』日光書院、一九四八年、五頁以下、大間知篤三『日本結婚風俗史』『家族制度全集』史論編Ⅰ婚姻所収二四七頁以下、瀬川清子「若者組と娘仲間」『山村生活の研究』二〇五頁以下など。
- (一一) 大間知篤三・瀬川清子・大森志郎・川端豊彦・三谷栄一・大島建彦編『民俗の事典』岩崎美術社 八〇頁。
- (一二) 文化庁編『日本民俗地図Ⅵ解説書』国土地理協会 一九七八年 二三八頁。
- (一三) 柳田国男・大間知篤三『婚姻習俗語彙』民間伝承の会 一九三七年。
- (一四) 柳田国男「女の身すぎ」『婚姻の話』岩波書店 一九四八年 五七頁。
- (一五) 瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』未来社 一九七二年。
- (一六) 白田甚五郎「よばひの文学」『国学院雑誌第六九卷一―号七五頁。

- (二七) 文化庁・前掲書 四三二、四三六頁。
- (二八) 奥野彦六郎『南島村内法―民の法の構成素因・目標・積層』至言社 一九七七年 一三六頁。
- (二九) 週刊朝日第一二卷二三号。
- (三〇) 読売新聞 昭和四年一月一日。
- (三一) 中山『日本若者史』一五三～一五五頁。
- (三二) 中山『日本婚姻史』一一七頁。
- (三三) 中山『日本若者史』一五五～一五六頁。
- (三四) 中山・同右一六二～一六三頁。
- (三五) 加藤咄堂『日本風俗志下巻』新修養社 一九一七年。
- (三六) 中山・同右一六七頁。
- (三七) 瀬川『若者と娘をめぐる民俗』五三八～五三九頁。
- (三八) 近藤富蔵『八丈實記』第一巻 緑地社 一九六四年 三一三～三一四頁。
- (三九) 娘組を「アネラ」と称した地域が鳥羽にあることからその名が受け継がれたと思われる。(鳥羽市史七五五頁参照)
- (三〇) 柳田国男『定本柳田国男集』第一五巻 筑摩書房 一九六九年 一一三頁。
- (三一) 武田正「家の嫁から村の女に―あるいは『村でマンダラを織る』―」『昔話の現象学』岩田書院 一四九～一五〇頁。

(たかしま めぐみ・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

有事立法と後方

— 防衛論議におけるわが国のロジスティクスの考え方 —

Emergency Legislation and Logistics

— A Study of Logistics for National Defense —

室本 弘道

Hiromichi MUROMOTO

キーワード：新しい安全保障の概念、国防から危機管理、有事立法、
正面と後方、後方支援体制

要旨

冷戦後世界はさまざまな脅威を経験し、冷戦時代の安全保障即「国防」の考え方から、新しい安全保障の考えに基づく「危機管理」へと変化した。

有事立法は、これら今日の国民の求める新しい危機管理に対処するため、それぞれの危機管理対象ごとに、国の責任分担を定め、そして国民の責任分担までも明示するものが望ましい。

そしてこの考えに立脚して初めて今問題となっているわが国防衛の「後方」も決まってくる。

1 はじめに

有事立法についての議論が盛んになっている。この論文は、冷戦後の「新しい安全保障観」のもとでの有事立法の意義とそのあり方について論述し、その有事立法のもとでの「自衛隊の後方」のあるべき姿について述べたものである。

本論文は防衛庁広報誌「SECURITARIAN」後方特集号（2002年9月号）において、筆者が「新しい後方の形」を執筆した際の元論文である。

自衛隊後方が正面と並んだ瞬間がある。地下鉄サリン事件での後方部隊の活躍である。これまで表舞台に出ることの少なかった後方が国民の前で堂々とその地道な仕事を完遂した。改めてこれからの自衛隊の正面と後方のあり方を考え直すきっかけとなった。

2 有事立法で決まる後方

2001年9月の米国同時テロ事件を境に、世界はテロ以前の時代「ポスト冷戦時代」に決別し新しい時代を迎えた。そして国際社会では、米ソ冷戦時代にはとても考えられなかった新しい合従連衡が始まった。その結果米国一極支配構造の更なる強化がめだつ。ロシアはかつての旧敵米国と同盟関係であると言い出し、NATOにもオブザーバー参加した。中国も一個中心（経済第1主義）の追求のため、今は争う時代ではないと米国に妥協している。両国ともそれぞれ国内にテロ分子を抱えており、テロ鎮圧の大義名分も共通である。

このように米国が実質国連に代って世界の安定に、霸権的に君臨しているという、いわゆる米国覇権論が、現実味を帯びてきた。（参考文献1、2）

わが国は戦後一貫して、日米安保体制下での安全保障を機軸としており、多くの国民の支持を受けている日米安保体制を、今急に変更する必



平成7年3月20日、東京の営団地下鉄日比谷、丸ノ内、千代田各線で、通勤ラッシュの車内に猛毒のサリンが撒かれ、12人が死亡、約5,500人が被害を受けた。災害派遣要請を受けた陸上自衛隊は、化学学校、第1、第12師団から約160人が出動。駅や車両内の除染を行った。写真は地下鉄霞ヶ関駅ホームを洗い流す第101化学防護隊の隊員

然性もないと思われる。

わが国固有の憲法第9条解釈から、相手が攻めてきた場合の自衛戦闘、即ち個別的自衛権の発揮、つまり専守防衛のみが可能であるとされている。このことは、自衛隊は国外に出て行かない防衛力、すなはち海外派遣軍（外征軍）とはならない防衛力である。

国外に出ない防衛力とは、国土防衛戦に限るということであり、現在の自衛隊には日本及びその周辺での自衛戦闘行為のみが認められている。

わが国土は、発展途上の国とは違い、国内インフラが相当完備しており、その中で戦闘を念頭に置いていることになる。

かつて日米間の政治のトップが、陸上自衛隊の所要総隊員数の見積を検討した折、日本の地形区分から考えると、13個の独立した部隊単位が必要であり、それを師団とした。13個の師団には正面（Combat）と後方（Logistics）を合わせて25万人が必要であると見積もられたが、我が国内での国土戦のみを考えればよいので、後方部隊は日本の民間のインフラが利用できるとして、後方部隊を7万人削って、陸上自衛隊18万人体制としたいきさつがある。つまり陸上自衛隊には後方部隊が基幹要員だけしかいないのである。海・空自衛隊をつくる時も同様の配慮がなされ後方要員が削られている。モノ関連では、たとえば旧軍のように兵器廠も鉄道連隊もなく全ての防衛装備品の生産・維持・輸送活動等は民間依存せざるを得ない。

つまりは、国民の支援が無ければ全くのお手上げ状態の自衛隊なのである。国民の支援とは何か。中央各官庁のみならず、地方行政府、企業、農漁民、トラック・鉄道・海運・航空などの交通関係機関、マスコミや宗教団体、一般国民に至るまで全ての国内インフラストラクチャーを総動員してやっと自衛隊の後方は初めて完結することになっている。

自衛隊創設以来50年が経ち、やっと今有事立法審議が始まったようであるが、このいきさつを考えれば、国の安全保障を第1の責務とする政治家がいかにか怠けていたかを物語っているのではないだろうか。自衛隊には正面の勇ましい部隊だけが準備されており、肝心のそれを支える後方部隊は最初から削られて発足したのである。すなわち有事立法及び民間防衛組織などがなければ、全く機能しない張り子の虎である。

どこかで何回も聞いた話ではあるが、今でも大艦巨砲主義・情報無視・兵站無視・精神力のみである。

外交交渉むなしく相手に攻められたとき、国民の生命財産を守ることは国家政治家の最も大切な責務であり、安全保障、危機管理をそっちのけにして、毎日議論することがそんなに多いのであろうか。戦争は絶対

無いと信じておられるからかも知れないが、戦争責任は政治家にあり、警鐘を発し続けている自衛隊側ではないと申し上げておきたい。

また、昨今の有事立法議論を聞いて気になることは、先づは戦争に勝つ為の有事立法であるべきで、戦争に負ければ有事立法（国民の権利保護）など、全て一気に消滅するということである。いつから戦後の日本は戦争すれば必ず勝つことになっているのだろうか。それこそ神国日本思想の再来ではないか。

さて、国土及びその周辺の戦闘に限定した自衛隊の後方（ロジスティック）は、世界にその例を見ない特殊な組織作りが必要となろう。このため、現在陸上自衛隊では、新方向の改編が進行中であり、やっと北海道地区にのみその改編が終了し、新しい部隊が今年から発足した。

はたして、世界の陸軍が試みたことのない特殊なこの国の実験は成功



大噴火を想定した伊達市、虻田町、壮瞥町による合同避難訓練で有珠小学校の児童ら約80人を避難場所まで輸送支援する第7特科連隊のトラック（平成13年5月18日、伊達市有珠中学校）

するだろうか。

そこで、今後のわが国の安全保障における後方のあるべき姿について考察したい訳であるが、その前にすべき大切な議論がある。それは冷戦後世界の新しい安全保障観についてである。

3 新しい安全保障観

長い冷戦のあと、ポスト冷戦期に芽ばえた人々の安全観（安全保障観）の多様化に基づく観点からの新しい安全保障観、そしてポスト冷戦期を終焉させたと言われる2001年9月の米国同時テロ事件以降世界の安全保障観について述べる。特にこの考察の中で、2大大国米中の狭間にしか生きることの出来ないわが日本の安全保障観について、新しい観点から議論を展開してみたい。

3-1 冷戦後の安全保障観（1990年以降）

国家国民を総動員して国民国家が戦った第1次大戦とそれに続く第2次世界大戦、さらに第2次大戦終了後、1990年頃まで続いた冷戦下においては、国家の軍事安全保障問題が人々の最大関心事であった。特に米ソ間の核戦争という地球最大の危機に晒されていた。これ以上の人類にとっての危機は無かった。このため1948年に出版されたネオリアリズムの古典、H.J. モーゲンソーの“Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace”が多くの人々に受け入れられた。広辞苑の定義では、安全保障とは「外部からの侵略に対して国家及び国民の安全を保障すること」となっている。

しかし冷戦が終わって、大規模核戦争から人々は解放されると、主として大国の締め付けから解放された国々で始まった地域紛争、民族紛争、宗教紛争及びグローバリゼーションの進展が、国家としての機能を失ってしまった国々からの難民問題や食糧問題が人々の関心を呼ぶよう

になった。また米国を中心とする IT 化の進展により、先進国と呼ばれる国々は「情報脆弱国家」となり、情報安全保障に取り組まなければならなくなった。

またこのグローバリゼーションの進展は国民意識から地球市民意識を芽生えさせていると同時に個々のアイデンティティを主張する時代（グローカリゼーション）へと多様化した。このことは、人々の人権意識・政治意識・豊かさの追求と非人道からの解放へと「人間の安全保障」という言葉を生み出した。

また安全な食物の追求及び工業生産から破棄までのサイクルを、地球環境をベースに考える「環境安全保障」は人々の強い関心を呼んでいる。

その他国際犯罪組織、麻薬、資金洗浄、無防備な民間船を襲うハイテク海賊などなど例をあげればきりが無いほど人々の安全上の問題が提起されるようになった。一口でいえば、「国防」から「安全保障」「危機管理」への転換である。

ポスト冷戦期のこれらの課題（危機管理対象）はそのまま 21 世紀へ何の解決策も見出だせないまま持ち込まれたといえよう。

わが国では、このような新しい問題に答えるための教育は十分行われておらず、これらの危機のみが強調されているのが現状である。

しかし、ここで提起した人々の心配事、安全を脅かすと考える対象は、地域により、国により、民族により、みな異なっている。冷戦以前と同様あいも変わらず国民国家防衛論、すなわち国防が、一番大切な国々もわが国の周りにも数多く存在している。

安全保障観が世界各国みな同じであることは決してないからである。

3-2 米国同時テロ以降の安全保障（現在の安保観）

ポスト冷戦期でも、日本での地下鉄オームサリン事件を契機に、大量破

壊兵器を用いたテロへの対策は、世界の安全保障担当者の関心を集め努力が続けられていたが、2001年9月11日、米国同時テロ事件が勃発した。いわゆる非対称脅威戦争（中国では超現戦という）の顕在化である。

世界の大国はこの国際テロ事件を境に、この事件をむしろ利用して、新しい合従連衡の時代に進んでいる。現在の安保観を述べる前に、少しこの事件を冷静にふり返ってみよう。

このテロ事件が米国でなく、日本で起きたとしよう。確実にいえることは、これは戦争ではなく犯罪事件として糾弾されよう。そして日本も過去に経済大国として世界の人々から搾取をしたから、反省も大切だ、日本にも非があるとして、死んだ人（犠牲者と一緒にテロリストも）のメモワールの後、オーム裁判同様長い犯罪人追究の裁判が続くことになろう。

米国ではこうはいかなかった。米国は自分の国を攻撃された経験は20世紀以降はハワイだけであり、日本のように無茶苦茶に国土を破壊された経験はない。特に今日この地球に並ぶものの無いスーパーNo.1大国（政治・軍事・経済・科学・文化の分野）である。その米国のシンボルを破壊されたわけであるから、当然平和愛好国日本の対応とは異なる。（戦前の帝国日本で通天閣が第3国人と呼ばれた人により倒壊されたようなものか）ブッシュ大統領はこれは戦争であると宣言、テロの首謀者・オサマ・ビン・ラーディン（アルカイードは彼の私兵）と彼を匿うタリバン征伐に向かうことになる。世界各国は「米国に味方するか、しないなら敵だ」と決め付けられた。日本など腹の中では、そこまでしなくてもと思った人は多いと思うが、協力しなければお前は同盟国ではないといわれた時（すなわちタリバンと同じにされたとき）の心構えなど、全く日本国民にはないから、小泉内閣は直ちに日米安保条約を強化させる方向の「テロ対策特別措置法」をバタバタと成立させ、自衛隊を協力させるしか他に方法がなかった。

英国やドイツを始め、ロシアもフランスも中国できえも、いわゆる国際慣れした各国は、米国支持にまわった。そして反対を表明した国々は、テロを支援する国家として米国から糾弾され、「悪の枢軸国家」（正しくは「邪悪の枢軸」）に指定され、いつ米国の攻撃に晒されるのか恐怖におののき始めた。今年になっての北朝鮮の変化などは、タリバン征伐の成果とそれに続くイラン攻撃の現実性がもたらしたものであろう。

このことは、戦後の日本では、日米安保の庇護のもと、国際社会の非情さを経験することの少なかった日本の一般国民にショックを与えた。特に言論の自由が保障されているわが国においてさえ日本の大新聞もこの米国の判断に遠慮したと思われる記事が当時目立った。またイラク攻撃を前にした今日の新聞論調もかなり以前とは異なっているように感じるのは私だけだろうか。

少し側道にそれて恐縮だが、タリバン征伐後のアフガニスタン暫定政権がようやく確立し、日本も多額の出費をさせられたが、私は絶対にアフガニスタンがこれからうまく平和にやっているとはいっていない。アフガニスタンは、どこの国でも経験した、シビルウオーを経験中であったのである。日本でいえば、川中島の決戦の最中に、武田信玄（アフガンの北部同盟）を米軍が応援し、上杉謙信（タリバン）を殲滅した図である。それで一時的に米軍の力によって、アフガンに平和が来たように見えているが、各地に点在する民族も異なる軍閥が治まるはずはない。織田信長も徳川家康も毛利元就もそのまま残っているのである。

アフガンが現代に存在する国家であるといっても、人類の歴史的にはどの時代の国家であるのか、また西欧とは宗教も民族も安保観も全く異なるのである。米国は腹いせに軍事力を投入したが、一向に解決にはならない。世界には、全く異なる時代を生き、全く異なる安保観を有した多くの国家や民族が並存し、同居して暮らしている。そしてそのそれぞれの国家や民族は皆正義である。少なくとも自分たちは不正義な国家民

族であると思って暮らしている人はいない。多くの人々は皆戦争の無い平和を望んでいるが、不正義が支配する平和よりは、戦争あるいはテロに訴えてでも自分たちの正義が実現することを望んでいる人の方が、不正義の平和に生きることを望む人よりは多いからだろう。第2次世界大戦以降、各個バラバラの正義の衝突による戦争を経験しなかった国は、世界中に殆どなく、数少ない国として日本がある。そして日本人はこの平和がいつまでも続くと感じている。何の事はない。一番強く恐ろしい米国の子分として励み、運良く平和を維持できただけであることを忘れている。北海道や沖縄が中立を宣言して独立国になったら、すぐに戦火に見舞われよう。危ういバランスの中での平和であることを忘れてはならない。

「国際学」の世界では、圧倒的力と富を有する米国を世界の公共安定財として利用し、更に国際制度化を推し進め、国際社会の安定を図ろうとする考え方が、1980年代から生まれた。「覇権主義」と呼ばれるが、この考え方がさらに加速され始めたのが今日現下の新しい安全保障の考えといえよう。(文献1、2参照)

このような現実世界にあって、自国の安全を全うするためには、自国の正義を押し通すか、あるいは他国の正義(日本の場合には特に米国の正義)との折り合いをつけるかが大切になる。米国は圧倒的軍事大国である。のみならず、世界中の人々(若者)を惹きつける唯一の超国家である。うそだと思う人は、世界中の米国大使館前に、米国行きを求める大勢の人々の列を見れば分かる。たとえば、世界中の日本大使館や中国大使館にそんな光景はない。少なくともこれからはしばらくはそうであろうと思う。

日本は軍事的能力を持って物事を解決することを憲法で放棄した。他国では必ずしもそうではない。むしろ自国の利益保護のために軍事力はODAより大切と考える国は、米中を始め日本周辺にも沢山ある。

米国同時テロで日本人が感じたことは、あの海を隔てた米国でさえこんな目に会うのであるから、日本ももしテロ集団が狙えば、罪も無い自分も危ないと、戦後初めての危機意識が芽生えた。テロリストは軍隊を攻撃するのではなく、無差別になんでもありの方法で関係ない民衆を狙う。テロリストの目的は民衆の心に恐怖を植え付け、自分の正義を押し通すためである。平和ボケした日本人も考えた。テロ被害に対して米軍は果たして助けに来てくれるのか。ひっとしたら自国で、あるいは自分の市町村で、さらには自分で対応して家族を守らなければならないのではないかと。米国での炭疽菌事件最盛期に、自分の郵便受けに白い粉が入って無いかと気になった日本人は多いと思う。

自国内に不満分子などを抱える大国は、この際、対テロについての米国流の考え方を大義名分として利用するため、一応米国に同調しておき、自国内の反乱分子に対して強攻策を行使できるチャンスを得た。また、現下の同時テロは米国を主ターゲットとしているが、テロの枢軸国に指定された国々が、大量破壊兵器を多量に生産し使用する可能性は捨てきれなく、いつ、どの国がその、とぼっちりを受けるかは予測できない。この際米国の力をもってして、これらの無法者と言われる国家を征伐するのを、高みの見物と決めてもおかしくない。仮にまたそのことによって米国がミスをするかその力に衰えが出れば、自分の出番もあるだろうと考えても不自然ではない。

米国の悪の枢軸発言後、その発言に各国とも戸惑いを表現してはいるが、自ら具体的行動に出ることは控え、米国の次のアクションを見ている。

テロを企てる側は、オサマ・ビン・ラーディンの名を騙ってでも、テロ対策の甘い国（たとえばバリ島等）において、外国人を無差別に殺す全世界規模のテロを開始し始めた。

3-3 変わりはじめたわが国民の安全保障観

安保無風地帯のわが国でも、国民の意識が変わり始めた。

これまでの安保論が、憲法問題に始まり、自衛隊違憲論、日米安保是非論、核艦船寄港反対運動などであったが、人々の関心は今日ではより身近な自分達にも関係のある危機管理へと転換しつつある。日本人の安全保障感覚や危機管理意識に変化が生じている。

憲法改正を是とする人は非とする人をはるかに超えている。自衛隊容認、日米安保堅持容認者は国民の過半数を数年前に突破し、増えつづけている。

いくら安保観が変化したからといっても、我が国の現下の採るべき根本の安保政策は、日米安保政策維持以外に現実的対応は考えられないと思う。世界の各国は、ロシアでさえ米国の同盟国であると言い出す昨



大雪の後、早朝からジャンプ台の整備にあたる第5施設群のノルディック協力隊員。高度差138mという目もくらむ高所で懸命に助走路を除雪（平成10年1月27日、長野・白馬村）

今、米国の一極体制を容認し日米安保堅持政策以外に、軍事弱小国家日本の採るべき道があるのだろうか。中国が25年後超大国として登場する可能性は高いと思うが、その時点で米国との力関係をつぶさに観察し、その時点でわが国安全保障政策を決めればよいことであり、今の時点で中国に気兼ねして中国びいきの政策をとることは、かなり危険である。

日米安保で約束した米国の艦船が港に入港することに反対している市があるが、もし米艦船が市の要求を無視して、強行に着岸したら、市民や国民の多くは、サッカーどころではない騒ぎになると思う。それが米国（米国民）との決定的なしこりになった場合、国家の安全保障体制に問題を生じる。地方の市には国家安全保障上の責任は与えられていない（権限を有していない）。米艦船がそんな無茶なことはしないだろうと勝手に考える甘えの上に成り立つ、選挙目当ての危険な火遊びに過ぎない。

さて、わが国の現下のとるべき安全保障政策を考えてみたい。

結論はこれまで述べたように、日米安保を強化する方向である。先に述べた世界の「覇権主義」の傾向にも合致する。中国の一人勝を懸念する東南アジアの諸国の希望にも合致する。

米国は必ずしも我が国の正面兵力を増やすことには積極的ではない。むしろ米国が作りあげた東アジアの戦略バランスを崩すものとして警戒している。我が国に期待するものは、米国の東アジア戦略（クリントン政権末期に公表されブッシュ政権もこれを踏襲している）を支える後方支援（ホストネーションサポート）である。艦船寄港に反対することはこれに反する。

先に述べたように、自衛隊の後方部門も全て民間依存の状態であるが、日米関係においても、益々米国に後方支援を期待されることになる。

また、3-1で述べた国民の危機意識の変化から自衛隊の任務が多様化

し、国民の求める自衛隊の任務の多くが（殆どが）後方分野での活動に変わってきている。

4 後方支援とはなにか ― 正面と後方

後方とは第2次世界大戦中米軍が使用した Logistics の訳語として使用されている。最近では防衛部門のみならず広く一般社会においても、生産工場の倉庫業であるとか、輸送産業において使われ始めた。

簡単にいえば、戦場等において戦闘作戦部隊（これを正面部隊といい、正面部隊が火力・機動力発揮のために使用する戦車などを正面装備品という）が作戦、戦闘を行う上で必要な各種装備品（正面装備と後方装備を含む）などの調達、人員の輸送、燃料、食料などの補給、通信・施設・衛生などの戦闘支援力の展開、維持に必要な諸活動の総称である。

自衛隊では、定義を定めているが、作戦が行われる場面が異なるため、統合幕僚会議（統幕）と陸海空自衛隊間で多少異なる。

統幕では「防衛力の造成、維持、発揮に必要な人員、施設、装備品等を整備し、提供すること及びこれに関する諸活動」としており、陸上自衛隊では「作戦部隊に対し、所要の人員、資材、装備、サービス等を提供することをいい、人事及び兵站機能を合わせ、あるいはさらに部外連絡協力、広報及び会計を含めて総称する場合がある」としている。

海上自衛隊ではこれらの機能にさらに具体的に正面部隊を含む教育訓練までも後方としている。

歴史的に日本ではこの後方を軽視する傾向が強く、負け戦の教訓として、何回も後方の重要性を謳っても、すぐに忘れてるのが現状である。このことは何も軍事だけには限らない。

大学でも情報化は大切と、多くのコンピュータが導入されたが、これらのシステムを機能させるためにウイルスを取り除き、故障を修理した

り交換したりするメンテナンス（後方）に従事する人は少ない。コンピュータを使う（正面）ために大切な後方は留守になりがちである。後方無視は日本人の習性ではあるが、だいたい貧乏国はみな同じである。1億円買った市町村は立派なうわものは造ったが、整備維持のカネは無く、そのうち汚い建造物となり、誰も寄り付かなくなるかもしれない。正面と後方の意味はお分かりいただけたものと考える。

5 正面と並んだ後方

ポスト冷戦後の安全保障の考え方の変化は、自衛隊にとっても新しい対応が求められた。

先に述べた、冷戦後出てきた各種「安全保障」の問題について、全てが防衛庁・自衛隊の責務ではない。国民に各種の安全の提供を行う主体は、安全保障・危機管理の中味によって、中央官庁から地方さらに国民に至るまで異なる。これを細かく決めるのが、「本当の意味での有事立法」であるべきと考える。その中で少なくとも防衛庁の責任は、次のような限られたものであろう。

「国防」、「国家安全保障」での軍事・情報関連、「総合安全保障」での防衛力行使・情報収集・国際協力の一部、「人間の安全保障」での災害派遣・地雷除去・遺棄化学弾除去・不発弾処理、「情報安全保障」での防衛系サイバー空間における「情報戦」での防衛と攻撃が考えられ、「地球環境安全保障」や「総合安全保障」を構成する「経済安全保障」「食料安全保障」「エネルギー安全保障」の中心的な役割は防衛庁以外の専門省庁を始めとする部門と思われる。

この危機管理の責任分担が広く国民に理解される努力を歴代政府はこれまで怠っていると思う。

防衛庁では多様化する任務を、国防の主任務に加えて、次のように分類している。

国内外災害派遣任務、国際貢献任務（PKO）、国際会議などへの専門家としての自衛官派遣、化学兵器禁止条約加盟に伴う遺棄化学兵器の処理等である。

後方部隊の実施する数々の任務の他に、平時の自衛隊を維持するため、正面勢力を割いて後方任務（自衛隊では隊務運営と呼ぶ）につかせている。例をあげると、幕僚監部や司令部などの勤務、毎日の給食支援、隊員の募集・退職支援、教育訓練のための各種学校勤務、輸送支援、駐屯地警備等いくらでもある。

幹部自衛官で、正面部隊の指揮官や幕僚だけを在任間勤務できる幸せ



平成5年7月12日、北海道南西沖地震が発生。奥尻島が火災と大津波により壊滅的な打撃を受けた。写真は同島青苗地区で倒壊家屋の中から行方不明者を捜す第29普通科連隊の隊員

な人は、ひとりもいないと思う。

業務の大半が後方業務である。

このように防衛庁の主任務は国防であるが、先に述べたように国民の関心と同盟国米国の自衛隊への関心は、国防（軍事力）そのものよりも、「今日の国防」を成立させるための重要な業務である「後方」に向けられている。

自衛隊の後方の方が正面より重要だと言っているのではない。自衛隊や世界の軍隊にとって、正面の素地・裏付けの無い「後方」など全く役に立たないからである。「正面と並んだ後方」の時代を迎えている。

これからの東アジアの戦略環境として、米中の経済利権を中心とする米国の関心関与は益々増大するであろう。自衛隊が今急に正面を強化する必然性はなかろう。日米安保の強化と協力関係を大切に考えれば、自衛隊の正面を強化する必要性よりは、後方分野の協力体制を確固たるものにする方が急務といえよう。「自国の防衛は自国でやらなければ誰が面倒を見てくれるのか」という声は確かに勇ましいのではあるが。また日米安保を破棄して、中国との同盟が客観的に結べる時期ではない。また日本の軍事中立を米国やアジア諸国がそれを望むかを考えれば、現時点での努力方向は明らかであろう。

自衛隊の後方部門についていえば、我が国のインフラに100%依存しているにもかかわらず、官民の協力態勢は殆どできていない現実の姿を強くアピールし、国民の協力を得ることが基も大切なことであると考え

6 これからの防衛における後方のかたち

後方とは「正面でないもの」全部であり、到底ここに後方関連の全てを記述する余白も能力も無いので、ここでは後方のうち人と物に限定して述べることにする。

6-1 ヒトについて — 優秀な人材の確保と訓練

日本では経済不況が長く続いているため、自衛隊は世界の各国が若者兵士募集に苦しむ中で特異な存在である。科学技術が戦略戦法を変える今日、徴兵制はどの国でもお荷物になっており、現在の志願制を継続し、高度な専門家を育てることが大切である。今わが国で徴兵制が採用されたら、一番困るのは自衛隊で、押し寄せる新隊員に毎日毎日基礎的な訓練を与えるのみで、彼らはすぐに去って行き、肝心の教育練度はさっぱり上がらないことになる。今日の最新兵器を扱う隊員は、職業意識に燃え長期間の訓練を必要とし、徴兵された隊員ではとても無理だからである。

人口の減少、特に若者人口の低下は、まもなく自衛隊の募集悪化をもたらし、人材の確保は難しくなる。これは何も自衛隊に限ったことではなく、日本人口減少と外国人受け入れ是非の選択を、いま日本人皆が迫られている。

これに対処する方法は、自衛隊隊員の質の高い技術者集団への移行である。少数精鋭化以外に方法はない。更に多様化する後方を考えれば、国民との接点に立てるあらゆる分野の専門自衛官の養成が大切である。

また狭い国土での演習場問題は、国民の生活の場と重なり解決困難な問題の一つではあるが、国民の理解を得て、十分な訓練に裏付けられた自信のある優秀な隊員を養成しなければならない。現在多くの訓練用シミュレーターが導入されて、実地訓練を補っているが、実地訓練に勝るものはない。狭い射撃場でいくら射程 10 km の射撃ばかりやっても、40 km 射撃はできないのである。

PKO 等の国際貢献業務は、業務の中身は後方業務とはいえ正面業務と何ら変わらず、日本を離れたところでの、任務完遂能力、国際協調性、統合運用能力、自己完結性の確保など、任務の多様化に伴い訓練すべき内容も様々である。

また他国との共同演習はより盛んとなり、安保環境の変化と相まって、日米のほか多くの東南アジア各国・オセアニア各国・カナダなどの各種のPKO型演習が始まろう。すでにマラッカ海峡等に出没する海賊退治共同訓練が、海上自衛隊・ASEAN諸国や中国・韓国海軍を含めて始まる。これからの共同統合演習の中身は「国防」型から「危機管理」型へと移行しよう。まさに国際性のある自衛隊員が求められる。

米軍との共同演習はこれまで何回も実施しており、これからも同盟国が何を考え、何を装備しているのかを伺う絶好のチャンスとなる。

私が米国ワシントン大使館勤務をしていたとき、日本の駐米大使がある日突然、陸上自衛隊は外交官であると言い出した。海上・航空自衛隊の共同演習では、その専門性から限られた数の職業軍人との演習になら



1年間に及んだカンボジアPKOが終了、多くの市民に見送られ、帰国のためトラックでプノンペンに向かう2次隊員。宿営地はカンボジア政府に譲渡され、「地域開発センター」に（平成5年9月12日、タケオ）



焼け跡で遺体の捜索にあたる第3特科連隊員。かたわらに「自衛隊の方へ。掘りおこすとき連絡下さい。母がうずまっています」という痛々しいメモ書きが（平成7年1月21日、神戸市内）

ざるを得ないが、陸上自衛隊の演習では、桁外れに多数の予備役の軍人、すなわち米国の民間人（学校の教師や工場労働者などのサラリーマン）と演習を行っている。これが日米間の理解に役立っているとの趣旨であった。今日 PKO や NGO は多くの実質外交官を生み出している。

国民に直接関係する募集や訓練環境整備の問題は、中央・地方政治家の取り組む問題でもあり、シビリアンコントロールの中心である。これを防衛庁自衛隊任せにしてきたのは、政治の怠慢であって民主主義国家とはいえない。有事法制の整備と平時有事の国民の支援が待たれる。

6-2 モノについて ― 装備面でのあり方

装備品（兵器）の良し悪しは正面戦闘の結果を決定する大きな要素である。

米軍による 2001 年のアフガニスタンでの短期間のタリバン征伐と長期にわたる負け戦・ベトナム戦争とを比較してみれば、兵器の進歩が戦闘の推移に与える大きさが分かる。兵器の進歩が戦場を変え、戦略・戦術・戦闘教義・戦法を変えた。湾岸戦争以来世界の各国で米軍に続けと研究されはじめた RMA (Revolution in Military Affairs) (苫小牧駒澤大学紀要第 6 号 2001・9・28) がある。

陸上戦闘においても、海や空のように最新兵器が必ず勝つという時代に近づいてきたといえる。このため正面装備から後方装備のバランスの取れた近代化 (RMA 化) は各国とも急務となっている。

6-2-1 望ましい防衛装備品の取得方法

装備品はまず、戦場の要求に基づき、研究開発から始まる。

米国では、将来戦を予測し、空地一体となった「エアランド・バトル」という戦術教義を考え出し、これに基づき研究開発が各分野で推し進められ、その概念に沿って完成した兵器が湾岸戦争に間に合ったとい

うわけである。

わが国でも、RMA の考え方によって、研究開発が行われてはいるが、装備品の輸出禁止のため、利用者は自衛隊だけとなり、非常に高価なものとなる。今流行りの「ケイタイ」（携帯無線機）は、15 年前までは自衛隊（軍）が警察の使用するものであったが、一般に開放され、現在はわが国でも 7,000 万台を越えた。購入値段は研究開発費からすればただみたいな値段である。仮にこれを自衛隊だけで使用するとすれば、せいぜい 25 万台程度であり、1 台 300 万円程度はすることになる。

それでは、自国での研究開発生産を止めて、高性能ではあるが価格の安い装備品に頼る方が良いのかということになる。例えば、海上・航空自衛隊装備品に多いが、米国からの FMS 方式とライセンス生産方式がある。

FMS（Foreign Military Sales）は、米国政府から米国製の兵器を輸入購入する方式である。この場合、日米共同作戦では完全に同じ兵器を使用することになるから、同盟国間に完全なるインターオペラビリティが達成できる。

ところがこれは米国の都合による配給のようなもので、いつ届けられるのか、やっと届いても完全なものではなく、ネジすら無い時もある。一度壊れたら米国に修理を頼むわけで、いつ修理が出来るのか不明である。こんな装備品を持っていても、訓練にも支障が出る。有事に果たして米国は日本の装備品を保障してくれるのか。有事ともなれば、世界の米軍である。日本に優先的に回してくれというのは無理というものだろう。不安の耐えない装備品となる。

それではライセンス生産方式が良いのではと考えるかもしれない。この方式は、外国最新兵器のライセンスを高額で買い取り、作るたびにその外国に上納金を差し出し、もちろん生産に当たる日本企業にはそれなりに支払いをする方式である。このため多くのライセンス製品は外

国から直接購入（FMS）する場合の約2倍の価格を防衛庁側は支払わなければ、外国はライセンスを承知しないし、ライセンス生産に携わる国内企業もやってゆけない。

もともと装備品（兵器）の国産化能力は、その国の戦力とみなされる抑止力である。その国の科学技術力を示すと同時に、国民の意思をも表している。外国製兵器に頼る国家は、その兵器導入国の奴隷的存在にならざるを得ない。一般経済におけるモノの売買と異なり、世界の大国が兵器輸出に血眼になる訳はそこにある。兵器導入に成功することは、被導入国に対し戦争に勝ったと同じ状態に相手国を貶めることができる。

他国の技術的基盤と他国の防衛産業基盤に全面的に依存することは、いくら同盟国でも危険である。

そこでわが国も独自の研究開発の重要性に基づき、自衛隊を相手にするしかない（少量生産が決まっている）優秀な装備品を目指して努力することになる。

研究費はかかるし、製品価格は高騰する。そしてこの分野も全て民間に頼って開発生産しているのが自衛隊である。自衛隊に兵器廠はない。

数年前の防衛庁調達実施本部事件も調達に起因する。そしてその後この本質的問題は何も解決されてはいない。多くの役人と自衛官と防衛企業の関係者が首になっただけである。裁判で気になったのは、防衛庁にも競争原理とやらを導入したら安くなるという理屈である。その結果「安かろう悪かろう」の装備品がまかり通りだしたと聞く。誰も真剣にわが国防衛のために役立つ、世界に通用する優秀な装備品など開発する気力が無くなってしまう。

そこで優秀な兵器を安価に調達する方式として米国において導入された方法が参考になる。我が国でも民間で使っている民需品で防衛用にも使えるものの導入 COTS（Commercial Off The Shelf）の採用である。米国では優秀な兵器が開発されるとそれに付随して優秀な技術が民間に

流れる。これを SPIN-OFF という。この例としては、米軍の開発した 21 世紀の情報技術としてインターネット・GPS・バーチャル・リアリティがあげられる。防衛庁は SPIN-IN の時代を迎えている。

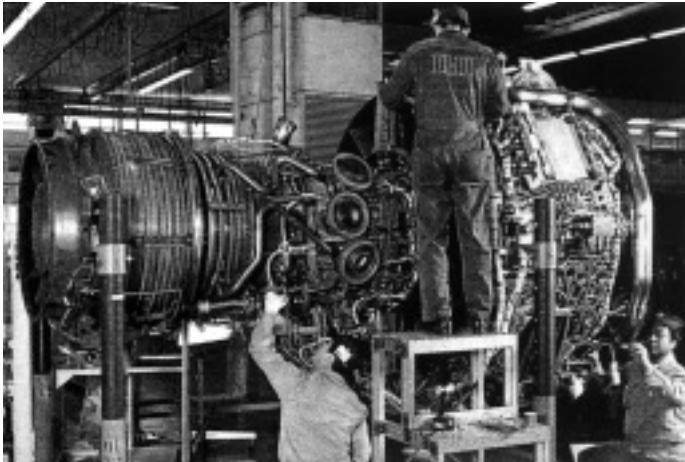
これを打開する方法はなかなか難しいが、まじめな研究には研究費を十分に支払うべきと考える。運用上の要求を満足する性能を有する装備には、十分な開発費を支払い、国産技術を育てる視点がどうしても必要である。民間業者は儲けることしか頭に無いという発想であれば、そもそも後方を民間に託した自衛隊発足の根本が間違っていたことになる。官民一体となって開発に当たり、世界に誇れる装備を持つことが、抑止力となることを忘れてはならない。

戦後のわが国の民間防衛基盤は、防衛技術の蓄積・開発力の維持・生産力の維持・民需技術の活用の窓口・兵器工廠の機能などまさに自衛隊が保有しても当然の戦力構成要素の一翼を担ってきた。

ネットワーク化の今日、兵器のプラットフォーム化が進むなかで、装備品が変わり始めた。RMA の進展は各種の情報ネットワーク関連器材のみならず一般防衛用機器についても、より一層の低コスト、高信頼性、多様性のあるハード及びソフトの COTS 製品を採用する時代になった。さらに段階的開発からスパイラル開発をも考慮しなければならなくなった。また情報・ソフト・知識・サービスについて、「形而定かでないもの」の適正価格化が求められる。防衛面に置いても、一般経済活動同様に公的情報の説明責任が生じ、このリスクを組み入れた適性価格が求められる。これらの要因はこれまでの旧来の調達システムを大きく変更せざるを得なくなった。

6-2-2 防衛調達の特異性

多くの処分者を内外に出した調本事件後何でも一般競争入札の傾向が強まっていると聞く。もともと競争一般市場を形成し難いのが防衛装備



民間産業の高い技術力と生産能力が防衛力を支える (IHI 提供)

の世界である。

わが国の防衛産業基盤が、防衛システムの、概念段階・確定段階・取得段階・運用段階・整備段階・破棄段階を通じて関わらなければ、自衛隊にその機能は無い。このため米国では、SETA 契約 (Systems Engineering Technical Assistance Contract) などが既に行われている。新ルールに基づいた調達制度改革のときを迎えていると言えよう。

調本事件は古い体質のまま新しい時代を迎えた悲劇だったような気がする。米国では、米国連邦政府調達規定 (FAR) が基本となり、その特徴は、公開制と調達プロセスの公平性と合理化である。契約履行中の追加費用などを認める Cost Reimbursement など多くの多様性のある契約形態が導入されている。また調達決定の基準として、応札価格のみに頼らず、技術提案要素・管理体制・過去の実績・サイクルを通じての支援可能性など提案の総合判断 (ベスト・バリュー) を行うこともある。

知的作業の有償化への評価・転換ルールや枠組みの整備も大切にな

る。このため政府機関と防衛産業の建設的な議論の場として、幅広い専門家・有識者を加えた恒常的研究（政府・防衛調達学会など）が必要となる。

6-2-3 共同研究など

BMD（弾道ミサイル防衛）共同研究など将来も前広に推進すべきであるが、米国側からの要請を受けるばかりでなく、わが国の方からも要請することにすれば、我が防衛基盤側からの持ち出し過剰といった不満は解消され、インターオペラビリティ（相互運用性）のある防衛装備品開発につながろう。

また、わが国は兵器輸出を一切行っていないと思っている人がいるようだが、毎年米国防省の発行する世界の兵器輸出入統計報告によれば、日本も兵器輸出国である。ランドクルーザー型の自動車などどう見ても軍用車両である。紛争地のテレビ報道にも国産軍用車両が活躍している映像をよく見かける。

ばか高い限定生産品となる自衛隊国産装備の現状を打破するためにも、そろそろ限定した防衛装備品の輸出に踏み切る時期と考える。2002年8月政府は地雷探知除去の装置を輸出解除にした。戦闘機や潜水艦などの正面兵器の輸出は米国も真っ先に猛反対するであろうが、防護用の装備品（防護マスク・防護衣・各種レーダー・通信機器・訓練用器資材・対暴動鎮圧型装備など）をアジアなどの国で要請があれば提供したらどうだろうか。

6-2-4 自衛隊を取り巻く兵站

有事立法の成立を待って始めて自衛隊のための平時有事 ACSA（物品・役務相互提供協定）議論がはじまる。日米間にはその取り決めがあるのに、肝心の自衛隊と国民との間には無いのである。立法化され

ば、国家の工業技術力や国家兵站基盤を考慮した防衛庁・自衛隊の責任と分担が定められる。わが国のインフラの方から、自衛隊の行う中央兵站から作戦野外部隊の兵站までが調整される。

その際、統合運用的観点からの自衛隊統合後方の見直しも急務となろう。陸海空統合化議論が最近また出ているが、今日の統合部隊が兵站組織を持たず、陸海空の兵站組織に依存していることが致命的になっている。

更に貴重な自衛隊定員を使って実施しなければならない兵站業務が精査されよう。

いま陸上自衛隊では、今年、北部方面部隊から順に、正面部隊と一体化された後方支援部隊への転換が開始されたが、それは更に民間依存体質強化に向けた改革といえる。

自衛隊定員は厳格に定められているが、後方業務に関わる国民の定員は無い。輸送通信・施設建設・医療業務・需品関連業務などは多くの国民の支援を必要とする分野であろう。

7 おわりに

人々の関心は「国防」から「安全保障」あるいは「危機管理」の時代へと変化しており、自衛隊も多様化する任務に取り組まざるを得なくなった。その新しい安全保障の分野はいわゆる後方分野での活躍であり、多くの国民から支持を得ている。よく自衛隊は災害派遣部隊に改編したら良いという一部の声がある。

正面の戦闘を放棄した軍隊への変身であろうが、それは軍隊とは呼ばず、実質土建会社への変身である。国連のPKO要請は自衛権を行使する軍隊に対して、かつジュネーブ条約に定められた正規軍に対して要請が行われる。土建屋への要請はその活躍場面が異なるのである。つまり土建軍しか存在しない国家は、国連から国連軍に変わる軍としての機能

として要請される時国際貢献ができないのである。土建軍に「身を持って国家のために尽くす」という誓約はとれないし、その誓約も無い土建軍は国連でも要らないのである。国連の軍事組織の一部として国連の指揮下で行動するのが PKO であるからだ。

PKO 参加は、正面をいつも考慮に入れた後方での国際貢献と言い換えることができよう。わが国のカンボジアに始まり今日の東チモールまでの国際平和協力業務は、国際的にも高い評価を得ているが、派遣隊員を支えるものは、人類愛と祖国愛に裏付けられた国際的友愛であり、ことに臨んでは身を持って公に尽くす責任感であろう。そこには後方も正面もない。

現下の自衛隊の任務として、国民コンセンサスの「国際後方貢献支援国家日本」を念頭に、NGO とともに、更に本物に育てる時を迎えているように思う。そのことが正面においても役立つ実力を身につけることに繋がる。

現下の厳しい国際情勢・地球環境の変化・情報脆弱国家などへの転換ともからみ、今日の我が国民も、少しずつながら地に足の着いた幅広い危機管理・安全保障議論を始めたようである。

北海道においても石川県について、2002 年 7 月 8 日、有事法制は「国の平和と安全及び国民の人権を守るために必要であり、早期に議案成立すべき」との意見書を道議会が可決した。わが国のインフラに大きく依存する後方にとって対話のできる環境が整いつつある。

参考文献

- 1 Hart, Michael & Antonio Negri, "Empire" Cambridge, Mass, Harvard University Press 2000
- 2 藤原帰一著『デモクラシーの帝国』岩波新書 2002.9.20

(むろもと ひろみち・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

Australia's Global Self: A Discourse Of Competing Identities

世界的に見たオーストラリア像

— 多文化社会におけるナショナル・アイデンティティをめぐる衝突について —

Michael KINDLER

マイケル・キンドラー

KEY WORDS : Australia, national image, global awareness,
national identity, refugees, anti-intellectualism

ABSTRACT

The image of a nation in the new millennium is not one exclusively contained by its geophysical borders or its variously interpreted heritage. It is the many interpretations and images it conveys intentionally and unintentionally in today's global, information-rich environment. At the onset of a new millennium, is Australia in a new world order, one described by so many as post-modern? Or is the grand modernist postcolonial project still continuing, as yet unfinished? Theoretical ways of seeing the world are in themselves limited and limiting, and in a state of transitional flux, depending on which pieces of the national psyche you happen to know about at any one time. Image consumers from outside of Australia have an understanding of Australia that is informed by snippets of information subjectively interpreted from a variety of sources that are instantaneous, ephemeral, selective, impressionable, but which may be no less valid than many other.

What make(s) Australia's global image(s) unique? Interpreting this medley of images, three core defining themes are defined around which this discourse of conflicting identities is explored: contemporary images of Australia, images of Australia's past and anti-intellectualism, and Australia's current image as a study, migrant, refugee and tourist destination. A range of competing images are located that confound the identity of this nation. Australia does not yet have the global stature it would like, is not really a global player of significance, but an emergent global 'wannabe' nation, one succeeding in sport but still struggling with its own directions constitutionally, historically, educationally, intellectually, politically and therefore internationally.

Introduction

The images by which Australia presents itself are in conflict with each other, competing for space on TV screens, in tourist brochures and in the minds of its citizens inside and outside of Australia.

What is Australia's place in the world today?

Asking a question about Australia's place in the world today is therefore a complex undertaking, depending on one's cultural point of departure, one's own *Weltanschauung*. Perception is a hydra: perception can be from within or without of Australia, from an economic, political, social or cultural viewpoint. So it is easier to ask a question about how the world sees Australia, because the latter sounds like a preliminary undertaking to answering the former.

Any perceptions are further modified by many surface and deeper understandings, historical, indigenous, gendered, artistic, literary, and so on. What emerges is that Australia's foreign policy is neither global nor international, confined as it is to the protection of itself as an island nation.

How does the world see Australia?

The approach to this question of the image of Australia today in the world is undertaken partly from within and partly from without Australia. The Governments of Hawke and Keating increasingly looked to Asia, while since 1996 Prime Minister Howard stated (over the question of East Timor independence 2000-2001) that "Australia was not part of Asia"¹. Where is Australia oriented in the world today, especially from a global perspective², if it cannot even be part of its immediate surrounding environment, its major trading part-

ners, its geo-physically proximate neighbours?

Australia's place in the world after the resounding success of the Sydney 2000 Olympics and after the celebration of 100 years of Federation is well worth a closer examination. Not because these two occurrences themselves have greatly transformed Australia from whatever it was prior to the new millennium. National identity has always been a fluid phenomenon. There is some debate as to whether the image that is presented to Australia itself and overseas can be crafted or packaged³, or whether it simply is the result of its natural history, or the perceptions of people living overseas, haphazardly composed as that may well be from whatever snippets of incomplete knowledge they happen to possess.

Images Old, Recent and New

The following discussion shows how old, recent and new images of Australia are competing with and against each other for public opinion. Is an image packaged or actual, artificial or real, composed or perceived? Can Australia's image be manufactured, or is it simply the sum total of a country's people, culture and experiences?

If the former, we attribute great significance to Paul Hogan and *Crocodile Dundee I, II and III*. If the latter, then the two mentioned events (Sydney 2000 Olympics and Federation Centenary) are simply influences among many others, beneath which the pulse of the Australian psyche is composed of a multitude of competing, confluent and conflicting influences. How outsiders see Australia depends arguably on what partial or incomplete information they have, such as a bit of its history, a bit of its achievements, a bit about its

geography, a passing acquaintance, a short documentary, the odd article or novel. Image and identity is multi-layered, mirrored and fractured, partly composed as it is of memory, lived knowledge and learned information about that country.

It is left to the reader to judge if the image Australians have of themselves is any better or worse than that of any other nation at this time. The attempt here is to identify key themes in Australian contemporary identity, to observe, not to make culturally evaluative comparisons.

Old Images

Old images of Australia abound as do its icons: past perceptions of Australia as the last and newest continent, as geographically and in other ways isolated, populated by convicts and a few Indigenous Australians with some migrants with heavy accents from southern European countries that were always worse off.

An Australia in which time was slower than elsewhere, where time mattered less, where progress was less important than being relaxed, laconic, self-deprecating, colonizing, male-dominated, sun-loving and beer-drenched. An Australia where mateship and sport reigned supreme, where meat and the colour telly (television), a General Motors Holden car (Australia's first car, it became an icon in successively different models such as the Kingswood, Monaro and Commodore) in the garage and a long weekend in sight was all that really mattered. An Australia where workers were always suspicious of employers, where union membership was a guarantee of a meal ticket, where strikes and sickies were commonplace, where

police were 'pigs' and teachers, bosses and judges, all forms of authority, really, were treated with disdain, suspicion and profound mistrust.

This was an image of Australia still umbilically connected to England, that is, of a predominantly Anglo-Saxon, dominated population which prevaricated between historic allegiance to England an increasing economic necessity to be friendly with America, the corporatism of which was steadily invading Australia. Authors like Donald Horne (*The Lucky Country, Ideas of a Nation, Lucky Country Revisited, God Is an Englishman, The Australian people, Biography of a Nation*) spoke of the abundance, of the land of milk and honey, of opportunity.

The country rode on the proverbial sheep's back, as wool flourished as an export industry when armies around the world during the Cold War needed warm jackets and uniforms, and before cheaper synthetic fleece-based materials became more popular. The export of single natural resources like wool or coal contributed to the success of the economy of Australia, certainly in the first half of the 20th Century. But the same success, because it failed to recognize the importance of globally shifting markets, and because it failed to understand the importance of a diversified economy, was surprised when the proverbial bottom fell out of the global market value for the self-same commodities.

The success of the first 50 years of the 20th century in Australia can be attributed in no small measure to the success of single commodities. The waning of that same success in the second half of the same century can be said to be the result of Australia's inade-

quately realized global role, and furthermore due to a belated recognition of the importance of diversification, research, education and innovation.

Recent Images

The image of Australia as the land of the last pioneering opportunities, a land of alleged equality, where anyone could make it, began to give way under the weight of government favoured and tax avoiding corporatism⁴, the feminist movement of the 1970s and the changing nature of Australian work and life. While there were moments of national equality, such as Medibank⁵, the taxation system in Australia increasingly favoured the rich, and taxed the worker to unprecedented levels¹. This was only marginally offset by the introduction of a 10% Goods and Services (GST) Tax in July 2000. The notion of equality of educational opportunity, a political benchmark in the 1970s, was surrendered in the face of deliberate government policy since 1976 to fund private education, with now in excess of 34% of Australia's children attending private schools, as opposed to 24% only 20 years ago.

These shifts in Australia's self-awareness were captured by authors and social commentators. Donald Horne's tone changed with later books (*Death of the Lucky Country*, *The Public Culture: an argument with the future*, 1994) and Stephen Knight also paints

¹ A simple example: in Australia, an average worker is taxed from 24 to 48% of his/her salary, while in Japan the taxation level varies from prefecture to prefecture, but hovers around 10%.

pictures of an Australia that may not be as glossy as some people had thought (by whom, when?). Knight⁶ described a rampant materialism ahead of an intellectual wealth as a characteristic of much of Australia. Nothing much has changed since he wrote that book, or since Patrick White⁷ spoke similarly about “men, muscle and machines”. White deplored a materialistic Australia that admired sporting prowess, physical strength above intellectual merit, and pursued cars and technology above human insights. Fay Gale and Ian Lowe added their voice to the discourse of public comment in their Boyer lecture of 1991, entitled *Changing Australia*.

Others, like Barry Jones (*Sleepers Wake: Technology and the Future of Work*, 1996) and Hugh McKay (*Turning Point* 1999, *Reinventing Australia*, 1994) chart a changing Australia, an Australia unsure of itself in terms of workplace reform, changing notions of family, career and life priorities. These writers have concentrated on changes within Australia, dictated by the pace of change, the pinches of economic necessity, and just plain technological innovation and social shifts.

A snap shot of contemporary Australia today is documented by Hugh McKay⁸. In summary, he describes three fundamental shifts in recent years:-

1. Lifestyle
2. Atomic family
3. Workplace reforms

McKay writes that the old image of Australians as a sun-loving, easy going, work-shy and relaxed people still holds, although there have been some significant qualifications of late. The way Aus-

tralian work, live and have relationships has undergone fundamental changes. In terms of lifestyle, beer and red meat consumption is down, up is the consumption of fish, chicken and white wine.

He describes the atomic family as smaller than nuclear², as a result of more people choosing divorce and living alone and there being fewer children born per parent than in the post-war period. He argues that the Australian workplace has undergone fundamental reform, as a result of which single long-term employment with one employer is increasingly a feature of the past, and because an emphasis on performance and profits is increasingly pressuring Australian workers, Australians tend to work longer hours (known as “presenteeism”) and even, something relatively unheard of even 20 years ago, take work home. In his book *Generations* (1998), McKay further describes the transitional shifts of value that characterize three generations: the generation that remembers the Second World War and the Korean War, the baby boomers who lived through the Vietnam War, and those born after 1975. These three generations all have markedly different values concerning job security, attitude to careers, money, relationships, life.

1. CONTEMPORARY IMAGES OF AUSTRALIA

Some of the strands of these old and recent images are persisting in the new Australia, the post-Sydney 2000 and post-centenary of Federation Australia. Some of the strands have disappeared, and

² A nuclear family, so termed in the 1950s, was typically made up of two parents and two children.

new ones have been added. In discussing the image packaging, the historically enduring, the migration encumbered and the external perceptions of Australia, it is clear that while Australia changed, as Australia's generations did, so did the rest of the world. The post war baby-boomers who rode on the economic success of the 1960s, 1970s and 1980s are now looking at retirement. Those born after 1970 have different values, are less mortgage-orientated, more reluctant to commit to relationships and more environmentally conscious. Employers and employees are less willing to hold down jobs with the same employer for a lifetime, preferring flexibility, outsourcing and contracts. Today, multi-skilling and lifelong learning is replacing the values that were characteristic of a more easy-going Australian past. Two focus questions emerge:

1. Is Australia able to promote itself positively to the world today?
2. Is Australia keeping up with changes dictated from outside?

Australian culture has many positive features, and these continue to attract curiosity and desire by many international visitors to Australia's shores. However, as the images of Australia have changed over different generations and decades, and as society has changed, so has the focus and pulse of Australian life. The cultural iconography that makes up Australia's image today is composed of competing images and themes:-

- A country where the nature of work has been transformed from a highly unionised workforce to an enterprise bargaining one in which workers' entitlements are becoming increasingly contested⁹.

- A country that, with English as its national language, is extremely well-situated to be a provider of international education, especially to Asia, yet this industry does not manage to attract the funding it needs.
- A country in which generally chauvinistic males worship their mates and sport above their partners has given way to a society in which divorce is high and feminism has had notable successes¹⁰ in the home and the workplace. The rapidity of the social changes has had its price, as suicide especially among young men has become unnaturally high.
- A country with a track record of a high level of social services is cutting back on these as Australians are being asked to fund their retirement, health and education to an increasing extent as the Government is decreasing its responsibilities in these areas in the face of a greying population.
- A country which in terms of female suffrage, workers' rights and the League of Nations had once been a leader, now scoffs at the United Nations when the latter dares to criticize Australia's record on Aboriginal welfare.
- A country which has taken an admirable initiative in East Timor in 2000, yet which wrestles with refugee intakes as if the humanitarian issues were different.

To be clear, here is a description of some of the recent successes in Australia. The Australian economy is healthy. In 1892 Australia and Argentina were placed alongside each other. By 1974 Australia was in the top 15 world economies, but has slipped to near the end of the top 30, according to OECD figures. Australia in terms

of global competitiveness has fared much better than its neighbour New Zealand. Unemployment is not unusually high (7.9% as at April 2002), and the Australian dollar, while not unduly strong, is strengthening Australian exports, especially in agriculture. The up-take of new technology is high in Australian society, with new car manufacture and imports, mobile phones, digital television and DVD, internet and computer technology providing a healthy business environment for Australia. Workplace reforms have meant that Australians are increasingly conscious of performance, work longer hours and are locked into enterprise agreements that place mutual obligations on workers and employers. Tourism to Australia and interest in (inter)national sport is at an all-time high¹¹.

But any balance sheet is two-sided. Australia's ability to position itself globally is hindered by a reluctance, even refusal at times to accept international standards.

- **Education.** Downgrading (by OECD standards compared to other developed nations) its investment in education since 1995, Australia is a country (comparatively speaking) less willing to invest in the future of its own children. Further, Australia remains unwilling to see the fast-growing new industry of the 1990s (full feeing paying overseas students) as worthy of government support and adequate resourcing.
- **Indigenous Australia.** Australia's statistics concerning Aboriginal health, education, employment and housing still are well below internationally accepted standards.
- **Migration.** Its attitude to migration is at best mixed, and the absence of government leadership recently has even seen

Australia break ratified UN conventions concerning refugee intakes¹².

- **Global Position.** This leaves a picture of Australia which is reluctant to assume a forward looking, global place in the world today. It leaves a picture of an internationally immature nation that plays only when the game is played by Australian rules.

The challenge is for Australia to play a more mature role in the world today, and shift its politics to align more with international standards in environmental control, education, its own Indigenous people, refugee management and further tariff removal and open trade. It has the resources to do so, and the capability to ensure greater social justice than it has achieved.

Globalisation and Australia's Image

Globalisation means many things to different people. The term is used here to describe the increased mobility of information (via the internet and the use of computers and mobile phone technology), people and money around the world today. As a result of the accelerated speed and volume of transfer of information, people and goods around the world, there is a widespread perception that national boundaries are less significant than they used to be in the previous century¹³. Globalisation has winners and losers. Australia is both a winner and a loser.

The successful Sydney 2000 Olympic Games are an example of Australia as a winner. The fall in world wool consumption has had a severe impact on rural communities and has been widely interpret-

ed as a loss for Australia in terms of global stakes. Those who think so forget the extent to which Australia did indeed profit from wool in the post-World War II years.

What makes an examination of national identity of particular interest in the new millennium is that this cultural wholeness that constitutes Australia is, like that of other nations, capable of being unravelled as the information rich, borderless (and in that sense global) society is fragmenting any national picture into splinters that are scattered across the globe. Indeed, national identity seems less and less a concept of national sovereignty or political reality and more and more a description of physical location and cultural differences.

The terrorist attack on the World Trade Towers in New York in September 2001 caused fatalities for more than 62 nations, and thus the national identity of the lives lost is felt on a more global scale even than the attack by Japan on Pearl Harbour, where the fatalities were almost exclusively confined to Americans. The incident in New York is used to illustrate the notion that national image is only partly so, as global presences mar the distinct character of any one national identity.

It has been said elsewhere¹⁴ that this is the age of the declining power of national governments, and the corresponding increasing influence of trans-national and international organizations. Among the many factors that are at work in this paradigmatic shift is a popular perception that the primary goal of national governments is to remain in power, not to actually improve society. In the face of increasingly poor management and frequent corruption, an absence

of leadership and ethical integrity, environmental sensitivity or respect for human rights, the role of national governments has decreased, and the interests of minorities are increasingly the concern of international bodies. Examples that come readily to mind are refugees, indigenous people of Australia, women and children. An office of the Commissioner for Children was introduced to the New South Wales Government only in 2001.

Images of identity in the post-modern age are not single, but a mosaic composed of a plurality of meanings, themes and understandings. For the purpose of exploring Australia's identity in the contemporary world, the perspective undertaken here will be that from outside Australia, looking in¹⁵. Thus any examination of multiple identities should identify positive imagery as well as manage to critique the soft underbelly of the same nation's shimmering self. By thematically arranging the many themes that constitute Australia's contemporary identity, manufactured, actual or otherwise, it will be easier to bring the magnifying glass to its composite whole, its image.

To facilitate this process, three discourses are discussed:

- Packaging Australia's image
- Australia's historical image
- Australia's image as a migrant and tourist destination

Packaging Australia's image

Many expatriate Australians or Australians working overseas or choosing to live outside Australia tend to sit in judgement over Australia from a distance, as someone who outgrew Australia,

moved away from it only to vituperate it and chastise it for its shortcomings from afar. In this sense Australia is often judged for its historical immaturity, and its inadequacies in terms of cultural and human rights achievements. To condemn a country for its relative youth is to accuse it unfairly. Such an approach is not helpful, as it only serves to increase the divisions, and arguably ultimately serves to justify the person's departure more than accurately comment on Australia as it is now.

Some examples here will be helpful in illustrating this point. Germaine Greer¹⁶ graduated from Sydney University but has spent the bulk of her life in Europe, toggling between England and Italy among other places. Her contribution to feminism is a matter for the record, yet her infrequent returns to Australia, during which she chastises Australia without reservation, do little other than increase distances of understanding and perception.

Similarly Robert Hughes, art historian and author of a fine history of Australia¹⁷, long-time resident in America, distinguishes himself by a hubris, an arrogance born of the belief that by virtue of his achievements accrued outside of Australia, he can belittle Australia and people choosing to live in Australia. Such comments are indeed of little use when exploring how Australia's identity is perceived.



Figure 1: Paul Hogan in his Crocodile Dundee Series, 1986, 1988, 2001

A second group of comment that is also not considered useful in this discussion is to listen to expatriates such as Mel Gibson, Paul Hogan or Elle Mc Pherson. While their ability to accrue wealth through Hollywood film stardom and modelling is well recognised, their career achievements really do not justify what at best can be described as ill-informed opinion when it comes to their views of Australia. Paul Hogan has succeeded in luring especially many Americans to visit Australia, playing on the understated laconic hero-image that he projects, one which is successful in surviving the 'outback', is successful with women (not unlike James Bond) and whose linguistic expressions and survival skills make him look hero-like. He manages to retain a pseudo-innocence, as he has no aspirations to be worldly. His picaresque success lies in his rejection of customs and understandings other than his own. This imagery is really quite flat in that it has not particularly succeeded in recruiting Asians as tourists to Australia.

Not that different is the group of expatriate business people like Rupert Murdoch or the failed Christopher Skase, who used Australia

to advance their own financial interests, and whose views of Australia were narrowed by a financial rather than anthropomorphic outlook on the world.

A third group whose articulate comments are more worthy of closer consideration is that of writers who have chosen to comment on Australia through their books. Among these are Thomas Keneally¹⁸, Peter Carey¹⁹ and David Malouf²⁰. What characterises these three writers is that they all have lived outside Australia for great stretches of time, but have written within a more anthropomorphic, compassionate view about Australia, both the landscape and the people. And they are contemporaries.



Figure 2: Three literary attestations of current Australian perception: Thomas Keneally, *Flying Hero Class*, Peter Carey, *Jack Maggs* and David Malouf, *The Conversations at Curlow Creek*

Flying Hero Class centres on a tragi-comic figure who thinks he can cut it big time in New York, only to fail for human inadequacies; *Jack Maggs* evokes the English Australian historical and cultural tension and again writes about the convict past and class, as well as

Christian sectarian conflicts; *Conversations at Curlow Creek* explores the psyche of the Scottish and the Aboriginal, this time on Australian soil, while the two previous books are largely set outside of Australia. The three books focus on three dominant images of Australia today:

- That of the Australian picaresque male, be he in business, in sport, overseas.
- The connection between people living in Australia and their ethnic connections outside of Australia, their background or cultural parentage.
- The question of Aboriginal co-existence with non-Aboriginal Australians.

2. IMAGES OF AUSTRALIA'S PAST

Aboriginal Australia

Australia's indigenous people are central to the image of what Australia is. The many tribes and languages that are Australia's Aboriginal people distinguish by ethnicity and culture an Australian identity that is original, unique and non-Western. The number of didgeridoo and indigenous art shops in tourist cities all over Australia attest to the success with which this Aboriginal Australia is marketed to visitors from abroad.

This culture, or these many Aboriginal cultures, can be described as having an intimate relationship with the landscape, with plants and animals that have managed to sustain Aboriginal people for a long time, and with minimal impact on Australia, certainly by comparison with that environmental impact which occurred since

Western settlement.



Figure 3: Advertisement for Qantas Inflight Magazine, July-August, 2001

What this advertisement does not acknowledge, is how Aboriginal people have managed, or failed to manage, to live alongside their colonizers. The history of Aboriginal welfare in Australia is one characterised by genocide²¹ and continuing inequality²² in a number of sectors such as education, health, employment and housing. Acknowledging Aboriginal Australians as essential to Australian identity makes commercial sense and common sense. The caption beneath the advertisement reads: “As one of the world’s first airlines, Qantas has a heritage of which all Australians can be proud. Coupled with this history is a spirit that will forever keep us young at heart”.

The advertisement attempts to unite all Australians (at a time of political division) under the banner of indigenous youthfulness. It

attempts to instil national pride, something not all Australians are willing to do in the face of persistent inequalities among its indigenous people.

At the same time, United Nations reports³ consistently indicate that by world standards the Australian government has been unwilling, reluctant and resistant to take sufficient and adequate steps to ensure greater social equity among all its inhabitants. The inability of Australia and many Australians to accept these criticisms or do something about them has significantly detracted from the overall wholesome and positive image that Australia enjoys abroad.

Australia's Convict Past versus its Migrant History

Australia is the least populated of all populated continents, and its history of colonization is by comparison with other continents is the most recent. Many serious tourists, in the course of their general education, learn how Australia became populated by people England wanted to throw out, for crimes of varying degrees, from 1788. In the reading of Australian history, the use of Australia as a penal colony stands out greatly in the minds of anyone interested in how Australia came to be. Less known are the fact that many chose to migrate to Australia as free settlers, that there are states and territories in Australia that have not experienced convict settlers, and that, in any case, migrants who came to Australia either during

³ United Nations Covenant on the Treatment of Refugees, 1951

the gold rush of the 1850s or thereafter, following cataclysmic world wars, or wars in Asia, came so for entirely different reasons.

The result is an image of Australia as populated by people of a second class quality, who may be unethical, prone to violence, are dishonest, has impressed the world more than the image of an Australia settled by many courageous people who made a new beginning of their lives. The competition of convict Australia with migrant Australia is still unresolved today.

Australian Sport

No discussion of Australian imagery is complete without the mention of the most secular god in Australia, sport. Since the



Figure 4: Ian Thorpe and Cathy Freeman, Olympic Achievers, Sydney Olympics 2000.

Ian Thorpe, (left) Australia, Gold Medallist Holds the Australian flag high on the podium at the Sydney Olympic Games 2000, Men's 400m Freestyle Swimming. Cathy Freeman (right), First Aboriginal to open the Olympic Games, First Aboriginal to win a Gold medal, in the 400 metres, Sydney Olympic Games 2000

establishment and national funding of a national *Australian Institute of Sport* (AIS) by then Prime Minister Malcolm Fraser in the 1970s, (time when Fraser was also known to bring a razor gangs of cuts to public spending, especially its bureaucracy), Australian sportsmen and women have soared to unprecedented heights at the Sydney Olympics 2000.

Clearly the outstanding achievement of these and many other Australians has increased a global perception of Australia as a country climatically and culturally suited to the pursuit and achievement of excellence in sport.

Bronzed Aussies are proud of showing their anatomy in swim wear and these adorn many a travel brochure. This is a most enduring picture of Australia as a land of surf and beach, sun and endless blue skies. Such an image is well deserved, as Australia indeed does boast endless beaches and a mild climate.

The risk in such an image is that it promotes, reflects and shapes hedonism at the expense of examining the inner self; surface over depth. Writers²³ have suggested a reluctance to question the inner self: Australians live on the surface, as long as the sun is up, there is a beer in the fridge, life is looking good. The good life is pursued as the principal objective, and in the process effort, personal challenge are actively avoided as much as possible.



Figure 5: Max Dupain, *Bondi Beach*, 1939

This famous black and white photograph has assumed iconic dimensions. The picture exudes good living, sun, sea, and a raw physicality that derives from worship of those elements. Since this photograph was taken, Australians have arguably become more skin cancer and health conscious than might be suggested by this picture.

The conclusion is that there are two images of Australians' physicality that compete for each other: on the one hand the best that sportsmanship stands for, on the other a hedonism, an adoration of the physical which surpasses and oppresses any achievement of another kind.

Anti-intellectualism

Unfortunately, this achievement in body-based imagery and sporting success has also had its price: anti-intellectualism. The seeds of this were sown early, in that part of Australian history that eschewed anyone achieving greatly. Unless it was a bushranger like Ned Kelly, who was feted as a Robin Hood, as stealing from the rich to give to the poor, who was celebrated as an anti-authoritarian figure, rather than (after the passage of some time and from a distance) as a revolutionary interested in social justice.

The identification with and celebration of the battler, the underdog is one of the core defining principles of Australian culture. The notion of mateship is tied to this. We are mates because we are together in opposing anyone telling us what we should do. Unionism and demarcation disputes²⁴ are also hallmarks of this culture. This culture suggested that change was to be resisted, that an idea was a hostile concept, because it contained the possibility of change.

The ability of Australians to be irreverent and laugh at authority and themselves, to cultivate the physical, to live for the relaxed moment, also has a downside. It means that as a people, Australians don't often take themselves seriously.

Philip Adams wrote²⁵:

'... there is a national tendency to allow our attempt for self-importance to become an excuse for mediocrity, for second best. At some point chiacking⁴ becomes knocking and knocking becomes anti-intellectualism.

Yes, Australia has a long defiant history of anti-authoritarianism, which is generally attributed to a convict past. Add to this the deeper ironies that came with the territory- with the pioneers' experiences of a recalcitrant continent.'

Adams goes on to argue that combining these self-deprecating, defeatist-orientated outlooks on life produced a larrikinism the kind of which has resonated in Henry Lawson's writing, Paul Hogan and even Bob Hawke, our second-longest serving Prime Minister (1983-1992).

The downside of such entrenched pessimism is that you begin to rejoice in defeat, yours and that of others. "We'll all be roo'ned, said Hanraghan".²⁶ Many Australian films have enjoyed celebrating personal defeat, death, in the face of overwhelming odds: *Galipoli*, *Picnic At Hanging Rock*, *Sunday Too Far Away*. Such self-doubt and pessimism, repeated often enough, can override the posi-

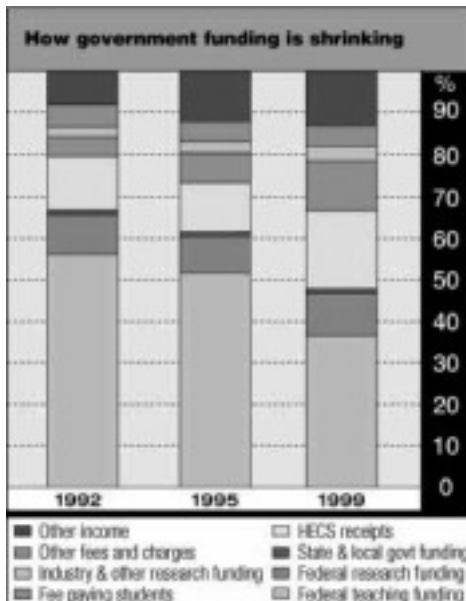
⁴ To jeer.

tive value that irreverence and scepticism have. Australian society cannot afford the luxury of saying 'she'll be right', because it takes effort to address the many hard social issues that characterise Australian society today. One of the most important things a nation can do is invest in its future by investing in the education of its young.

Why has that insight not guided Australian government expenditure of late? It is argued because the acquiescence of an inward-looking pessimism has overwhelmed the desire to believe in education as the key to a nation's future. Cultures that value individual

achievement and success at an intellectual level have been overtaken Australia. Visible examples of this in the last 50 years are South Korea, Italy, Japan, Germany. The Australian Institute of Sport is not really an exception, because that pride is primarily in physical achievement.

Table 1: The Shrinking of Government Funding to Education in Australia,
Source: *The Bulletin*, April 3, 2002



The following Tables 1 & 2 shows that in terms of expenditure on education for a degree program, Australia lags behind European countries like France, Ger-

many England, Sweden and Switzerland, and only marginally ahead of countries such as Ireland, Greece, Hungary and Spain. Unfortunately, the Table does not show figures for Canada and America, but it is believed that Australia is behind those two countries.

This recent table shows how the level of government investment in tertiary education in Australia has shrunk as a national capital investment in the nation's future.

In particular, the investment in federal teaching funding has decreased by more than 30% in the years 1992 to 1999, while the level of state and local government funding has remained virtually unaltered for the same period.

The increased revenue from non-government sources, such as student fees and university generated income, has come at a cost to the infrastructure of the resourcing and teaching in universities in this time, and unquestioningly, a lowering of the quality of the degrees that are subsequently obtained.

Table 2: The Cost Of A Degree²⁷ Cumulative expenditure per student over the average duration of tertiary studies (1998)

Country	AverageCost per degree in Us Dollars	Country	AverageCost per degree in Us Dollars
Australia	29194	Italy ^{2*}	34559
Austria ⁴	72184	Korea ^{4*}	21800
Canada ^{4*}	m	Mexico ⁴	13005
Denmark ⁴	40065	Netherlands ⁴	41951
Finland	45413	Poland*	15685
France ⁴	33830	Spain ⁴	22922
Germany*	46078	Sweden	60928
Greece ^{3*}	21657	Switzerland ^{4*}	60030
Hungary	20545	United Kingdom ^{3*}	34348
Iceland ^{2*}	m		
Ireland*	27610	Country mean	35087

Table 3: Total public expenditure on education (Source: OECD²⁸)

Direct public expenditure on educational institutions plus public subsidies to the private sector (including subsidies for living costs, and other private entities) as a percentage of GDP and as a percentage of total public expenditure, by level of education and year

	Public expenditure ¹ on education as a percentage of GDP			
	1998			1995
	Primary, secondary and post-secondary non-tertiary education	Tertiary education	All levels of education combined	All levels of education combined
OECD countries				
Australia	3.5	1.2	4.8	5.0
Austria	4.0	1.6	6.3	6.5
Belgium	3.5	1.1	5.2	m
Belgium (Fl.)	3.4	1.0	5.0	5.2
Canada	3.7	1.8	5.7	6.5
Czech Republic	2.9	0.8	4.3	4.9
Denmark	4.9	2.2	8.3	7.7
Finland	3.8	2.0	6.2	6.9
France	4.2	1.0	6.0	6.0
Germany	3.0	1.1	4.6	4.7
Greece	2.3	1.1	3.5	2.9
Hungary	2.9	0.9	4.6	5.0
Iceland	4.3	2.2	7.1	m
Ireland	3.3	1.1	4.5	5.1
Italy	3.5	0.8	4.9	4.6
Japan	2.8	0.4	3.5	m
Korea	3.1	0.4	4.1	m
Luxembourg	m	m	m	m
Mexico	3.0	0.8	4.2	4.6
Netherlands	3.1	1.4	4.9	5.0
New Zealand	4.9	1.8	7.2	5.7
Norway	4.6	2.0	7.7	9.1
Poland	3.5	1.2	5.4	5.5
Portugal	4.3	1.0	5.7	5.4
Spain	3.3	0.9	4.5	4.7
Sweden	5.3	2.1	8.0	m
Switzerland	4.1	1.1	5.5	m
Turkey	1.8	0.8	3.0	2.4
United Kingdom	3.4	1.1	4.9	5.2
United States ²	3.4	1.3	5.1	m
Country mean	3.6	1.3	5.3	5.4

Table 3 compares the cost of a degree compared to other countries.

It is clear from this table that the cost of a degree in Australia is significantly less than that of most European Union countries with the exception of Ireland, Spain, Greece and Hungary.

While this table contains some incomplete figures, the statistics nevertheless show several disturbing trends. Overall, many OECD member economies have decreased the expenditure on public education for the period shown. It is brave countries like New Zealand, Portugal, Denmark, Greece, Turkey and Italy that have dared to counter the general trend. Some countries maintained a virtually unchanged level of investment in education, such as France and Germany. However, for the purpose of this paper's argument the public expenditure by Australia on education, never above the OECD country mean in 1995, has fallen further below the OECD country mean by 1998, unlike 13 member countries that remain above the same mean.

No doubt government apologists will point to increased privatisation of education as a good thing²⁹. What cannot be avoided is a recognition of double standards operating in Australia, which in themselves mirror a confusion over the national direction that Australia wants to go in this new century. That is a kind interpretation.

A harsher view, expressed by many Australians in exile and others like the former Governor-General, Sir William Dean, is that Australia lacks political leadership, a vision for Aboriginal reconciliation or a need to educate Australia's next generation. An irreverent image of Australia is competing with the image made by those

Australians who want to take themselves more seriously, but who are prevented from doing so by a collective and government led lack of leadership.

The result is a dumbing down, an avoidance of achievement in the pursuit of hedonism at all cost. The Australian government, too, likes to revel in a “aren't we good” image that avoids looking at the hard questions. As a result, there is too much of a preoccupation with its past, and a lack of attention to the future. The glaring example, and not the only one, is shown that by OECD figures, Australia is the only developed nation that in recent years (1996-2001) has reduced the level of expenditure in education.

By not investing in the next generation, Australia shows a narcissism with its current self that refuses to look outside itself, leave alone see that it successfully competes with other nations in the knowledge stakes. One of Australia's leading revenue earners since 1994 has been full fee-paying international students, predominantly from Asia. Yet so incapable of funding this tertiary education sector has the Australian Government, both federally and by state, been that this sector remains deplorably under-funded and under-resourced, understaffed and under-recognised for its significant contribution to a healthy Australian economy. As a result, many private colleges, mostly foreign-owned, have sprung up to fill the gap that government cannot see.

3. AUSTRALIA AS A MIGRANT, REFUGEE AND TOURIST DESTINATION

How do people living outside Australia see the Australian life-

style? It is true that an outdoor life style, much swimming, open space living still holds as a seductive and pervasive image, especially from the perspective of a crowded Asia or Europe. Australia is further perceived as a relatively successful multicultural or pluralistic society, second only to the US and ahead of England³⁰.

The positive side of this is seen in the ready availability of diverse culinary offerings in most major cities, and religious tolerance as enshrined in the constitution. On the negative side remains the unease with which Australia chooses to refute and disregard United Nations conventions, such as concerning Aboriginal people, or international maritime law concerning Refugees, and the presence of a small but vocal political party called One Nation, that advocates a moratorium on migration.

Many Australians will say that their lifestyle is unique, shaped as it is by a mild climate, and a multicultural society that tolerates many different ethnic identities and religions, that relishes the many different foods that such a society produces. Australians love the outdoors, outdoor sports, the barbeque (BBQ), Australians have a great sense of humour, a laconic and self deprecating sense of themselves, the ability to laugh at everyone including themselves. Altogether a relaxed lifestyle, a working habit in which taking a sickie³¹ is never questioned, and working too hard is frowned upon. Is that Australia today?

Australia for many has become a destination, ever since colonization, or, if you subscribe to the migration theory by which the first Aboriginal people came to Northern Australia, ever since.

The desirability of Australia as a tourist destination is a rela-

tively recent one. To visit Australia in the 1970s as a tourist, the cost of the ticket was more in terms of a person's average income than it is today. In other words, travel has become cheaper. The attractiveness of Australia as a tourist destination has grown, with World Heritage Sites like Kakadu, the Great Barrier Reef, The Blue Mountains of Sydney (2000), Fraser island, Shark Bay, Lord Howe island, Uluru (Ayers Rock), Tasmania and the Daintree tropics of Northern Queensland becoming favoured by visitors.

During the bubble economy of the 1980s, a record number of Japanese visited Australia, and there was even a direct flight from Sapporo Chitose in Hokkaido to Cairns. While the number of Japanese is still large, it has shrunk and other nationals visit Australia from Asia, such as from South Korea and especially since the return of Hong Kong to China, from there. Arguably the longest staying tourists to Australia are backpackers from Europe, Scandinavia and America, who enjoy a working holiday in Australia and slowly make their way around the continent, appreciating the sun, the friendliness and the camaraderie that comes from travelling among likeminded people.

Australia's reputation as a country to visit, study or work in has grown for the following reasons: it is regarded as climactically welcoming for its mild temperatures and open-air living. Compared to the US, Australia is relatively secure, and, relative to England, Canada or the US, has a lower cost of living. Finally, especially for Asians, it is closer than Europe or North America. Europeans or North Americans who come to Australia also enjoy stopping over in parts of Asia on their way, adding a further benefit to choosing

Australia as a tourist destination.

The desirability of Australia as a destination for the purpose of migration was a mere trickle all the way up to World War Two. But the post-war period saw an exponential increase in at first mostly European settlers, first by boat and then, in the 1970s, by plane. Since the Vietnam War (1964-1975), the number of Asian migrants began to increase also, so that by 2000 6 out of 10 families that migrate to Australia are in fact of Asian descent.

The Pacific Solution

This term was coined by Immigration Minister Ruddock and Prime Minister Howard as a way of not accepting refugees to Australia, preferring in the first instance to send illegal arrivals (at Australian government expense) to neighbouring pacific countries like Papua New Guinea, Nauru and Fiji, and, in the first half of 2002, to try and send these self-same refugees to perhaps more tolerant and accepting countries like Norway, Ireland and other members of the European Union.

In September 2001 a Norwegian ship called the *Tampa* picked up 438 people (mostly refugees from Afghanistan) who were taken from a sinking Indonesian ship not far from Christmas Island³². At this point there have been about 9,530 unauthorised arrivals in Australia on about 135 boats since July 1, 1999³³. Another newspaper³⁴ reported that in the last five years, that is, between March 1996 and September 2001, some 10,000 potential refugees arrived on Australia's shores and that most of these had been processed as legitimate refugees with the exception of about 1800 that had failed

the refugee test. Given that newspapers had been reporting considerable unrest in Australian refugee detention centres or holding camps around Australia, the truth is probably somewhere between these three news sources.

One interesting feature of the heated public debate surrounds the language with which to refer to people landing by boat. Since the events of the Vietnam War (1964-1975), people travelling by boat wanting to seek asylum in Australia have been referred to as 'boat people'. That is an accurate term, although there is a connotation in the use of the words that implies a certain class of person, namely desperate and trying by any means to make a new life for themselves. In the wake of the war in Asia, such refugees were accepted by Australia. As were, in 1989, Australian residence granted to some 10,000 Chinese when the events in Tienamen Square made a return for these people look less and less attractive.

Yet the language for boat people has deteriorated. Often heard is the phrase 'queue jumpers', indicating that people arriving by boat and claiming emergency assistance on humanitarian grounds held a less legitimate claim to being processed as a refugee or potential claimant than people who had arrived by more conventional means, aircraft, and who had obtained a preliminary visa (eg tourist) before attempting to convert their status.

Australia has absorbed 5.7 million migrants in the last 50 years, including about 500,000 refugees, an impressive record by any nation's standard³⁵. So how is it that the arrival of the Tampa caused the Prime Minister of Australia to try and legislate to exclude this small group of refugees from landing and from availing

themselves of the due process of migration law congruent with UNHCR Covenants?

On the one hand, Howard can be understood if he thinks the image of Australia is that of “a soft touch”. It is true that information sources are indicating that many more attempts will be made to arrive on the shores of Australia from many parts of the world. Australia is not alone in its efforts to stem the tide of what may be illegal immigrants, as Britain is facing similar onslaughts onto its shores from migrants from Eastern Europe and beyond.

The irony is that many migrants who were the beneficiaries of Australian residence permits and citizenship in the wave of migration that occurred in the 1960s and 1970s are the ones praising Mr Howard.

Australia’s attempts to change the rules, to change the law so that it can do what it likes within its territoriality, is in direct contravention of civil liberties and UNHCR conventions that it claims to hold dear. When Kofi Annan³⁶ criticized the Australian Government in June 2000 for its record on Indigenous Affairs, the same Prime Minister told him to mind his own business.

Germany’s *Deutsche Welle*³⁷ described Howard’s action of refusing refugees on the Tampa to land on Australian soil as “damaging its international reputation and standing”.

So the image of Australia as a human rights respecting, refugee accepting country with an outstanding record for a multicultural acceptance of many ethnicities and tolerant of religious freedom has now suffered by its refusal to take boat people and process them under the laws of Australia. In fact, the image of Australia as a

migration friendly country³⁸ is competing with an image of Australia pulling up the draw-bridge, a fortress Australia.

The hasty readiness with which Prime Minister Howard offered military assistance to President Bush to meet terrorism in Afghanistan contrasts sharply, contradictorily, with his refusal to accept refugees from that country on boats that aimed for Australia's shores in 2001 but were variously diverted from Christmas Island to New Guinea, New Zealand and Nauru, all at taxpayers' considerable expense.

Conclusion

This discussion has shown that the images by which Australia presents itself are in conflict with each other, competing for space on the TV screens, in tourist brochures and in the minds of its citizens inside and outside of Australia. One could say that a nation that is struggling with its identity is engaged in a healthy struggle. But as with any struggle, there is a competition of value, of perception, of ways in which you believe a culture is situated.

The struggle is over the very things that have preoccupied many emerging nations:-

- Which values to champion, and which to downplay (sport or intellect)
- Which sectors of its economy to fund, and which to starve (education, defence, health)
- Which laws to legislate and uphold, and which to ignore (national laws, Un covenants)
- To respect or leave its Indigenous people to themselves

- To open or close its borders, to orient itself to Asia, Europe, America or all
- To become more independent or to continue and develop exiting allegiances
- To become a republic or to stay as a constitutional monarchy
- To work towards a more equitable society or to accept current inequalities

The pendulum is swinging, between pragmatists, idealists, conservatives, progressives, humanitarians, and globalists, nationalists, parochialists, internationalists, reactionaries and others. In the period under instruction, other countries have grown or shrunk in stature. Australia has that same opportunity. Whether it will, and how, only time will decide.

The elections held in November 2001 saw a return of the Liberal Party and Prime Minister Howard to Government. Prior to September 2001 the Labor party was widely polled to win the election on policies that included, as stated above, a pathway to reconciliation, Knowledge Nation, and a 'roll-back' on the GST (Goods and Services Tax).

It became clear to most commentators in the wake of the election result that the election had been hijacked by the arrival of refugee ships in September and the events of September 11 in New York. Few saw the hypocrisy of refusing refugees (partly from Afghanistan) while simultaneously promising President Bush Australian military aid to Afghanistan. Even fewer see the decline in public investment in education as a threat to the country's future.

Clearly, Mr Howard's policy of sending Refugees to Nauru, with

a population of 10,000 and 21 square kilometres of land mass, instead of allowing them to land in Australia, with a population of 19 million and a land mass 7.7 million square kilometres, appealed to the voting public. Mr Howard fuelled a fear, almost xenophobic, of foreign hordes landing on the shores of 'this wide brown land' (Dorothy MacKellar) to the point that he had little hesitation to ignore Australia's signature on the 1951 United Nations resolution on the treatment of refugees. This brought Australia much international criticism, of which only two samples are cited by way of concluding this discussion of the image of Australia. UN Secretary Kofi Annan and the UN High Commissioner for Refugees, Ruud Lubbers, at the occasion of the 50th anniversary in Geneva of UN efforts to resettle refugees.

"If all countries lived up to their obligations [under the UN Resolution on Refugees] there would be no problem of burden sharing"

And from abroad a letter was published in Australian newspapers, and signed by 137 expatriate graduates that stated:

"As ambassadors for our country, we have found it difficult to justify to our overseas colleagues the Australian government's decisions."³⁹

This leaves two conclusions: that in the short term pressing exterritorial issues - refugees and international terrorism- are distracting Australia and Australians from paying attention to, or even wanting to improve, their image at home or abroad. Unresolved, simmering issues are the decreasing level of public funding to education, the absence of any attempt at reconciliation with Australia's

Aboriginal population, and the continuing disadvantages of minority groups such as women, the unemployed and the elderly.

The other conclusion is that the poor international image that Australia has as it enters 2002 is such that it will need to be attended to if Australians want to rightfully participate as equals in the global community, if Australia wants to be taken seriously in international terms.

Postscript.

The laws that the Australian Federal Parliament enacted so as to determine illegality in anyone landing in Australian territorial waters and islands are successively called

- The Migration Legislation-Amendment (Judicial Review) Act, 1998
- The Border Protection (Validation and Endorsement) Act 2001
- The Migration Amendment (Exclusion from Migration Zone) Act 2001
- The Migration Amendment (Excision from Migration Zone) (Consequential Provisions) Act 2001
- The Migration Legislation Amendment Act (IVO. 6) 2001

The purpose of these acts is for Australia to pretend to be an ostrich or Emu, with its head in the sand, and pretend that nothing is happening, no boatloads of people are arriving, and if they do, Australia thinks it is legally entitled to ship them on to other nations (The Pacific Solution), and in any case, to determine illegality in the arrivals. While the problem of how to deal with arriving boat

people needs to be addressed, doing so in this manner is ridiculous. In fact, as this article goes to press, the Australian Government is seriously considering including Tasmania and New Zealand among the islands deemed as illegal points of arrival. Why not include the Opera House, Ayers Rock, the Great Barrier reef and the Great Australian Bight as well, while the legislators are at it. Then march on the suburbs, the airports, railway stations, milk bars, churches, schools and old people's homes.

The only conclusion that is possible in this discussion is that it will be inevitable that further boatloads of people will attempt to land on or near Australia in an attempt to live in Australia. There may be a hiatus because of the monsoon season in South East Asia, but the boats will continue to arrive. For Australia to pursue such a single handed isolationist policy in violation of its obligations under the refugee Convention lessens Australia in the eyes of many Australians, certainly in the eyes of many expatriate Australians such as myself, and certainly in the eyes of anyone interest in human treatment of asylum seekers and refugees. How can Australians, many of whom are indeed first generation migrants themselves, expect a lesser standard to apply to new arrivals than was accorded to them?

The answer is not by legislation which is retroactive and retrospective and exclusionist, but by Department of Immigration guidelines of processing applications for visas which are by agreed international standards, which are speedy, which are humane and which are, above all, fair. For a country that prides itself in giving people a 'fair go', Australia has certainly not shown itself doing so of late.

Australia's global self is in jeopardy. A country with great potential is turning in on itself, and backwards on itself, and is at risk of losing its vision, the vision by which the Constitution was founded in 1901, and which aimed at equality of opportunity.

Endnotes

Dr. Michael Kindler is Foundation Professor in the Faculty of Intercultural Studies at Tomakomai Komazawa University since 1999.

- ¹ The Japan Times of November 1999 summed up the previous Prime Minister of Australia, Paul Keating as a pro-Asian leader and the current Prime Minister, John Howard as anti, greatly confounding some members of the Australian embassy who were anxious to present a more positive image of Australia to Japan. In fact, the newspaper's perception was succinct and accurate.
- ² Rupert Murdoch the media magnate suggested in a lecture he gave in October 2001 in Adelaide that unless Australia invested more in the education of its young, it was risking 'global irrelevance'.
- ³ The Australian Broadcasting Commission showed a series of programs in August 2001 called *Selling Australia*, which looked at the way tourism was being promoted or encouraged. The programs were shallow as they only focussed on visitor perceptions and visual rather social or intellectual dimensions of what it means to be Australian.
- ⁴ Kerry Packer, Rupert Murdoch, Renee Rivkin, Kerry Stokes and others are seen as the corporate survivors, while others, like Warwick Fairfax, Robert Maxwell, Alan Bond and Christopher Skase are seen as con-men who are derided by the Australian public for their exploitative tactics.
- ⁵ A national health scheme that was meant to be equal for all when it was conceived in 1975, it today consists of Medicare and Medibank Private, along with other, more expensive private health schemes.
- ⁶ *The selling of the Australian mind: from first fleet to third Mercedes*
- ⁷ Patrick White, (1989). 'A Sense of Integrity', in P. Brennan and Christine Flynn (eds), *Patrick White Speaks*, Sydney, Primavera, 189 ff, Marr, David (1991). *Patrick White, A Life*, Sydney, Random Century Australia
- ⁸ Hugh McKay, *Turning Point, Australians Choosing their Future*, Sydney, Macmillan, 1999, *Reinventing Australia*, 1994, *Generations*, 1998
- ⁹ Ansett Australia's workers are a case in point where the Government and Air New Zealand and the New Zealand Government are each disputing their obligations. In the event, the company folded, as did many other airline companies like Sabena and Swissair.
- ¹⁰ Females are outperforming males at secondary education exit level as well as in

many tertiary courses, 1989-2001.

- ¹¹ After the 2000 Olympics it was realized that only full time professional sportspeople can achieve the necessary international success. Sport is being seen more as a specialized commercial pursuit than an enjoyable pastime for the larger population. This has brought about a subsequent lowering of public attendance at sporting venues, as the metaphoric centrality of sport to Australian life is increasingly questioned, or viewed from the comfort of the passive television armchair.
- ¹² See later discussion
- ¹³ It is possible in 2001 to pass through European countries without needing to show a passport, as happened to me in March. Japan has relaxed a visa requirement for short term visitors.
- ¹⁴ Michael Kindler, *Today, how is a Minority Perceived by a Majority? Emerging Cultural Pluralism for Australia's Aboriginal People*, Tomakomai, 2001
- ¹⁵ The author discloses that he came to Australia as a migrant from Switzerland in 1967, completed his secondary and tertiary education in Australia, worked for more than 25 years in Sydney before choosing to work in Japan since 1999. He continues to regularly visit Australia, and is motivated by a love of the country, although not an unqualified one.
- ¹⁶ Author of the *Female Eunuch*, 1974, *The Change: Women, Aging and the Menopause* 1993, *The Obstacle Race: The Fortunes of Women Painters and Their Work*, 2001, *The Madwoman's Underclothes: Essays and Occasional Writings*, 1990, and other titles.
- ¹⁷ *The Fatal Shore*, 1989, *Nothing if not Critica* 1993,
- ¹⁸ *Victim of the Aurora*, Jimmy Blacksmith,
- ¹⁹ *Oscar and Lucinda* (Booker Prize Winner, 1988), *The True History of the Kelly Gang* (Booker Prize Winner, 2001)
- ²⁰ *Conversations at Curlow Creek, Johnno, Harland's Half Acre*
- ²¹ Henry Reynolds, Colin Tatz
- ²² Aboriginal and Torres Strait Islander Commission (ATSIC), Fact Sheets, Canberra, 2001
- ²³ See further on when discussing contemporary Australian writing
- ²⁴ A demarcation dispute arises in Australian work practice if a worker considers that the task/she is asked to do falls outside their job description. These disputes were common in the 1970s and 1980s, but became rarer as enterprise agreements were introduced that regulated work more in exchange for wage rises.
- ²⁵ *The Weekend Australian*, August 25-26, 2001, page R 28
- ²⁶ Henry Lawson. Roo'ned = ruined
- ²⁷ <http://www.oecd.org/EN/document/0,,EN-document-604-5-no-1-22129-604,00.html>
- ²⁸ <http://www.oecd.org/EN/document/0,,EN-document-604-5-no-1-22129-604,00.html>
- ²⁹ The newly appointed Australian Ambassador to Japan, John Mc Carthy, said to me in January 2002 that it was increasingly government policy for research centres like the Australia Japan Research Centre at the Australian National University to become self-funding. He did not appear to be aware of his own publicly funded position when saying this. He was further most ambivalent over the success or

failure of the Koizumi-Howard Japan Australia New Trade Agreement to be signed in May 2002. This anecdote serves to illustrate that there are two standards, one for public servants, and another for publicly funded university teachers, who once, not so long ago, were seen as having comparable working conditions. Not any more. Performance bonuses are being paid to commonwealth public servants irrespective of actual performance, while the career ceiling and financial remuneration of university teachers' are increasingly eroding. The price of such a policy is unenlightened government, and short-sighted gain.

- ³⁰ The North of the United Kingdom saw some race riots only in July 2001, and the US in Los Angeles in 1995. While Australia has never had racial unrests on such a scale, it is true that pockets of ethnic tension have been experienced among people of Aboriginal, East European, Middle Eastern and occasionally Asiatic origin. These unrests are due either to economic inequalities or politically held beliefs, or both.
- ³¹ a day off work, either because you are sick or because you just wanted a day off work.
- ³² In Oslo in June 2002, the UNHCR chief and Norway's Queen Sonja presented the Nansen Refugee prize as part of celebrations for World Refugee Day to the owner and crew of the Tampa. The award was given in the hope that it might encourage all individuals to contribute in their private capacity to improve the well-being of asylum seekers and refugees.
- ³³ Gerard Henderson, *How foreign policy turned on Howard* (SMH, 4/9/2001)
- ³⁴ The Australian, August 30, 2001
- ³⁵ Paul Kelly, *We of Never Never Land*, Weekend Australian, Sept 8-9, 2001
- ³⁶ United Nations Secretary General in Darwin on the occasion of thanking Australia for its involvement in East Timor Peace keeping efforts, 2001
- ³⁷ News Broadcast of September 4, 2001
- ³⁸ Australia is often cited after America as accepting the most number of migrants in post World War Two global history.
- ³⁹ Peter Goodall, John Howard Gets But A Brief Respite, in the Japan Times, December 19, 2001

(マイケル キンドラー・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

植民地下フィジーの自治行政制度

— フィジー人行政 (Fijian Administration) の構造と機能 —

“Fijian Administration” in Colonial Fiji

— Its Structure and Function —

東 裕
Yutaka HIGASHI

キーワード：植民地、間接統治、オセアニア政治、フィジー、自治行政

要旨

1874年の主権委譲から1970年の独立まで、フィジーは英国の間接統治下におかれる。英国により「フィジー人行政」(Fijian Administration)制度が創設され、伝統的なフィジー人の地域政治単位の上に全国規模の自治行政制度を確立し、間接統治の効率化とフィジー人の伝統的生活様式の維持が図られた。こんにち、1997年憲法においても、この植民地当時のフィジー人行政制度に由来する制度が定められ、フィジー人の伝統的利益保護の仕組みとして、フィジー人行政制度は依然として重要な意味を持っている。そこで、本稿では植民地下のフィジー人行政制度の構造と機能を紹介し、今日のフィジー人行政及びフィジー政治を考える手がかりとする。

はじめに

1874年10月10日にフィジーの主島ビティ・レヴ島のレヴカ (Levuka) において、フィジーの酋長達とイギリスの間で「割譲証書」(The Deed of Cession of Fiji to Great Britain 10 October 1874) の調印が行われ、フィジーは英領植民地となった。以後、1970年の独立まで96年間、フィジーはイギリスによる間接統治の下におかれる。イギリスはフィジー統治のために、「フィジー人行政」(Fijian Administration) 制度を創設し、伝統的なフィジー人の地域政治単位の上に全国規模の自治行政制度の確立を試みた。間接統治の効率化とフィジー人の伝統的生活様式を維持することにその目的があった。

「フィジー人行政」(Fijian Administration) は、「フィジー人に関する事項」(Fijian Affaires) に責任を有する政府部門の一つであった。その長は「フィジー人担当長官」(Secretary for Fijian Affairs) で、同長官は行政評議会および立法評議会のメンバーでもあり、フィジー人関係の行政に対し、大臣と同等の責任を有した。長官はフィジー人担当省 (Fijian Affairs Board) の長であり、その業務の中でも重要なのは「フィジー人法令」(Fijian Regulation) の制定で、この法令によって村社会もフィジー人社会全体も規制され指導された⁽¹⁾。

こんにち、1997年憲法においても、この植民地当時の制度に由来する制度が定められ、フィジー人にとってはその伝統的利益保護の仕組みとしての特別なフィジー人行政制度は依然として重要な意味を持っている。そこで、本稿では、植民地下のフィジー人行政制度について、その構造と機能を紹介し、今日のフィジー人行政を考えるよすがとしたい。

1. 行政機構の変遷

(1) 1876年原住民関係令下の行政機構

フィジー割譲後、割譲証書に署名したロビンソン卿 (Sir Hercules Robinson) によって暫定政府が設置され、卿自ら総督となった。フィジー全土は4つの地方 (region) に分けられ、その地方がさらに12の州 (province) に分割され、各州にロコ (Roko) と呼ばれる州の首長 (Provincial Chief) が配された。さらにロコの下には、ブリ (Buli) とよばれる18の郡首長 (district chief) がおかれた。こうして、フィジー人行政の地域区分が行われ、この上にフィジー人行政が築かれることになる。

割譲翌年の1875年6月、フィジー人行政制度を確立することになるゴードン卿 (Sir Arthur Gordon) が総督としてフィジーに赴任する。ゴードン卿はそれまでに、フィジーと状況が似た英領植民地トリニダードやモーリシャスで総督の経験があり、そこでの経験をフィジーでも生かし、原住民の権利を保護する姿勢を強く打ち出した⁽²⁾。

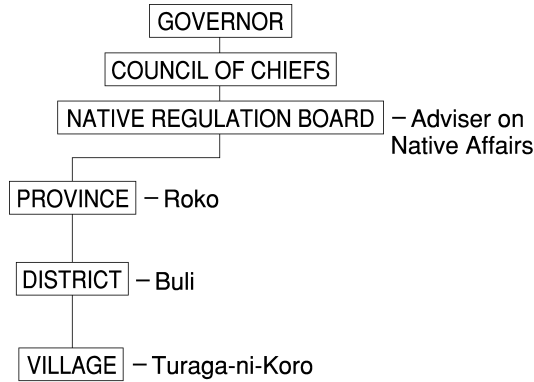
当時、「原住民政策」について二つの対立する見解があった。第一の見解は、フィジー人は西洋文明の基準に従って支配されるべきだという考え方で、主に植民者及び植民地フィジーに経済上の利益を有する者によって支持された。西洋化されれば、ヨーロッパ流の土地の個人所有の考え方に倣って、フィジー人共同保有地が分割され流動化すると見込まれたからである。第二の見解は、フィジー人は彼らの先祖の習慣と伝統に従って支配されるべきだという考え方で、これがゴードンの考えであった。フィジー人は自分たちの政府への参加を促進されるべきであり、かつ植民地フィジーの行政においては既存の階級制をはじめとするフィジー人の伝統的諸制度を利用する、というのが彼の確信であった⁽³⁾。

1876年には「原住民関係令」(Native Affairs Ordinance)が制定され、これによってフィジー人行政制度(The Fijian Administration)が基礎付けられた。これは、フィジー人に関係する諸事項を組織する手段として考案された制度で、フィジー人に自らに関係する行政事項の一端を担う役割を与えるという崇高な意図(noble idea)の下に考案されたものであった。しかしながら、その現実には、財政的に必要に迫られてのものであり、かつ政府の中にフィジー人の参加を促すという原則は、明らかにフィジー人自身の固有利益の承認と擁護を意味していた⁽⁴⁾。

行政区分としては、全国が12の州(province)に分割され、その行政の責任者として伝統的なスタイルによるロコ(Roko: the Fijian administrative official in charge of a province)が任命された。それがさらに郡(district)に分割され、その責任者としてブリ(Buli: administrative head of district)がおかれた。さらに、その下の村(village)にはトゥーランガ・ニ・コロ(Turaga ni Koro: the Government representative in the village or village headman)と呼ばれる村長が任命された。こうした行政区分は、ほぼ伝統的な政治単位に密着したもので、任命される行政責任者も、トゥーランガ・ニ・コロを除き、その地域を管轄区とする高位の酋長が任命された⁽⁵⁾。さらに、こうした自治行政組織の上に原住民規制局(Native Regulation Board)がおかれ、原住民担当顧問(Adviser on Native Affairs)が責任者として配され、さらにフィジー全体を代表する酋長評議会(Council of Chiefs)、そして総督(Governor)へと至るピラミッド型のフィジー人行政機構が組織された(図1)。

酋長評議会と原住民規制局はフィジーに関する法(law)を制定し、これらの法は法廷でフィジー人の裁判官によって適用された。また、土地の所有に関する共同体システムが1880年の原住民土地令(Native Lands Ordinance)によって確立された。こうしてゴードンが基礎を築

(図1) 原住民関係令(1876年)下のフィジー人行政組織



Administration under the Native Affairs Ordinance, 1876

出所: *Fiji in the Pacific*, 4th ed., p.41.

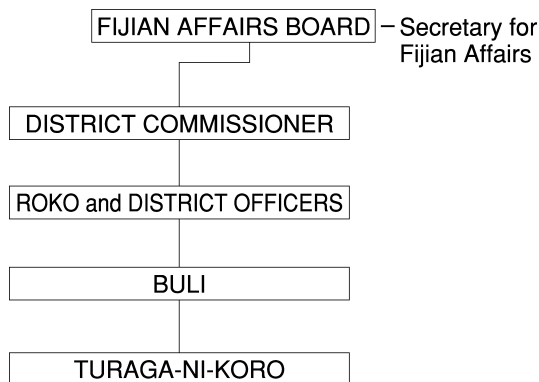
いた原住民行政システムは、その後幾度かの変更を経験しながら1970年代まで続いた⁽⁶⁾。

(2) 1945年フィジー人関係令下の行政機構

ゴードン総督による創設以来、約70年間にわたって運用されてきた1876年原住民令下のフィジー人行政制度は、20世紀半ばに至り時代に適応するためのシステム再編が必要になった。そのため、1945年に新しいフィジー人関係令が施行され、フィジー人関係担当者の名称が、原住民担当顧問(Adviser on Native Affairs)からフィジー人担当長官(Secretary for Fijian Affairs)に変更された。原住民規制局(Native Regulation Board)に代わってフィジー人担当省(Fijian Affairs Board)が設置され、総督の直轄下に置かれることになった(図2)。

北部、南部、及び東部の3つの地方(district)が形成され、それぞれがヨーロッパ人の地方長官(European District Commissioner)の

(図2) フィジー人関係令(1945年)下のフィジー人行政組織



Administration under the Fijian Affairs
Ordinance, 1945

出所: *Fiji in the Pacific*, 4th ed., p.42.

下に置かれた。地方長官を補佐するため、13の州をそれぞれ担当するロコ、通常はヨーロッパ人である地方担当官(District Officer)、それぞれのチキナ(Tikina)を担当するブリ、及び村におけるトゥーランガ・ニ・コロに至る組織が形成された。こうして、フィジー人担当長官からトゥーランガ・ニ・コロに至る責任系統が明確に確立された⁽⁷⁾。

1944年から45年に至るフィジー人行政制度の再編に当たって中心となったのが、フィジー人のラツ・ラ・スクナ(Ratu Sir Lalabalavu Sukuna)⁽⁸⁾であった。スクナは、酋長や政府の公務員を訓練し、民主社会においてその役割を果たせるようにすることがフィジー人行政の目的であると信じていた。一方、彼はフィジー人社会の伝統を固く信じ、フィジー人の民主的発展がなされるとすれば、そこにはフィジー人の生活様式の変化が必然的に伴うことを自覚していたが、その変化は緩やかなものであるべきだと考えていた。このような彼の考えは当時のミッチェル総督(Sir Philip Mitchell)にも支持され、1945年に創

設されたフィジー人担当長官に、スクナが初代長官として就任した⁽⁹⁾。

1945年から1966年にかけて、フィジー人の生活様式は急速に変化し、それに伴ういっそうの近代化が必要とされるようになった。スクナの狙いは、フィジー人をゆっくりとデモクラシーに向かわせることにあったが、その過程は期待したようには進行しなかった。その原因は酋長の権威に対するフィジー人の伝統的敬意にあり、この少数の伝統的支配者の手中に多くの行政権が残されたままであった。

その一方では、教育の機会に恵まれるようになった多くのフィジー人や、村を離れて都市に住むようになったフィジー人は、村の影響から逃れるようになった。フィジー人はスポーツ団体など様々な民間団体に活発に活動するようになり、そうした団体運営の中でフィジー人行政の外にある民主的統治過程を学ぶようになっていった。こうした生活の変化を背景に、地域から離れて都市に居住するフィジー人は、州議会 (Provincial Council) や酋長評議会 (Council of Chiefs) に代表を要求するようになった。さらに、立法評議会 (Legislative Council) のフィジー人議員は、酋長会議によって任命されるのではなく選挙によって選出されるべきだと要求した⁽¹⁰⁾。

こうしたなか、1956年から1960年にかけて、フィジー人の生活様式とフィジー人行政についていくつかの調査が実施された。その報告が、マクドゥガル (R. S. McDougal, 1956)、スペイト (Spate, 1958)、ワード (Ward, 1958)、及びベルショウ (Belshaw, 1958) によって相次いで公刊された。1960年のアラン・バーンズ卿 (Sir Alan Burns) のバーンズ委員会調査報告書では、フィジー行政の変革については、土地所有権と並んで、権利、移民、及び農業発展の重要性が示唆され、とりわけ重要な報告であるとされる。また、フィジー人の人類学者であるナヤザカロウ (Nayacakalou) も、1960年にフィジー人のリーダーシップと行政についての実地調査を実施している。こうしたこの時期に実施

された調査・研究の報告書は、一様に改革の必要を勧告していた⁽¹¹⁾。

さらに、1960年から1963年の間にフィジー人は立法評議会議員の選挙権を獲得し、女性に選挙権が付与されるという大きな憲法上の変化があった。1967年には州議会（Provincial Council）は初めて一般選挙によって選出されたが、それぞれの議会に2名の任命による議員（通常は法律家と会計士）が助言者として残された。地域は人口に従って再編成され、それとともに、古いチキナ議会（Tikina Council）は消滅し、ブリもまたなくなった。ロコは残り、その任務がアシスタント・ロコによって補助されるようになり、アシスタント・ロコの人数は地域の規模と行政の困難さによって決められた⁽¹²⁾。

1970年の新憲法採択後、フィジー人担当省は、長たるフィジー人担当大臣、国会のフィジー人議員の中から選ばれた8名の議員、酋長評議会から任命された2名、及び選挙によらない大臣任命による法律並びに会計助言者によって構成されることとなった。

このような行政の運用には、当然、資金を必要とした。議会によって立案される諸計画の実施、公務員給与の支払い、及び事務所の運営などの経費で、この資金を獲得するため、一人当たりを基準に地代が徴収された。必要な金額が成人男子によって負担され、村々はその地代を居住する成人男子の数に応じて支払った（～1967年）⁽¹³⁾。

2. 各行政機関の構成

(1) フィジー人担当省（The Fijian Affairs Board）

フィジー人担当省は、立法評議会（Legislative Council）、酋長会議（Council of Chiefs）、及び行政評議会（Executive Council）の3機関をつなぐ役割を期待された。フィジー人担当省の任務はフィジー人の利益について総督に助言を行い、総督から付託される事項について検討す

ることであった。同省は、一般にフィジー人の生活の全局面に関係する立法（1948年以降はフィジー人関係令（Fijian Affairs Regulations）と呼ばれた）を行った。これらの法令（regulations）はフィジー行政を執行するための規範を定立し、イギリス刑法では犯罪とされないが、フィジー人の慣習に反するが故に犯罪とされる行為について刑罰を定めた⁽¹⁴⁾。

フィジー人担当省は、立法評議会議員をその構成員の一部とするなど、国家の最高レベルの合議体の一つとしてフィジー人の政治的代表の枠組みを提供するものであったが、それはフィジーにおけるフィジー人のみを対象とする社会的・政治的及び経済的行政組織であり、ヨーロッパ系、インド系、及びその他の国民を対象とするものではなかった。この組織の重要な側面は、フィジー人の古来の慣習と伝統に沿った仕事を行うこと、すなわち、伝統文化の枠組みの中で機能することを目的としたものであるという点にあった⁽¹⁵⁾。

植民地フィジーにおけるイギリスによる間接統治下で、フィジー人行政組織は、フィジー及びフィジー人の「発展」を目指す植民地政府の政策を実行するために伝統的リーダーシップを活用し、かつ、その制度の永続的な成功を確保するために伝統秩序を保持することを目指すものであった⁽¹⁶⁾。

(2) 酋長評議会（The Council of Chiefs）

酋長評議会はゴードン総督時代から存在し、1945年に再組織された。構成は次のようになっていた⁽¹⁷⁾。

- ① フィジー人担当長官（Secretary for Fijian Affairs）（議長）
- ② 14州のロコ（Roko of fourteen provinces）
- ③ 各州1名の代表（one representative from each province）（人口1万人以上の州からは各2名）

- ④ フィジー人裁判官 (Fijian magistrate) [1名]
- ⑤ フィジー人開業医 (Fijian medical practitioner) [1名]
- ⑥ 総督任命の酋長 (chief) [6名]
- ⑦ 教師 [1名] (後に追加)

評議会の任務はフィジー人のために勧告と提案を行い、フィジー人に関係する事項に助言を与えることであった。少なくとも2年に1回の開催が要求されていた。評議会は純粹の諮問機関で、フィジー人担当省が法令を制定し施行する権限を有したのに対し、酋長評議会はフィジー人に関係する事項について意見を述べることができるだけであったが、その意見はつねに敬意を持って傾聴された⁽¹⁸⁾。

(3) 州議会 (The Provincial Councils) とロコ (Roko)

州議会の任務は各地域におけるフィジー行政業務を実施することで、その構成は次の通りであった⁽¹⁹⁾。

- ① フィジー人担当長官 (Secretary for Fijian Affairs) (議長)
- ② 郡コミッショナー (District Commissioner)
- ③ ロコ (Roko)
- ④ 郡担当官 (District Officer)
- ⑤ 土地保有者 [5名]
- ⑥ フィジー人裁判官 (Fijian magistrate)
- ⑦ 医務官 (medical officer)
- ⑧ ブリ (Buli)
- ⑨ 各チキナ代表 (representatives from each Tikina) [3名]

議会は、フィジー人法令を施行し、各州の土地保有者から州税を徴収するための条例を制定し、その税を州の共通利益のために支出することができた。

州における行政の長がロコ (Roko) である。ブリの行政構造が伝統

的首長制度に密接に関係していたのに対し、ロコはその地位に就任する要件が幾分かは自由で、むしろフィジー人行政における地域機関として機能した。必ずしも酋長身分に属することが要件ではなかったが、ロコの大半は酋長であり、そうでない場合もその地域においてすでに権威を持っている人物が任命されるのが慣例となっていた。13人のロコのうち9人が酋長身分に属し、うち7人がその州における高位の酋長身分の者であった。残り4人だけが平民であり、この4人のロコはその地域の酋長に従属はしなかったが、通例、酋長と良好な関係を保つために全力を尽くした。ロコがその地域の酋長である場合には、地元の酋長階層との関係は通常良好であり、その行政上の地位は明らかにその伝統的な地位によって補強された。しかし、酋長であれ平民であれ、ロコはその職務を執行するための必要な訓練と物理的手段を有し、その地位はブリのそれよりもはるかに恵まれたものであった⁽²⁰⁾。

ロコは、その管轄区域におけるブリの活動を監督し調整したが、それ以外にも多くの責任を有していた。例えば、州の資金管理及び支払い責任を持ち、フィジー人法令 (Fijian Regulations) の遵守を監視し、また、酋長会議の職務上当然の構成員であり、地方のほとんどの各種委員会の構成員でもあった。こうして、ロコは、一般に州の社会経済生活を担当した。そのため、ロコはフィジー人行政とその他政府部門の地方における第一の接点であり、その責任はブリのそれよりもはるかに大きなものであった⁽²¹⁾。

(4) チキナ (郡) 議会 (The Tikina Councils) とブリ (Buli)

チキナ議会は人々が最も直接にかかわる機関で、次のメンバーで構成されていた⁽²²⁾。

- ① ブリ (Buli)
- ② チキナの酋長達によって選ばれた酋長 (chiefs elected by the

Tikina chiefs) [3名]

- ③ フィジー人裁判官 (Fijian magistrate)
- ④ 医務官 (medical officer)
- ⑤ トゥーランガ・ニ・コロ (Turanga-ni-Koro) [3名]
- ⑥ 各村の代表 (representative from each village) [1名]
- ⑦ チキナの現場補佐官 (field assistants of the Tikina)

この議会は、チキナのすべての住民が従わなければならない命令 (order) を制定し、州議会によって指示された共同体業務計画を作成することができた。チキナにあってはブリ (Buli) が行政の長であったが、その地位はトゥーランガ・ニ・コロとはおおいに異なり、行政管理者 (administrator) としての性格が明確であった。ブリはロコの推薦によりフィジー人行政当局によって任命され、通例そのチキナの高位の酋長が就任した。平民の任用も可能ではあったが、1960年までにブリに任命された平民は4人だけであった⁽²³⁾。

ブリは、そのチキナで徴税を行い、様々な情報 (出生と死亡の記録など) を収集し、それをロコに渡し、フィジー人規制の違反者をチキナ裁判所や州裁判所に訴追し、チキナ議회를主宰し、一般に管轄区域内の村を監視する責任を持っていた。村に対する監視責任は、広範かつ細部に及び、村の学校・給水・住宅・衛生の維持や畑の植え付け、そして踊りや集会の規制までがその中に含まれた⁽²⁴⁾。

また、近代的な指導者として、経済発展計画を主導し、住民と諸問題を討議し必要に応じて助言を行い、自作農を奨励し、企業活動を行う者を助成するために州から資金を獲得することを住民から期待された。しかし、これらの事項について、特別な訓練を受けたわけでもなく、資金の裏付けもなく、行政上の任務が制限され、しかもかなり限定的であったため、住民の期待に応えるには限界があった。ここにフィジー人行政の基本的な問題があった。すなわち、ブリは指導者 (leader) となるこ

とが期待されながら、実際には行政官 (administrator) 以上のものになることができなかった。それでも、実際にはブリがロコの担当業務の多くを行い、村とフィジー行政をつなぐ主たる役割を果たした⁽²⁵⁾。

(5) 村議会 (The Village Council) とトゥーランガ・ニ・コロ (Turaga-ni-Koro)

村議会は、すべての村民によって構成され、多くの村に存在したが、法令によって定められた機関ではなく、その管轄権は村の中に限られていた。しかしながら、村での生活においては多大の影響力を持った。村においては、伝統的首長である村長 (village chief)、行政上の首長であるトゥーランガ・ニ・コロ (village headman)、及び宗教指導者 (village pastor) という3つのリーダーシップが存在した⁽²⁶⁾。

伝統的首長たる村長は、伝統に由来する権力を行使し、村民の福祉のために村民の代表として決定を行う全権を有していた。それゆえ、伝統的村長は村における真の指導者であったが、これに対し、トゥーランガ・ニ・コロはたんなる行政上の代理人 (agent) にすぎない地位にあった。その背景には法令に基づく権力を有していたが、その地位は、村及び伝統的村長の代理人であった。村議会によって任命され、村がその給与を負担したが、その上級行政庁であるブリがつねにその法令の執行について監視していた。

村民がトゥーランガ・ニ・コロの命に従わないときは、違反者を訴追することが職務であったが、違反者が同族のものとなつては気の進まない仕事であった。そのためトゥーランガ・ニ・コロの職は不人気であり、頼まれるといやといえないイエスマンがその職に就いた。伝統的村長に対する村民の忠誠心は、法令の代理人に過ぎないトゥーランガ・ニ・コロへのそれを上まわり、トゥーランガ・ニ・コロは伝統的村長に密着して職務を行わなければならなかった⁽²⁷⁾。

理論上は、村の慣習に関することは伝統的村長、行政に関することはトゥーランガ・ニ・コロという責任分担ができていた。伝統的村長は純粹に習慣的な事項を執り行い、慣習的儀式を主宰し、そのことを通じて村落共同体の統合を実現すると同時に他の村からの敬意を獲得した。そして伝統的な敬意とその執り行う儀式の神聖性を通じて、伝統的村長は村の秩序維持に重要な役割を占めていた。これに対し、トゥーランガ・ニ・コロは行政命令の処理を担当し、その地位と制裁権の根拠となっているフィジー人法令 (Fijian Regulation) において、住宅建設・村の除草・村の道路の保守・村の清掃、その他直接村民の福祉に関連する事柄、並びに郡や州全体のかかわる広範な事項がその職務とされていた。しかし、住宅建設・除草などについても慣習事項として、伝統的村長が本来の職務である純粹な慣習事項を超えてその権限を行使し、村議会も伝統的首長が主宰した⁽²⁸⁾。

このように、通常、トゥーランガ・ニ・コロは完全に伝統的村長の陰に隠れ、その存在意義が疑問視されたが、かわって伝統的村長が行政機構の中に位置づけられることはなかった。トゥーランガ・ニ・コロの地位に威信がなく、その責任が煩わしく、そのうえ報酬も微々たるものであったからである。さらに重要なことは、伝統的村長にあっては、トゥーランガ・ニ・コロになることはたんなる法令の代理人、すなわち公僕に成り下がることを意味したからであった。また、その地位に就き外からの指令に従うことは、伝統的村長の權威に服従する村民と敵対する可能性をもった不快な仕事に巻き込まれる可能性があったからでもある。

このような理由により、ほとんどの村ではトゥーランガ・ニ・コロは、伝統的村長と分離され、通常その村の有能な平民がその地位に当たり、酋長が務めることはめったになかった⁽²⁹⁾。

3. 結びに代えて

植民地下におけるフィジー人行政機構を概観した。すでに述べたように、フィジー人行政は、イギリスによる間接統治の効率化とフィジー人の伝統制度の維持という二つの大きな目的の下に導入されたものであった。この当初の目的はおよそ実現されたものと考えられるが、この制度の導入直後に予期しなかった状況の変化が起きる。それは、フィジー人行政の基礎を築いたゴードン総督によって1879年に開始された、サトウキビ農場での労働力としてのインド人年季労働者の移入である。1916年にインド政府が移民を禁止するまで37年間の移民総数はおよそ6万人に達し、そのうちの4万人あまりが年季労働契約期限が切れた後、フィジーに定住する道を選んだ。その後、インド人人口は拡大を続け1945年までにフィジー人人口を上まわるようになった。そして、こんにち約80万人のフィジー人口の約4割を占めている。

このインド人コミュニティの拡大が、その後のフィジーにおける最大の政治・経済・社会的課題となったことはいうまでもない。その顕著な現れが、1987年と2000年に起きた原住民フィジー人の政治的権利の優位の保障を求めたクーデタである。1987年のクーデタ後に制定された1990年憲法には伝統的行政制度の一つである大酋長会議が憲法上の機関として位置づけられ(第3条)、いったんは破棄され再びその効力を認められた現行の1997年憲法においても「フィジー人関係法(Fijian Affairs Act)の下に設置された大酋長会議は存続し……」(116条)として、その存在が承認されている。この他にも、1997年憲法で「フィジアンとロトゥマンが、その分離された行政システム(their separate administrative systems)を通じて統治する権利」(6条(d)項)が保障されているのも、植民地下のフィジー人行政の流れをくむものであろう。こうした伝統的権利保障は、とりわけ対インド人コミュニ

ティーへのフィジー人の伝統的権利・利益の主張であることは暗黙かつ公知の前提であり、それが国家的にはアフーマティブ・アクションとして正当性を与えられることになっている（6条(b)・(j)・(k)項⁽³⁰⁾）。

間接統治による植民地フィジーで導入されたフィジー人行政制度は、こうして民族問題の発生・展開とともに、当初の目的以上にフィジー人の伝統的権利や制度を保護する機構として機能するようになったものと見られる。そして、100年以上にわたる歴史を経て、この制度の保障自体もまた一つの伝統となり、その維持がフィジー人の既得権と考えられるようになってきているように見える。その意味で、今日、フィジーの政治・行政を考察するに当たって、植民地下のフィジー人自治行政制度について再確認しておくことも、意義あることであろう。本稿に続き、独立後のフィジー人行政の考察が課題となる。

注

- (1) R. R. Nayacakalou, *Leadership in Fiji*, University of the South Pacific, Suva, Fiji, 1975 (Reprinted, 1992), pp.83-4.
- (2) Terrence A Donnelly, *Fiji in the Pacific, 4th ed.*, Jacaranda Wiley Ltd., 1994, p. 39. Stephanie Lawson, *The Failure of democratic Politics in Fiji*, Oxford University Press, 1991, pp.60-61.
- (3) *Ibid.*, p.41. ゴードン卿はパターンリスティックな考えを確固として持った人物で、フィジー人の慣習や土地所有権が、他の植民地のどこでもあったようにヨーロッパ人の企業家によって侵されることを危惧し、それを防止するためのフィジー人の伝統的制度の保障を制度化したものである。(Stephanie Lawson, *Tradition versus democracy in the South Pacific: Fiji, Tonga, and Western Samoa*, Cambridge University Press, 1996, p.45.)
- (4) Nayacakalou, *Ibid.*, p.83. Lawson, *The Failure of democratic Politics in Fiji*, p. 63.
- (5) *Op. cit.* R. R. Nayacakalou, *Tradition and Change in The Fijian Village*, South Pacific Social Sciences Association, 1978, p.140, p.145, p.147. A. Capell (Compiled by), *A New Fijian Dictionary*, Government Printer, Suva, Fiji, 1991. フィジー語では、provinceが *yasana* (ヤサナ)、districtが *tikina* (チキナ)、villageが *koro* (コロ) で、チキナはフィジー人の伝統的な政治単位でもある。(Ropate R. Qalo, *Divided We Stand: Local Government in Fiji*, University of the South Pacific, 1984, p.36.)
- (6) Donnelly, *ibid.*, p.41.
- (7) *Ibid.*, p.42. 1945年には、ロコが13人、ブリが181人いた。(Qalo, *Ibid.*, pp.36-7)

- (8) ラトゥ・スクナは、フィジーの高位の酋長で、英国留学・フランス外人部隊入隊による第一次大戦への参加の経験をもつフィジーの英雄。1946年にフィジー人担当省の長官に就任。(橋本和也『キリスト教と植民地経験—フィジーにおける多元的世界観』、人文書院、1996年、84頁)
- (9) Donnelly, *ibid.*, p.43.
- (10) *Ibid.*, p.44.
- (11) *Op. cit.*
- (12) Donnelly, *Ibid.*, p.44-5.
- (13) *Ibid.*, p.45.
- (14) *Ibid.*, p.42.
- (15) Nayacakalou, *Leadership in Fiji*, p.84.
- (16) *Ibid.*, pp.84-5.
- (17) Donnelly, *ibid.*, p.42.
- (18) *Ibid.*, p.43.
- (19) *Op. cit.*
- (20) Nayacakalou, *Leadership in Fiji*, pp.89-90.
- (21) *Ibid.*, p.90.
- (22) Donnelly, *ibid.*, p.43.
- (23) Nayacakalou, *Leadership in Fiji*, pp.89.
- (24) *Op. cit.*
- (25) *Loc. cit.*
- (26) *Ibid.*, p.85.
- (27) *Ibid.*, p.86.
- (28) *Op. cit.*
- (29) *Ibid.*, p.87.
- (30) 東 裕「フィジー諸島共和国憲法(1997年)における人権と原住民の権利」、『苫小牧駒澤大学紀要第2号』、1999年、pp.76-7。

参考文献

- Brij V Lal, *Broken Waves: a history of the Fiji Islands in twentieth century*, University of Hawaii Press, 1992.
- R. A. Derrick, *A History of Fiji, Volume one*, Colony of Fiji at Government Press, Suva, 1946 (Reprinted, 1974).

(ひがし ゆたか・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)
Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

ヴィクトリア朝時代の知識人に見られる見識と国際感覚

— ザ・グラフィック紙の復刻版を通読して —

Some Outstanding Outlooks and Views of
the Intelligentsia in the Victorian Era
— From the Graphic in 1869~1870 —

谷村善通

Yoshimichi TANIMURA

キーワード：ロンドン、ザ・グラフィック、庶民の暮らし、救貧院、
ザ・グラフィック・アメリカ

要旨

19世紀ヴィクトリア女王治世期は産業革命の成熟と世界覇権をかけた大英帝国繁栄の絶頂期であった。しかし光の裏側には筆舌しがたい陰の暗部がイギリスの大都市を覆っていた。何百万という飢餓線上の人々は巷に溢れ、特にロンドンのイーストエンドでは、至る所にゴミ、汚物の山、腐肉をあさる人々の群、日夜を問わず酔っぱらい歩く男女の姿が見られ、あらゆる犯罪と売春の温床であった。

当時の週刊紙ザ・グラフィックは、彼らの日常の多くを語っているわけではないが、時折イラスト付きで彼らの現状を紹介し、紳士・淑女に警鐘を鳴らしている。

そのいくつかをここで取り上げ、他の文献も参照しながら、当時の世相、特に貧民の生活に光をあてる。

I はじめに

当時の世相をイラストで紹介する高級紙ザ・グラフィックの復刻版が1999年「本の友社」より出版された。第1巻は720頁からなり、1869年12月4日号から1870年6月25日号までの30週分が収録されている。興味を引くイラスト記事を60ほど、イラストのない記事を120あまり通読して、ほぼグラフィック紙の読者層と質の高さが判明した。記事の内容から購読の対象は上流階級と推定された。中流階級を含むとすれば、中の上あたりであろう。教養的な文章であれ、国の内外のニュースであれ、比喩、直喩、仮定法が多く、しかもふんだんにラテン語、ギリシャ語、フランス語が使用されているので、中流の有産階級の人々にとっては読みづらいものであったと思われるからである。

内容を紹介しよう。24頁からなるこのタブロイド版の週刊紙はその紙名が示すように、ページ大のエッチングを主流とする大小のイラストを2頁おきに、見開き2頁ずつ、計11頁分（表紙1頁を含む）掲載している。そのほとんどは、国内外を問わず刻々報道される最新の大きな出来事の光景や、各界の行事、それに係わる中心人物の肖像などで占められている。光景には必ず人物を配しており、淑女、特に盛装した美しい女性達が多く描かれ、それぞれ場面にふさわしい動きをしている。イラストに関する記事には出来事の詳細と共に場面や人物の表情・姿に対して克明にして客観的な描写を行っている。私に取り上げた貧しい人々の絵も数少ないが描かれており、当時過酷な日々を強いられていた状況が窺えた。美術展の作品を除き、各イラストのエッチングは極めて写実的ではあるが、美術的に価値の高いものと推測される。

記事は報道の客観性、正確性を重んじているが、その語調、論調にはブリテン人の誇り高き姿勢が貫かれている。特にフランス人に対する対抗意識は露骨である。これは世界最強国であり、世界の富を独占するヴィクトリア時代のブリテン人有識者共通の姿勢であったろうと思われ

る。

表紙を飾るのは、時の人、時の出来事などが多いが、記事を読むと興味本位のものではなく、分析的で啓蒙度の高い教養記事になっている。例えば145頁、1870年1月15日号では、「ハンティング」を扱い、頁全面のイラストには古い城壁跡に猟犬を従えた馬上の紳士達が勢揃いし、狐狩りに向かおうとしている。中央に珍しく一女性の馬上姿があった。記事（抜粋）には次の様な描写がある。

A Meet at Kenilworth All that is to be said for or against hunting has been said so much better by Mrs. Freeman..., that it is useless to touch here upon the merits or demerits of the cause which... I said advisedly “not a superfluous lady,” in the face of the fact that there is a lady on a colossal horse in the middle of the picture.

.....

The presence of ladies gives a refinement and grace to the hunting-field; but most fastidious people prefer that these adjuncts be added by those with whom they have no concern at all. And this, not because there is the slightest touch of hardness or cruelty in the feeling of exhilaration which..., but because of the promiscuous nature of the affair. The liberty, equality, and fraternity of the field may re-act unpleasantly.

「狩の場に女性がいることは品の良さや雅の観を与えるが、きむずかしい紳士達にとっては、そういうことは、自分達と無関係であって欲しいものだと思う。自由とか、平等とか、友愛などといものが猟場に混入し、不愉快さを与えかねないからである。」

これは、一例にすぎないが、当時のイギリス紳士の高邁と偏見が見事に表されており、興味深い記事である。

毎号に載る記事を列挙してみると、News of the Week (or Chronicle)、By the Bye、Sporting (Notes)、Theatres (Playing, Opera Songs)、Music、Fashions、Arts、Literature、Books、Law and Justice、Parliament、Religious Events、Current Topics (People, Affairs, Events, Accidents, Ceremonies, Gossips) などである。記事の種類だけでも高級感がある。

さて、今回、試みようとする小論は、華やかな上流階級の暮らしとは裏腹に、餓死を避けるために一夜の宿を浮浪者収容所に求める下層階級の人々、貧しさから逃れ、圧迫から逃れ、新世界に移住しようとする人々の姿をグラフィック紙のイラストと記事からピックアップし、当時の知識人が彼らをどう眺めかつ考えていたかを追ってみたい。題材の性格上暗い話題が中心となるがご寛容願いたい。

II 救貧法の成立、改正、救貧院の設置

第2次世界大戦終結後まもなくイギリスの救貧法が廃止された。ホームレスにとって誠に残酷なこの法は実に400年の命を永らえたのである。救貧法はチューダー王朝に入り、絶対王政の進行に伴い一連の法制定となって現れてくるが、エリザベス救貧法 (Poor Law) はそれらの救貧法の完備した形で1601年に制定された。制定を推進させた要因は、毛織物業の発展によるエンクロージャー、ヘンリー八世の修道院解体命令などによる封建的農奴制の崩壊であった。追放された農民や解雇された修道僧、及び修道院の召使いたちはその多くが貧民、浮浪者に落ちぶれていった。その数は日増しに増大の一途をたどった。しかし彼らのなかには頑丈な貧民達が多く存在した。彼らは労働意欲を持っているのに職を持とうとせず、口を糊するためには、いつでも強盗や無法者に変身

できた。事実犯罪は増大し、ロンドンは無法地帯と言われるほどであった。エリザベス救貧法はこれらの貧民に強制的な就労を義務づけるものであった。

その後、居住制限法、労役場テスト法、ギルバート法、スピーナムランド法などの導入を経て救貧法は改善されていったが、ヴィクトリア時代に入り、チャドウィックの調査委員会報告書に基づき 1834 年に新救貧法が施行された。この制度によって初めて救貧院施設が設けられた。イラスト「家無き飢えたるひとびと」を解説したグラフィック紙の記事に次のような英文が載っているので、おそらく新救貧法に基づいて、「浮浪貧民救済法」が成立し、救貧院（臨時宿泊所）設置の運びとなったものと推察される。

They are some of the homeless poor for whom Refuges are supported by the charitable, and on whose behalf Mr. Charles Villiers, when President of the Poor Act Board, brought forth the measure known as the Houseless Poor Act.

この文言から、浮浪貧民には臨時宿泊所が与えられるが、その法的根拠は、この施設を支援する慈善団体の一員で、救貧法審議委員会の委員長が推進して成立させた「浮浪貧民救済法」にあると言える。この法案によってホームレスたちは一夜の宿と食べ物を保障されることになった。

Before it became law, they would have slept on the strip of pavement by the workhouse of St. Martin-in-fields, or burrowed beneath the dark arches of the Adelphi, or looked out separately for some door step with a covered porch, where they would have remained until morning, or until they were

moved on by the constable on his rounds.

法施行以前には、彼らは夜露をしのぐねぐらを街中の路上や公園の暗がり、人の家の戸口などに求め、運が悪ければ警邏の巡査にねぐらを追い立てられる様子が窺える。

しかし、臨時宿泊所 (Refuges) も決してホームレスにとって好ましい宿泊所ではなかった。好ましいどころか、過酷な労働奉仕と、極めて粗末で少量の食事しか与えられなかったのである。あとで食事の内容や労役奉仕について述べるが、聞けば胸の痛む思いがする。ケロウ・チェズニーの「ザ・ヴィクトリアン・アンダーワールド」の一節 (翻訳) を引用しよう。

「1834年の〈新救貧法〉——名高い「ヴィクトリア朝精神を示す不可欠の証拠」——が数多くの人々の人生に暗い影を投じた事実は変わらない。〈新救貧法〉は人々に恐怖を抱かせるべく目論まれた過酷な法律であり、たとえ呑気さ、温情主義、臆病さ、キリスト教的慈愛、その他数多くの理由・原因からその過酷さが軽減されたとしても、法律の条項は、それを実施する任に当たっている者が残忍で卑劣であれば曲解され、過酷さはさらに増大し、情け容赦のない残忍な行為を生むところとなった。」

「救貧院に収容されている貧民の生活状態を、一般の労働者よりも『望ましくない』——これはお役所の言い回しであるが——ようにしておくことが必要であった。」

つまり〈新救貧法〉は健康な浮浪者を路上から追放する代わりに、一夜だけの食と宿を与え、早く何らかの職 (過酷で低賃金) に就かせようとするものであった。その背景には、節約と勤勉を美德とし、貧困は自ら

のふしだらにあるとし、施設は怠け者に労働の習慣を身につけさせ、再起を促す効果がある、さらに産業革命の成果がめざましく、労働力が慢性的に不足していたので、新法によって労働の移動がしやすく、安価な労働力が得やすくなるとの為政者の意図があった。

III 家無き飢えたる人々

グラフィック紙の創刊号に載った木版画『家無き飢えたるひとびと』は一夜の宿と食事を得るために交番前に集まっている光景である。



HOUSELESS AND HUNGRY

このイラストが、いろいろ文献に当たっているうちに大変有名な作品であることを知った。復刻版を出版するにあたって監修の松村昌家氏が別冊解説で「家無き飢えたひとびと」のスケッチが文豪のディッケンズや画家のゴッホに感銘を与え、その後グラフィック誌と関わりをもったことに言及しておられる。新潮社から出ている「ヴィクトリア万華鏡」

のなかでは、このイラストを描いたルーク・ファイルズが実際に絵の現場を目撃してスケッチした時期や経緯が語られており、ディッケンズ好みの絵であること、ゴッホがグラフィック紙の挿絵の熱心な蒐集家であり、特にこの絵の載っているグラフィック紙を後年入手したことを弟レオに手紙で報告している。

このイラストに関するグラフィック紙の記事は、そのほとんどを画面の人物の描写に充てている。ルーク・ファイルズが描いたのが1863年、グラフィック紙に掲載されたのが1869年である。約6年の歳月が過ぎているが、記者の記述は個々のひとびとの個人的事情に通じている。おそらくルークが記録していたものが下地になっていると推測される。

The figures in the picture before us are portraits of real people who received the necessary order for admission on a recent evening, and whose names and last sleeping-place are all entered in the police-books. They have nothing in common except hunger, destitution, and rags, and are fair types of the classes who drift into our casual wards night after night.

この臨時宿泊所に来る飢えた人々は共通してぼろをまとった文無しであるが、まあまあという階級にいたと思われる連中も紛れ込んでくる。

1. The poor woman with a baby in her arms, and a ragged boy and woebegone girl running at her side, is the wife of a dock labourer who is now undergoing three weeks' imprisonment for assaulting her..... Her case serves to explain the unwillingness to prosecute, so often observed among wives who have been brutally

ill-used, and which is sometimes commented on as inexplicable.

画面の左手にいる赤子を抱いた女性と傍らの男女の子供2人は家族である。夫は港湾労働者であるが、彼女に暴力を振るったかどで3週間の刑務所入りをしている。しかし、家賃の滞納、店のつけがたまり、夫が刑務所入りをしたのを機会に家を追い出された。記者は彼女の事例を引いて、一般に虐待されても夫を訴えない妻の多いことを述べている。つまり夫の刑務所入りは家族が路頭に迷うことを意味しているからであると。このことは当時におけるイギリス女性の地位の低さが、下層階級で一段と悲惨な状況を生みだしていたことを物語っている。

画面中央の両手をポケットに入れた中年の男について、興味深い記事がある。グラフィック紙にとっては、上流階級の人々に話題を提供するに格好の人物であり、記者にとっては知的な健筆をふるう絶好の対象であったろうと思われる。

The middle-aged man with the bulbous nose, and the quasi-respectable air, who rears himself against the wall and keeps his hands firmly in his trousers-pockets, — with a half-humorous air of philosophic resignation; this man is a character. It is unnecessary to say he has seen better days, or that he has sacrificed comfort and position to drink. There is a rich huskiness in his voice, and a twinkle in his bleary eyes, which speak forcibly of tap-room eloquence and pot-house celebrity. Out cast as he is, this casual pauper is a keen politician, and will denounce the perfidy of ministers, and proclaim the decadence of England to any one who will listen.

Supply him with gratuitous drink, and he will fawn upon you,..... abuse you; telling all the while of the shameful conspiracies of which he has been the victim, and how impossible it is in this effete old country for a man of genuine talent to rise, or hold his own.

男はかつてりっぱな紳士の暮らしをしていたようである。酒におぼれお定まりの没落の過程を経て臨時宿泊所の世話になっているが、飲むとなかなかの弁舌家である。政治を批判し、世相を嘆く。一杯の振るまい酒で、お追従や悪態をつくが、陰謀の犠牲のために現在の境遇になったという身の上話や、こんな駄目なイギリスでは本当に才能のある人は世に出ることも、身を維持することもできないと慨嘆する。

パッセージの中で下線を施した英語は、見応えのある語句で詩的であると同時に一連の対象語をきわだたせて人物像を明確化している。rich — huskiness、a twinkle — his bleary eyes、tap-room — eloquence、pot-house — celebrity、shameful conspiracy — the victim、effete old country — genuine talent など形容詞の使い方が巧みである。記者の知的レベルの高さを示す証左となろう。

記者は画面の人物の全員について語っているが、一人一人その複雑にして多様な底辺の事情を明らかにしている。物心がつくかつかないかで母親に去られ、スラム街で育った少年、犯罪人になった息子に少ない有り金をむしり取られた老人、未熟練工で病気のために職を失った夫とその妻子達の明日に光が差すわけではないが、それぞれ臨時宿泊所で一夜を明かしたあと、かすかな期待と希望をもってこのロンドンを離れることになる。定職のない少年にはチェスター練習船の新入りが薦められかも知れない。記事の最後のパッセージでは、宿泊許可のチケットをもらった彼らが臨時宿泊所に入ったことが報告されている。着衣は脱がさ

れ、ホットオーブンに入れられ、寄生虫が除去される。代わりに清潔な寝間着が与えられる。夕食に厚切りのパン、一杯のかゆがでる。朝食はパンと水。朝食後一定の労役を果たし、放免される。これが当時の一泊貧民の実体であった。

以上がグラフィック紙に載った「家無き飢えたひとびと」の報道であるが、他の文献によると食事の粗末さや、朝の労役のつらさなどは、このグラフィック誌の記述よりさらに劣悪なものであった。ケロウ・チェズニーのヴィクトリア朝の下層社会やメイヒューのロンドン貧民調査によるとパンは、6オンス(170グラム)のものが1個、スキリー(オートミールの薄いかゆ)が3パインツ、パンの代わりは粗悪なジャガイモなどであった。パンは乾いたものと報告されている。朝の労役はまいはだ作り、拭き掃除、石割りなどであった。まいはだ作りや石割りは体力のない飢えた人々、特に病気がちな人や女性にはつらい仕事であった。

IV ザ・グラフィック・アメリカ

ザ・グラフィック・アメリカはグラフィック紙の記者とイラスト画家の二人が移民を運ぶ大西洋汽船に同乗してリヴァプールからニューヨークまで、さらに上陸してニューヨークを始め、ボストンその他の移民に関係の深い土地を取材した特集記事である。第1報は1869年の第14号(3月5日発行)に載り、その後11週にわたり毎週掲載され、第24号(5月14日発行)まで続く。しかし特集はこれで終了したわけではなく、数週間後に続編が掲載される旨の予告が出ている。しかし復刻版第1巻には収録されていない。

創刊第3号(前年の12月18日発行)では特派員の記事に先だって、おそらく主筆の手によるものであろうか、Leaving Old England「祖国を去って」と題して、出航直前の移民船のイラストとともに一文が載せられてある。同船した記者の文章体と異なり、かなり教養や知識のレベル

の高い表現が多いところから、主筆か、それに近い老練記者の記事と判断した。2ヶ月後に特集記事が組まれたことから考えて、おそらくこの記事がその火付け役になったのではないかと推測される。その関連性も考慮に入れず・グラフィック・アメリカを取り上げるに当たって私はこの記事の特集の序文として扱うことにした。

1. 各週の特集記事の日付と内容項目

- (1) December 18, 1869 Leaving Old England
アメリカ移民の状況とその未来
- (2) March 5, 1870 On the Atlantic Steamer 出航の様子
- (3) March 12, 1870 On the Atlantic Steamer (Continued)
船酔いとクインズタウン寄港
- (4) March 19, 1870 In Mid Ocean 船客達の様子
- (5) March 26, 1870 Arrival at New York 上陸直前直後
- (6) April 2, 1870 The New York Streets ブロードウェイ、
ウォール街、アメリカ人のお祭り騒ぎ
- (7) April 9, 1870 The New York Streets (Continued)
アイルランド人移民
- (8) April 16 The New York Streets (Continued)
ニューヨークのホテル、床屋
- (9) April 23 The New York Streets (Continued)
ニューヨークの郵便局、速歩競争
- (10) April 30 Boston ボストン:宇宙の中心
- (11) May 7 Boston (Continued), The Shakers
ボストン賛歌、移民したシェーカーズ
- (12) May 14 The Shakers (Continued)
シェーカーズの日々の暮らし

上記の特集記事のすべてを要約して当時の移民の実体を述べるのが目的ではない。ヴィクトリア朝の光と影の「影」、特に貧民移民およびアメリカ人の動向が、有産階級であり知的階級でもあるグラフィック紙記者の目にどう映じていたか、どのような言葉で表現していたかに着目していきたい。

2. 祖国をあとに〔Leaving Old England〕

主筆と見られるこの文作成の記者は、まずイラストに描かれた移民の船出の様子は主なる出口港であるロンドン埠頭、グレイヴセンド、サザンプトン、プリマウス、リバプールによく見かける光景であることを伝えている。彼はイラストに描かれている甲板やロープ上の人々で特徴のある人物にいろいろな思いを馳せている。その中でアメリカへの移住が何を意味しているか、また有産階級で、海外に流刑となった人を家族が波止場に見送るシーンと思い比べながら彼らの未来に何が待ち受けているのかを書いている。

Those men, women, and children, who are clinging to the shrouds, or gazing earnestly over the bulwarks, are going down to the Underworld, as the Poet-Laureate styles it, disappearing as completely from the portion of the earth which we, the spectators, inhabit, as if the planks of the deck on which they stand were the planks of a scaffold, and the ropes dangling about their heads the instruments of execution.

下線部に強調される語句は極端すぎるほどである。アメリカ行きは黄泉の国に行くことであり、この世から消えることを意味している。

また彼らが踏んでいる甲板の板は死刑執行場の踏み板であり、頭のあ

たりにぶら下がっているロープは死刑執行の首吊り縄であると。当時の知識人には、貧民のアメリカ行きは、究極の身の破滅としか映らなかったのであろうか。



Leaving Old England

The more wealthy classes of community have their sorrows, I know full well, when they stand on the pier at Southampton waving their farewells to husbands, sons, daughters, brothers, and sisters, bound for India; but their cup of grief is sweetened with one drop of consolation; they hope, in all cases, to see their exiles at home again. Whereas, in the case of the humbler emigrants bound for America or Australia, such hopes can seldom be reasonably entertained.

ここでも、記者の目には、アメリカやオーストラリアに移住するために乗船していく貧民達の姿に将来の希望はほとんどないと映っている。これらの貧民に向けた一連の厳しい論調はなにもこの筆者に限るものではない。それはグラフィック紙が困窮者達を扱うどの記事にも共通している論調であり、有産階級の人々が容易に受け入れられる主張でもあった。ここにもイギリス人の無骨な気質とヴィクトリア時代の風潮が窺えて誠に興味深い。わたしは当時の有産階級の人々のこうした特有な定見を、或る種の偏見とみる。自立性と勤勉を重んじ、向上心を美德とするこの時代に、貧しい移民の姿は、計画性がなく、節約をしない怠惰な人々の群としか映らなかつた。つまり、怠惰な人間は、新天地を求めても苦勞を克服できず、最終的に哀れと慈悲の対象にしかならないと断定しているのである。筆者は彼らの将来についてこう結んでいる。

They have been improvident... Let us hope, at any rate, that suffering has taught these men a lesson, and that in a new hemisphere they will commence a more prudent career.

彼らの苦しみは、節約に無計画であったためなのだから、これを教訓として新天地でより慎重な生計を立てて欲しいと。

記事はさらに北大西洋上の冬の厳しさに触れている。北大西洋は嵐の海というニックネームがあり、この時期、ゲイルのすさまじさは殊の外で、イギリスの沿岸を出るまでに確実にこの嵐に見舞われることは必定であった。船は木の葉のように左右上下に揺さぶられ、物は飛散し、船内は泣き声とうめき声で満ち、甲板上では船長の“tacks and sheets”と叫ぶジグザグ航進の指示に船員、水夫達が右往左往する様子が描かれている。当時の冬の航海では、すべての船客はひどい船酔いに襲われ、その苦しさは想像を絶するものであったろう。この様子は後の同行記者

の記事によっても明らかとなる。

3. 大西洋汽船に乗船して

特集記事は3月5日号（復刻版では321頁）から始まるが、第一報では乗船前の数時間と乗船完了までを扱っている。この節では特に大きく取り上げる文章が無いので、第二報と一緒に取り上げて論じたい。

第一報の記事の興味深い文をいくつか列記してみる。

- (1) Although America is so accessible by a number of routes, it has not yet been found that every road leads to the wonderful Atlantic seaboard.
- (2) It has always struck us that there exists a not very remote connection between the last hours you are permitted to spend on shore prior to a long sea-voyage, and the uncomfortable period which must elapse between the passing and the consummation of the sentence of sus: per coll.
- (3) The only persons who don't seem to trouble themselves about going to sea are Queen's messengers.

3つの文に共通する背景は、嵐と船酔いである。このことは、Leaving Old England で説明したように北大西洋横断の汽船に乗れば、悪夢に似たゲイルとそれに伴うひどい船酔いを免れない。

(1)文は、“Every road leads to Rome.” の格言をもじって書かれたものである。アメリカ行きのルートは数多くあるが、大西洋横断に快適な船旅を保障するのはこれだというものはまだ見つかっていないと。

(2)文は、長い船旅を前に乗船までの数時間を陸地で過ごすのは、死刑執行が命じられて、執行までの不愉快な数時間と幾分似たところがあるというものだがあまり尋常な連想ではない。sus: per coll は裁判官が、被告の名前のところに、「死刑執行相当」と書き込むラテン語である。

Leaving Old England では帆のロープを絞首刑のロープに見立てていたがどうやらイギリス人は人間の苦しきの端的な直喩に「死刑」と関係ある語句を好むように思える。

(3)文は決して船酔いしない例外的な人物を挙げている。彼はどんな悪天候でも、場所の如何に関わらず、笑顔で飛脚の勤めに励む。彼を称して「公文書伝達吏」という。彼は sea-legs を持っていてネプチューン(海の神) やボーリアス(北風の神) をものともしなかったのである。

記者はこの sea-legs を持つ者と待たざる者の違いを強調して移民船客たちの悲惨な船酔いの様子を想像している。

第二報(3月12日号。復刻版345頁)は出航から丸一日間の船内の様子が伝えられている。

夕食のベルに人々は広間へと急ぐ。食欲は旺盛で料理は次から次へと平らげられ、楽しい会話と笑いが渦巻く。話題の中心は「船酔い」。人々は他人の船酔い話に笑い転げる。

しかし、食事が終わらないうちに小走りに広間を去る人が出ると、それが導火線となって次から次と船客たちは船酔い状態に入ってしまった。未だ大揺れが来ないうちに彼らの半分が大広間から姿を消した。その夜の船上、船内は人々の出す奇妙な音とうなり声で溢れた。甲板に多数のうつ伏せる人影があった。

朝。明るくなったデッキでのシーンは悲惨と言うより無い。聞こえるのは船員が吹くホイッスル、帆を張る水夫達の奇妙にももの悲しい歌声だけ。水平線が平らに見えない。嵐でもないのにかなりのうねりがあった。



Off Queenstown

12時頃。汽船はアイルランド南西部沿岸にあるクイーンズタウン港に入港した。揺れが無くなり、船客達は元気を取り戻し始める。船の周りに物売りの小舟が集まりアイルランドなまりの叫び声をあげる。イラストの左端の女性はその物売りで勇敢にも乗船してきてアイルランド製の品物を信じられないほどの安値で売る。リングを売る女もいる。

See, in the picture, how they are crowded up together, and how rude are their berths and surroundings! The poor ill woman in corner has scarcely space to move; one man's berth is so narrow that his feet project over it; and another, so poor that he is shoeless, must be content to lie in one position all night long.

イラストの右端に横になっている男女がいる。今乗船してきたアイルランド人らしいが、リバプールで乗船した移民達のように客室が無く、甲板も混んでいて狭い場所に縮こまっている。女は病気なのだが窮屈な場所で身動きもままならない。一人の男はその上に足をつきだし、もう一人は貧しくて靴もない。二人ともこの状態で過酷な船旅を我慢していかなければならない。

クィーンズタウンを出航後、穏やかな日が続き、甲板の一部や船尾に押しこめられていた貧しいアイルランド系移民達の間にも歌声や笑い声が聞かれた。

4. 大西洋の真っ只中で

平らな水平線は見られないが波立つ垂直なうねりもないおだやかな海の航海が続いた。記者の目はリラックスした人々の個々の姿に向けられる。物知りだが出しゃばりな男性、美しい娘に見られているのを素知らぬ振りして口笛を吹く画家、ヨーロッパ帰りの牧師、めがねをかけた鋭い目をした曰くありげな女性、ヨーロッパの観光から帰る途中の陽気なアメリカ人の若者達、そして妻子に説得されて、捨てがたき思いを抱いて故郷を去るジョーンズ氏など、記者は事実と推測を交えながら、目立ちたがり屋には知的階級特有な皮肉たっぷりな言葉を、哀れを誘う人々には憐れみの言葉を与えながら表現していく。一方同行イラストレイターの目はその多くを貧しい移民達に向け、温かい目で彼らを描いている。



Steerage Emigrants

They are depicted by our artist affectionately and snugly “united” on one of the rolling benches. They have manifestly taken up their position for the day. They heed not the tramping of the promenaders, the whistles of the officers, the laughter of their fellow-passengers; but, wrapped from head to foot in capacious shawls and rugs, hugged tightly up together, they think sleep thrice blessed — for it kills time, imposes forgetfulness of uneasy qualms, and favours that immobility for which the feeble sea-voyager yearns.. ’Tis a pity that the harsh lunch bell should break rudely upon their slumbers — the lunch bell which not only wakes them, but wakes them to experience the smell of soup and fish — so savoury on land, but now so inexpressively repulsive.

イラストを見ながら記者のこのくだりの文を読むと思わず貰い泣きしようになる。船尾に詰め込まれた彼らは他の乗船客より貧しい。ドイツ人とわかる一団もいるが、他はみなアイルランド人である。彼らは一日中その場を離れない。船内を歩き回る人々、笑い合う他の船客たち、そして船員のならずホイスルなどには注意を向けず、ショールやラグにくるまって暇があればひたすら眠るのである。眠ることが彼らにとって大きな恵みなのであった。眠りで暇をつぶし、眠りで不安を忘れ、眠りでじっとして船酔いを避けるのである。ただ彼らにとって極めて不愉快なのは昼食を告げる鐘であった。彼らの目を覚まさせるだけでなくスープや魚のにおいを思い起こさせるからであった。

加えて、記者はこの穏やかな航海の数日間にサルーンに集う男女の船客達の間で顕著になったラブロマンスの広がり伝えていく。画家は「月の光の下の楽しみ」という粹なタイトルでイラストを載せているがこの稿では割愛する。

5. ニューヨーク到着

「数時間で島が見えます。」と船長の放送が入った。人々が相争ってデッキの端へ殺到する。やがてロングアイランド島の輪郭が見えてくる。記者は実に写術的に描写していく。森、教会の尖塔、村、郡役所在地の街、男女、牛馬と言った具合に遠い存在から近いものへと距離感を出していく。船内の人々は浮かれ出し、男女ともに身支度や正装に着替える。船員の元気な声が行き交い、水夫達はマストからマストへと飛び移ってロープを引く。ここでイギリス人達の賭け好きな一面が出る。彼らは集まってくる水先案内人の何艘もの船を遠くに見ながら、うまく着船する一着の船の番号が奇数か偶数かを言い当てる賭を始めたのである。

The next excitement among the gentlemen passengers is to lay wagers as to whether the number of the successful pilot's boat will be odd or even. As we approach nearer and nearer, we begin to discern,..... a number of little boats.....
“Champagne supper at the Astor that it's odd,” says a habitual voyager, who looks very knowing. “Taken,” says another, puffing a huge cloud of smoke from his cigar. “It's an 8! I see it as plain as day!” cries an enthusiastic young lady with a spyglass. The excitement waxes intense as the leading pilot nears us; at last over pops the little boat to the very water's edge, betraying on its sail the great black figure 9, and thus deciding the bets for good and all.

夕食にシャンパンを賭ける賭けに何人かが応じ、結局始めに言い出した船客の「奇数」が正解となった。これは推測であるが当選者が habitual voyager とあるので彼は何回も往来していてどの水先案内人の船が先頭に来る可能性が大きいかわっていたように思える。

船はバッテリー公園に接岸する。記者とイラストレーターは上陸してブロードウェイ街を歩く。しかし噂に聞いたほどの危険な街ではなかった。イングランドには次の文の一部で語られる情報が流れていた。

The first ride up Broadway corrects some errors which many not very intelligent foreigners have regarding American life. Judkins, the little dry goods clerk from a Yorkshire village,.... who, from what he has heard from the country gossips at home, “has reason to believe” that Broadway is dangerous, has girded a belt about his loins and inserted

therein a dirk knife and a pistol.

ジウドキズなる移民がブロードウェイは危険と聞いていて腰のベルトにナイフとピストルを差していたが、歩いてみると噂とは大違いで安全で賑わいのある通りであった。あまり知的でない外人連中が懐いていた偏見であることが判明した。

同行画家はニューヨークでイギリスでは見られない珍しい光景をいろいろスケッチして掲載している。その一つを紹介しよう。



New York Police

通りの中央をニューヨーク警察隊が行進して行く。パレードではなく巡邏中である。風貌からアイルランド系と見ている。傍を二人のご婦人が流行の外出着で歩いている。彼らは人混みに慣れている様子でエスコートする男性をつけていない。安全を確信しているのである。左のインディアンの像はたばこ屋の看板である。片手にイギリス製のたばこを

差し出し、片手は店内を指している。

他のイラストにもイギリス人には目新しい街頭風景がいくつも掲載されている。眺めていると物珍しさよりも笑いがこみ上げてくる構図のものが多。掲出のイラストでは警官隊の表情や格好がユーモラスである。

選挙に勝ってインディアンの大酋長達に扮して練り歩く民主党の代議士達、ニグロの召使いが無造作にゴミ捨て場にゴミを放り投げ、ほこりが通行中のご婦人達に降りかかる迷惑シーンなどは思わず笑ってしまうが、生真面目なイギリス紳士達は逆に憤慨したり、冷笑したりしたのであろうか。記者はまた召使いや行商の違いを挙げているが、対比に用いている形容詞がとても皮肉である。「きちんとした帽子をかぶり、きれいなエプロンをかけ、バラ色の頬をしたイギリス人メイドの代わりに、黒檀のように皮膚は真っ黒で、ちぢれ毛を編んで垂らし、黄色の大きな目をし、真っ黒い口元が開くと歯だけが白く光る黒人女達であった。」

行商人については、イギリスで見慣れている猫の餌売りの声、パン売りの少年の早口な叫び声、ミルク売り、古着売りなどのぶっきらぼうな、短い口上はまだ大西洋を横断してきていないと記している。

グラフィック紙第19号(4月9日、復刻版435頁)では、アイルランド人移民の貧しく、悲惨な生活ぶりが特集されている。アメリカのどの都市にもアイルランド人居住地区があり、いずれも壊れかけた掘っ建て小屋がごた混ぜに密集して建っている。通称ダブリン。ドイツ移民や、オランダ移民達は都市から離れたところに移住し質素だが健全に暮らしているのに対し、アイルランド人達は、大都市の周辺に密集する。ニューヨークのセヴンダイアル地区はとくに悲惨なアイルランド人街で犯罪者、乞食、苦役人たちが生活し、暴動があると先頭に立つので社会の敵と見なされている。

ニューヨーク滞在中、記者は精力的に歩き回る。ホテル、床屋、トロットニングなどユニークなニュースを報道する一方、上陸地点に住みついた多くの移民の貧しい生活ぶり、路上生活者、ゴミ集めの仕事に群がる人々の実態、警察の留置所内の様子等を取材しイラストと共に特集している。

6. ボストン

記者はこのあとニューヨークを離れ、ボストンを訪れる。ボストンは別称ザ・ハブ（世界の中心地）と呼ばれる。アメリカのアテネとも言われる。記者の目にはニューヨークとは対照的に保守的な雰囲気を持つ、エレガントで洗練された都市と映る。ハーバード大学があるところは美しい郊外の街で学者や実務者の落ち着くところと書いている。ここに来て記者はアメリカ女性の活発さに目を見張る。彼らは男性と同じく戸外のスポーツが大好きで夏は、クローケに興じ、海辺では泳ぎやボートこぎ、田舎ではピクニックと活動的である。冬は冬で豪快なスレイ・ライディングを男同様に楽しむ。イギリス人は日頃からアメリカ女性の悪口を言っているようだが、取材してみると実態は決してそうではなく、むしろ健全な姿の者が多いと記者は好意的に報じている。

7. グラフィック・アメリカを振り返って

記者はボストン訪問後、ニューヨーク州の北東部の州境に位置するレバノン・スプリングズを訪れる。ここは敬虔なシェイカーズのコロニーがあるところで、半世紀近く前にアン・リーの後援でできたアメリカで最初の移民シェイカーズの里である。記者と同行のアーティストは2週にわたり、シェイカーズの特異な宗教生活を描写しているが、特異な取材なので割愛することにする。

特集記事は出港地リバプール市内の取材に始まり、乗船の様態、出航

後の船内における移民達の悲喜こもごもの様子、前半の船酔いと後半のラヴ・ロマンス、ニューヨーク到着の興奮状態、ニューヨークおよびボストンなどの都市の珍しい光景や移民の動向等を生々しく伝えてくれた。まことに移民汽船を舞台とする人間模様の一大絵巻をみた思いがした。同行画家は同情的なポーズで数多くの弱者を描いた。記者も前半で貧民に対する複雑な心境を吐露していたが、後半からアメリカ紀行にかけては感情を差し挟まず客観的な傍観者の立場を維持した。しかし、イギリス人記者はニューヨークにあまり好感を持っていない。活気に溢れてはいても騒々しい都会に対して物珍しさを感じるだけであつた。一方ボストンのような保守的で落ち着いた、品位のある都会に安らぎと好意を持ち好印象の記事を書いている。

記者はリヴァプール、船内、ニューヨークで見かけた貧民や品位のない人々をアイルランド人ではないかと差別的な目で見えていたが、実際にアイルランド人移民の数は想像を超えるものになっていた。1820年から1890年の間に340万人という膨大な数のアイルランド人が経済的に行き詰まってアメリカに移住してきているが、富を夢見た世界からの移民の中でこれほど貧困にあえいだ国民は例をみないであろう。記者はアイルランド人の困窮が都市周辺に群がる彼らの習性に原因の一端があるように記しているが、イングランド人移民の大半が農民か熟練工または半熟練工だったのに対し、アイルランド人移民の大半は食い詰め者でしかも技術を持つ者がほとんどいなかった事実を知れば悲惨な彼らの生活が理解できるというものであろう。

主としてイギリス国内の階級的な構図の中で貧富の問題を扱ってきた私にとって、この特集は小説を地でいくような生々しい貧民移民の実態を浮き彫りにさせてくれ大変参考になった。いろいろな文献を通して当時の状況は歴史的に認識できているが、当時の日々を伝える新聞報道でなければこれほど痛切に訴えることはできないであろう。このたびのグ

ラフィック紙の復刻版出版に感謝する次第である。おそらく当時のイギリス有産階級も記事を読み、弱者のイラストを見て心が痛み憐憫の情に駆られたことであろう。そして国内の貧者に対する奉仕や寄付行為も一段と促進したことでであろうと推察されるのである。

注：

- (1) the Graphic: An Illustrated Weekly Newspaper (復刻版) vol. 1 (December 1869 – June 1870) 720 頁
- (2) Hunting: vol.1 No.7 (p.145~146)
- (3) 新救貧法：1601年に制定されたエリザベス救貧法は整備された成文法であったが、その後更に何回か改善を加えられ、ヴィクトリア女王の1834年新救貧法が成立した。
- (4) 居住制限法 (1662)、労役場テスト法 (1722)、ギルバート法 (1782)、スピーナムランド法 (1795) 等はエリザベス救貧法からヴィクトリア救貧法にいたる過程で出された一連の修正法である。
- (5) ケロウ・チェズニーの引用文：ヴィクトリア朝の下層社会 (高科書店) p.22
- (6) HOUSELESS AND HUNGRY (イラスト) 復刻版 p.9
- (7) メイヒューの貧民調査：H・メイヒュー著「ロンドンの労働とロンドンの貧民」(1861~1862)
- (8) まいはだ作り：木造船の漏水を防ぐために使う麻くずを古い麻綱からほぐす作業 p.104
- (9) Leaving Old England: vol.1 No.3 (p.59)
- (10) On the Atlantic Steamer: vol.1 No.14 (p.321)
- (11) On the Atlantic Steamer (Continued): vol.1 No.15 (p.345~346)
- (12) In Mid Ocean: vol.1 No.16 (p.365~366)
- (13) Arrival at New York: vol.1. No.17 (p.393~394)
- (14) The New York Streets: vol.1 No.18 (p.417~418)
- (15) The New York Streets (Continued): vol.1 No.19 (p.435~437)
- (16) The New York Streets (Continued): vol.1 No.20 (p.465~466)
- (17) The New York Streets (Continued): vol.1 No.21 (p.488~489)
- (18) Boston: vol.1 No.22 (p.512~514)
- (19) Boston (Continued), The Shakers: vol.1 No.23 (p.533~534)
- (20) The Shakers: vol.1 No.24 (p.555~557)

参考文献

- (1) 松村昌家監修 『The Graphic vol. 1 (復刻版)』 本の友社
- (2) ナンシー・グリーン 『多民族の国アメリカ』 創元社
- (3) 長島伸一 『世紀末までの大英帝国』 法政大学出版局
- (4) ケロウ・チェズニー 『ヴィクトリア朝の下層社会』 高科書店

- (5) 高橋裕子・高橋達史 『ヴィクトリア朝万華鏡』 新潮社
- (6) 門山栄・川北稔編 『路地裏の大英帝国』 平凡社
- (7) W. J. リーダー 『英国生活物語』 晶文社
- (8) クリストファー・ヒバート 『ロンドン』 朝日新聞社
- (9) R. J. ミッチェル 『ロンドン庶民生活史』

(たにむら よしみち・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

外国人私費留学生の現状

— アンケート調査を中心として —

Present Condition of a Foreign Student Studying in Japan

石田 清史

Kiyoshi ISHIDA

キーワード：外国人、私費留学生、中国人、アンケート、調査

要旨

何かと話題に上る外国人留学生であるが、その実情が判らなければ有効な支援も対策も講じ得ない。彼等の現状は如何なるものであろうか。一般に留学生は、来日直後こそ数多の困難に直面するが、日本語、日本事情の理解を始めとして、多くの問題は時の経過と共に著しく改善される。私費留学生を苦しめる経済的困難もまた同様である。その意味で、下級生ほど苦しみ、上級生になると寧ろ留学生活を楽しみ、卒業後もなお暫く日本に留まることを望んで上級課程進学を志す者が多い。よって学部留学生の指導、援助に当っては、彼等が最も困難に直面している入学直後から一、二年の間に重点を置くべきであり、また上級生に対しては大学院進学をも念頭に置いた教育を行うべきである。

I はじめに

近年、わが国で学ぶ外国人留学生（以下留学生と呼ぶ）を巡る諸問題が注目を集めている。昭和58年に中曽根内閣の策定、着手した留学生十万人受入計画以降、わが国に学ぶ留学生の数は累増の一途を辿っている。この計画は21世紀初頭までに留学生の数を十万人にしようとするもので、ここ数年の増加実績は計画を下回ったものの、なお着実に増加し続けている。昨平成13年5月1日の時点で前年同期比二割増の78,812人。^(註1) 遠からず目標の十万人に到達することは確実である。

筆者の奉職する苫小牧駒澤大学にも比較的多数の留学生が在学している。平成10年度に7名を受入れたのに始まり、漸次その数を増して、平成14年7月末日現在、国際文化学部国際文化学科を中心に158名を数えるに至った。

数人程度なら兎も角、百人を越す留学生を擁するとなると、規模の面からも、また元々蔵している質的困難からも、最早担当教官や窓口の職員の個人的努力では及ばぬ問題がある。支援制度、カリキュラム、生活環境など受入体制全般を整備する全学的取組が必要となる。

そのためにはまず留学生たちの実情や真意を、学業のみならず生活面も含めて総合的に把握せねばならない。留学生対策のためには先ず、留学生を知ることが出発点である。彼等は記号や数値、観念上の存在などでなく、生身の人間なのである。その置かれた状況、苦難、喜びや悲しみ、そして希望するところを正確に把握して初めて、有効適切な対策を講じ得る。以て実情調査を志した所以である。

II 独自調査の必要

官庁系の調査は大規模なものがあるが、些か硬きに過ぎて留学生の本音から遠い嫌いがある。先行研究にも調査に依拠したものは存在し、中には新聞社に拠る数百人規模の調査も見られるが、既に年月を経過して

いる。情勢は日々変転して流動的であるから、最新のデータに拠らねば最新の動向は把握できない。地域や学校の特性による異同もあろう。

かくて本稿執筆にあたり、独自の調査を実施するに決した。能うべくんば全国的規模の調査が望ましいが、個人で日本全域にわたる調査は困難であるから、今回は北海道で多数の留学生を擁する苫小牧駒澤大学をサンプル校に選んだ。将来に於て機会あらば、インターネットを活用するなどして全国調査を実施したいと考えている。

III 調査の方法

アンケートを主とし、聴取や大学の記録を併用した。調査実施時期は平成14年7月から8月にかけてである。

アンケートは面接方式に依らず、調査票を配布して後日の提出を求めた。真情を吐露して貰うためである。よって必ずしも記名を求めなかった。何れも匿名の方が真実を語り易いと判断してのことであるが、回収率を考慮して任意記入の姓名欄等は設けた。

サンプル校には交換留学や短期留学を除き、正規留学生158人が在学中。学生総数824人に対し19.2%を占める。ほぼ全員にアンケート用紙を配り、121名から回収することが出来た。

調査者が面接して直接記入する方法を採らなかったため、未記入の欄も少ない。判然としない事柄は、別に広く面談して聴取調査を行い、解明に努めた。

留学生問題は中国人に大きな比重があるが、他のアジア諸国からの留学生にも或程度通有の問題でもあること、たとえ利益/不利益処分でないにせよ国籍で別け隔てすることは教育の現場で望ましくないこと、等々から中国人以外を排除する事はしなかった。

IV 調査結果とその分析

以下に回収された調査票の集計とその分析を行う。

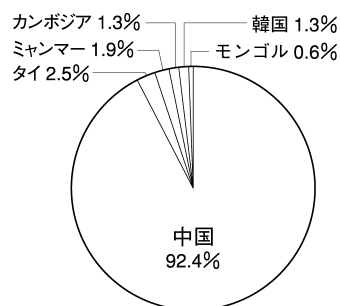
国籍、出身地、性別、学年、年齢等の諸項目に付いて、予め大学当局が把握している158人全員に付いてのデータと、今回アンケート調査に応じた121人分のそれとを比較すると、強度の類似性が認められる。一見すれば直ちに気付くほど酷似している。後者が前者に対し絶対数に於てやや縮小した数値、比率に於てほぼ同率であることから、本調査は母集団の性格を概ね4分の3の縮尺率で正確に示し、偏り無い指標を示すものとする。

1. 調査対象の特性

全て大学学部生で、且つ私費留学生である。留学生の典型と言える。一般に私費留学生は政府派遣及び国費の留学生に較べ経済的に恵まれなないが、広義の私費留学生の中では大学院生、学部生の方が、就学生より在留資格、奨学金等で優遇されている。

1-1 出身国

図1



大学の資料に拠れば在籍者は中国146人、タイ4人、ミャンマー3人、カンボジア2人、韓国2人、モンゴル1人、6カ国合計158人である。(図1)

全てアジアからの留学生である。中国人が92.4%と大部分を占めている。留学生中に占める中国人の割合は、全国平均で6割弱であるから、^(註2) サンプル校に於る出身国別構成は、中国人の比率が高いと言える。

図 2

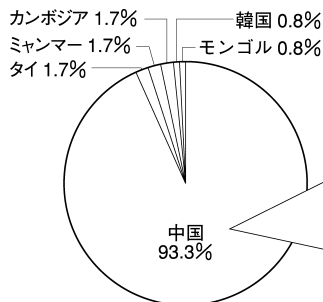
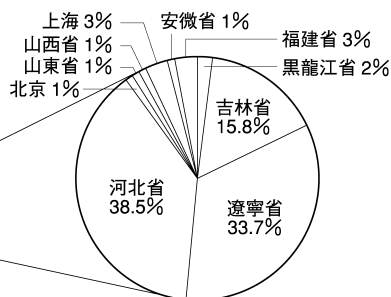


図 3



これに対しアンケート回収分は中国 113（黒龍江省 2、吉林省 16、遼寧省 34、河北省 39、北京直轄市 1、山東省 1、山西省 1、上海直轄市 3、安徽省 1、福建省 3）、タイ 2、カンボジア 2、ミャンマー 2、韓国 1、モンゴル 1、6 カ国合計 121 人。（図 2）

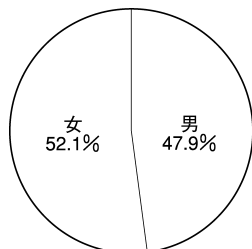
国名は記入しても地域名を記載しない者が 12 人いた。他の項目から推断し得たが、敢て記さなかった。理由として、本人特定に繋がることを危惧したからだと考えられる。

1-2 出身地域（図 3）

中国人グループ中の出身地域別構成は、北部に偏っていることが見て取れる（グラフは北部地域から順に配列してある）。これはサンプル校が北海道に所在し距離が近く気候風土も類似していること、千歳空港と瀋陽空港との間に直行便が飛んでいること、そしてサンプル校が燕山大学と、苫小牧市が河北省秦皇島市と、苫小牧港が秦皇島港とそれぞれ姉妹提携しているといった諸事情からであろう。中国人の出身地として最多の河北省はそれら提携先の所在地であり、二位の遼寧省は瀋陽空港の所在地である。

1-3 性別

図4

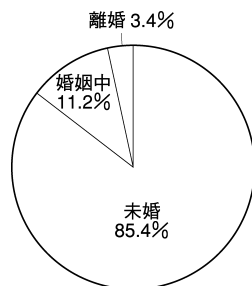


男 58、女 63、回答合計 121 人。(図 4)

人口構成通りで格別の特徴は認められない。中国は社会主義で男女平等であること、^(註3) 一人っ子政策で子供を極度に大切にすることなどから性差無く留学させて来るものと考えられる。漢民族に於ても女子の方が外国や外国語を好む傾向があるのかも知れない。

1-4 婚姻

図5



未婚 99、既婚 17 (婚姻中 13、離婚 4)、合計 116 人。(図 5)

比較的年長の学生には既婚者もいる。婚姻継続中の者は、留学生同士のカップル一組を除き、何れも配偶者を残し単身での来日である。これは私費留学生の家族の呼寄せが困難だからでもある。

中国は離婚が多く、離婚後の生活設計として留学で出直しを図ることもあるという。頷ける話である。

1-5 学年

図6

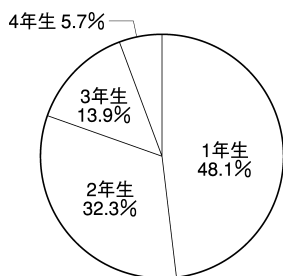
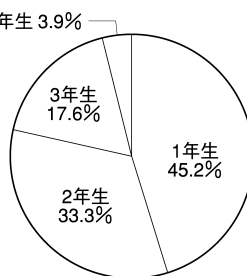


図7

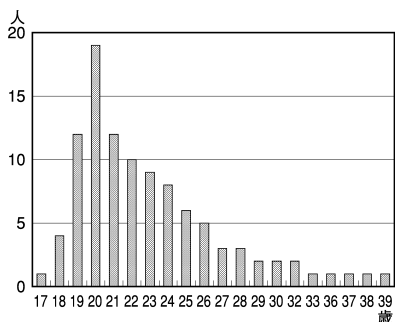


在籍数は1年生76、^(註4)2年生51、3年生22、4年生9、合計158人。
(図6) 年を追って留学生在が累増して来たことが判る。

これに対し調査回答者は1年生46、2年生34、3年生18、4年生4、合計102である。(図7) 二つのグラフは相似形に近く、ここにも母集団とサンプルの質的近似が顕れている。

1-6 年齢

図8



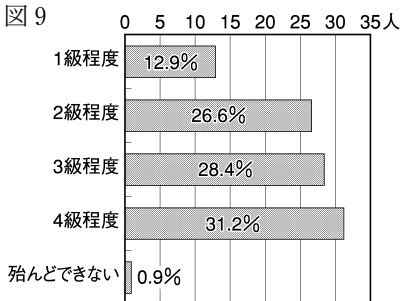
17歳1、18歳4、19歳12、20歳19、21歳12、22歳10、23歳9、24歳8、25歳6、26歳5、27歳3、28歳3、29歳2、30歳2、32歳2、33歳1、36歳1、37歳1、38歳1、39歳1、合計103人。平均年齢23.09歳。(図8)

中国は数え年で年齢を称える伝統が色濃いので、若しこれに拠って計算した者がいたとすれば満年齢より1、2歳高く記入されたことになる。

中国は数え年で年齢を称える伝統が色濃いので、若しこれに拠って計算した者がいたとすれば満年齢より1、2歳高く記入されたことになる。

1-7 語学力

図9



日本語能力試験1級程度14、2級程度29、3級程度31、4級程度34、殆どできない1、回答合計109。(図9)

わが国へ留学を希望する者は、前提条件として日本語能力を要求される。大学以上なら日本語能力試験1

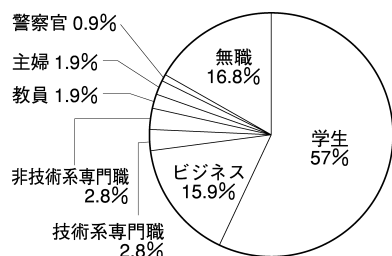
級程度の力が望ましく、せめて2級程度の能力が無ければ授業を理解できないと考えられる。入管実務も、日本語学校の就学に対してでさえ3級を要求している。大学への留学となると、それ以上の能力を具えていることが望まれる。

本調査では自己申告に依り、添付証明書を求めなかったから、実力をそのまま反映していると確言は出来ないが、留学生達を直接知っている筆者の実感では、実力との間に大きな乖離も無かろうと思う。

他に母国語以外で大学の講義を解し得る能力を自認する者、英語26、朝鮮語6、^(註5) フランス語1、合計33人を数えた。

1-8 留学前の職業

図10



技術系専門職3、非技術系専門職3 (TV局1、通訳1、調理師1)、ビジネス17 (企業7、商店5、運輸2、ホテル3)、公務員 (警察官) 1、教員2、学生61、主婦2、無職18、合計107人。(図10)

入学時の書類と比較すれば、今回の調査で学生と記した者の中には、元学生をも含むものと考えられる。そうした者は卒業後、留学までの短期間、家業手伝いにせよ、アルバイトにせよ、実社会の経験を持っている筈であるが、本人の意識の中では「つなぎ」に過ぎないため敢えて記載しなかったようである。

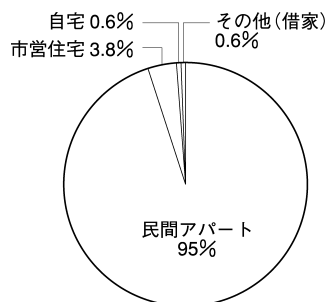
都市部の出身者が多いので第一次、第二次産業従事者は少なく、多くが第三次産業従事者である。日航国際線スチュワーデス、ファッション・モデル、テレビ局勤務等、華やかな職業を擲って留学した者も散見され、向学の志が偲ばれる。なお中国は社会主義国であるから夫婦共稼ぎ

が原則で、専業主婦は稀である。

2. 住環境

2-1 住形態

図 11



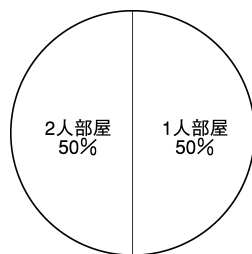
自宅 1、民間アパート 150、下宿 0、市営住宅 6、その他（借家） 1、合計 158 人。（図 11）

住所に付ては大学が把握しているのでこれに拠る。かつては大学が留学生専用の寄宿寮を維持していたが平成 12 年秋に廃止し、住宅費補助を以て替えた。

四年生には地元自治体がかつて採っていた政策支援の名残で市営住宅に住む者がいるが、三年生以下は民間アパートが殆どである。

2-2 居住性

図 12



1 人部屋 55 人、2 人部屋 55 人、回答合計 110 人。（図 12）

大学の斡旋する提携業者用意のアパートは、二人用の二万八千円の部屋と、一人用の二万円の部屋とがある。構造は軽量鉄骨が多い。二人用は比較的新しくてきれいである。隙間風が入り寒いとも言いが、暖房器具も風呂も給湯機も付いている。

金銭的余裕が出てくるにしたがい個室を希望するようになり、一人で二人部屋に住む者もあれば、自分で町のアパートを探し契約する者もある。中国に於る大学の寮が 10 人前後という多人数の同室であることを

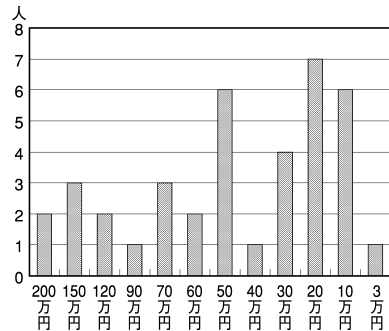
思えば、値段は兎も角、日本留学中の住環境は悪くないと言えよう。

3. 経済生活

本節は有効回答が少く統計的基礎が薄弱なものを一部含む。またあまりに少額なる数値は日本円と中国元^(註6)を混同している可能性も考えられ、有意のデータが採れたか心許ないが、データはデータとして採録して置く。

3-1 家庭の経済状態（故国の家庭の年収）

図 13



200万円 2、150万円 3、120万円 2、90万円 1、70万円 3、60万円 2、50万円 6、40万円 1、30万円 4、20万円 7、10万円 6、10万円未満 1、合計 38人。平均 521,621円 62銭。(図 13)

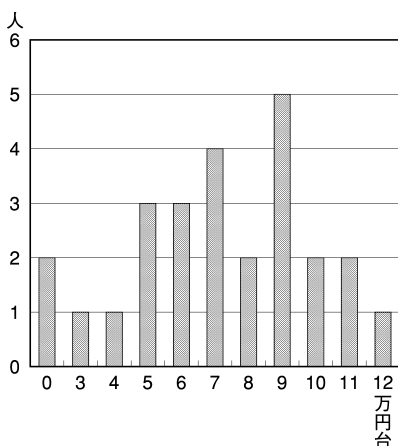
留学生は概ね中流以上の家庭の子女であるから、本国の一般的水準より高い財力を具えてはいる。が、如何せん彼等の故国自体がわが国とは大きな経済格差のある国なので、ぬきんでて裕福でない限り、その資力は日本の基準に照らせば留学を支えるに不十分と見られる場合が多い。

3-2 一ヶ月の平均収入

以下本人の経済状態を考察する。

無収入 2、月収 3万円 1、4万円 1、5万円 3、6万円 3、7万円 4、8万円 2、9万円 5、10万円 2、11万円 2、12万円 1、合計 26人。(図 14)

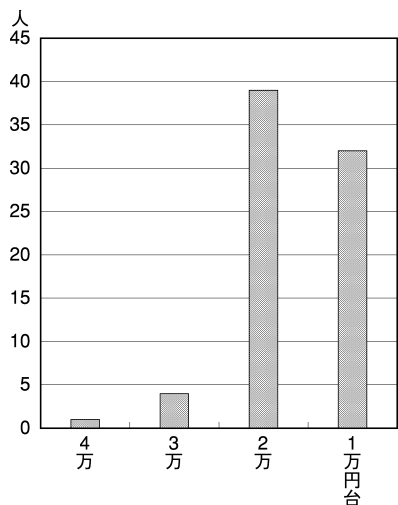
図 14



奨学金、仕送、アルバイト等を合した総収入である。留學生活には学費、生活費を合せ年間最低百万円前後必要であるから、収入の不足は明らかであろう。

3-3 一ヶ月の平均支出と内訳

図 15



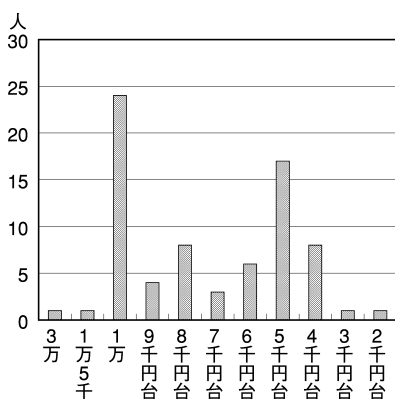
① 家賃

4万円台 1、3万円台 4、2万円台 39、1万円台 32、回答合計 76人。平均 19,500円。(図 15)

大学は月額一万円を限度として家賃の実費を補助している。実際には殆どの者が一万円を満額受給するので、留学生各自の現実の負担額はこれより一万円少いと見て良い。一部は市営住宅に入居しているが、これは家賃が一万円に満たないので全額補助、家賃無料となる。稀に家賃に苦しんで友人の部屋に居候する者も

いないではないが、なお総じて家賃負担は軽いと言えよう。

図16



② 光熱水道費

3万円1、1万5千円1、1万円24、9千円台4、8千円台8、7千円台3、6千円台6、5千円台17、4千円台8、3千円台1、2千円台1、回答合計74人。平均7,647円。

(図16)

留学生は男女を問わず自炊が多いので、ガスを多く使う。また女子はシャワーの使用頻度が高い。冬季には暖房費が増えるが、本調査が夏季

に実施されたため、本項目は少額に留まったと考えられる。グラフからはピークが二つあるように見えるが、これは調査、作表の都合で1万円台から1万4千円台までを一つに纏めたからに過ぎない。ピークは5千円台である。男子と女子、一人部屋と二人部屋では違いがあるだろうが、今次調査からはそこまで読み取れない。

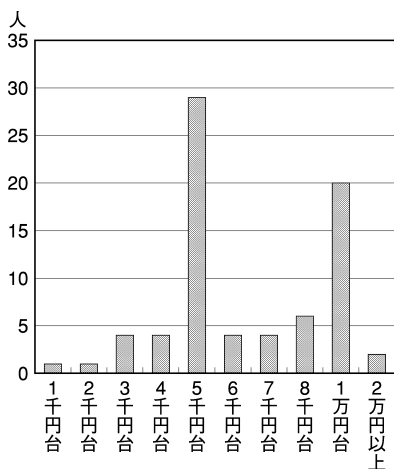
③ 通信費

1千円台1、2千円台1、3千円台4、4千円台4、5千円台29、6千円台4、7千円台4、8千円台6、1万円台20、2万円以上2、回答合計75人。平均7,440円。(図17)

携帯電話等の移動体通信は日本人学生にも普及しているが、中国人にとっては一種のステータスでもあり、特にこれを好む。留学生はほぼ全員が所有しており、筆者は例外を一人しか知らない。故郷の家族も直通で電話連絡が付くということに安心を覚えるようである。

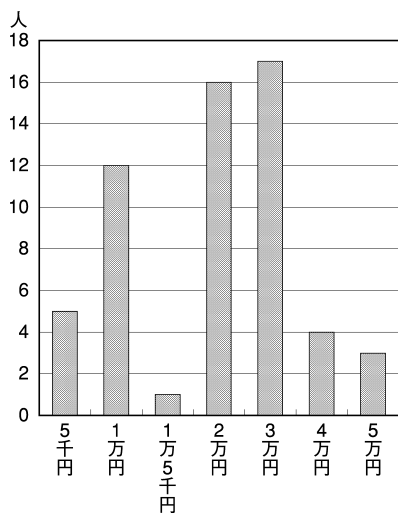
電話代が比較的安いのは、学生半額割引制度のある特定の電話会社を利用しているからで、かなり電話好きである。ピークが二つあるのは、

図 17



携帯電話の発信を多用する人と受信中心の人、二つのグループが存在するためかと推察される。

図 18

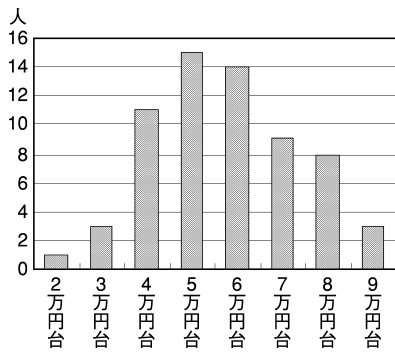


④ その他の支出

5千円 5、1万円 12、1万5千円 1、2万円 16、3万円 17、4万円 4、5万円 3、回答合計 58人。

(図 18)

図19



⑤ 支出合計

2万円台1、3万円台3、4万円台11、5万円台15、6万円台14、7万円台9、8万円台8、9万円台3、回答合計64人。平均59,765円。(図19)

支出からは年額34万円の授業料を除外してあるので、これを合すれば年間平均106万円が、留學生活の所用経費ということになる。たまさ

かの疾病や帰国等、臨時の出費を勘案すれば、もう少し余裕を見るべきであろう。

3-4 仕送

図20 仕送の有無

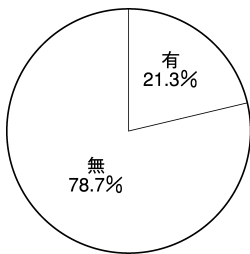
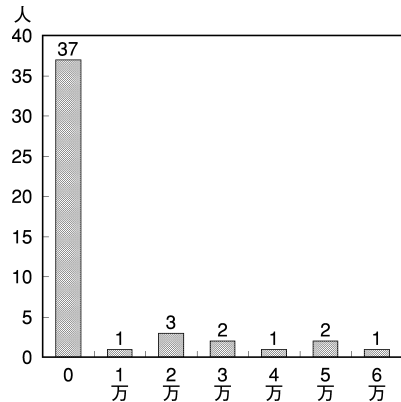


図21 仕送額



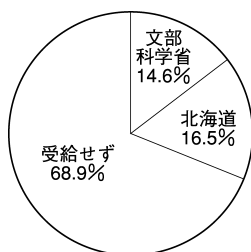
仕送のある者10、無い者37、合計47人。有る者の内訳月額6万円1、5万円2、4万円1、3万円2、2万円3、1万円1、合計10人。

平均 33,000 円。(図 20-21)

殆どの者が仕送を受けていない。親元に仕送能力が無いというだけでなく、留学生自身が父母に負担をかけまいと努めている。血族の強固な絆は中国文化の最大特色であるから、親元がよほど裕福でもない限り、留学生本人の資質性向に関らず仕送を辞退しようとする。それどころか逆に親元へ送金したいと望んでいる。まさに自力更生である。但し、定期的に仕送を受けていなくとも、事情によって臨時に送金を依頼することは有る。

3-5 奨学金

図 22



大学の資料に拠れば、全留学生 158 人中、文部科学省/日本国際教育協会の奨学金^(註7)を受ける者 23 人。北海道庁の奨学金^(註8)を受給する者 26 人。合計 49 人。奨学金を貰えない者 109 人。受給率 31.01%。(図 22)

私費留学生の奨学金受給率は日本全国で 30%強であるから、概ね等しい数字である。

尤も、公的奨学金は留学生数に対して比例配分式に各大学へ割当るものであるから、ほぼ同率になるのは当然でもある。

奨学金を受給できない 7 割弱の留学生は、金銭的にかなり苦しい。苫小牧駒澤大学は国際文化学部という学部特性からも留学生支援に注力している大学なので他大学より手厚い補助があるとは言え、自活した上、年間 34 万円の授業料を負担するのは容易でない。

3-6 アルバイト

アルバイトはほぼ全員が望み、且つ新入生を除く大半が従事している

が、短期のアルバイトもあり、転職も頻繁である。その上アルバイトに限らず凡そ収入のことは書きたがらない。これは支援を打ち切られることを嫌っているためらしい。勤務時間も収入も、実際より少なめに書く傾向があるようだ。こうした事情で、有意のデータが取り難い。

イ. 月収10万円台1、8万円台6、7万円台9、6万円台10、5万円台8、4万円台6、3万円台2、無し12、回答合計54人。アルバイトをしている者の月収平均60,714円。(図23)

図23

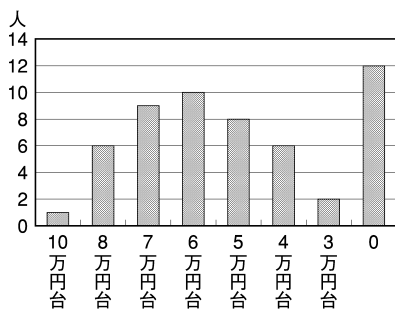
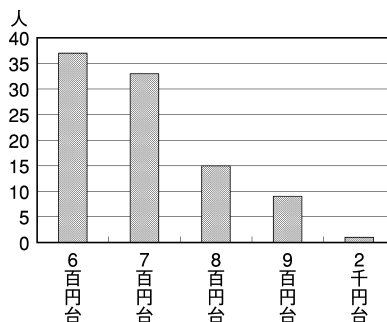


図24



ロ. 時給

600円台37、700円台33、800円台15、900円台9、2000円1、回答合計95人。平均時給749円98銭。(図24)

最低賃金付近で奮闘している姿が浮び上がってくる。^(註9)

尤も、日本語や日本事情に通じて来るにしたがい、より割の良い仕事に転じて行く。特に高給を取る者は何らかの特技があるのであろう。故国で調理師や漢方医の国家資格を取得している者もいる。

ハ. 就業時間

平均週18.7時間勤務。1日3～8時間で、週2～6日出勤という形

が多い。

数の上で多いのは運送会社の仕分作業、飲食店、コンビニエンス・ストアで、何れも授業時間帯と重複しない夜間、休日の仕事である。

最も多く、二桁の人数の留学生が働いている宅配便会社の仕分作業を一瞥してみよう。就業時間帯は午後6時-11時の宵勤と、午後11時-午前5時の深夜勤がある。時給は宵勤が800円、深夜勤が900円。何れも初任給で、2ヶ月経過するとから50円上がる。宵勤は20分程度、深夜勤は一時間の休憩を貰え、巡回バスの送迎が付く、という条件である。

仕事の内容は、程近き千歳空港から届いた荷物がベルトコンベアで次々流れて来るのをラインで待受け素早く持上げて運び分けるのであるから、純然たる肉体労働である。女子も多く勤務しているが、流石に重量物は男子が替って引受けるという。

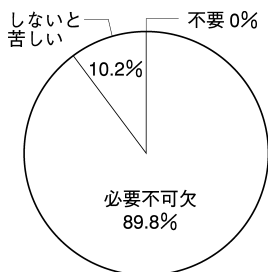
一番高額の深夜勤を選択して週5日出勤すれば1ヶ月4週として95,000円。これは最大値に近く、深夜勤を採れないこともあれば、5日出られないこともある。荷物が無くなれば仕事は早めに終わってしまい、時給制だから当然給料も減る。平均月収はまず7万円といったところであろう。

明方帰宅し、一眠りして登校、眠い眼を擦りつつ授業を聴く。より楽な宵勤を選べば日付の変る頃に帰宅できるが、勤務時間が一時間短いし、時給も百円下がるから、約二割の収入減になってしまう。翌朝授業がある場合は宵勤にし、そうでなければ深夜勤を採る、というようにしたいのであるが、職場の都合から必ずしも選択の自由は無い。

居酒屋もコンビニも事情はほぼ同じ。こうした涙ぐましい努力の末、少からぬ留学生が全優の成績を挙げている姿は一昔前の苦学生を想起せしめ、共感と賞讃の念を禁じ得ない。

二. アルバイトの必要性

図 25

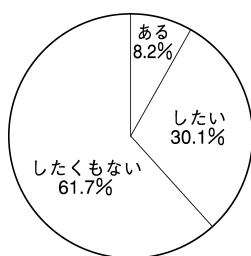


アルバイトをしていない者22人に、アルバイトをしたいか否かを問うたところ、全員が、したい、と答えた。次でアルバイトは日本で勉強を続けるために必要か、との問には必要不可欠106、不可欠ではないがしないと苦しい12、不要0、合計118人の回答を得た。(図25)

留学生は授業料を含む全経費として年間最低百万円を必要とする。比較的高額な文部科学省系の奨学金を受けるとしても、年間支給額は62万4千円に過ぎない。大抵の場合、仕送は望めないのであるから、不足分を補う道はアルバイトしかない。必要性は明らかである。幸か不幸か中国でも「工読」といって、働きながら学ぶことは一般的である。

長期休暇に大都市へ行ってアルバイトをしたことがあるか？

図 26



したことがある6、したことは無いがしたい22、したことはないし、したくもない45、合計73人。(図26)

留学生がアルバイトをするには法務省入国管理局の発給する資格外活動許可証が必要であるが、この許可は在籍校の地元、当該入管の地域管轄内で働く事を前提としている。

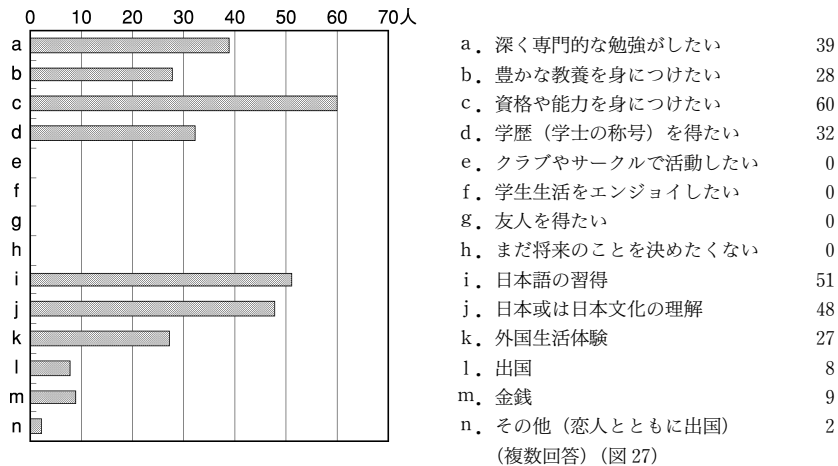
よって二ヶ月以内の短期とはいえ出稼ぎ同然に遠方へ出掛けて働くことは、一律に禁止されてはいないにしても或程度問題視される。また大学の目が届かず連絡も困難なこと、そのまま学問を遠ざかって労働者化する惧れがあることから好ましくない。

さりながら彼等にとってアルバイトは留学継続の要件であるから、長期休暇に地元で仕事が無ければ、有る場所へ行こうとする者の出てくるのは当然である。仕事の溢れている大都市は格別、地方では大学なり公的機関なりが好適なアルバイトを斡旋する必要があるだろう。

4. 学園生活

4-1 留学目的

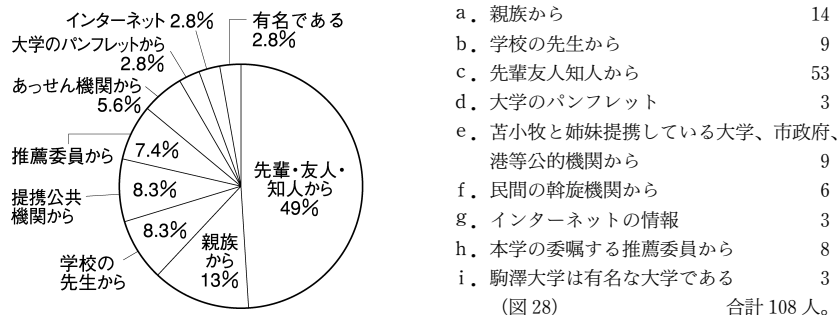
図 27



留学目的ははっきりと具体的、実利的で、漫然曖昧型、モラトリアム型は絶無である。この点、日本人学生とははっきり異なる。貧しい国々から来る彼等にとって、留学それ自体があまりにも非日常的で、困難を伴うからでもあろう。

4-2 苫小牧駒澤大学を知るに至った経路

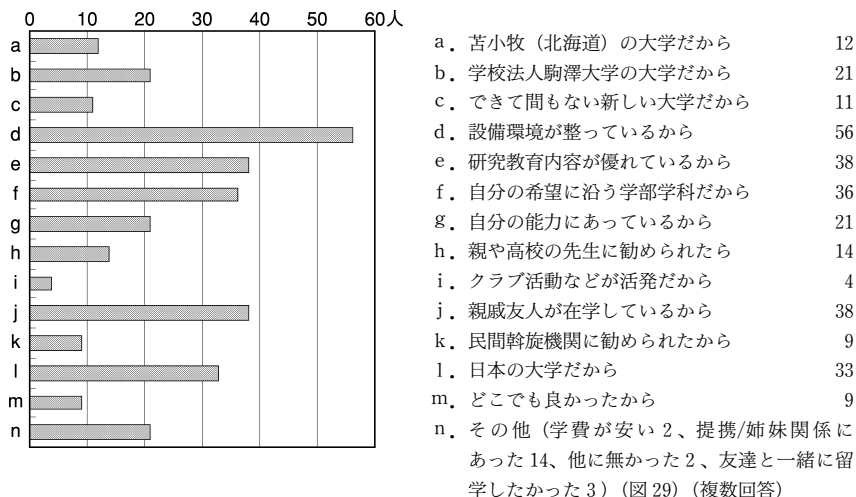
図 28



データにははっきり顕れていないが在學生、殊に親族知友からの口コミ情報が多いようである。これは中国人社会の特徴でもある。a という親族、c という先輩友人知人も、殆どが既に入學している親族なり先輩友人知人なりであって、要するに在學生である。今春まで三度の入試を扱った経験から断言できる。

4-3 学校選択理由

図 29

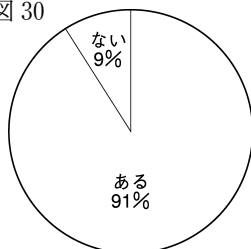


中国は科学の伝統を汲む学歴社会で、受験競争は激烈である。随って国内での大学進学は困難を極める。一方日本は少子化で入学が容易であり、しかも大学の水準はかえって高い。殊に中国人の最も学びたい経済学や経営学は、西側先進国が圧倒的に優越すると見られている。困難は留学資金だが、これも近年の経済成長で辛うじて手が届いて来た。こうして中国は今、留学ブームなのである。d、e、g、l、mはこうした脈絡で捉えられる。

5. 留学生生活の困苦

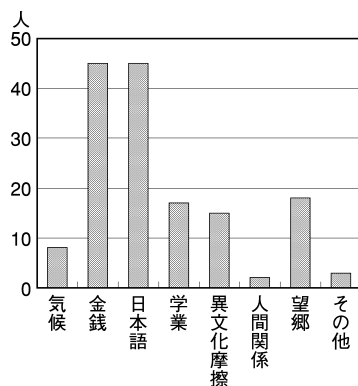
5-1 困っている問題があるか

図30 ある 101、ない 10、合計 111人。(図30)



5-2 問題の内容

図31



気候 8、金銭 45、日本語 45、学業 17、異文化摩擦 15、男女或は人間関係 2、望郷 18、その他 3。(複数回答) (図31)

タイ、カンボジアといった東南アジアから来た者は勿論、中国でも南方出身者には北海道の寒気がこたえる。逆にハルピン、瀋陽のような北方の留学生は故郷より暖かいと喜んでいる。

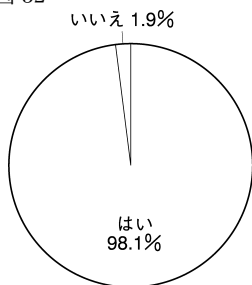
日本語は主に下級生の悩みである。特に非漢字圏からの留学生は漢字に苦しんでおり、大学の日本語教育に於ては彼らのために漢字の特訓を施している。

望郷云々は多くがホームシックという程のことではなく、帰りたいが帰れない、ということで、多分に経済的問題である。

総じて入学後、時間の経過と共に改善される問題が多い。

5-3 支援の要否

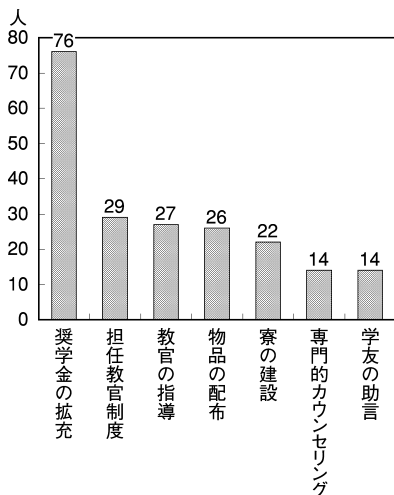
図 32



もっと誰かに助けて欲しいか はい 106、いいえ 2、合計 108 人。(図 32)

5-4 希望する支援の内容

図 33



奨学金の拡充 76、担任教官制度 29、教官の指導 27、物品の配布 26、寮の建設 22、専門的カウンセリング 14、学友の助言 14。(複数回答) (図 33)

「誰でも^{ママ}に助けてほしいです」という悲鳴のような声までであった。

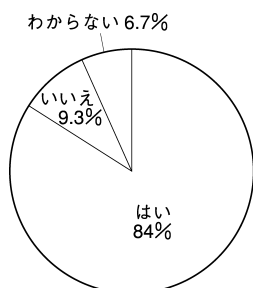
具体的には生活苦、学園生活や学業に悩んでいる様子が覗かれる。物品の配布というのは、今春まで地元有志の寄贈を受け家電品、家具といった耐久消費財を配布していたことを指す。

6. 進路

6-1 (退学、転校等をしないで) 本学を卒業するか

はい 63、いいえ 7、わからない 5、合計 75 人。(図 34)

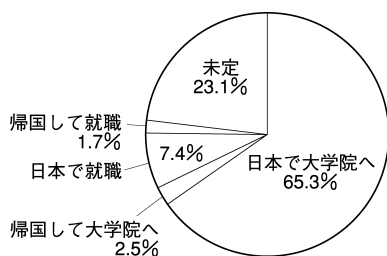
図 34



卒業しない理由は、姉妹校等他大学への転校、また本国で既に学士の称号を得ている者は大学院への入学である。留学生、殊に中国人は仕事でも学校でも比較的気軽に移る。これはステップ・アップということであり、アルバイトが少い、寒いという地方都市の立地に不満を述べる者はあるが、大学そのものへの不満は少い。

6-2 本学終了後の進路

図 35



日本で大学院進学 79、帰国して大学院進学 3、日本で就職 9、帰国して就職 2、未定 28、回答合計 121人。

(図 35)

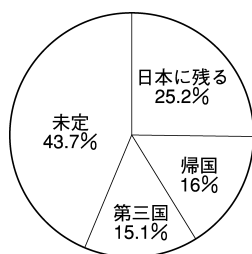
本設問には 121 人全員が回答したし、進路に関する問は何れも 100%近い回答率を得ている。以て関心の高さを知り得る。

意外にも大学院進学希望が圧倒的である。中国が科挙の伝統を享けた学歴社会で（現時点に於る上海の求人市場の相場では中卒、高卒、大卒の間にはそれぞれ初任給で 2 倍半づつの開きがある）、修士以上の学位が高く評価されることから、これはこれなりに本気の希望ではある。が、実はもう一つの動機が隠されている。大学院進学希望として見れば合計 67%であるが、グラフの配列すなわち視点を変えて日本残留希望として捉えれば 72.7%に達する。だからこそ帰国しての大学院進学希望は僅かなのである。進学と就職合せても、帰国希望は 4.2%に過ぎない。本心は日本残留である。

学部に比べて授業時間の少い、したがって時間的余裕の有る大学院こそ大都会へ進学し、アルバイトで存分に稼ぎたいという本音を蔵した者が少くないのである。中国人は学歴指向も強いが、金銭指向は更に強い。留学に要した費用も回収したい。だから本来なら、彼等は日本で就職したい。だが日本経済の不況長引く中、就職は困難である。敢えて日本に留まろうとするなら、大学院進学の方が容易である。こうして大学院進学へと向かうのである。

6-3 留学後の行き先

図 36



帰国 19、第三国へ行く 18、日本に残る 30、未定 52、計 119 人。(図 36)

第三国は米国が多く、カナダや豪州という声もある。一番行きたいのは米国だが、受入れてくれる先進国なら何処でも、ということである。が、東洋人として地球の裏側のヨーロッパよりは環太平洋圏の「隣国」の方が身近に感ずるといふ。

6-4 就職

① 日本での就職を希望しますか？

熱望する 20、希望する 49、どちらでも良い 39、希望しない 10、嫌だ 1、計 119 人。(図 37)

出来れば日本で就職したい。言葉や事情に慣れてもいるし豊であるから。かくて消極的希望まで算入すれば実に 90%に達する。

② 北海道、苫小牧と言った地元での就職を希望しますか？

熱望する 2、希望する 42、どちらでも良い 49、希望しない 24、嫌だ

3、計120人。(図38)

図37

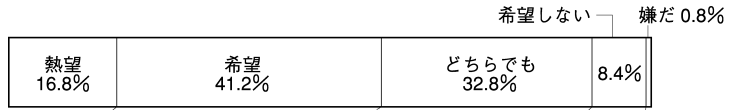
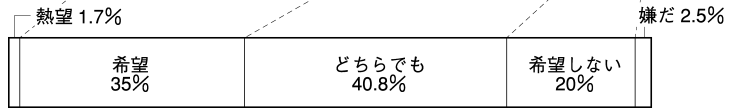


図38



同じ日本でも地元に対してはトーンダウンしている。地方は経済的に見て不利であり、文化的に見て詰らない、気候も寒い、ということである。

③ 日系企業に就職して祖国で働くことを希望するか

熱望する9、希望する41、どちらでも良い58、希望しない5、嫌だ0、計113人。(図39)

拒絶反応は少いにしても、不人気である。これは外国生活への憧れや経済格差が動機と見られる。

図39



図40



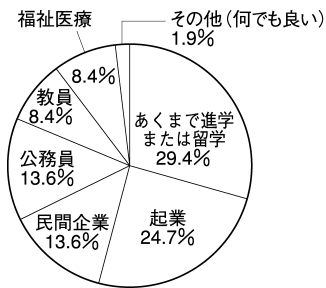
④ 日系企業に就職して第三国で働くことを希望しますか？

熱望する 14、希望する 39、どちらでも良い 43、希望しない 18、嫌だ 2、回答合計 116 人。(図 40)

熱望も忌避も共に増え、好悪がややはっきりしている。経済未発達
の国では海外駐在の機会が少いため、外国勤務を重大視する傾向も聴取さ
れた。

⑤ 就職分野別希望

図 41



a. 民間企業	21
b. 公務員	21
c. 教員	13
d. 社会福祉、医療施設関係	13
e. 自分で事業を起す (ベンチャー)	38
f. 親の後を継ぎ自営業 (含寺院)	0
g. あくまでも進学又は留学	45
h. フリーター	0
i. その他 (何でも良い)	3

(図 41)

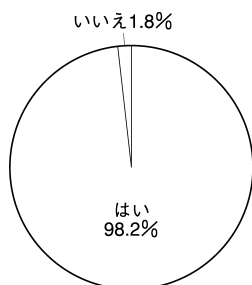
あくまで進学組を除けば起業・ベンチャーが最大多数を占めるが、自
立自営志向が強いのはビジネスに於る漢民族の特徴である。香港人曰く
「人に雇われて金持になった奴はいない」。筆者は台湾在勤経験がある
が、そこでは壮/中年になって未だ人に使われていることを恥る気風が
あった。どんどん転職し、独立する。故に大企業は育ち難く、勢い中小
零細ファミリービジネスに流れ易い。したがって本設問に於て他の選択

をした者も、多くは最終的に自ら経営者たらんとするであろう。希望専攻分野を問うと経済学や経営学を学びたいと望む者が多いのもこのためである。実際、成長過程にあるアジア諸国、就中歴史的変動期の中国はビジネスチャンスに溢れている。

7. 留学への満足度

7-1 留学してよかったか

図 42

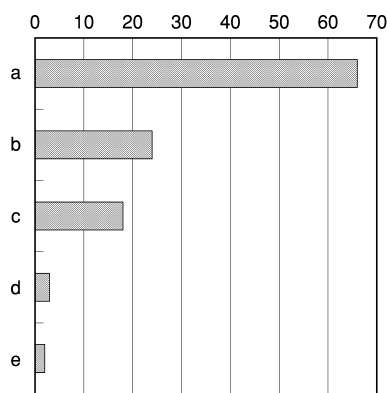


はい 109、いいえ 2、回答合計 111 人。

(図 42)

圧倒的満足と支持を得たことは喜ばしい。理由として「祖国で知りえなかったことを知り視野が広がって偏った考えが改まった」「自国で勉強するよりも効果的」「先生がやさしいです」「ともだちいっぱい」等々の賛辞が並ぶ。理由として挙げられたところを分類すると以下の通りである。(図 43)

図 43



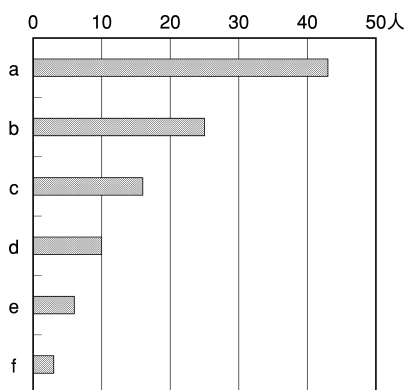
- | | |
|---------------------------------|----|
| a. 教育内容に対する満足 | 66 |
| b. 海外留学自体を素晴らしいチャンス、人生の充実と捉えるもの | 24 |
| c. 自己の能力やキャリアの向上 | 18 |
| d. 教官に対する満足を挙げるもの | 3 |
| e. 大学の環境、設備を称えるもの | 2 |

いいえ、と答えた2人は何れも生活苦を挙げた。

7-2 留学してみてよかったことは何か

図 44

上記とは別に留學生活の個別的苦

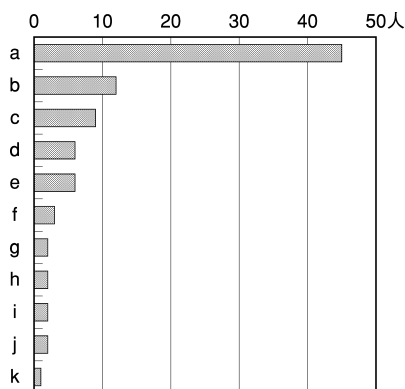


楽を問うてみた。

a. 学習成果	43
b. 日本や日本人を肯定するもの	25
c. 外国の一人暮らしで成長した	16
d. 留學生活の楽しさ	10
e. 先生たちが熱心で優しく親切	6
f. 友人ができた	3

7-3 留学してみて悪かったことは何か

図 45



a. 生活苦 (物価高、アルバイトが無い)	45
b. 孤独	12
c. 文化、習慣の違い	9
d. 気候 (冬の寒さ、雨、気候で体が悪くなった)	6
e. よくない友達ができ、人間の悪性をみた	6
f. 言葉がわからない	3
g. 日本の若者	2
h. どこに行っても同じだと感じました	2
i. 留學生の管理は難しい	2
j. 来る前の専門技術を忘れた	2
k. 住居	1

ホームシックは来日当初に於て強く、甚しきは精神の安定を欠くに至

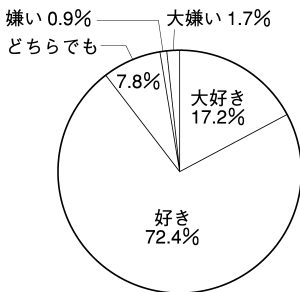
る女子学生もまま見られる。そこまで行かずとも、ああどうして私は日本留学なんかしたんだろう、と部屋で独り落込んでいる者は少ない。このことから、入学当初こそ精神面も含めた支援を重点的に行うべきであるが、新しい環境になれば、友人も出来るに随って鎮静に向うようである。上級生ともなると、卒業後も日本に留まろうと考える者が多い。

大学の設備、環境に対する不満は全く無い。心から満足しているようである。教員の指導に対しても満足度が非常に高い。これは、中国の大学が大規模ではあっても一般に設備は古く、不十分で汚いこと、中国人が自分と格別の縁故を持たない相手に対して不親切であること等を思えば納得できる感想である。

8. 好感度

8-1 苫小牧駒澤大学に対する好感度

図 46



大好き 20、好き 84、どちらでもない 9、嫌い 1、大嫌い 2、計 116 人。(図 46)

90%近い圧倒的好感度である。理由を分析すると以下の通りである。

- ・総合的評価に於て肯定する者（すばらしい 30、日本の大学は先進的で一流 2）
- ・教育内容に関するもの（先生は授業も面白く熱心で親切 8、幅広い知識、知性と教養を授かり日本文化も学べる 4）
- ・大学の方針に関するもの（留学生にやさしい 6）
- ・設備や環境に関するもの 14

自身の母校に対する愛校心、帰属意識は当然と見ることもできようが、大学が圧倒的支持を得ているのは喜ばしい。苫小牧駒澤大学は創立5年目なので、校舎や設備も新しく、キャンパスは広大で緑に覆われ、北に樽前山、南に太平洋を臨み、眺望勝れている。こうした視覚的美しさも、若者の心を捉えているようである。回収したアンケート用紙には綺麗、清潔、美しい、良好な環境、最新設備云々、といった賛辞が並んでいる。

尤も、転出希望も少くないので、安心してもらえない。留学生たちは万事機敏で積極的、仕事先も呆気無く変えれば、学校も替える。香港人が最も顕著であるが、社会人、殊に被用者は常にもっと割の良い仕事はないかと転職先を探している。同じ文化的背景を持つ中国人留学生もこうした感覚と無縁ではなく、邦人学生より高い転校希望を蔵している。国公立大学（学費が安いから）、東京大阪の大学（アルバイトを探しやすいから）、東京の駒澤大学や札幌の北海道大学（加えてグレードが高いから）等々である。今春だけでも数人の留学生が他大学へ転じている。彼等が多くの手を背負って選択の自由に乏しいことを思えば、これは小さな比率ではない。

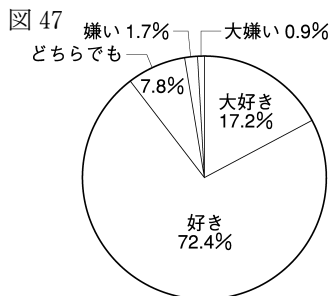
不満として、大学のカリキュラムに専門性が薄い。これはサンプル校が国際文化学部のみで単科大学的存在で留学生に需要の多い経済、経営関係の科目が少ないという特有の事情に基くから、このまま全国に一般化は出来ない。

8-2 北海道、苫小牧に対する好感度

大好き 20、好き 84、どちらでもない 9、嫌い 2、大嫌い 1、計 116 人。(図 47)

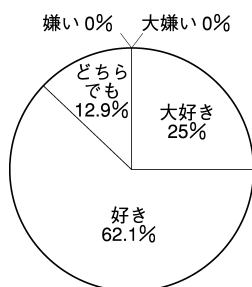
「苫小牧市民が優しかった」「苫小牧の人は親切」といった指摘もある。苫小牧市民だけが日本の他地域より優しく親切とは考えられない

が、留学生は故国と比べてそう感じているようだ。



8-3 日本に対する好感度

図 48



大好き 29、好き 72、どちらでもない 15、嫌い 0、大嫌い 0、計 116 人。(図 48)

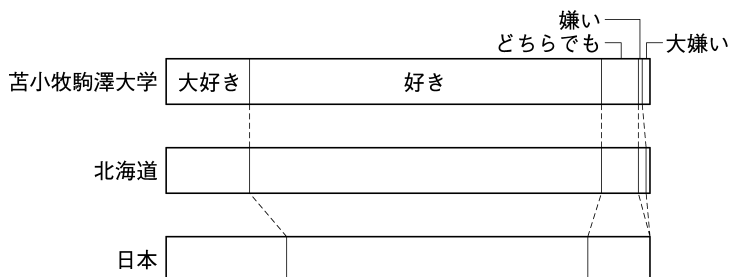
大部分が好感を示している。その内訳は

- ・日本人の資質や日本文化に関するもの（日本は有名で伝統文化も優れている 2、人々の素質が甚だ高い 5、日本人は優しく親切 9、礼儀正しい挨拶に文明国を感ずる 2）
- ・自然環境に関するもの 2
- ・社会環境にかんするもの（日本は先進国家 3、小さいが綺麗で科学技術の進んだ国 2、清潔 5、安全で平和 3）

「初め好きでやがて嫌いになって今では普通になった」という重い指摘もあった。

好感度を比較してみよう。(図 49)

図 49



好感度に於て、地元北海道、苫小牧が日本全体よりやや劣っているのは興味深い。外国人が日本と聞いて、先ず思い浮かべる土地は東京、名古屋、大阪といった大都市、或は京都、奈良、鎌倉といった古都である。若者の好みとして、また苦学生としてアルバイトを探す便宜からも、地方都市よりもそういった著名な都市を好むことは理解できる。

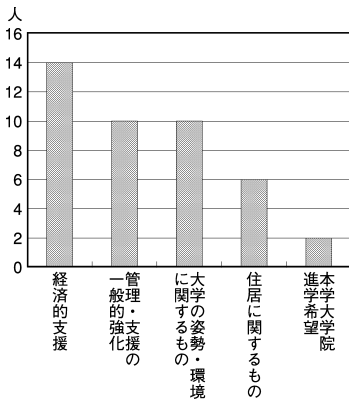
また漠然たる好悪の情に於て差が小さいにしても、現実に住むという選択になるとはっきりした大都市指向が顕れることを見落す訳に行かない。

なお掲示の図表からは直接読み取れないが、高学年ほど日本への好感度が高く、低学年ほど低い。これは中国国内で反日宣伝が浸透しているためと考えられる。「初めて日本へ来る時は怖かった」と迄言う中国人留学生もいた。来日後、実体験を重ねるにつれて自らの日本人像を形成し、植付けられたマイナスイメージが修正されて行くものようである。

9. 希望事項

- ・ 経済的支援を訴えるもの 14 (学費の減免 10、アルバイトの斡旋 4、「アルバイトさえあれば 4 年間頑張り通せる」)

図 50



- ・留学生に対する管理・支援の一般的強化を訴えるもの 10 「もっともっと助けてください」
- ・大学の姿勢・環境に関するもの 10 (公平な扱いを 2、留学生に理解を 2、図書館の開館時間延長 2、学科や科目を増設 4、学生食堂の料理をもっと美味しく 2)
- ・住居に関するもの 6 (転居 5、暖房の不備 1 「日本人学生の多いアパートで日本語能力を養いたい」)

- ・本学大学院進学希望 2 (図 50)

中国には従来、私企業や、税金すらも無かったくらいであるから、私立学校も無かった。彼等の知っている自国の公立学校は学費や寮費が安い。家賃、公共料金も只同然であった。随って高額の学費家賃等を払うということは彼等の習慣には無いことで、元々の物価の違いもあって不満を覚えるのである。

また中国の大学は全寮制である。随って、自費でアパートを探し備品を揃えるのも、彼等の文化に無い事で、入学直ちに入室し、入室直ちに自習を開始できると思っている。アパートに入ってから驚愕し「何もありません、全く何もありません」と訴えて来た例も有る。事前に説明しても、必ずしも浸透徹底しない。まさに異文化摩擦である。

V. おわりに

一般に留学生は、来日直後は日本語の未熟、文化摩擦、生活苦、大学生活への不慣れなど数多の困難に直面するが、多くは時の経過と共に著

しく改善される。その意味で、下級生ほど苦しみ、上級生になると寧ろ留學生活を楽しんでいる傾向がある。乗用車を入手して乗り回す者さえ必ずしも例外的存在ではない。

今回の調査対象 158 人、回答者 121 人が下級生になるほど人数の増える学年ピラミッド構造を成している。これは現時点に於る留學生の学年別構成をそのまま反映するものであるにしても、データが下級生に偏る傾向はあろう。調査手法としても学年別調査を行わなかったので、進級と共にどのように変化して行くかを捉えることは出来なかった。仮に各学年同数の集団で平均値を取るならば、もう少し余裕のある姿が浮かび上がる可能性があることを付記して置く。

以上、アンケートと聴取調査から浮び上がる典型的な留學生のありようは、青雲の志に燃え親戚中から百万円（人民元で七万円）程掻き集めて来日し、入学後はアルバイトに努め仕送無しで辛うじて自活、やがて日本にも慣れ余裕が出て来たら追々増収を図って借金の弁済に取掛る、上級生ともなれば日本語にも日本事情にも通じ、卒業の目処も着き、なお暫く日本に留まることを望んで大学院進学を期す、というものである。

よって指導、支援に当っては、彼等留學生が最も困難に直面している入学直後から一、二年の間に重点を指向すべきである。また、上級生に対しては就職だけでなく大学院進学をも念頭に置いた教育、指導をなさねばならない。

留学生生活に関するアンケート

平成14年7-8月実施

姓名 学生番号 (記入しなくても構いません)

1. あなたの国籍、出身地、性別、学年、年齢、来日時期等を教えてください。

国籍 出身地 性別 男 女

婚姻(既婚 未婚) 学年 年齢 来日年月日

入学/着校年月日 帰国予定年月日

あなたの学歴を記して下さい。

2. 次にあなたの住居についてお尋ねします。居住形態は何ですか。

a. 自宅 b. アパート c. 下宿 d. その他()

3. あなたの居室に住む人は、あなた自身を含めて何人ですか？

4. 母国語を除き、あなたの語学力はどの程度ですか？

日本語能力試験1級程度 2級程度 3級程度 4級程度 殆どできない

() 語 程度

5. あなたの留学前の職業は何でしたか？

6. あなたの故国に残した家族の一家の月収は幾らですか？

7. 以下はあなた自身の経済生活についての質問です。一ヶ月の平均収入と内訳を教えてください。

奨学金

アルバイト

仕送り

その他

合計

8. 一ヶ月の平均支出と内訳を教えてください。

家賃

光熱水道費

通信費

学費(除授業料)

その他

合計

9. あなたはアルバイトをしていますか？ はい いいえ

10. Y. している人に

それは大学の授業のある時期ですか、春夏冬の長期休暇中ですか、それとも通年です

- a. 親族から
 - b. 学校の先生から
 - c. 先輩友人から
 - d. 大学のパンフレット
 - e. 苫小牧駒澤大学と姉妹提携している大学、市政府、港等の公的機関から
 - f. 民間の斡旋機関から
 - g. インターネットの情報
 - h. 本学の委嘱する推薦委員から
 - i. 駒澤大学は有名な大学である
 - j. その他 ()
16. あなたが苫小牧駒澤大学国際文化学部を選んだ理由は何か (3つまで)。
- a. 苫小牧 (北海道) の大学であるから
 - b. 学校法人駒澤大学の大学であるから
 - c. できて間もない新しい大学であるから
 - d. 設備環境が整っているから
 - e. 研究教育内容が優れているから
 - f. 自分の希望に沿う学部学科であるから
 - g. 自分の能力にあっているから
 - h. 親や高校の先生などに勧められたら
 - i. クラブ活動などが活発だから
 - j. 親戚友人が在学しているから
 - k. 斡旋仲介業者に勧められたから
 - l. 日本の大学だから
 - m. どこでも良かったから
 - n. その他 ()
17. 留学生活で困っている問題がありますか? はい いいえ
18. Y. 有ると答えた人に。
それはどんな問題ですか 気候、金銭、日本語、学業、異文化摩擦、男女或は人間関係、望郷其他情緒面など出来るだけ具体的に書いて下さい。
19. もっと誰かに助けて欲しいと思いますか? はい いいえ
20. Y. 助けて欲しいなら、それはどのような助けですか?
教官の指導、学友の助言、奨学金の拡充、寮の建設、専門的カウンセリング、物品の給付、担任教官 (補導老師) など、出来るだけ具体的に書いて下さい。

21. (退学、転校等しないで) 本学を卒業しますか? はい いいえ
22. n. 卒業しないと答えた人に。何故、どういう進路を考えての事ですか?
23. 次に将来の進路について質問します。卒業後はどのような分野を希望しますか。
- a. 民間企業
 - b. 公務員
 - c. 教員
 - d. 社会福祉、医療施設関係
 - e. 自分で事業を起す (ベンチャー)
 - f. 親の後を継ぎ自営業 (含寺院)
 - g. 進学及び留学
 - h. フリーター
 - i. その他 ()
24. 滞在国との組合せから分類すると、次の何れに該当しますか?
- a. 帰国して大学院進学
 - b. 日本で大学院進学
 - c. 帰国して就職
 - d. 日本で就職
 - e. 未定
25. 本学に限らず将来の進学等を含め、日本での留学全日程を終えたらどこの国で暮らしますか?
- a. 帰国
 - b. 第三国 () へ行く
 - c. 日本に残る
 - d. 未定
26. 日本での就職を希望しますか?
- a. 熱望する
 - b. 希望する
 - c. どちらでも良い
 - d. 希望しない
 - e. 嫌だ
27. 北海道や苫小牧等での就職を希望しますか?
- a. 熱望する
 - b. 希望する
 - c. どちらでも良い
 - d. 希望しない
 - e. 嫌だ
28. 日本企業、若くは日系企業に就職してあなたの祖国で働くことを希望しますか?
- a. 熱望する
 - b. 希望する
 - c. どちらでも良い
 - d. 希望しない
 - e. 嫌だ
29. 日本企業、若くは日系企業に就職して第三国で働くことを希望しますか?
- a. 熱望する
 - b. 希望する
 - c. どちらでも良い
 - d. 希望しない
 - e. 嫌だ
30. 留学して良かったと思いますか? はい いいえ
31. それは何故ですか?
32. 留学してみて良かった事は何ですか?
33. 留学してみて悪かった事は何ですか?
34. 日本や本学に対する感想はいかがですか?
35. 苫小牧駒澤大学が好きですか?
- a. 大好き
 - b. 好き
 - c. どちらでもない
 - d. 嫌い
 - e. 大嫌い

36. 北海道、苫小牧が好きですか？

- a. 大好き b. 好き c. どちらでもない d. 嫌い e. 大嫌い

37. 日本が好きですか？

- a. 大好き b. 好き c. どちらでもない d. 嫌い e. 大嫌い

38. 特に希望する点があれば書いてください。

(以上、英/中訳文省略)^(註10)

註1 文部科学省留学生課調べ。http://www.mext.go.jp/

註2 同上。なお、留学交流事務研究会編著『留学交流執務ハンドブック』平成14年度版。

註3 庶民の心情には男尊女卑の傾向も見られると指摘されている。

註4 平成13年9月入学者を含む。

註5 朝鮮語を挙げる者は何れも中華人民共和国延辺朝鮮族自治州の出身で、これが母語である。

註6 人民元は文章語として「圓」「YEN」と記すので日本円と混同し易い。1元≒15円。

註7 文部省/日本国際教育協会私費外国人留学生学習奨励費。月額52,000円。

註8 北海道私費外国人留学生学習奨励金。月額30,000円。

註9 最低賃金法に依り日額5,095円、時給637円である。これはアンケート調査の時点に於て調査地に於て有効であった平成13年度地域別最低賃金額に拠る。例外的に産業別最低賃金額に拠る場合も有り得るが、金額に大きな違いは無い)

註10 サンプル校の学事課学生係が新入生一般に対して行っているアンケートを、内外国人比較の便宜を考慮し努めて取入れた。そのため設問中に若干の不整合を生じた。

(いしだ きよし・本学講師)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

“DON'T MEAN NOTHIN”

Teaching English to the “Freeter” Generation

フリーター世代に英語をおしえるということ

Robert Carl OLSON

ロバート・カール・オルソン

KEY WORDS : “Freeter” phenomena, Structural reform, Feedback, Content-based evaluation, Bubble-economy education

ABSTRACT

Japan is experiencing a new phenomena — a generation that is questioning the values and expectations of previous generations. This group, known by some as “Parasite Singles (1)” and others as “Freeters,” is partially responsible for changes in Japan. Due in part to the “Freeter,” Higher Education in Japan is evolving.

This paper will explore the following three topics:

- 1.) The introduction of the “Freeter.”
- 2.) Various changes in education resulting from the “Freeter.”
- 3.) Classroom management skills that have proven successful.

Part One; The “Freeter” Phenomena

What is a “Freeter”

The “Freeter” can be defined in many ways. Two possible definitions are:

- 1.) A member of the young-adult generation (approximate age ranges from 18 to 30) who does not enter the work place on a full-time basis and has all financial support derived from part-time employment or family members, most likely the parents.
- 2.) A younger member of society who questions social involvement and responsibility in exchange for the freedom to pursue individual interests.

How — and why — did the “Freeter” come to exist?

Any serious discussion of the “Freeter” phenomena must be preceded by an exploration as to *why* a generation would remove itself from mainstream society. Research suggests there are three main reasons:

Changes in Japan’s financial society. Lifetime employment and the guarantee of a comfortable retirement — the pillars of Japan’s workforce — have crumbled. The “Freeters” know that regardless of how diligently they may work, they will not receive the same benefits as those before them.

Changes in Japan’s educational society. Some aspects of Japan’s, educational system are static and do not adequately prepare

students for the 21st Century. Exacerbating the problem is the previously mentioned rewards of lifetime employment can no longer be used to lure students into compliance.

Changes in Japan’s society. The definition of socially acceptable behavior is changing. Many “Freeters” want more freedom and wish for an end to the status quo.

I suggest that some “Freeters” see the *Game of Contemporary Japanese Life* as unfair and un-winnable and their response is simple — since they cannot win, they will not play.

The “Freeters” are likely filling a need

I refuse to use the term “parasite single” because to do so suggests that this generation suddenly mutated into a self-serving organism that feeds on others and serves no purpose. Nothing could be further from the truth.

Before offering what may appear to be support for the “Freeters,” let me say that I have problems with this group as a whole. I find the “Freeter” generation to be unmotivated and, more alarmingly, unimaginative. Ask most “Freeters” what will make them happy and you most likely get a blank stare or a shrug of the shoulders followed by the phrase, “*imi nai jiyān* (Don’t mean nothing),” which is the de facto motto of this group.

Having said that, their contribution to Japan and what Japan is to become in the 21st Century cannot be denied.

Whether by design or default, the “Freeter” generation is forcing

Japan to examine its way of life and — miraculously — change.

Parallels to Martin Luther King's Non-Violent Change

Martin Luther King, the American Civil Rights leader of the 1960's, spoke of non-violent change as the best method for achieving social equality. Martin Luther King achieved a number of his objectives but not without a significant amount of residual bloodshed. By contrast, the "Freeters" may be Japan's best catalyst for necessary social change without the burning buildings and riot police associated with the 1960's.

The best example of this claim may lie in the problem of the "welfare system." Simply stated, the number of people expecting to receive support from the government exceeds those who are providing support in the form of income taxes, high insurance premiums, etc. Given a long enough time frame, this could force Japan's social welfare system to come to a grinding halt. The "Freeter," by refusing to enter the workforce, exacerbates this dilemma.

There is *nothing* that can be done by the government in regards to punishing the "Freeters:" no crimes are being committed as there are no laws requiring those able or eligible to find employment. The only other option is for the government and others involved is to actually change the various systems that have grown stagnant. It is in this context that the "Freeters" may actually achieve what Martin Luther King sacrificed his life for — meaningful social change accomplished in a non-violent manner.

Japan doesn’t change

And while on the subject of social change in Japan, may I be blunt?

Japan doesn’t change.

Japan bends, blinks, dodges and ducks but it does not change. Support for “Structural reform” is a mile wide and an inch deep: everyone likes the idea but no one is willing to threaten the existing comfort zones necessary bring about change. Since 1993, seven prime ministers have been elected, each with the promise of reforming the current, out-dated system. While former Prime Minister Keizo Obuchi passed away while in office and did not have the benefit of his full term, none of the other prime ministers including current Prime Minister Junichiro Koizumi have accomplished anything remotely resembling reform.

Defenders of the Old Guard state that Japan is changing but the signs of progress are not being recognized. Apologists attempt to explain that the current system is not built for change while another group that resembles the politically correct movement of the United States insists that Japan’s special circumstances are not being taken into consideration. Whatever the reason, Japan in many ways has become a monolith so resistant to reform that any change, social or political, is so slow that erosion appears swift by comparison. In this sense, only a radical element such as the “Freeter” has a scintilla of a chance of actually inducing change.

Part Two; A Discussion on Teaching the “Freeter”

An Academic Detente

We live in a consumer-driven society; we know what we want, we know how much we can pay and we make economic decisions within those parameters. It is considered foolish to invest resources into anything perceived as irrelevant and today’s students invest their most precious resource — time — along these lines. Today’s educators often find that academia and authority are not enough to educationally motivate the “Freeter” generation while the “Freeters” are finding that their passive ways will no longer be tolerated.

A compromise is necessary: teachers who confront the fact that certain aspects of the current educational machine are inadequate and take active measures to improve them and students who depart from their passive roles in the educational process and possibly Life itself.

How can this be accomplished?

I believe that solid educational reform begins with exploring the following characteristics and their role in any curriculum.

- Expectations.
- Feedback.
- Evaluation.

Expectations; Educational contracts

Consider airline travel. Before boarding any aircraft, travelers have answered one essential question: where do they want to go?

After answering that question, the traveler and the travel-industry worker agree to fulfill a number of demands that will result in safe travel for the traveler and financial reward for the travel industry worker. The purchasing of an airline ticket serves as the contract.

I suggest students and teachers should reach a consensus on available academic destinations, the criteria for each, the rewards for success and consequences for failure. Included in this agreement should be what the students can expect from the teacher.

What I am referring to is a syllabus.

Too often, though, a syllabus is little more than a list of rules and regulations that follows the teacher's name and office phone number and the list of books necessary for the course. What is needed is an academic contract: if I as the teacher present discourse on the following subjects in a manner that is comprehensible and if you the student attend class, pay attention, etc. you the student will have acquired the following skills. Both parties should get something. Students should know what will be taught, how it will be taught and how they will be evaluated. This will empower students to decide if this course suits their particular academic needs and then put forth their best effort. Teachers should know what the students' expectations for the class is and that they (students) will work diligently to achieve them. This will empower teachers to provide their best possible discourse.

For example, before the beginning of the semester I ask my students to record which of the following categories best describes their reason for entering into and the amount of effort they are willing to invest in a Communication English course.

<u>An English Speaker</u>	<u>Use of English/College Credit</u>	<u>College Credit</u>
100%-80%	79%-70%	69%-60%
This student will likely use English professionally or recreationally throughout his or her life.	This student will likely use English at some point in his or her life but not very often.	This student has no interest in English; wishes only for credit.
This student uses and understands the English we study effectively.	This student has limited ability to use the English we study.	This student was able to use the English studied at testing times.
0-1 absences/semester.	1-2 absences/semester.	2-3 absences/semester.
Average score 80%-plus on all written/oral tests and quizzes.	Average score approx. 75% on all written/oral tests and quizzes.	Passes (60%+) all written/oral tests and quizzes.
Student displays high level of effort through punctuality and continuous participation.	Students are punctual and usually participate.	Students are punctual and do the required activities.

In having each student choose the category that best represents his or her goal and commitment level, I accomplish three objectives.

- #1.) I know who “my players” are; I have an indication about who is serious about learning English and who may just be along for a 2-credit point ride.

- #2.) By committing to one of the categories listed above, the students hold me accountable for providing the necessary instruction that provides an opportunity to achieve that objective.
- #3.) By committing to one of the categories listed above, the students are held accountable to the requirements of their respective choices.

Some may argue that placing students in categories, via self-selection or otherwise, will limit student progress and squelch interest and ambition. My response to such claims is:

- (1) I believe that this practice increases productivity and ambition as students are forced to assume an active role in their education by contemplating and then stating their goals for this course.
- (2) Students have a clear understanding of what is expected from them and,
- (3) This self-selection model reflects our consumer driven society — we would invest money only in something we see as necessary, why should we expect students to act differently towards course selection?

I do not advocate “credit cramming” or selecting courses based only on apparent ease: rather I support courses that have transparent expectations, objectives and consequences.

Learning Blind; The Role of Feedback

If one is ever interested in viewing an example of exceptional teaching, visit a marine aquarium and watch the animals handlers train the dolphins. When trying to teach a dolphin to jump over a pole, the handlers first put the pole under the water. When the dolphin swims over it, he or she receives a fish and a lot of praise. After enough success, the bar is raised until it is just above the surface of the water. When the dolphin jumps over it, the praise and fish are provided. Finally, the dolphin has learned that the goal is to jump over the bar and will do so to lengths of over four meters. The key, say the handlers, is constant and continuous feedback.

I suspect that animal trainers would be successful universities instructors.

The purpose of this passage is to highlight that feedback is to learning what gauges are to the airplane pilot who is flying in a storm — without them, the pilot is blind and will most likely crash. While I am not advocating that an English conversation teacher throw a metaphorical fish at every student who utters a comprehensible sentence, I am stating that feedback cannot wait until the test at the end of the semester. For students to learn, they must be made aware of their successes and failures in a timely fashion; i. e. the sooner the better. I provide my students with the following forms of feedback:

- Daily interaction with every student where strengths and weaknesses are reported. Positive feedback is done publicly while negative feedback is done privately.
- A numerical score of 1-4 given after every class that corre-

sponds with that student’s level of participation and effort.

- A monthly written or oral test covering the latest vocabulary and questions.
- A mid-term period where each student is given their current score. Students with score less than 60% are removed from the class.
- An oral exam at the end of the semester.

But these suggestions should not eclipse the need for student-to-teacher feedback. A reoccurring theme of this paper is that the students must become active participants in the educational process and one way educators must facilitate this process is through open channels of communication. Again, a number of vehicles are acceptable.

- Evaluations that students use to rate teacher performance. These can be used throughout the semester as well as at the end of one.
- Communication with any university administrative departments that handle class registration.
- Daily interaction with students in which teachers encourage student input.
- Instant computerized surveys. Tomakomai Komazawa University has implemented a revolutionary computer system known as “Brain Child.” This system instantly records and displays student responses while protecting their privacy. It has been beneficial to instructors with large classes who seek immediate student feedback.

Whatever system or methods are implemented, the importance of feedback cannot be overstated.

Evaluation; measuring what matters

Evaluation, the final and maybe most difficult segment in regards to teaching the “Freeta,” should reflect what the student has achieved. If the student has mastered the material, the student’s final score should be high. Likewise, if the student has failed to learn the material, he or she should not be allowed to graduate to the next level, i. e. fail and repeat the course.

This common-sense explanation is so simple that it borders on being offensive but those who have taught at the university level in Japan know that “certified” and “qualified” are not necessarily one in the same. To better understand this the unique system of Japanese university evaluation, a brief history lesson is necessary.

Bubble Economy Education

In the 1980’s Japan became an economic power and securing employment at a successful company guaranteed a life free from financial worry. Entrance into such a company depended on the recruit’s university — the more prestigious the university, the better the chances of employment. Once accepted into the company, he or she was trained to become a member of that economic team.

This spiral (whether upwards or downwards is debatable) begins in junior high school when many students attend specialized “cram schools” to help them prepare for the nation-wide high school entrance exams. The better the student’s exam, the better the high

school he or she will enter and the better the chances of entering a superior university which leads to the safe employment craved by many Japanese.

This system is grueling and often referred to as “exam hell” by both teachers and students. But there is a four-year lull between the tests and the training.

It is called university life.

While students do attend classes and take tests, the unspoken purpose of university life is to offer a break from the rigors of studying. If students were asked to rank the usual college activities that include “school festivals,” “sports,” “part-time jobs,” and etc. in terms of importance, “studying” would be in the top ten but likely near the bottom of it.

This is not intended to be offensive or throw mud in the eye of universities. Rather, it is intended to highlight the chasm between the educational system of the Bubble-Economy and the current economic system itself; the Bubble-Economy system produced solid workers who worked well within parameters set by the company but current economic conditions require people who can think creatively and globally — something Bubble-Economy education cannot produce.

Evaluation in the Bubble-economy classroom

If academic achievement is not the highest priority of university life, what determines a student’s success in a given course?

The simple answer is attendance.

The attendance record is often as important as test scores when it comes time to hand out grades. Students who come to class and “try hard” and have nice personalities are often rewarded the highest grades. This form of evaluation is sometimes referred to as “citizenship grading” and it collides head on with the content evaluation that I am advocating.

Every semester, I have approximately a dozen students who do not understand why they have failed the course even though they may have attended the majority of classes. My answer that the students didn’t appear to learn anything (immediately followed by an impromptu oral exam that confirms this hypothesis) is often met with disbelief and a reiteration of the original protest — *but I came to class!!*

I have noticed an interesting phenomena: there are pockets of students who every week will come to class early in order to grab the back seats, do nothing during class, sprint out of the room when class ends, not be able to produce much if any English during the various tests who are incredulous when they do not pass the course. I do not believe that these students are only found in Japan, but I do believe that they can be found in large numbers in Japan.

Content-based evaluation

I suggest the greatest difference between “citizenship grading” and “content-based evaluation” is the passive nature of the former and the active nature of the latter. Grades, tests scores and other evaluation vehicles should be like a mirror, reflecting what the student has accomplished. They should not be seen as favors or

curses randomly delivered from an academic deity to a classroom congregation. There is only one thing I dislike hearing more than, “How come you didn’t pass me?” and that is “Thank you for giving me the good grade.” My response to both is, “I didn’t do anything; you did it (whatever “it” may be) by yourself.”

A final word on content-based evaluation: it has been my experience that when the previously mentioned feedback is utilized effectively, evaluation almost becomes redundant as my students can always — and accurately — estimate their current standing in the course.

PART THREE; CONSIDERATIONS AND CONSTRAINTS

Walking the walk

I believe that many research papers often have two weaknesses:

- 1.) Research papers tend to focus exclusively on description and ignore prescription. I appreciate knowing what the problem is and why it is a problem but I feel cheated when solutions are not offered.
- 2.) The solutions that research papers offer often appear to have been made in a vacuum, meaning that the solutions seem plausible only in theory and would most likely not succeed in the classroom.

This paper will attempt to break with this tradition by first recognizing probable difficulties and then offering strategies that

have proven effective in my courses.

Administrative communication

It is not enough to inform the students of your classroom policies; the front office, student affairs and any other relevant university personnel have the right and the responsibility to know how their students will be educated. While this is likely true in a number of countries, it takes on special importance in Japan, where harmony and cooperation are social pillars.

There is also another reason to inform administration of class policies — to raise the standards of the front office as well as those of the student's.

I will illustrate through another brief insight into Japanese society.

I earlier wrote that recruitment into a prestigious company depended largely on the university attended and on any social contacts. Social contacts are to Japan what grease is to gears: a major increase in speed and efficiency. One of the best forms of social contact is to be an “old boy” (OB), i. e. if you graduate from University “X,” your chances of gaining employment at University “X” increase significantly. It should, therefore, come as no surprise to find a significant number of administrators are actually former students — who most likely graduated under the academic standards of the Bubble-economy and see no problems with it.

Imagine this scenario.

The teacher informs students of the absence policy: missing four classes for any reason will result in course failure. “Kenji” is

swimmer who misses two classes because of swimming practice and another two for nebulous reasons. The bad news is broken to Kenji but, rather than learning a valuable lesson about attendance, Kenji stomps down to the front office and complains that he is being booted from class because of absences even though two were “excused.” The front office worker, he himself a graduate from this school and a former member of the soccer club, understands that the school historically has made exceptions in these cases and decides, for the sake of harmony, to intervene. This dilemma will likely reach one of the following conclusions:

- 1.) The teacher will be pressured to allow the student to return to class. This will undercut the teacher’s authority and leave him or her resentful of the front office.
- 2.) The teacher will not back down and the student will not be allowed to return to class but the conflict will leave the front office staff member, who has to handle the irritated student, resentful of the teacher.

Neither outcome is good; trust and cooperation have been sacrificed and the quality of education will decrease.

The alternative

Now consider the same situation with the communication component added. I approached the front office with my syllabus before the beginning of the semester. One member expressed concerns about the four-absences policy. His concern was that stu-

dents would miss out on other activities, my concern was that the level of learning would be compromised.

What was the result?

We compromised.

By altering the schedule so my classes were evenly distributed throughout the week, a transfer system was created that allows students the option of changing classes if there is another conflict. This solution provided a win-win-win situation for all involved.

- I was able to maintain the integrity of my class while retaining the support of the front office.
- The front office staff understands and has influenced my class policy and, as a result, will not have to mediate any teacher-student disputes.
- The students will be held responsible for attendance but still have the flexibility to accommodate extra curricular activities.

The key was communication.

Moving from passive conformity to the active individuality

A number of years ago I was extorting a non-responsive class to answer a question when a student raised his hand and gave me a crash-course on Japanese culture. Over the ocean of silence he yelled from the back of room, “Japanese are shy and don’t answer questions.” This concise answer revealed two important points: the Japanese tendency towards shyness and the willingness of some to use culture as a crutch. I won’t disagree with anyone who says that

Asian culture is more reserved than Western culture and I agree that cultural differences should be respected but I refuse to allow cultural traits — real or otherwise — to be used as excuses for not learning.

During my ten years in Japan, I have noticed four traits that encourage passiveness: shyness, group mentality, excuse mining and an over-reliance on English courses and native speakers to teach them.

Shyness.

The goal regarding shyness should be to foster self-segregation of those who maybe reserved and those who may attempt to use a stereotype to avoid effort. I begin each semester by telling students that communication (preferably speaking) in this class is expected regardless of personalities or culture and those who are uncomfortable with that and unable to comply should seek a different class. I continue by saying that those who wish to overcome their shyness will find this class invaluable — as I employ many of the same methods my teachers used to help me overcome the shyness of my earlier years!

Group mentality.

In Japan, and I suspect in Asia, the group is often more important than the individual. This view, though beneficial in many cases, is often responsible for the silence in ESL classrooms: if the group doesn’t speak, I will not speak, therefore, no one speaks. My response to this challenge is to remind the students that, in this class as in Life, they will be judged as individuals and this form of

evaluation will increase as we progress into the 21st Century.

I also try to use the group mentality to my advantage by rearranging the room so that desks form a square around the perimeter of the room. Using the seats-in-rows formation means most students have a view of the back of someone's head and often encourages hiding in the back of the room. Conversely, I find the square design allows for face-to-face interaction for everyone and allows me to move into the student's zone of intimacy with a few unencumbered steps.

Excuse mining.

As I write this paper, I am watching the pre-fight show of a boxing title match. During interviews, the Japanese fighter focused on his lack of experience in title matches, a lingering cold that has been bothering him and the sudden lay-off of a family friend from a factory. I knew immediately that this fighter would not win — he had already found the reasons why he couldn't — and he was knocked out in the second round.

I wish I could say that this thought process is unique in Japan, but it is not. “Muzukashii (It's difficult)” is a verbal button many Japanese learn to push at an early age when they wish expectations to be lowered. I regularly see people of all ages use this strategy, “I cannot be expected to perform at a high level because it is difficult so go easy on me.” Disturbingly, I rarely see this strategy rebuked.

My response is to be direct; yes, this class is a challenge and sometimes they will encounter difficulty. But I also tell students that difficulty — and even failure — are to be learned from and are actually necessary to improve and they will not be penalized for failing but for only failing to try.

An over-reliance on English and native English speakers.

I want to encourage all interested to study English, but I would be dishonest if I were to say that all students should study English. Despite the beliefs of certain teachers and governmental agencies, the English language is not a requirement for “being international.” Gregory Clark, former President of Tama University, went so far as to remove English from the required curriculum, his logic appearing to be that if students who want to study English are separated from those who have to, the quality of English education will increase.

Today, many college English courses are choked with students and the quality of learning is understandably poor. Further complicating this dilemma is the image of native English teachers as a sort of linguistic talisman, a magical amulet that is the best — and only — way to learn English. Such beliefs undercut competent Japanese instructors and overburden foreign instructors. My response to is to encourage students with minimal interest in English to take other language courses taught by Japanese instructors. TKU currently offers French, Spanish and German and Chinese course taught by competent and motivated Japanese instructors and these classes would benefit any student.

Other suggestions

Limit class sizes.

While the ideal number of ten students per class is often logistically impossible, instructors have a responsibility to limit student numbers. Tomakomai Komazawa University has committed to an under-thirty five-student limit to keep class sizes manageable. Furthermore, TKU has supported my use of a mid-term period to remove lackluster students midway through the semesters. This ensures that the class will never be above thirty-five students and those students who remain will be capable. Despite my satisfaction with this system, I voluntarily paid a price for it; the number of weekly classes I teach has increased from three (my contracted number is five) to nine. I offer the following suggestions in regards to keeping student numbers manageable.

- Forbid class dumping. A colleague in southern Japan teaches 220 students over three periods. If his students were spread out over the standard five classes, the average number of students per class would be approximately 44, not great but certainly better than the over-70 students to teacher ratio currently existing. Compacting classes in this manner is academically unethical.
- Reduce administrative responsibilities. Japanese university instructors are expected to serve on committees and I am not advocating avoiding this responsibility. I am, however, stating that teachers have to prioritize their commitments and sometimes a student must take precedent over a meeting. When I

find there is a conflict between academic and administrative responsibilities, I consult the leader of whatever committee and explain the situation. More times than not their response has been supportive. On the rare exceptions when I have met with resistance, I ask what issues will be decided at this meeting. If the instructor can name such an issue, I offer my opinion and still miss the meeting with the promise of later consultation. If the instructor cannot name an issue of importance (“discussing something” is vague and rarely important), I again promise to follow-up and leave knowing that, in addition to helping a student, I will also have most likely saved two hours. Once again, there is a price to pay: teachers do check up on one another and missing meetings may negatively affect promotions, etc. Likewise, I advocate being absent from administrative responsibilities only when necessary.

- Bar repeat failing students from your class. Students who have failed my class twice do not get a third chance. This is common sense; the vast reason students fail English classes is lack of effort and/or absences. If students have not matured to the point of attending class and following procedures in two years, then it’s time to focus on the younger students. Giving students unlimited chances only serves to constipate the system.
- Fortify material. Even the best English conversation textbooks are little more than linguistic tour guides. Furthermore, many textbooks try to integrate cultural points into language acquisition activities that require either advanced levels of English or superior knowledge of a particular country’s history.

Often, neither are present and the student leaves class feeling frustrated. The most effective remedy for this malady is for instructors to add their own material, material that incorporates known information (people, events, etc.) with English discourse that is within or just beyond the students' level of understanding. This theory, known as Krashen's Input Theory, states that language cannot be acquisitioned unless it is understandable and relevant to the students and their experiences. Today's textbooks are basically a one-size-fits-all approach to teaching and the only way to overcome this deficiency is to "customize" your teaching according to each individual class. Again, the time requirements are considerable but necessary.

In conclusion; Fate loves the fearless

The 21st Century is both exciting and threatening for those in the field of education: as we leave the Industrial Age and venture into the Information Age we are coming to terms with the fact that many of our institutions and practices are no longer relevant and, like the all animals that exist during the times of cataclysmic changes, we must adapt or perish. Thinking is replacing rote memory, cooperation for authoritarianism, and choice for regulation.

This is a terrifying prospect for those who are set in their ways and do not wish to change, but for those who are willing to venture out of their comfort zones and into their personal versions of the unknown, the excitement and rewards of confronting these challenges are boundless in both size and depth.

The well is deep, so drink and be filled.

Robert Carl OLSON “DON’T MEAN NOTHIN”

REFERENCES

Biehler, R. and Snowman, J. *Psychology Applied to Teaching, Fifth Edition*. Houghton Mifflin Company. 1986.

The Japan Times. Daily newspaper.

Lovat, T. (Editor). *Sociology for Teachers*. Social Science Press Australia. 1992.

Wadden, P. (Editor). *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities*. Oxford University Press. 1993.

Endnotes

1 “Parasite single” is a term levied on employed young adults who remain financially dependent on their parents and use their earnings to enjoy luxurious lifestyles.

(ロバート カール オルソン・本学講師)

苫小牧駒澤大学紀要第8号 (2002年11月30日発行)

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol.8, 30 November 2002

戦後日本のビジネスサイクルに対する 株価の先行性についての実証的検証

Verification of Japanese Stock Prices as Leading
Indicators of Business-Cycles after World War II

山崎 和 邦

Kazukuni YAMAZAKI

- キーワード：1 「ビジネスサイクル」
2 (ビジネスサイクルに対する)「株価の先行性」
3 「経済的重要性」
4 「統計的充足性」
5 (内閣府の)「第七次景気指標改定」

要旨

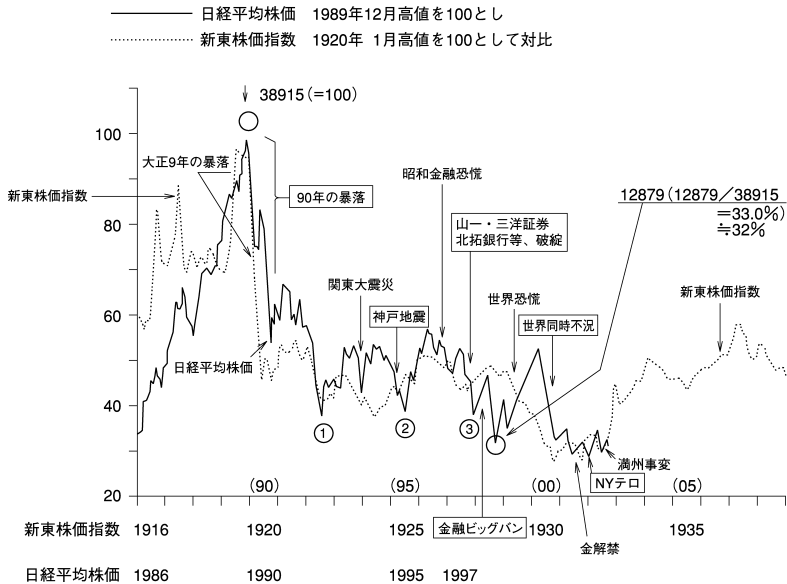
市場経済の体制下での経済活動の活力は、上昇と下降という形で或るサイクルをもって変動するという現象が生ずる。これを Business-Cycle または Trade-Cycle と言い、わが国では通常、景気循環と言われてきた。本稿は、その波動の周期を経済企画庁の景気動向指数の変動及び通産省の鉱工業生産指数の変動をもって客観的現象とし、(1)ビジネスサイクルに対する株価の先行性を戦後わが国の事実と照らして検証し実証する。(2)株価が景気動向指数作成上の経済指標として適切なものであることを六つの角度から論述する。(3)経済企画庁は87年に株価を景気先行指標から削除して長きにわたった。私は、このことが景気観測と景気対策の遅れの主因であったと説き、株価を先行指標に復活させるべき事を98年来、日本経済学会秋季大会等に於て経企庁内国調査課(景気動向指数担当省庁)等に対して説き続けたがついに内閣府は2001年12月に株価を先行指標に復活させた。遅きに失したが至当である。(官公庁名は旧名使用)

株価がビジネスサイクルに先行するという経験則は一般的に知られている事ではあるが(1)ビジネスサイクルに対する株価の先行性を戦後わが国の事実に照らして検証し実証する。(2)株価が景気動向指数を作成するための経済指標として適切なものか否かを六つの角度から検討し、正しく適したものであることを論述する。(3)しかるに、経済企画庁は87年の第六次経済指標改定時に景気先行指標群から株価を削除したまま2001年12月に至った。これが、長期デフレと不良債権問題を早めに見抜けなかった主因の一つになり、従って経済政策を遅らせた重要要因の一つになったと思う。

90年に大正9年以来70年ぶりの規模の株価大暴落があった。(大正9年暴落は「昭和恐慌」の引き金になったことは周知の事実である)。そして92年に戦後初めての銀行株の一斉大暴落があった。これらは、資産デフレとその結果である不良債権の集積(不良債権問題はデフレの結果としての現象である。小泉・竹中両氏はこの因果関係を逆に捉えているところに現在日本の経済政策の根本的誤りがある)及び、BIS規制発動後の「貸し渋り」をも視野に入れた金融システム危機の予兆であり、市場が送った断末魔近しというシグナルであったが、株価を凝視していた一部の識者以外には、これを70年ぶりの大凶兆と見抜くことはできなかった(グラフA)。

株価を景気先行指標として早急に復活させるべきであるということ、私は自分の所属する景気循環学会(会長金森久雄、前会長篠原美代平・一橋大学名誉教授)等をとらして98年10月以降、日本経済学会98年秋季大会等において経済企画庁内国調査課等に提案し続けてきてが、ついに内閣府は、2001年12月の第7次採用系列改定時に、東証株価指数を景気先行指標に復活させることに決めた。いささか遅きに失した憾はあるがこの措置は至当のものとする。

(グラフ A) 昭和恐慌と平成デフレの株価の比較



まえがき

株価が景気に先行するという経験則は、一般的な株価の定義（「株価は将来の予想収益を金利で割り引いた現在価値」）からも言える事であるし、内外の経済史からも認められている事であるが、これについて本稿は、わが国ビジネスサイクルの波動を経済企画庁作成の景気動向指数の波動をもって客観的現象とし、株価を戦後東京証券取引所開所以来50年強の日経平均株価をもってし、両者の動向の関係を検証しようとするものである。

株価としては最も一般的に通用している日経平均株価（1898年以降百年余の使用に耐えてきたNYダウ平均の算出方法と同じ）を採るが、これは東証株価指数を採っても検証の結果はほぼ同じ結果を得る。因みに87年以前に経済企画庁が採用していたのは東証株価指数であったし、

内閣府が2001年12月に復活させた株価もまた東証株価指数である。

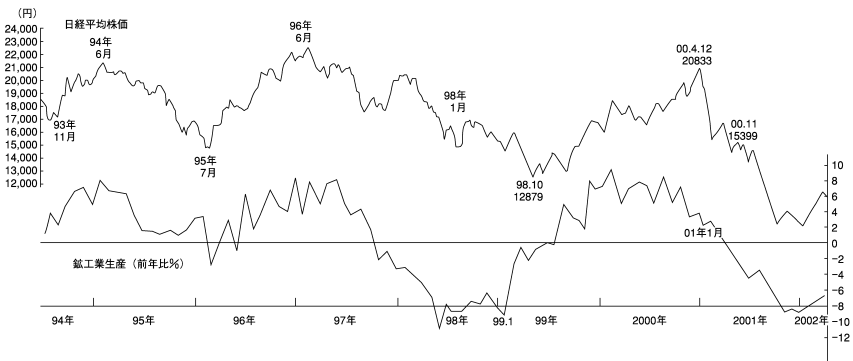
また、ここでは省庁の名称は旧名称を使用する。

まず、(1)章において、日経平均株価が景気一致指標の主要指標たる鉱工業生産指数前年同月比(%)の動向に対して、87年以降は常に前者が後者に3ヶ月～8ヶ月のリードタイムを持って先行したということを実証する。

- ① 94年以降は8ヶ月のリードタイムを持つことがグラフBにおいて明らかに(グラフB参照)、②91～93年にさかのぼれば、3ヶ月のリードタイムを持つ事がグラフCで明らかに(グラフC参照)、③87～90年にさかのぼると、8ヶ月のリードタイムを持つことがグラフDで示される。

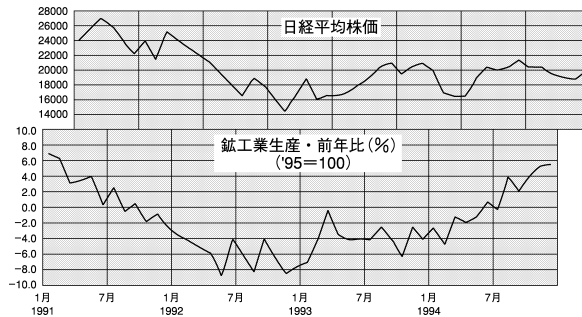
しかしながら、86年以前にさかのぼれば、日経平均株価と鉱工業生産指数前年同月比とは相関性がなかった時期があったことを明らかにし、経企庁が87年の第六次改定の際に東証株価指数を先行系列から削除したことは、その時点では一応正しかったと云えるでしょう。(グラフE-1 E-2参照)。

(グラフB) 日経平均株価は鉱工業生産指数前年比に8ヶ月先行する(94～2002年3月) (株価グラフを8ヶ月右にずらしてある)



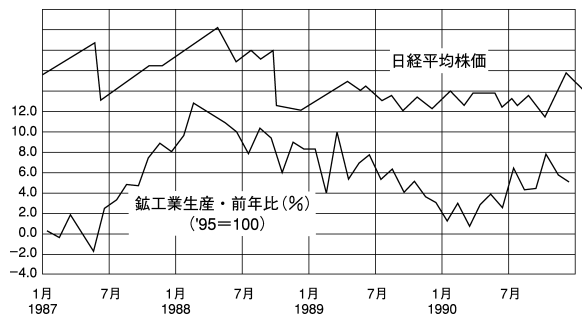
ところが、87年以降は株価は鉱工業生指数に対して3ヶ月から8ヶ月のリードタイムをもって明らかな先行指標となっていたのである。また、その翌年の88年に、株価を重要要素とする国際間の取決め（BIS規制）が決まったが、株価を経済指標から削除したわが国では、昭和恐慌の契機となった大正9年の暴落以来の70年ぶりの株価暴落を90年に目のあたりにしてさえも、株価を凝視する一部の識者以外にはほとんど

(グラフC) 日経平均株価は鉱工業生産・前年比に3ヶ月先行する(91~94年)
(株価グラフを3ヶ月右にずらしてある)



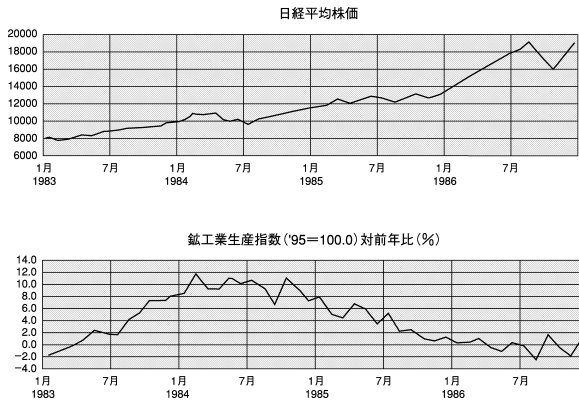
(グラフD) 日経平均株価は鉱工業生産指数前年比に8ヶ月先行する。
(87~90年) (株価グラフは8ヶ月右にずらしてある。)

(註) 成長問題を捨象し波動のみを明らかにするため株価は(45/100)だけ右下へ傾斜させてある

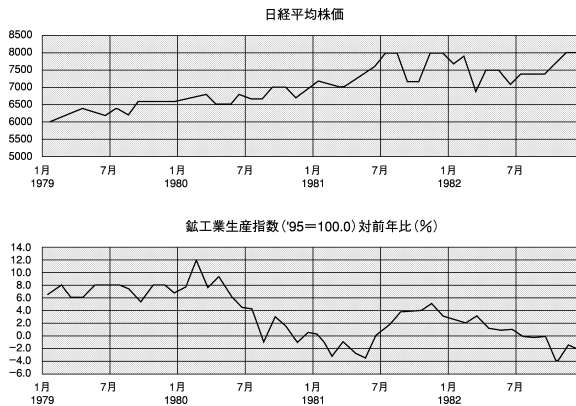


の官庁エコノミストも民間エコノミストも、それを資産デフレとそれに次ぐ「貸し渋り」の凶兆とは読み取る事が出来なかった（再びグラフA参照）。

(グラフE-1) 83~86年は株価と鉱工業生産指数対前年比との相関は認められない



(グラフE-2) 79~82年も株価と鉱工業生産指数前年比との相関は認められない。



次に(2)章において、経済企画庁の景気動向指数そのものと、株価との関係を検討する。「加工統計」たる景気動向指数と、一経済指標としての株価とを敢て比較してみる。そのために、株価の1950年以降の成長トレンドを捨象し波動のみを捉えて20%、30%超の上昇下降を示現した時について景気動向指数と比較し、また、戦後の五大長命景気と株価との関係を調べ(表イ)、さらに、戦後景気の第1循環から直近の第14循環上昇開始時までの各循環と株価20%波動(20%超の上昇下降)との関係を調べようとするものである。表ロ及びグラフFがそれである。

次に(3)章で株価が経済指標としての適合性を有するか否かという事について、六項目の選定基準に照らして検証する。

(1) 鉱工業生産指数に対する株価の先行性についての検証

まず、経済企画庁が作成していた景気動向指数の「一致指標」の中の主要指標たる鉱工業生産指数の前年同月比(%)の動向に対する日経平均株価の関係を検証する。

通産省・大臣官房調査統計部指数班から出ている鉱工業生産指数

(表イ) 戦後五大寿命景気と日経平均株価(30%以上の上下)

	D. I. の基準日	日経平均株価 30%以上の上下波動	リードタイム
神武景気の開始	54.12月	上昇開始 54. 3月	8ヶ月
〃 終焉	57. 2月	下降開始 57. 5月	1ヶ月
岩戸景気の開始	58. 7月	上昇開始 57.12月	7ヶ月
〃 終焉	61.12月	下降開始 61. 7月	5ヶ月
いざなぎ景気の開始	65.11月	上昇開始 65. 7月	4ヶ月
〃 終焉	70. 7月	下降開始 70. 4月	3ヶ月
バブル景気の開始	86.12月	上昇開始 74.10月	?
〃 終焉	91. 2月	下降開始 90. 1月	13ヶ月
最近の景気の開始	93.10月	上昇開始 92. 7月	15ヶ月

(表ロ) 第4～12循環の基準日と株価20%波動の始動点

	D. I. の基準日	日経平均株価	リードタイム
第4循環の山	61.12月	下降開始 61. 7月	5ヶ月
〃 谷	62.10月	上昇開始 61.12月	10ヶ月
第5循環の山	64.10月	下降開始 63. 4月	16ヶ月
〃 谷	65.11月	上昇開始 65. 7月	4ヶ月
第6循環の山	70. 7月	下降開始 70. 4月	3ヶ月
〃 谷	71.12月	上昇開始 70. 5月	17ヶ月
第7循環の山	73.11月	下降開始 73. 1月	10ヶ月
〃 谷	75. 3月	上昇開始 74.10月	5ヶ月
第8循環の山	77. 1月	対応なし	
〃 谷	77.10月	〃	
第9循環の山	80. 2月	〃	
〃 谷	83. 2月	〃	
第10循環の山	85. 6月	〃	
〃 谷	86.12月	〃	
第11循環の山	91. 4月	下降開始 90. 1月	15ヶ月
〃 谷	93.10月	上昇開始 92. 7月	15ヶ月
第12循環の山	97. 4月	下降開始 96. 6月	9ヶ月

(1995年=100) を採り、これの前年同月比 (%) を算出する。これをグラフ化して株価のグラフと比較することにする。

株価は、時価総額の推移・単純平均・日経平均株価・東証株価指数等のうち、通常一般に、株価の動向(方向)や水準を考える際に最も普及しているところの日経平均株価を採ることにする。この両グラフを併せて見ると次のことが云える。

- ① 94年以降は、日経平均株価と鉱工業生産指数(前年同月比)とにおいて、前者が後者に約8ヶ月先行してほぼスライドして動くことが判明した(グラフB)。
- ② 91年～93年は株価がほぼ3ヶ月のリードタイムを持つ(グラフC)。

- ③ 87～90年は、日経平均株価が20,000円弱から40,000円弱へのほぼ一方的な右上がりであるため、この右上がり趨勢を捨象し、波動のみを生かすこととした。つまり、日経平均株価グラフを（波動はそのままにし）全体を α° ^(註1)だけ右下に傾けてみる。^(註1) α° は88年1月～89年12月末の間のトレンドのなす角度（グラフにおいては45/100）。景気の波動と成長との結合の問題（波動しながら成長する）は、経済史から経験的に認知されていることでもあり、ヒックスやカルダーによって、つとに理論的に論証されてきたことであった。私は、決してこれを否定するつもりではなく、ただ、本稿では株価と鉱工業生産の波動について、前者が後者と密接な先見性を有し、約3ヶ月～8ヶ月先行することを検証するために、成長（右上がり）の傾向を一時捨象してみたのみである。波動のみを比較し易いようにするためにである。

このようにして得られたグラフを8ヶ月リードタイムを持たせて（右へずらして）鉱工業生産前年比と重ねてみると、グラフDのようになる。

- ④ 86年以前にさかのぼると数年間は鉱工業生産指数前年同月比（%）と日経平均株価とは、全く相関性がなかった時期があった。よって、87年に経企庁が第六次改定の際に景気動向指数の先行指標の中から株価を除外したことは、その時点では正しかったといえるだろう（グラフE-1、E-2）。

このようにして、「1977年以降は、株価と景気との関係が希薄化したという考え方が専門家の間にも強まった。このため、経済企画庁の景気動向指数の先行系列に含まれていた東証株価指数は、1987年の採用系列改定時に削除され現在に至っている」（景気循環学会副会長・田原四郎教授著「日本と世界の景気循環」東洋経済新報社刊・1998 p176）。

(2) 景気動向指数と株価との関係

今まで検証して来たものは、景気の主要一致指標たる鉱工業生産指数と株価との関係であった。

次に、景気動向指数そのものと株価との関係を検討してみる。

景気動向指数 DI は、いわゆる三つの D (Duration 期間、Diffusion 波動、Deapth 深度) のうち、Deapth は測り得ない。

故に、この指数で示すものは、「レベル (好・不況の度合)」でなく「方向 (景気上昇か下降)」なのだと割り切らねばならない。90 年代前半、景気動向指数が明白に下降を指示しているにも拘らず経企庁内に「レベルか方向か」という議論があった。87 年に株価を景気先行指標から削除したままでいた誤りと共に、「レベルか方向か」という、このレトリックが政府の景気判断を大幅に遅らせた要因になったと私は見る。景気動向指数の重要性はその指示する方向なのだ。その意味において、株価についても、その高低のレベルではなく、方向 (上昇か下降か) のみを問題にすることにすれば、日経平均株価と景気動向指数との比較が容易になる。

- ① 景気動向指数の DI は上昇か下降の方向のみを示し、そのレベル (山の高さ、谷の深さ) は示し得ないものである。故にこれと株価を比較するにおいては株価の方も上下の方向のみを見た 20%超の上昇下降の始まった起点を調べこれを図示し、これを線 A とする。なにゆえに 20%超を基準としたかは、アメリカ株式市場における NY ダウ平均株価の 1898 年以降 100 年余の事実に基づく。直近 100 年間で 20%超の下降は 15 回のみであり、これは長期趨勢の変化を示すものとされてきた。20%以内の下降は 53 回あり、これは長期趨勢変化でなく短期的な市場の調整場面であった。(因みに NY ダウの 2000 年の下降相場は最高値の 19.5%内の下げで反転し、その限りにおいてはいわゆるソフト・ランディングの範囲内に

あったものと言えた)。この事実から、長期趨勢の転換は20%超の上昇下降をメドとする。

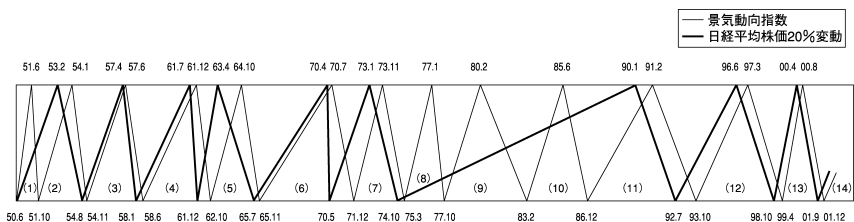
一方、景気動向指数の山と谷の「基準日」(経企庁が事後に決める客観的な時期)をグラフ上に明示し、上昇下降の方向を示すというDIの機能を生かして上下方向を図示する。これを線Bとする。

このA・B両方の線を重ねてみると、「戦後14回の景気循環のうち、第8、9、10循環以外の全ての場合において株価が景気動向指数に先行して方向を変え、そのあと或るタイムラグを以て景気動向が株価に追随した」ということが明白である。(グラフF参照)。

- ② 因みに、戦後の五大長命景気と日経平均株価との関係は表イのようになり明らかな相関関係を見ることが出来る。
- ③ また、景気動向指数の山と谷の基準日と、それに隣接する日経平均株価20パーセント変動の始動月とを列挙すると表ロのようになる。

第8、9、10循環以外の全ての場合において株価と景気循環が明らかな相関を示し、前者が後者に対して明らかな先行性を発揮する(グラフF参照)。

(グラフF) 景気動向指数(山と谷)と日経平均株価20%変動



D. I.の山・谷の基準日と、それに隣接する日経平均株価20%変動の上下波動の起点とを見ると、77年~86年の3循環以外は株価はリードタイムの差こそあれ、景気動向指数に先行する習性を持つと云える。

(3) 経済指標としての適合性についての検討

以上が明白になった事それ自体で、株価が経済指標として適格であるということが認められると思うが、念のためこの章で株価が経済指標として備えるべき要件を具備しているか否かを検討する。

経済指標が景気動向指数を作成するための指標として適格であるためには六つの選定基準をクリアしていることが必要である。

- ① 経済的重要性（景気動向を把握する上で特に重要なものであること）
- ② 統計的充足性（時系列統計として長期間整備されていること。月次統計がとれていること。信頼性が高いこと。）
- ③ 統計の速報性（早期に、定期的に公表されいること）
- ④ 景気とのタイミング（景気基準日付との先行、遅行との関係が安定していること）
- ⑤ 景気循環との対応性（循環の回数が景気基準日付の循環とほぼ同じであること）
- ⑥ データの平滑性（不規則変動の回数が少なく、データの動きが平滑であること）

①～③の基準については、日経平均株価は景気動向指数のための経済指標としての選定基準に充分適合すると言ってもよいであろうが、④⑤⑥から見て適合性はどうか。

・基準④について

これは景気とのタイミングの問題である。(1)章において株価と、景気一致指標の主要項目たる鉱工業生産指数との関係、及び(2)章において景気動向指数そのものとの関係を検証した。

念のため、73年以降に形成したそれぞれの景気の山に対して、景気

一致指数に対する先行指数のリードタイムを調べてみる。先行指数は、73年11月の山に対し7ヶ月先行、77年1月の山に対し6ヶ月、88年2月の山に対し6ヶ月、88年6月の山に対し6ヶ月、91年4月の山に対し8ヶ月、それぞれ先行した。この間の5回の山に対し、先行指数が景気に先行する先行期間の平均は6.6ヶ月である（経企庁「景気動向指数」より）。一方、日経平均株価はその間の先行期間が9ヶ月から15ヶ月となっており、リードタイムは少し長い。以上によって各種経済指標の加工統計たる景気先行指数の先行性よりも、株価そのものはなお先行するということになる。

景気動向指数に対する株価のリードタイムは各循環によって、13ヶ月、15ヶ月、9ヶ月というように差がある。前述の鉱工業生産指数（前年同月比）に対する先行性がほぼ8ヶ月に揃っているのに対して、景気動向指数に対する株価のリードタイムは少し安定性に欠けるが、9ヶ月から15ヶ月先行するという点において、「景気とのタイミング」という選定基準に適合していると云ってよいであろう。

・基準⑤について

株価変動が景気循環の回数と対応しているかという問題である。

日経平均株価の循環と景気動向の循環の回数がほぼ同じであること（景気循環との対応性）については、必ずしもこの条件をクリアしているとは言い難い面がある。

第11循環については、まさしく先行性を以て一致しているが、第12循環については、この循環の期間に日経平均株価の方は安値形成時から50%前後の上昇を伴う通称「往来相場」を何回も形成している。ところが、この間、景気動向指数は93年10月を谷とし97年4月を谷とする1循環を形成したにすぎない。この期間についてのみいえば、日経平均株価は景気動向と循環の回数が同じとはいえない。よって、基準⑤には

適合しない面が一部分にはあると云える。

・基準⑥について

データに平滑性があることと、不規則変動の回数が少ないかという問題である。

株価が経済指標として適格か否かということについては、この「データの平滑性」は最も議論の対象になるところであろう。

イ) データの連続性ということについては、日経平均株価は優れて連続性を持つものである事は明らかであるが問題は衝撃的で不連続な動きが時々あるということである。株価は真空を最も嫌うが、しばしば市場人氣が片寄って過熱すると、値段が飛んで空間を形成することは稀ではない(市場用語では「マドを空けた」ととか「夜放れ」という)。だが、十中八九は、後日この「マド」の価格帯で売り買いが形成されることが多い。即ち、価格形成上の真空の存在を許さない(市場では「マド埋めのところまで下がる(上がる)筈だ」などという)。

これは、株価は連続する性質を持つことが過去長年にわたって経験的に知られているということである。具体的に殆どの銘柄の株価チャートを検討してみても「マド」の十中八九は近日中に埋められている。

ロ) 一方、不規則変動の回数かどうかという問題であるが、株式市場には不規則衝撃(海外の政変などのような外性的要因)による価格変動は稀ではない。

景気循環の世界で、不規則衝撃や偶然誤差が累積すると、現実の循環運動が説明出来なくなるという問題は、約70年前にKaleckiによって提議され、偶然誤差の衝撃にさらされながらも尚かつ現実の循環を説明し得る理論が如何にして可能となるかが問われた時代

があった（1930～40年代）。

そこで生まれたのが、Frishの不規則衝撃理論（Random Shock Theory）であろう。Frishは、運動方程式が周期的問題を生むためには不規則衝撃が不断に与えられていなければならないと説明している。

この問題を「衝撃の問題（Impulse Ploblem）」と呼び、この波動問題と衝撃問題という二つの問題を解くことによって景気理論は明らかにされると説いた。

Frishは波動問題としては減衰正弦波を仮説し、それにも拘らず現実の経済変動が循環を形成するのは不規則衝撃または偶然誤差の累積の結果であると説明した。この問題は「揺れ木馬に不規則衝撃を加えても、それが不断に加わるならばその不規則衝撃は揺れ木馬に規則的振動を与える結果となる」と説明したK. Wicksellの説明に繋がっていくことになる。

株価変動こそ、まさしく不規則衝撃・偶然誤差・外性的要因が間断なく与えられるが、その結果、株価はやはり循環する。景気循環を経済成長と結合させて解析するのと同じく、「株価は右肩上がりとなりながら（成長しながら）循環する」か、または「株価は右肩下がりになりながら（衰退しながら）循環する」ものであることは、個々の株価においても平均株価においても経験則となっていることである。

一方的に上昇しっぱなしということはなく、一方的に下降しっぱなしということも現実的にはいかなるケースにおいてもあり得ず、成長または衰退の路線をとりながらもやはり循環する。

株価形成上の循環波動の問題と不規則衝撃の問題については、景気循環理論における先人たちの「Impuls-Ploblem」のように考えたい。

ハ) 基準⑥におけるデータの平滑性という問題については、株価は必ずしも平滑ではない。ときに、何々ショックと呼ばれるように、市場はヒステリックな反応を示す。

しかしながら、行きすぎた反応は近日中に必ずその修正が行われるということは、経験的につとに知られていることである。

1/3 戻し、1/3 押し、または半値戻し、半値押しなどという市場用語は、そのことが既に市場内で常識となっていることの証左であろう。

このように見て来ると、日経平均株価は、景気動向指数のもとになる経済指標の備えるべき基準六要素のうちの基準①②③④⑥の五つを具備し、基準⑤についても戦後 14 循環のうちの 11 循環に適合していると見てよいと言えるであろう。

また、日経平均株価には恣意性が全くないこと、その算出方法はアメリカで 1898 年来 100 年をこえる歴史を経て透明性が高いこと、日々公表されていること等においても経済指標として優れていると云えるであろう。

先述したように内閣府は 2001 年 12 月、経済指標の第 7 次改定時に株価を復活させて東証株価指数を採ったが、日経平均株価でなく東証株価指数を採っても、鉱工業生産指数・景気動向指数 DI との関係はほぼ同じ結果を得るものである。

また、前掲のグラフから示されるように、今、87 年以降は株価が鉱工業生産に対して優れた先行性を有することが実証されたと考えてよいし、景気動向指数に対する先行性をも実証的に検証することが出来たと考える。そこで私は、景気動向指数の先行指標の中に再び株価を採用すべきであると 1998 年 10 月以来、日本経済学会 98 年秋季大会等において景気動向指数担当省庁たる経企庁に提案してきた訳である。

敢えて株価を先行指標の中に加えなくとも、先行指標群それ自らの中に株価の影響は織りこまれている筈であるという主張があれば、それもまた一理はある。

従来採用されてきた先行指標 11 系列の中には、それ自体が株価と連

動して現れるという体質の指標が数多くある。

例えば、建設着工面積、新設住宅着工面積はそれぞれ建築主の資産の重大部分の表示である株価の上昇下降が、住宅新設のマインドや資金調達力に大いに影響を与えるということは容易に見やすいことである。

また、現代、給与所得者のうち少なからぬ比率の者が従業員持株制度による株主であるという情況に鑑みて、新車新規登録届出車数、中小企業業況判断、新規求人数等も、自社株や一般株式市況の動向は大いにマインド上に影響を与えるであろうということも見やすいことである。ゆえに、敢えて株価を先行指標の中に加えなくとも足りているから87年に景気庁が先行指標群から株価を削除したままで良いのだという考え方もあろう。

しかし、昨今の経済情勢ではそれは妥当ではない。例えば、今日の不良債権問題も BIS 規制も 401 K も株価と直結する。

BIS 規制によって、株価と金融とが直結されてしまったことで、日経平均が 1,000 円下がれば銀行の自己資本は 2 兆 5,000 億減る勘定になり、BIS 規制によって、株価下落による自己資本減少分の 12.5 倍 (BIS 規制の 8 % の逆数) × 45% すなわち 5.62 倍のレバレッジ効果で、「貸し渋り」が生じ、多くの倒産、不況に直結した。

今ほど株価が重視されているときはない。前述のように、敢えて日経平均株価を景気動向指数の中に加えなくとも景気動向指数は機能しているという論は、現今の状態ではそれは当たっていないと云えるであろうし、将来に対しても同じことが言えるであろう。

(4) 総括

1987 年、経済企画庁が景気動向指数作成のための採用指標を改定したときに (第 6 次・採用系列改定時)、株価は先行系列から削除され、その状態が 2001 年 12 月までの長期間にわたった。しかしながら、

イ. 私は1987年以降は、少なくとも景気一致指標の主要指標たる鉱工業生産指数との関係において、3～8ヶ月のリードタイムを有する株価の先行性を検証した。

ロ. 株価は表口のように、戦後の五大長命景気においては3ヶ月から15ヶ月のリードタイムを持って先行したことは事実である。

ハ. 第1循環以降、第14循環までの間、第8、9、10循環以外は全て、3ヶ月から15ヶ月という、リードタイムの差こそあれ、株価は景気動向指数の山・谷の基準日に先行して20%上下波動の起点を形成していたことがグラフFから云えるとしてよいであろう。

ニ. また、株価が経済指標として適切であるかどうかという事も検討し、極めて適切な指標であることを明らかにした。

ゆえに私は、景気動向指数作成上の先行経済指標の中に、再び株価を加えるべきであることを、98年10月以来、日本経済学会98年秋季大会等に於て景気動向指数の担当省庁たる経済企画庁に提案し続けて来た。

ついに昨年12月の第7次改定時に内閣府が株価を景気の先行指標群の中に復活させた。これは遅きに失するが大いに至当である。

最後に景気循環学会の田原教授の著書から引用して結びとしたい。

「東証株価指数は、1987年の採用系列改定時に削除されて現在に至っている。それでは、株価の先行性が果してなくなったのであろうか。近年の動向を見ると、むしろ復活したと見られる兆候が現れてきた。」(前掲書 p.176) (下線山崎)。

「景気と株価の短期的な変動も含めて総括すると、株価循環の景気先行性には戦前・戦後を通じて大きな変化はないと考えられる。換言すれば、景気予測指標としての株価の重要性は依然失われていない。」(前掲書 p.176) (下線山崎)。

参考文献 (書名五十音順)

- 「景気循環論」J. R. ヒックス著、古谷弘訳、岩波書店、1951
「戦後五十年の景気循環」篠原美代平、日本経済新聞社、1994
「日本と世界の景気循環」田原四郎、東洋経済新報社、1998
「景気動向指数」経済企画庁、1994
「景気循環の演出者」白川一郎、丸善ライブラリー、1995
「景気循環論に関する一考察」山崎和邦、中央公論事業出版、1975
「景気予測の話」高橋亀吉、東洋経済新報社、1963
「昭和金融恐慌史」高橋亀吉・森垣淑、講談社学術文庫、1993
「アメリカ株式恐慌とその後の発展」A・フィッシャー著、小高井泰雄訳、同文館、1932
「アメリカの株価分析」R・エドワーズ他著 野村投信委託訳、東洋経済新報社、1969
「雇用・利子および貨幣の一般理論」J. M. ケインズ著、塩野谷祐一訳、東洋経済、特に第12章「長期期待の状態」 1995
「ケインズ」福岡正夫著、東洋経済新報社、1997
「ケインズ」伊東光晴著、岩波書店、1989
「実務家ケインズ」那須正彦著、中央公論社、1995
「ケインズ先生の株式相場学」坂田真太郎著、東洋経済新報社、1979
「根拠なき熱狂」R. J. シラー著、植草一秀監訳、ダイヤモンド社、2001
「株式市場の科学」山下竹二、中央公論社、1987
「株式ケイセンの使い方」岡本博、日本経済新聞社、1969
「株式市場の人気の見方」ハーヴェイ・A・クロー著、岡本博訳、東洋経済新報社、1970
「市場と株式投資の人間学」(改題「あなたはなぜ株で儲けられないのか」) 山崎和邦著、ダイヤモンド社、2001
「相場の心理学」ラース・トゥヴェーデ、赤羽隆夫著、ダイヤモンド社、2001
「投機学入門」山崎和邦著、ダイヤモンド社、2000
「幻の文書・三猿金泉(さんえんきんせん)秘録考」加田泰著、PHP 研究所、1982

(やまざき かずくに・本学非常勤講師)

苫小牧駒澤大学紀要 第8号

平成 14 (2002)年 11 月 20 日印刷

平成 14 (2002)年 11 月 30 日発行

編集発行

苫小牧駒澤大学

〒059-1292 苫小牧市錦岡 521 番地 293

電話 0144-61-3111

印刷

株式会社アイワード

紀要交換業務は図書館情報センターで行っています

— お問い合わせは直通電話 0144-61-3311 —